福岡市埋蔵文化財調査報告書第901集

HIROSE　　KAMI HIROSE

広瀬遺跡２・上広瀬遺跡１

石釜地区基盤整備促進事業関係調査報告書２

－広瀬遺跡第１次調査２・上広瀬遺跡第１次調査－

２００６

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

福岡市西郊の早良平野は、平野を北流して博多湾に注ぐ室見川の流域を中心として旧石器時代から近世までの多くの遺跡が営まれ、豊かな自然と多くの遺跡が残された地域です。

福岡市ではまちづくりの目標としての都市像に、ひとつに自然を生かす快適な生活の都市、ひとつに海と歴史を抱いた文化の都市を掲げその実現にむけ邁進しています。

しかし快適な都市づくりをめざす一方で、これにともなって消滅していく遺跡も多く、本市ではこれら開発によって、やむなく失われる遺跡の記録保存調査を行なっています。

本書は早良区石釜地区の圃場整備事業に伴い、平成15年度に発掘調査を行なった広瀬遺跡第１次調査の成果報告と、平成16年度に発掘調査を行なった上広瀬遺跡第１次調査の成果報告をするものです。

調査の結果、広い交流を示す多くの縄文土器と、内野・石釜地区で中心となる中世居館の検出、本市で２例目となる中世土器焼成遺構の検出・古代～中世の多数の焼土壙の検出など多くの成果を上げることができました。

本報告書が市民の皆様の文化財に対する認識とご理解につながり、また、学術の分野に貢献することができましたならば幸甚に存じます。

最後になりましたが、本報告書の作成にいたるまで多大なご協力を頂いた農林水産局・広瀬石釜土地改良区・地元関係者の方々に対し、心よりの感謝の意を表する次第です。

平成18年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　植 木 とみ子

例　　言

1．本書は、石釜地区基盤整備促進事業に伴い平成15年度（2003）発掘調査を実施した、福岡市早良区大字西・内野８丁目地内に所在する広瀬遺跡の第１次調査第１区～３区の調査報告遺物編及び同調査第４区～第７区の調査報告並びに、平成16年度（2004）発掘調査を実施した、同区大字西字広瀬地内に所在する上広瀬遺跡第１次調査の調査報告書である。

2．調査で検出した各遺構は、土壙（SK）、溝状遺構（SD）、掘立柱建物（SB）、柱穴（SP）、他（SX）の様に頭に記号を付して呼んだ。

3．本書に掲載した遺構実測図は、加藤良彦・阿部泰之・木下博文・瀬戸啓治・藤野雅基・山田ヤス子・平田雅子・天野玄普による。

4．本書に使用した図面類の整図および製図は、加藤の他に井上加代子・米倉法子・濱田美紀・濱石正子・撫養久美子・相原聡子・遠藤茜で行った。

5．本書に使用した遺構写真は加藤が、全景等空中写真は広瀬遺跡第１次調査は有限会社空中写真企画に、上広瀬遺跡第１次調査は写測エンジニアリング株式会社による。遺物写真は加藤の他フォトハウスＯＫＡによる。

6．本書に使用した方位は旧国土座標第２系による座標北である。磁北はこれに6°10′西偏する。

7．付編の上広瀬遺跡第１次調査に伴う自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託した。

8．本書の執筆・編集は、加藤が行った。

9．本書に収録された遺物・写真・図面などの記録類は、平成18年度に福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本　文　目　次

広瀬遺跡２
Ⅰ．はじめに…… 1
１．調査に至る経緯…… 1
２．調査の組織…… 1
Ⅱ．調査区の立地と環境…… 3
Ⅲ．調査の記録…… 6
１．調査の概要…… 6
２．１区の出土遺物…… 7
３．２区の出土遺物…… 27
４．３区の出土遺物…… 28
５．４区の調査…… 32
６．５区の調査…… 38
７．６区の調査…… 54
８．７区の調査…… 59
Ⅳ．　小結…… 60

上広瀬遺跡１
Ⅰ．はじめに…… 63
１．調査に至る経緯…… 63
２．調査の組織…… 63
Ⅱ．調査の記録…… 66
１．調査の概要…… 66
２．１・２区の調査…… 68
３．３・４区の調査…… 74
４．５・６区の調査…… 85
５．７・９区の調査…… 93
６．８・10区の調査…… 98
７．11区の調査…… 100
８．12・13区の調査…… 101
９．14区の調査 …… 105
Ⅲ．小結…… 113

付編．上広瀬遺跡第１次調査に伴う自然科学分析…… 117

挿　図　目　次

広瀬遺跡２

Fig. 1　周辺遺跡分布図（1/25,000）…… 4
Fig. 2　調査区位置図（1/4,000）…… 5
Fig. 3　1区縄文時代遺構分布図（1/400）…… 8
Fig. 4　縄文遺構遺物位置図（1/50）…… 9
Fig. 5　1区縄文遺構出土遺物実測図（1/3・2/3）…… 9
Fig. 6　1区柱穴出土縄文遺物実測図（1/3・2/3）…… 10
Fig. 7　1区縄文グリッド遺物位置図．1（1/50）…… 11
Fig. 8　1区縄文グリッド出土遺物実測図．1（1/3・2/3）…… 11
Fig. 9　1区縄文グリッド遺物位置図．2（1/50）…… 12
Fig.10　1区縄文グリッド出土遺物実測図．1（1/3・2/3）…… 13
Fig.11　1区縄文包含層検出面出土遺物実測図（1/3・2/3）…… 14
Fig.12　SK81出土遺物実測図．1（1/3）…… 16
Fig.13　1区混入縄文遺物実測図（1/3・2/3・1/4）…… 17
Fig.14　1区中世遺構分布図（1/400）…… 18
Fig.15　SD01西部最下層出土遺物実測図（1/3）…… 19
Fig.16　SD01陸橋部遺物出土位置図（1/40・1/80）…… 19
Fig.17　SD01東部土器溜まり出土遺物実測図．1（1/3）…… 20
Fig.18　SD01東部土器溜まり出土遺物実測図．2（1/3）…… 21
Fig.19　SD01東部土器溜まり出土遺物実測図．3（1/3）…… 22
Fig.20　SD01上層出土遺物実測図（1/3・1/2・1/4）…… 23
Fig.21　1区SB・SP出土遺物実測図（1/3・1/2・1/4 ）…… 24
Fig.22-1　1区土器焼成壙SK11遺物出土位置図（1/30）…… 25
Fig.22-2　1区中世土壙出土遺物実測図（1/3）…… 25
Fig.23　1区近世遺構出土遺物実測図（1/3）…… 26
Fig.24　1区近世遺構分布図（1/400）…… 26
Fig.25　2区出土遺物実測図（1/3）…… 27
Fig.26　2区遺構全体図（1/200）…… 27
Fig.27　3区遺構全体図（1/200）…… 28
Fig.28　3区遺物出土位置図（1/40・1/60）…… 29
Fig.29　3区出土遺物実測図（1/3・2/3）…… 31
Fig.30　4区遺構全体図（1/200）…… 32
Fig.31　4区出土縄文遺物実測図.1（1/3・2/3）…… 33
Fig.32　4区中世遺構実測図（1/40・1/50）…… 34
Fig.33　4区出土中世遺物実測図（1/3・1/2）…… 36
Fig.34　4区近世遺構実測図（1/40）…… 37
Fig.35　5区縄文遺構実測図（1/40）…… 38
Fig.36　5区遺構全体図（1/300）…… 折り込み
Fig.37　5区縄文遺構出土遺物実測図（1/3・2/3）…… 39
Fig.38　5区中央縄文包含層遺物位置図．1（1/100）…… 41
Fig.39　5区中央縄文包含層出土土器実測図．1（1/3）…… 42
Fig.40　5区中央縄文包含層出土土器実測図．2（1/3）…… 43
Fig.41　5区中央縄文包含層出土石器実測図．1（2/3）…… 45
Fig.42　5区中央縄文包含層出土石器実測図．2（2/3・1/2）…… 46
Fig.43　その他5区出土遺物実測図（1/3・2/3・1/4）…… 48
Fig.44　5区中世遺構実測図（1/40）…… 51
Fig.45　5区出土中世遺物実測図（1/3）…… 53
Fig.46　6区土壙実測図（1/40）…… 54
Fig.47　6区遺構全体図（1/300）…… 折り込み
Fig.48　6区中央縄文包含層遺物位置図．1（1/100）…… 55
Fig.49　6区中央縄文包含層出土遺物実測図（1/3・1/2）…… 56
Fig.50　6区中央縄文包含層出土石器実測図（2/3・1/2）…… 57
Fig.51　その他6区縄文遺物実測図（1/3・2/3・1/2）…… 58
Fig.52　6区出土中世遺物実測図（1/3）…… 58
Fig.53　7区遺構全体図（1/200）…… 59
Fig.54　7区土壙・出土遺物実測図（1/40・1/2）…… 59

上広瀬遺跡１

Fig. 1　調査区位置図（1/8,000）…… 64
Fig. 2　調査区地形測量図（1/2,000）…… 65
Fig. 3　1区SX02・06実測図（1/50）…… 68
Fig. 4　1・2区遺構全体図（1/200）…… 69
Fig. 5　1区SB01実測図（1/80）…… 69
Fig. 6　1区SK01・SX03・04・05実測図（1/50・1/40）…… 70
Fig. 7　2区トレンチ土層断面図（1/50）…… 71
Fig. 8　2区SD09・SX10土層断面実測図（1/50）…… 72
Fig. 9　2区SK07・08実測図（1/40）…… 72
Fig.10　1・2区出土遺物実測図1（1/3・2/3）…… 73
Fig.11　3・4区遺構全体図（1/200）…… 74
Fig.12　3区SB03・04実測図（1/80）…… 75
Fig.13　3区SK12・14・17実測図（1/40）…… 76
Fig.14　3区SK13・16・22実測図（1/40）…… 77
Fig.15　4区遺構実測図（1/80・1/40）…… 78
Fig.16　3・4区出土遺物実測図．1（1/3・2/3）…… 79
Fig.17　5・6区遺構全体図（1/200）…… 81
Fig.18　5区SB09・10・11・12実測図（1/80）…… 82
Fig.19　5区SK35・36・37・38実測図（1/40）…… 83
Fig.20　6区土壙他遺構実測図（1/50・1/40）…… 85
Fig.21　6区SB13・14・15・16・17実測図（1/80）…… 86
Fig.22　5・6区出土遺物実測図．1（1/3・2/3）…… 87
Fig.23　7・9区遺構全体図（1/250）…… 89
Fig.24　7区SB18・19・20実測図（1/80）…… 90
Fig.25　7区土壙実測図（1/40）…… 91
Fig.26　9区SB21・22実測図（1/80）…… 92
Fig.27　9区SK91・92・93実測図（1/40）…… 93
Fig.28　7・9区出土遺物実測図．1（1/3）…… 93
Fig.29　8・10区遺構全体図（1/200）…… 95
Fig.30　8区SD84・87・SK81・82実測図（1/50・1/40）…… 96
Fig.31　10区SB23・24・SK101実測図（1/80・1/40）…… 97
Fig.32　8・10区出土遺物実測図．1（2/3・1/3）…… 97
Fig.33　11区遺構全体図（1/200）…… 99
Fig.34　11区出土遺物実測図．1（2/3）……100
Fig.35　11区遺構実測図（1/50・1/40・1/80）……100
Fig.36　12・13区遺構全体図（1/200）……101
Fig.37　12区遺構実測図（1/80・1/40）……102
Fig.38　13区SB27・SK132・133実測図（1/80・1/40）…… 104
Fig.39　12・13区出土遺物実測図．1（2/3・1/3）…… 104
Fig.40　14区遺構全体図（1/250）…… 105
Fig.41　トレンチ土層断面図（1/50）……106
Fig.42　14区出土縄文遺物実測図（1/3・2/3・1/2）……107
Fig.43　14区SB28実測図（1/80）……108
Fig.44　14区SB29実測図（1/80）……109
Fig.45　14区土壙実測図（1/40）……110
Fig.46　14区出土中世遺物実測図．1（1/3）……112

写　真　目　次

広瀬遺跡２

Ph. 1　1区縄文遺構出土遺物…… 10
Ph. 2　1区縄文グリッド出土遺物．1 …… 14
Ph. 3　1区縄文グリッド出土遺物．2 …… 15
Ph. 4　その他の1区出土縄文遺物…… 15
Ph. 5　1区SD01土器溜まり出土遺物…… 22
Ph. 6　1区出土中世遺物…… 24
Ph. 7　3区出土遺物…… 30
Ph. 8　4区全景（西から）…… 33
Ph. 9　4区SK01（北東から）…… 35
Ph.10　4区SK04（南から）…… 35
Ph.11　4区SK05（西から）…… 35
Ph.12　4区出土遺物…… 36
Ph.13　4区SK02（南から）…… 37
Ph.14　4区SK03（西から）…… 37
Ph.15　5区全景（東から）……折り込み
Ph.16　5区全景（南から）……折り込み
Ph.17　5区SK10（南から）……折り込み
Ph.18　5区SK06（南から）……折り込み
Ph.19　5区SK07（南から）…… 39
Ph.20　5区SK08（南から）…… 39
Ph.21　5区SK02（北から）…… 40
Ph.22　5区縄文遺構出土遺物…… 40
Ph.23　5区包含層遺物出土状況（西から）…… 42
Ph.24　5区包含層遺物出土状況（西から）…… 42
Ph.25　5区包含層土器出土状況（南から）…… 42
Ph.26　5区包含層出土土器…… 44
Ph.27　5区包含層出土石器…… 47
Ph.28　その他の5区出土縄文遺物…… 48
Ph.29　5区SK03上層断面（東から）…… 50
Ph.30　5区SK04（西から）…… 50
Ph.31　5区SK01土層断面（南から）…… 50
Ph.32　5区SK09（南から）…… 50
Ph.33　5区SK05土層断面（西から）…… 52
Ph.34　5区SK11土層断面（北から）…… 52
Ph.35　5区SK12土層断面（北から）…… 52
Ph.36　5区出土中世遺物…… 53
Ph.37　6区全景（南から）……折り込み
Ph.38　6区全景（東から）……折り込み
Ph.39　6区SK04（東から）……折り込み
Ph.40　6区SK01（西から）……折り込み
Ph.41　6区SK03（北から）……折り込み
Ph.42　6区出土縄文遺物…… 55
Ph.43　7区全景（南から）…… 59
Ph.44　7区SK01（東から）…… 59

上広瀬遺跡１

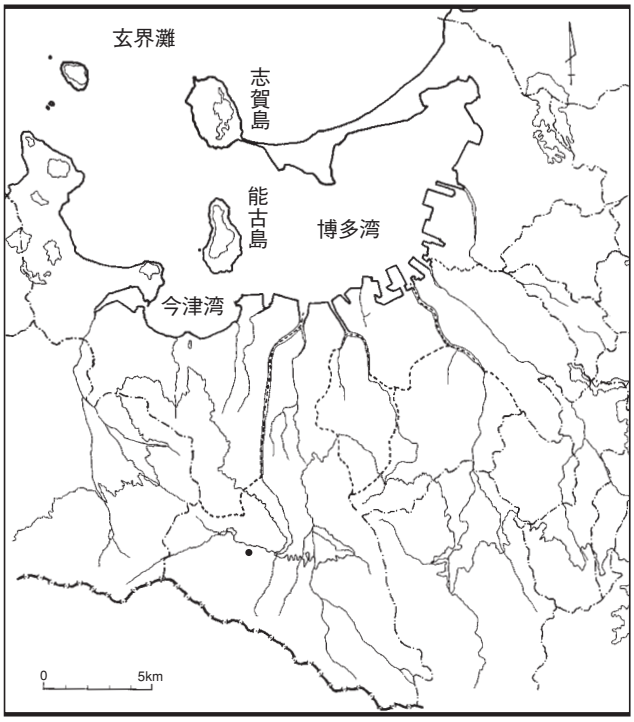
Ph.1　調査前風景（南から）…… 66
Ph.2　3～10区全景（南から）…… 67
Ph.3　1区全景（東から）…… 68
Ph.4　1区SX02炭化根（南西から）…… 68
Ph.5　1区SK01（北から）…… 68
Ph.6　1区SX03（北から）…… 71
Ph.7　2区全景（東から）…… 71
Ph.8　2区トレンチ土層断面（北から）…… 71
Ph.9　2区トレンチ炭粒包含層（西から）…… 71
Ph.10　2区SK07（西から）…… 72
Ph.11　2区SK08（西から）…… 73
Ph.12　1･2区出土遺物…… 73
Ph.13　3～8区全景（南から）…… 75
Ph.14　3区SK12（南から）…… 76
Ph.15　3区SK14（北から）…… 76
Ph.16　3区SK17（東から）…… 76
Ph.17　3区SK16（北から）…… 77
Ph.18　4区SK27（南から）…… 77
Ph.19　4区SK26（北から）…… 77
Ph.20　5区全景（西から）…… 80
Ph.21　6区全景（西から）…… 80
Ph.22　5区SK35（南から）…… 82
Ph.23　5区SK36（北西から）…… 83
Ph.24　5区SK37（西から）…… 83
Ph.25　6区SD69（東から）…… 84
Ph.26　6区SX67（南から）…… 84
Ph.27　SX67土師器出土状況（南東から）…… 84
Ph.28　6区SK63（東から）…… 84
Ph.29　6区SK65（北から）…… 84
Ph.30　6区SK64（東から）…… 85
Ph.31　6区SK66（東から）…… 85
Ph.32　5･6区出土遺物…… 87
Ph.33　7区全景（西から）…… 88
Ph.34　9区全景（西から）…… 88
Ph.35　7区SK75（東から）…… 90
Ph.36　7区SK78（東から）…… 90
Ph.37　7区SK76（東から）…… 91
Ph.38　9区SX94（北から）…… 91
Ph.39　9区SK91（西から）…… 92
Ph.40　9区SK92（東から）…… 92
Ph.41　7･9区出土遺物…… 93
Ph.42　8区全景（西から）…… 94
Ph.43　8区SK81（東から）…… 96
Ph.44　8区SK82（東から）…… 96
Ph.45　10区SK101（北から）…… 97
Ph.46　10区全景（西から）…… 98
Ph.47　11区SK111（東から）…… 99
Ph.48　11区SK112（北から）…… 99
Ph.49　11～13区全景（南西から）…… 100
Ph.50　12区SK121（北から）…… 102
Ph.51　12区SK122（北から）…… 102
Ph.52　12区SK123（北から）…… 103
Ph.53　12区SK124（北から）…… 103
Ph.54　13区SK132（東から）…… 103
Ph.55　13区SK133（北から）…… 103
Ph.56　14区全景（南から）…… 106
Ph.57　14区SK143（北から）…… 107
Ph.58　SK143上面焼土（西から）…… 107
Ph.59　SK143上面焼土断面（北から）…… 107
Ph.60　14区SK142（東から）…… 109
Ph.61　14区SK144（北から）…… 109
Ph.62　14区SK145（西から）…… 111
Ph.63　14区SK146（東から）…… 111
Ph.64　14区SK147（西から）…… 111
Ph.65　14区SK148（北から）…… 111
Ph.66　14区SK149（北から）…… 111
Ph.67　14区SK150（西から）…… 111
Ph.68　14区出土遺物 …… 112

福 岡 市

HIROSE

広瀬遺跡 2

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第901集



調査番号　０３２６
調査略号　ＨＲＳ-１

２００６

福 岡 市 教 育 委 員 会

1．4～7区全景（東から）

2．5区縄文包含層（南東から）

3．1区土器焼成壙レプリカ

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

本遺跡の本格的調査の開始は、平成13年（2001）年９月20日付で計画が明らかとなった「石釜地区基盤整備促進事業」の施工を契機とする。受付番号は13－１－557である。埋蔵文化財課と農林水産局農林部農業土木課は、この事業計画について遺跡遺存の状況を把握するための試掘調査などの必要な事項について事前の協議を進めた。当初の事業計画は、総対象面積24.5haで、平成15年度から平成18年度にかけ順次整備していく計画であった。

これを受けて埋蔵文化財課では初年度施工予定地の大半に広瀬遺跡が含まれる事を確認、平成14年12月16日から12月26日まで初年度施工予定地全域に試掘調査を実施した。結果遺跡地内全域で焼土壙・柱穴をはじめとする中世の遺構と縄文時代の包含層を確認した。

この結果を受け両者の協議により、遺跡の包蔵地内は盛土による設計変更を行って保存する方針で調整を進めたが、やむを得ず遺構面が掘削される部分・道路・水路等の施工箇所については発掘調査を実施することとなった。調査区は7箇所に分散し、東西約450ｍ・南北約80ｍの長大な範囲に点在する（Fig.２）。

発掘調査は最大面積の調査１区から平成15年6月16日に着手し、同年12月26日に全ての行程を終了した。

調 査 番 号	0326	遺 跡 略 号	HRS-1
調査地地籍	早良区大字西、内野8丁目	分布地図番号	早良17（内野）0800
開 発 面 積	35,000㎡	調査実施面積	6,243㎡
調 査 期 間	030616～031226	事前審査番号	13-1-557

2．調査の組織

【調査委託】農林水産局農林部農業土木課（当時）

【調査主体】福岡市教育委員会　教育長　生田征生（当時）

【調査総括】文化財部長 境徹（当時） 文化課長 山崎純男（当時） 調査第１係長 力武卓治（当時）

【調査庶務】文化財整備課　後藤泰子

【発掘調査】加藤良彦

【発掘作業】菊地栄子　鶴田喜美恵　中園登美子　山田ヤス子　岩見敏子　鶴田佑子　天野玄普

伊東絹子　脇山千代美　中園輝夫　岩見美津代　岩崎道雄　岩崎すみ江　菅野武

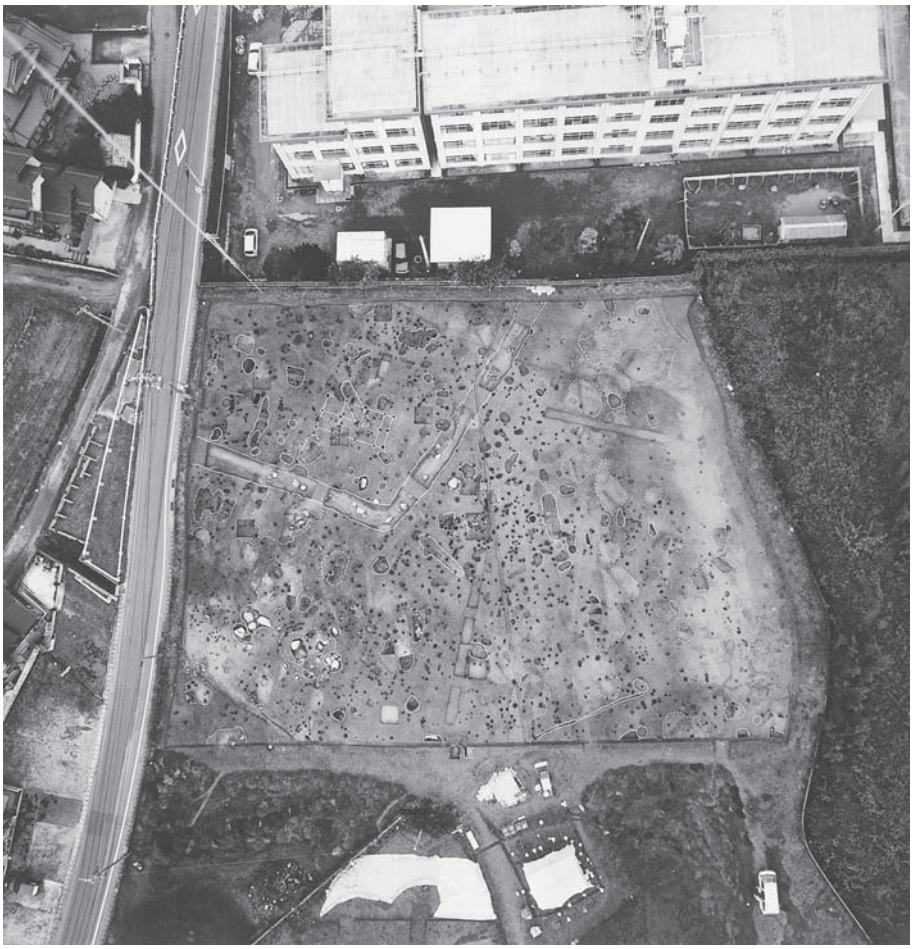
尾崎泰正　川嶋京子　貴田潔　森下初美　真田弘二　実岡恵護　小出敏幸　竹末敏伸

友池敏夫　佐藤信二　吉川武　本袋茲宣　藤野雅基　瀬戸啓治　下司昭枝　井上八郎

上野道郎　柴田勝子　吉川春美　指山歌子　門司弘子　堀川ヒロ子　廣瀬梓　永嶌重俊

阿比留忠義　平井和子　海津宏子　有江笑子　金子由利子　安河内史郎

【整理作業】芦馬恵美子　木村厚子　国武真理子　竹田幸子　平川泰世　南里三佳



Ph　調査1区全景（南西から）

II. 調査区の立地と環境

福岡市域は西から、背振山系から北流する諸河川流域である糸島・早良・福岡平野、犬鳴山地から北西に流れる諸河川流域である粕屋平野が主要な部分を占め、これらが博多湾を囲むように広がっている。

広瀬遺跡が位置する早良平野は、西側を背振主稜から北に派生する西山・飯盛・高祖地塁山地に、東側を同じく北に派生する油山山地と更に北に延びる飯倉台地によって画され、中央部を背振山地を源流とする室見川が北流し博多湾へと注いでいる。平野の北辺には姪浜をはじめとする第三紀層の小丘陵群が散在し、これらを繋ぐように砂丘が形成され、後背には沖積低地が広がっている。また両山地の山麓部や平野中央部には中位段丘下位砂礫面が残され、小田部台地にはこの上位の火山灰層が残存している。低位段丘の多くは室見川の扇状地平野・三角州平野部に埋没している。この下流域には西新町遺跡・藤崎遺跡・有田遺跡等、中流域には吉武遺跡群・浦江遺跡・金武城田遺跡・重留遺跡・東入部遺跡群等、弥生から中世を中心とする集落遺跡が展開している。

広瀬遺跡は、これらから南に遠く離れた背振山麓に近く、北東を油山、北西を西山、南を金山に囲まれた盆地状の内野・脇山・石釜地区の、室見川上流域右岸の河岸段丘上に立地する。南北を河川に開析され、北東に延びる舌状台地となっており、調査区は遺跡の北東部に位置し、第2次・3次調査区が隣接する。標高は78～89ｍである。遺構は旧耕作土下の、縄文時代早期～晩期包含層にあたる黄褐色・黒灰色シルトの上面で検出される。

上流域の歴史環境を概観してみると、中・下流域と異なり中心となるのは旧石器・縄文時代・中世で、旧石器時代は峯遺跡でスクレイパー等が、馬立山遺跡でナイフ型石器・尖頭器、脇山Ａ遺跡で細石核・三稜尖頭器、志水Ａ遺跡でナイフ型石器、上広瀬遺跡で三稜尖頭器が出土している。

縄文時代は脇山Ａ遺跡・脇山Ｂ遺跡・栗尾Ｂ遺跡・当遺跡第１次調査等で早期から晩期に至るまとまった資料が出土している。

弥生時代以降は遺跡は希薄で、谷口遺跡で弥生時代の遺構がわずかに、古墳時代では集落のみならず、１基の古墳も造営されず空白地帯となっている。

古代では峯遺跡で掘立柱建物が検出されている。

集落が形成されるのは12・13世紀の中世以降で、峯遺跡・脇山Ａ遺跡・内野遺跡・上広瀬遺跡で多くの貿易陶磁器と掘立柱建物群・土壙墓群等を検出している。文献では脇山・横山地区は嘉保３年（1096）背振上宮東門寺領に寄進され、15世紀中頃までには大規模な潅漑施設が造られ飛躍的な開墾がはじまる。15世紀末には博多聖福寺の寺領ともなっており、これらを背景とした開墾を裏付けている。

広瀬遺跡では、平成16年度一部の報告を行った本調査の第１次調査（市報第865集『広瀬遺跡１』）から、３次にわたる調査が実施されている。

平成15年実施の第２次調査では防火用水漕付け替えの43㎡の調査面積で、焼土壙１基・土壙１基を検出している。

平成15年実施の第３次調査では道路拡幅工事に伴う87㎡の調査面積で、第１次調査区から広がる縄文時代の倒木痕４基、第１次調査１区検出の12・13世紀中世居館と同時期の中世整地面、他に中世土壙１基・柱穴多数・中世耕作層、近世水田耕作層を検出している。

参考文献：吉良国光「背振山の所領支配と村落」『九州史学』特集号1987年

『広瀬遺跡１』福岡市埋蔵文化財調査報告書第865集2005年
「福岡市埋蔵文化財年報」VOL.18 2005年
『広瀬遺跡３』福岡市埋蔵文化財調査報告書第902集2006年

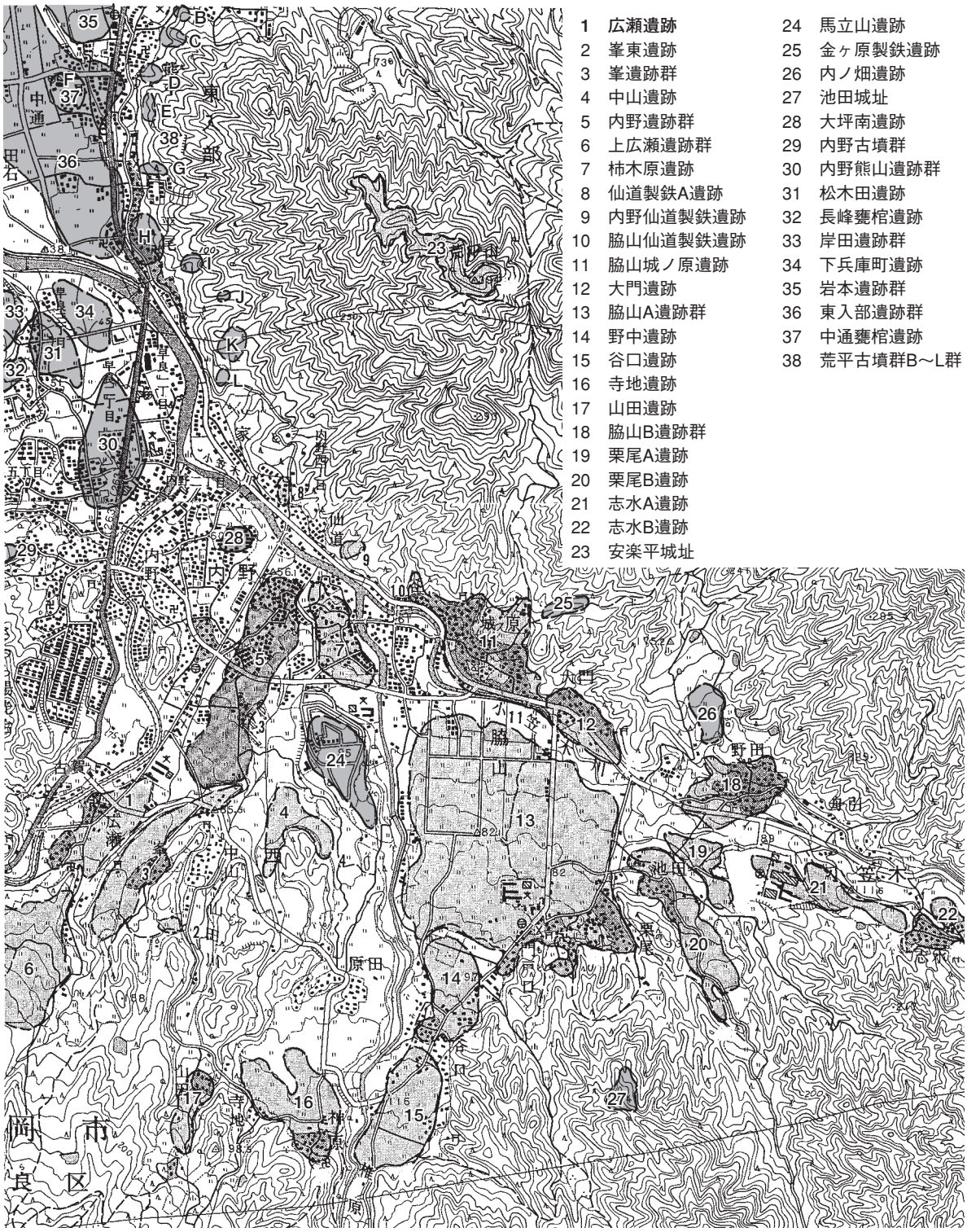


Fig.1　周辺遺跡分布図（1/25,000）

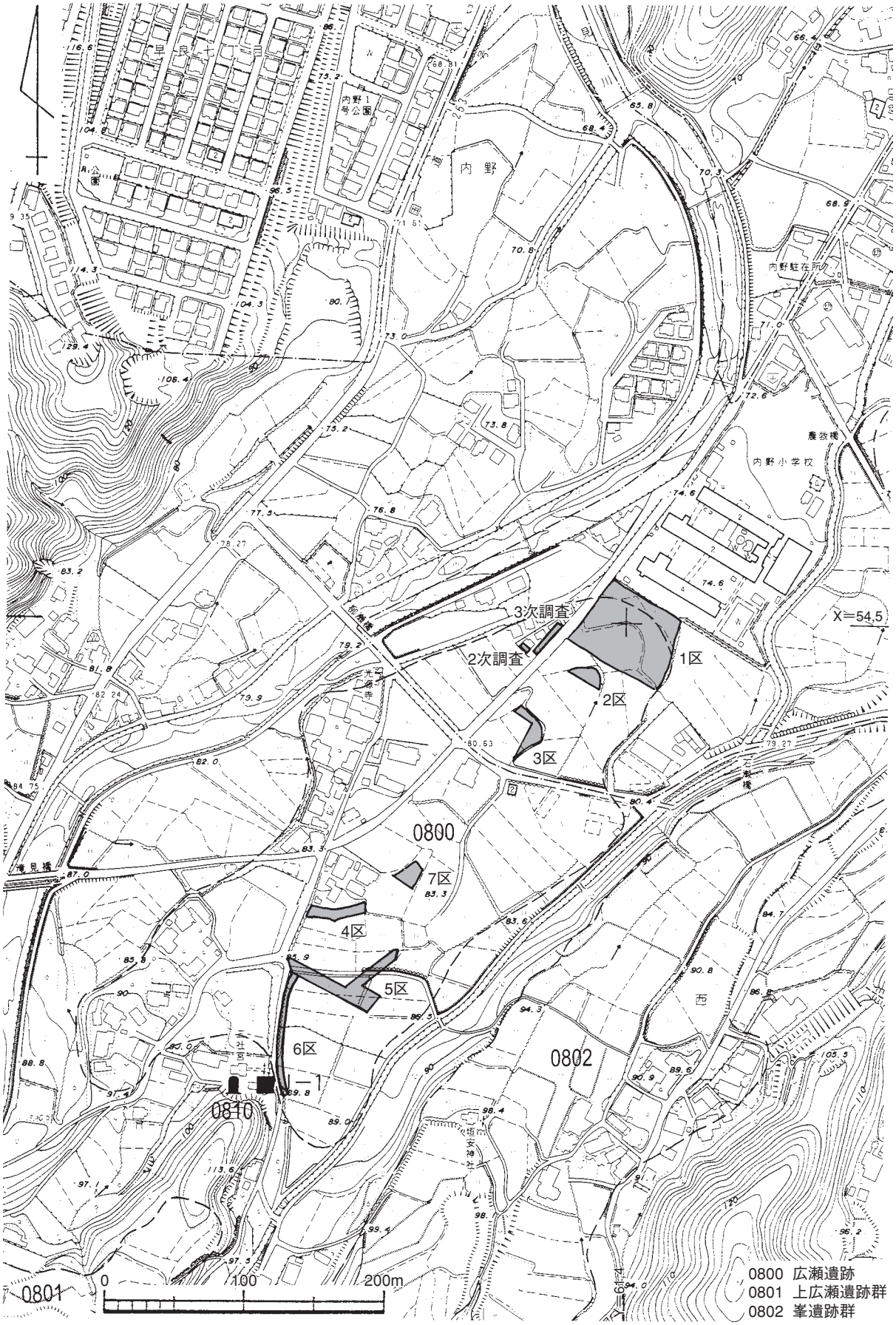


Fig.2 第1次調査区位置図（1/4,000）

Ⅲ．調査の記録

1．調査の概要

本調査区は福岡市西部に位置する早良平野を貫流する室見川の上流部、東岸の河岸段丘上に立地する広瀬遺跡の北東部に位置する。標高は78ｍ～89ｍである。遺構は耕作土下の黄褐色・黒灰色シルトの縄文時代早期～晩期包含層上面で検出される。

調査区は遺構面が掘削される部分・道路・水路等の施工箇所に設定され、東から１区3,491.5㎡・２区145㎡・３区355.5㎡、市道を挟んでさらに７区346㎡・４区390㎡・５区961㎡・６区558㎡（Fig.2）の調査区を設定した。

検出した遺構は、１区で縄文時代の倒木痕47基・集石炉１基・貯蔵穴３基・土壙29基・柱穴・包含層、古代～中世の焼土壙29基・中世溝１条・土器焼成壙１基・土壙10基・柱穴多数、近世溝１条・土壙３基・水田開墾時の廃石土壙10基・柱穴少数、２区で縄文時代の包含層、古代～中世焼土壙１基・柱穴、３区で縄文時代の倒木痕16基・土壙３基、弥生時代倒木痕１基、古代～中世の焼土壙１基・中世溝１条・柱穴（以上は『広瀬遺跡１』遺構編福岡市埋蔵文化財調査報告書第865集2005年で報告済み）、４区で縄文時代の倒木痕１基、古代～中世の焼土壙２基・中世溝３条・土壙２基・倒木痕・柱穴、近世廃石土壙２基・柱穴、５区で縄文時代の倒木痕19基・土壙６基・柱穴・包含層、古代～中世焼土壙８基・土壙８基・柱穴、６区で縄文時代の倒木痕18基・土壙１基・柱穴・包含層、古代～中世焼土壙２基・中世溝２条・土壙１基・柱穴、近世土壙１基・廃石土壙１基・倒木痕、７区で縄文時代の倒木痕９基、古代～中世焼土壙１基を検出した。総計で縄文時代の倒木痕110基・集石炉１基・貯蔵穴３基・土壙39基・柱穴・包含層、弥生時代倒木痕１基、古代～中世焼土壙44基・中世溝７条・土器焼成壙１基・土壙20基・掘立柱建物１棟・柱穴多数・倒木痕１基、近世土壙４基・水田開墾時の廃石土壙13基・溝１条・倒木痕１基・柱穴多数である。中心となるのは縄文時代早期・晩期と13世紀前後の中世である。

縄文時代早期・晩期は包含層・倒木痕を主にして遺物が検出される。中世・近世遺構の検出面の黄褐～黄灰色シルト・暗灰褐～黒灰色シルトが包含層となっており、遺構検出・掘削時に縄文土器を検出した地点を中心に２ｍグリッドを設定し、包含層内の遺物の検出を行った。また、薄い黄灰色シルトがきれて下層の黒灰色シルトに切れ替わっている面においては黄灰色シルトを覆土とした遺構・倒木痕が検出される。殊に倒木痕は、倒置して起き上がった土層が、薄い黄灰色シルト面では黒灰色シルトが、逆に黒灰色シルト面では黄灰色シルトが三日月状のコントラストで現れ非常に検出し易い状況であった。直径５ｍ近い倒木痕を多数検出している。主に黄灰色・暗灰褐色シルトから早期田村・手向山式期と晩期黒川式・夜臼式期の土器が出土しており、大部分が縄文時代と考えられ、晩期まで、当該地が巨木が鬱蒼とならぶ森林であったことを示している。

他に目立つのは焼土壙で、44基を検出している。少量の土師器と縄文土器以外まとまった資料の出土が無く時期比定が難しいが、大半が古代から開発が始まる12世紀後半～13世紀初以前の所産と考えられる。

調査１区先端近くには12世紀後半～13世紀初の幅2.5ｍ・一辺約50ｍと思われる方形区画溝が検出され、南辺の中央部に陸橋を設けている。内側には２×３間の掘立柱建物をはじめ多数の柱穴と土壙が検出され、内野・石釜地区での中心施設と考えられる。また、特筆すべきは2.3ｍ×1.8ｍ・

深さ10㎝の全面が火熱のため５～20㎜程暗褐色に変色した隅丸方形皿状の土器焼成壙SK11を検出したことである。焼成面から土師器坏・皿の破片数十片が出土している。これはレプリカを作成し、現在福岡市埋蔵文化財センターに保管されている（巻頭写真３）。

遺物は包含層を中心に、旧石器時代石器、縄文時代早期田村・手向山式期押型文土器・撚糸文土器・石鏃 ・石匙・中期阿高式土器・瀬戸内船元系土器・晩期黒川式・夜臼式土器・石器などを、中世溝を中心に多くの土師器坏・皿・貿易陶磁器を検出している。

今回報告を行うのは市道から東の１～３区の遺物編と市道から西の４～７区分の本報告分である。

２．１区の出土遺物

調査第１区は本調査の中心となる調査区で遺跡北東端部に位置する。調査面積3,491.5㎡で、縄文時代の倒木痕47基・集石炉１基・貯蔵穴３基・土壙29基・柱穴・包含層、中世溝１条・焼土壙29基・土器焼成壙１基・土壙９基・柱穴多数、近世土壙４基・水田開墾時の廃石土壙8基・柱穴多数を検出している。

縄文時代は、上部の黄褐～黄灰色・暗灰褐色シルトが比較的厚く残る中央部を中心に早期田村・手向山式期押型文土器・撚糸文土器・石器・晩期黒川式・夜臼式土器・石器を検出している。黄灰色シルトがきれて下層の暗灰褐～黒灰色シルトに切れ替わっている面においては黄灰色シルトを覆土とした遺構・倒木痕が検出され、倒木痕は径５ｍ前後のものが中央の30×20ｍ程の範囲を除いて密集している。

中世では北東部で12世紀後半～13世紀初の幅2.5ｍ・一辺約50ｍと思われる方形区画溝が検出され、南辺の中央部に陸橋を設けている。内側には２×３間の掘立柱建物をはじめ多数の柱穴と土壙・土器焼成壙が検出され、内野・石釜地区での中心施設と考えられる。

近世では北西部に水田開墾時に巨石を埋め込み処理した廃石土壙を10基検出している。

1）縄文時代の遺物

縄文時代は倒木痕47基・集石炉１基・貯蔵穴３基・土壙29基・柱穴・包含層を検出した。包含層は掘削時に地山から縄文土器を検出した地点を中心に２ｍグリッドを11箇所設定し、包含層内の遺物の検出を行っている。早期田村・手向山式期押型文土器・撚糸文土器・石器・晩期黒川式・夜臼式土器・石器を検出している（Fig.３）。

①遺構出土遺物（Fig.５ Ph.１）

１は貯蔵穴SK54（865集Fig.５）出土の晩期粗製深鉢の頸部片で、内外面をヨコ条痕後ヨコナデ、気泡を少量含む。２は土壙SK10（865－６）出土の早期貝殻条痕文土器片で、外面をヨコ・ナナメ条痕、内面ヨコナデ、２㎜前後の砂粒を多量に含む。３は土壙SK66（865－６）出土の早期撚糸文土器片で、外面にＬ撚り糸幅1.5㎜、間隔1.5～3.0㎜のタテ撚糸文を施し下半が被熱で赤変、内面はヨコケズリ後ヨコナデ、４㎜前後の砂粒を多量に含む。器厚1.4㎝と厚い。４は不整形土壙SK33（Fig.４）出土の早期撚糸文土器片、調整・胎土は３同様で、器厚は上位が厚い。５は不整形土壙SK72（865－６）出土の早期押型文土器片で、外面に幅1.2㎝程の大粒扁平な楕円押型文を縦位に施し下半が被熱で赤変、内面は丁寧なヨコナデ、１㎜前後の砂粒を多量に含みカクセン石が目立つ。器厚７㎜と薄い。６は溝状土壙SK35出土の晩期貝殻条痕文土器片で、外面をヨコ・ナナメ条痕、炭化物が付着、内面はヨコナデ、２㎜前後の砂粒を多く含む。７は倒木痕SK39（865－７）出土の晩期条痕文土器片で、外面をヨコ条痕、煤が付着、１㎜前後の砂粒を多く含む。８は不整形土壙SK69

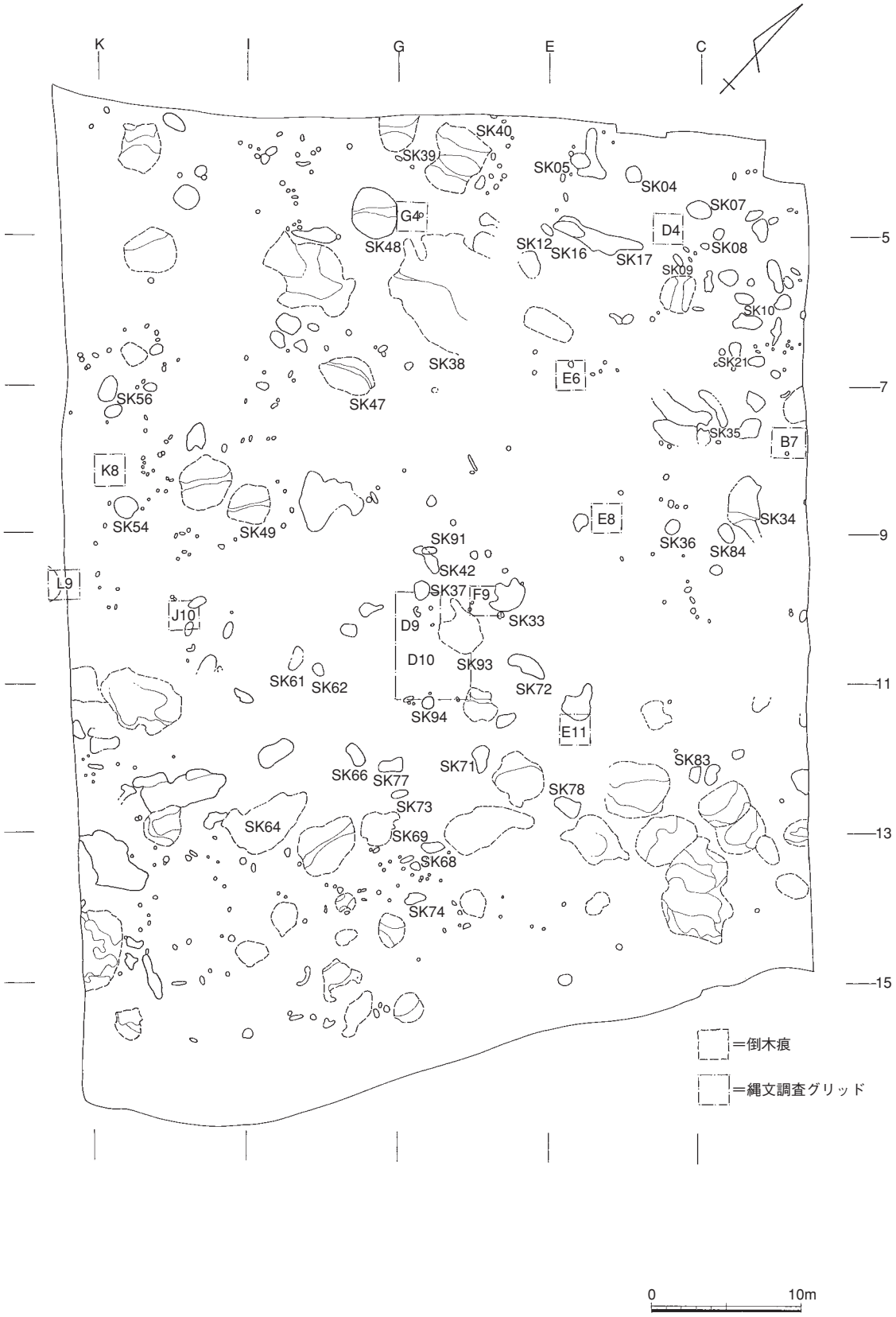


Fig.3　1区縄文時代遺構分布図（1/400）

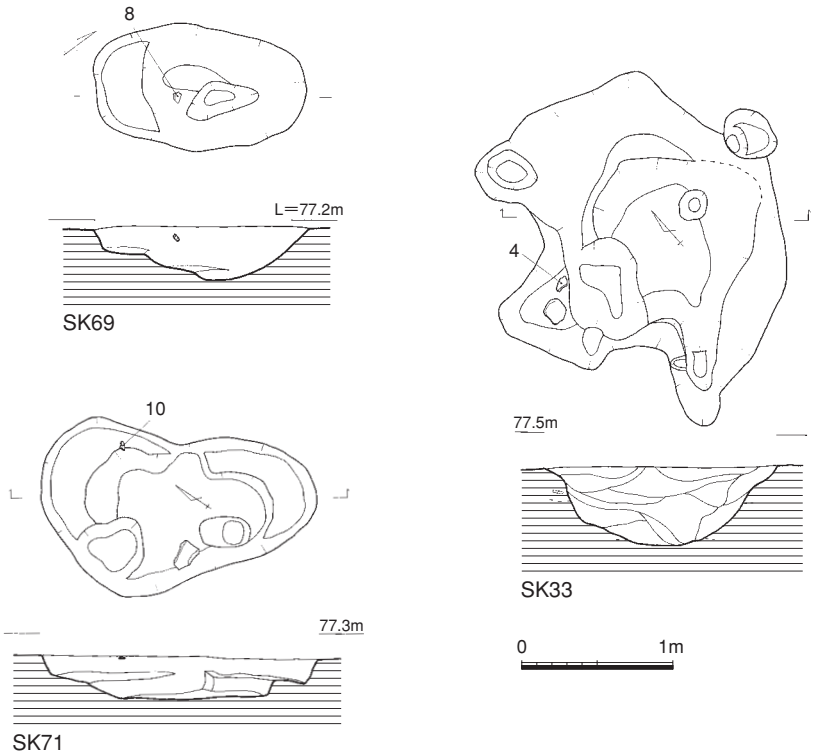


Fig.4　縄文遺構遺物位置図（1/50）

（Fig.4）出土の晩期条痕文土器片で、外面にタテ条痕、内面にヨコナデ、3㎜前後の砂粒を多く含み、気泡を少量含む。9は倒木痕SK64出土の晩期精製浅鉢片で、外面にヨコケンマ、内面ヨコケズリ後ヨコケンマを施す。10は不整形土壙 SK71（Fig.4）出土のサヌカイト製石匙。横長剥片の上下縁の両面から調整剥離を施し整形する。66×40×8㎜を測る。11は土壙SK83(865−6)出土のサヌカイト製石鏃25×16.5×4.5㎜0.86gを測る。

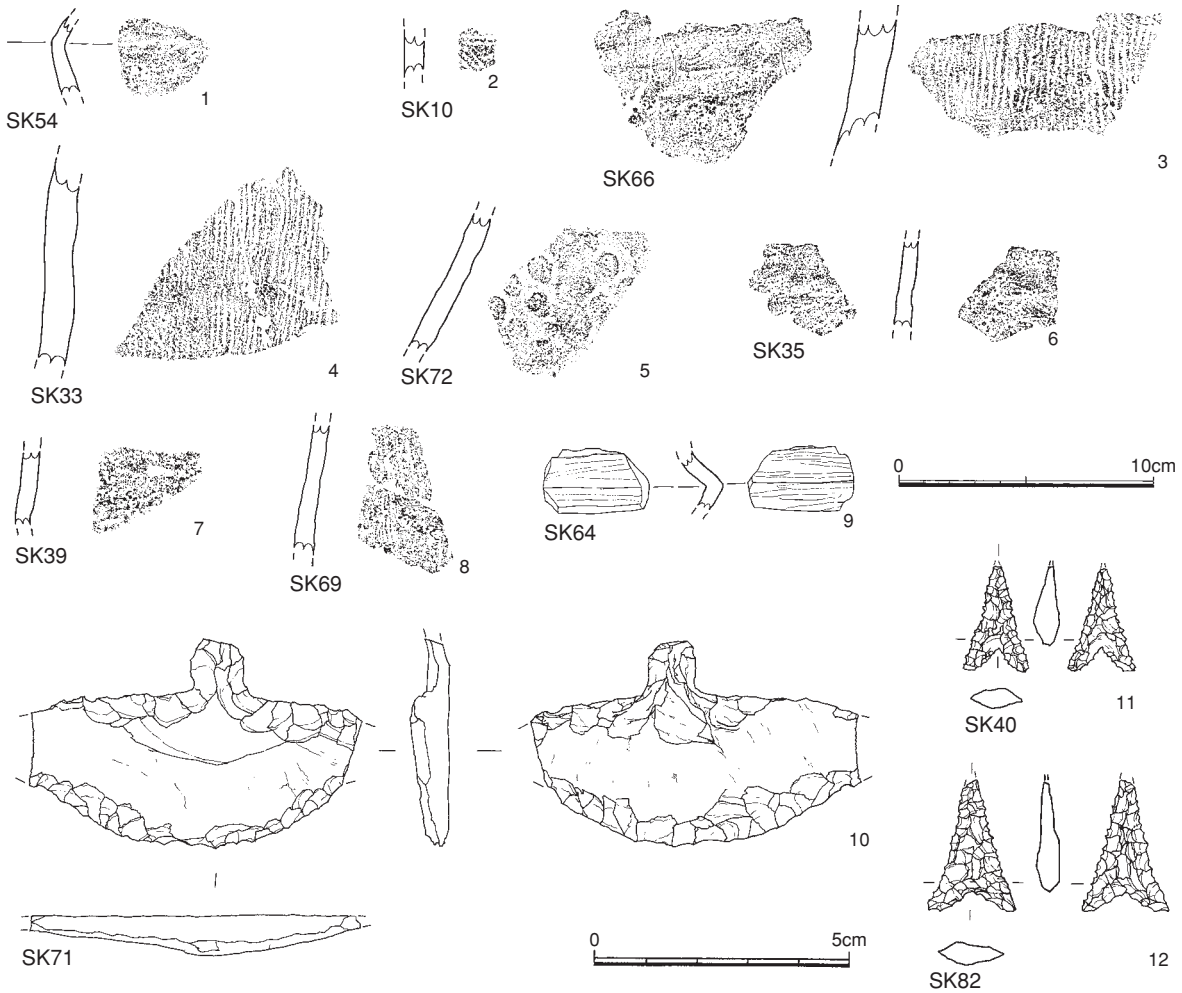
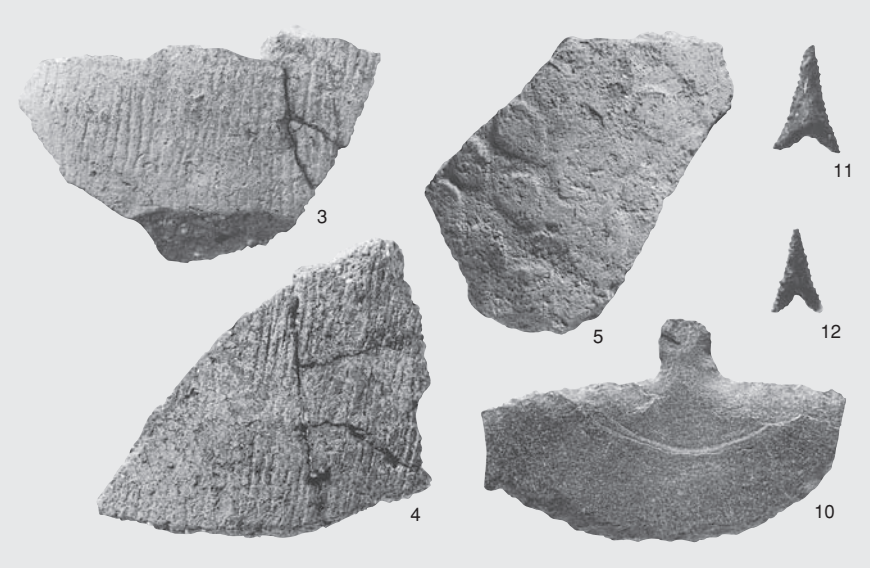


Fig.5　1区縄文遺構出土遺物実測図（1/3・2/3）



Ph.1　1区縄文遺構出土遺物

柱穴出土遺物（Fig.6）

13～17は早期土器。13はやや右下がりの14は横位の15は左下がりの楕円押型文で15は粒がやや粗い。内面はヨコナデを施す。16は内外面ヨコナデ後外面に縦位の沈線。17は 押型文土器の底部とおもわれ、内外にナデ内面にへら当て痕が残る。18～23は晩期土器。18～20は精製浅鉢。18は口径17.2㎝。口縁内外と頸部に沈線を施し、肩部が緩い稜をなす。19は外面口縁下に沈線、内面は段をなす。20は稜をなす肩部片。何れも内外にヨコケンマを施す。21～23は粗製深鉢。21は口縁外面にヨコ条痕、内面にヨコ条痕後ヨコナデ。22は口縁外面に粗いヨコ条痕、内面にヨコケズリ後ヨコナデ。23は円盤貼付底部で径7.6㎝。24はサヌカイト製の小石鏃で、10.5×16×4㎜0.38gを測る。25は晩期の黒耀石製の調整剥片を用いた使用剥片。26は早期のサヌカイト角礫の隅角剥片製の削器で、39×43×17㎜を測る。

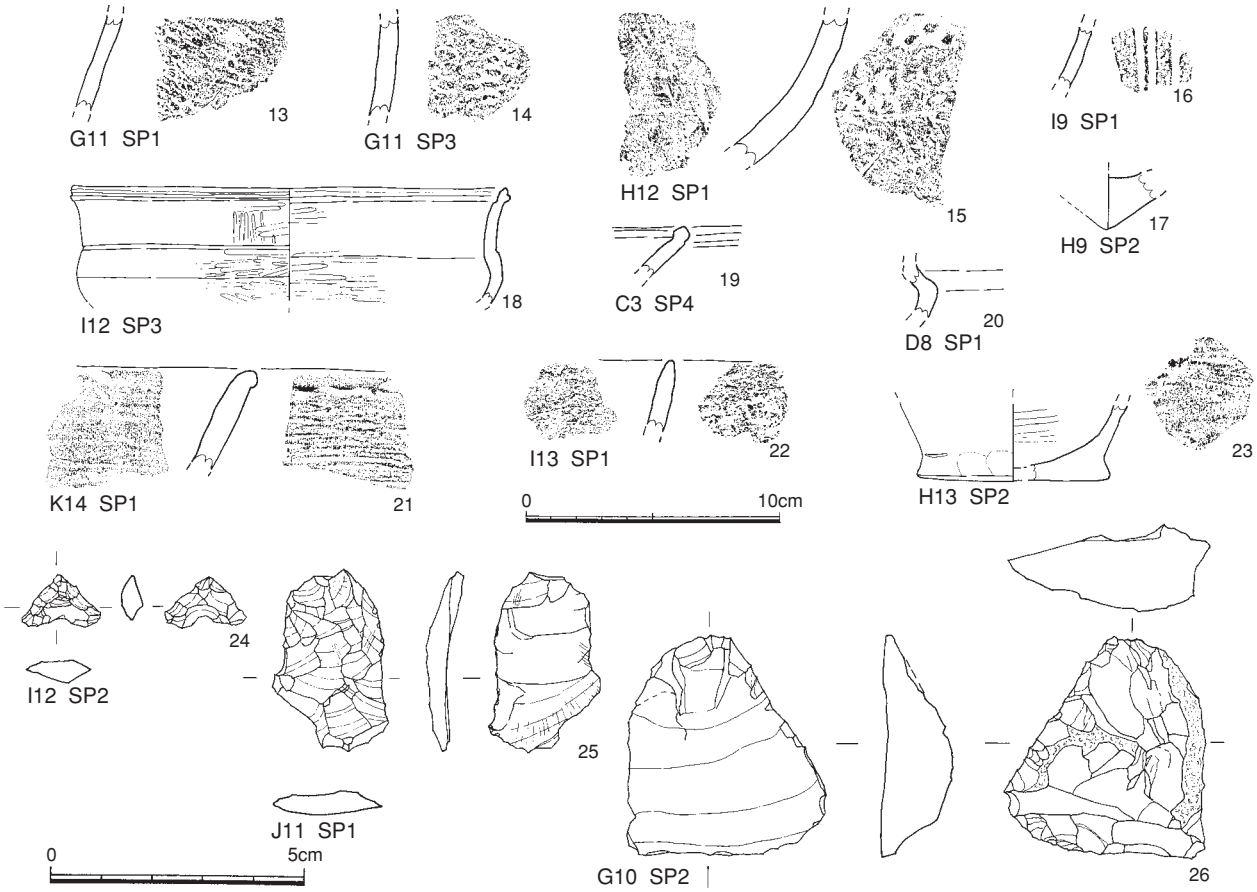


Fig.6　1区柱穴出土縄文遺物実測図（1/3・2/3）

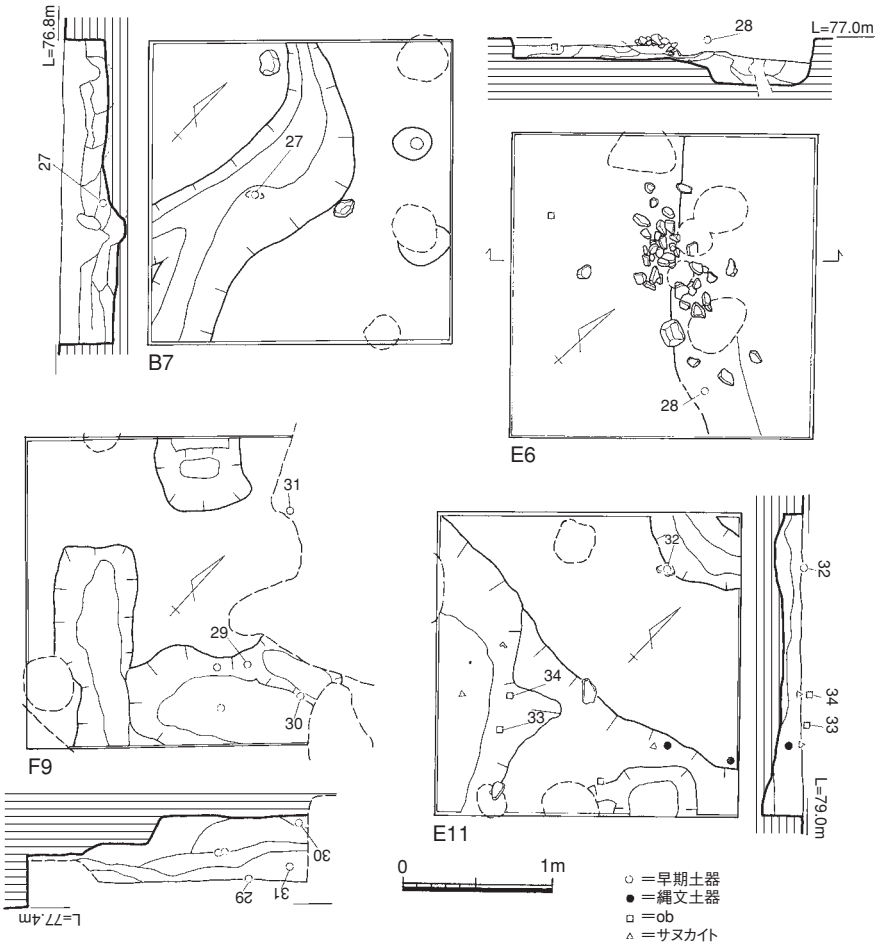


Fig.7　1区縄文グリッド遺物位置図．1（1/50）

②グリッド出土遺物（Fig.8～10 Ph.2～3）

Fig.7・9は各グリッド壁面土層図に遺物の垂直位置を重ねたもので、遺物は土層上位から下位まで散布し、面を成していない。27はB7グリッド出土の撚糸文土器。外面にL撚り糸幅1.5㎜、間隔1.5～3.0㎜のタテ撚糸文、上半に煤が付着。内面は丁寧なヨコ・ナナメナデ、4㎜前後の砂粒を多量に含む。28はE6グリッド出土の早期条痕文土器。外面にナナメ条痕後2本単位のタテ沈線。内面はヨコ貝殻条痕後ゆるいヨコナデ、2㎜前後

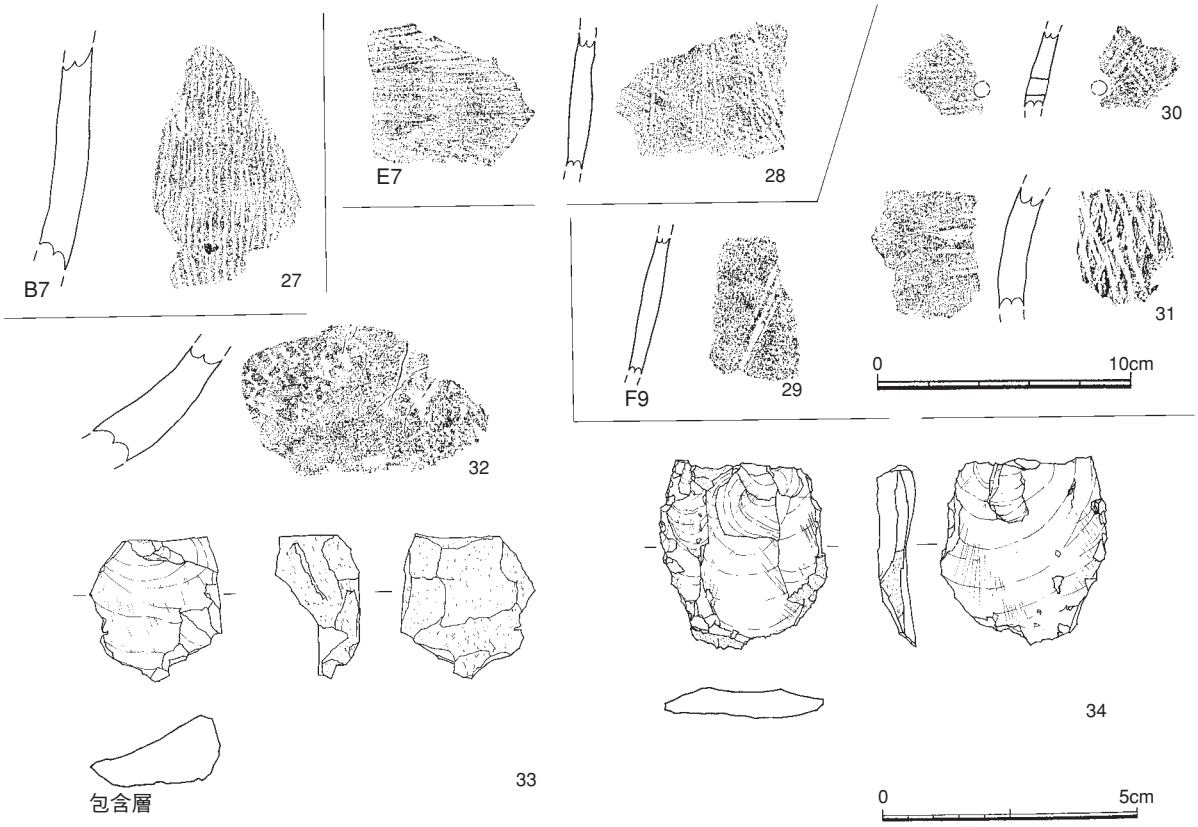


Fig.8　1区縄文グリッド出土遺物実測図．1（1/3・2/3）

の砂粒を多く含む。29〜31はＦ９グリッド出土。29は内外面ヨコナデ後外面に２本単位の貝殻沈線を斜位に施す。２㎜前後の砂粒を多く含む。30は内外に貝殻条痕後ゆるいヨコナデ、径５㎜程の補修孔を穿つ。31は撚糸文土器。右下がりの撚糸文後タテ撚糸文を施し煤が付着。内面はヨコ条痕後ヨコナデ、４㎜前後の砂粒を多量に含む。32〜34はE11グリッド出土。32は縦位の山形押型文。内面は丁寧なヨコナデ。器厚は18.7㎜と厚く２㎜以下の砂粒を多く含む。33は腰岳産黒耀石角礫の隅角の剥片。34は黒耀石の使用剥片で主剥離面上下と左に自然面を残す。35〜41（Fig.10）はＧ９・10グリッド出土。35は散布の中心を成す撚糸文土器で、グリッド内に広く散布。外面にＬ撚り糸幅1.5㎜、間隔1.5〜3.0㎜のタテ撚糸文を口縁から底部に向け４〜５回に分け施文、口縁下に径９〜12

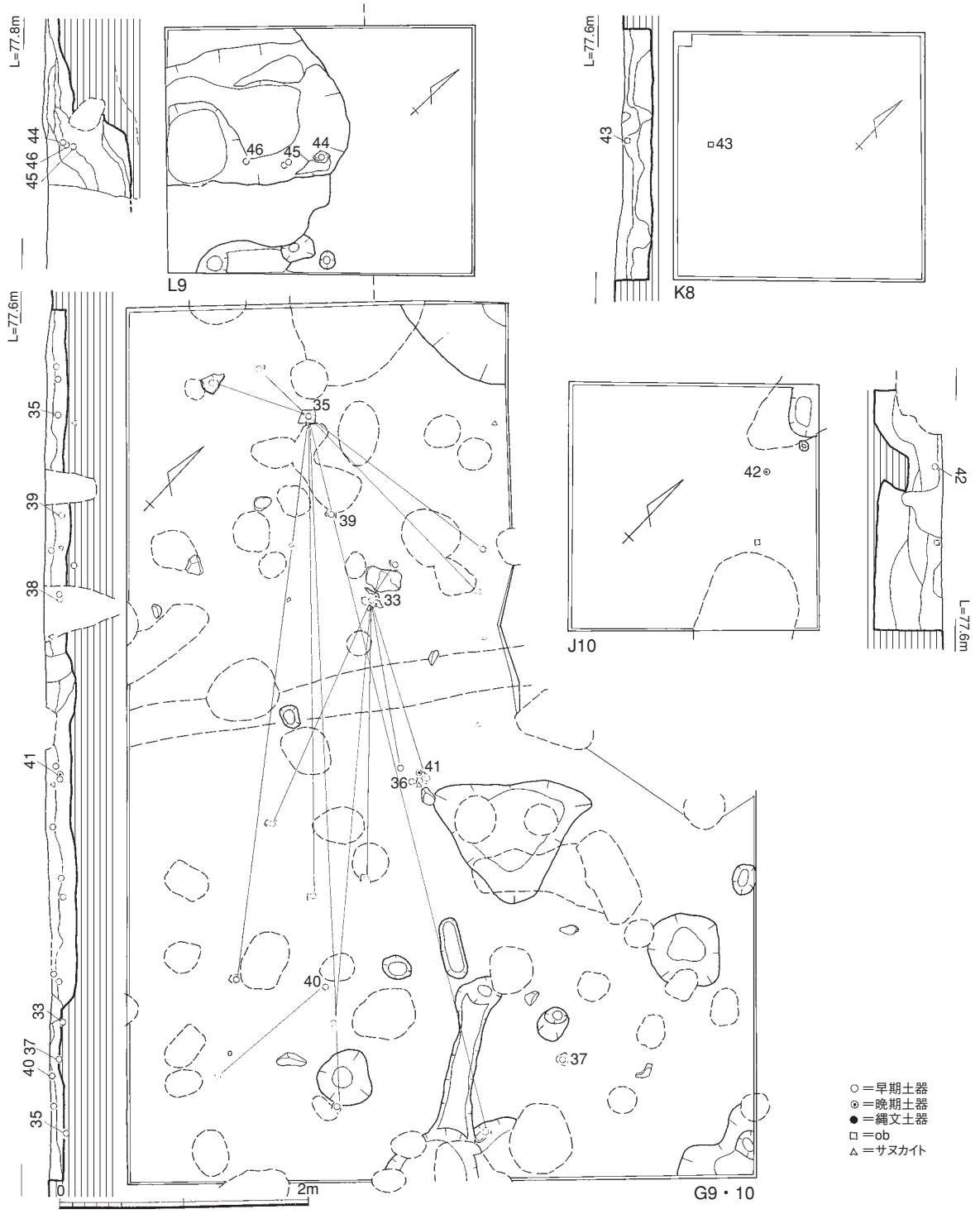


Fig.9　１区縄文グリッド遺物位置図．２（1/50）

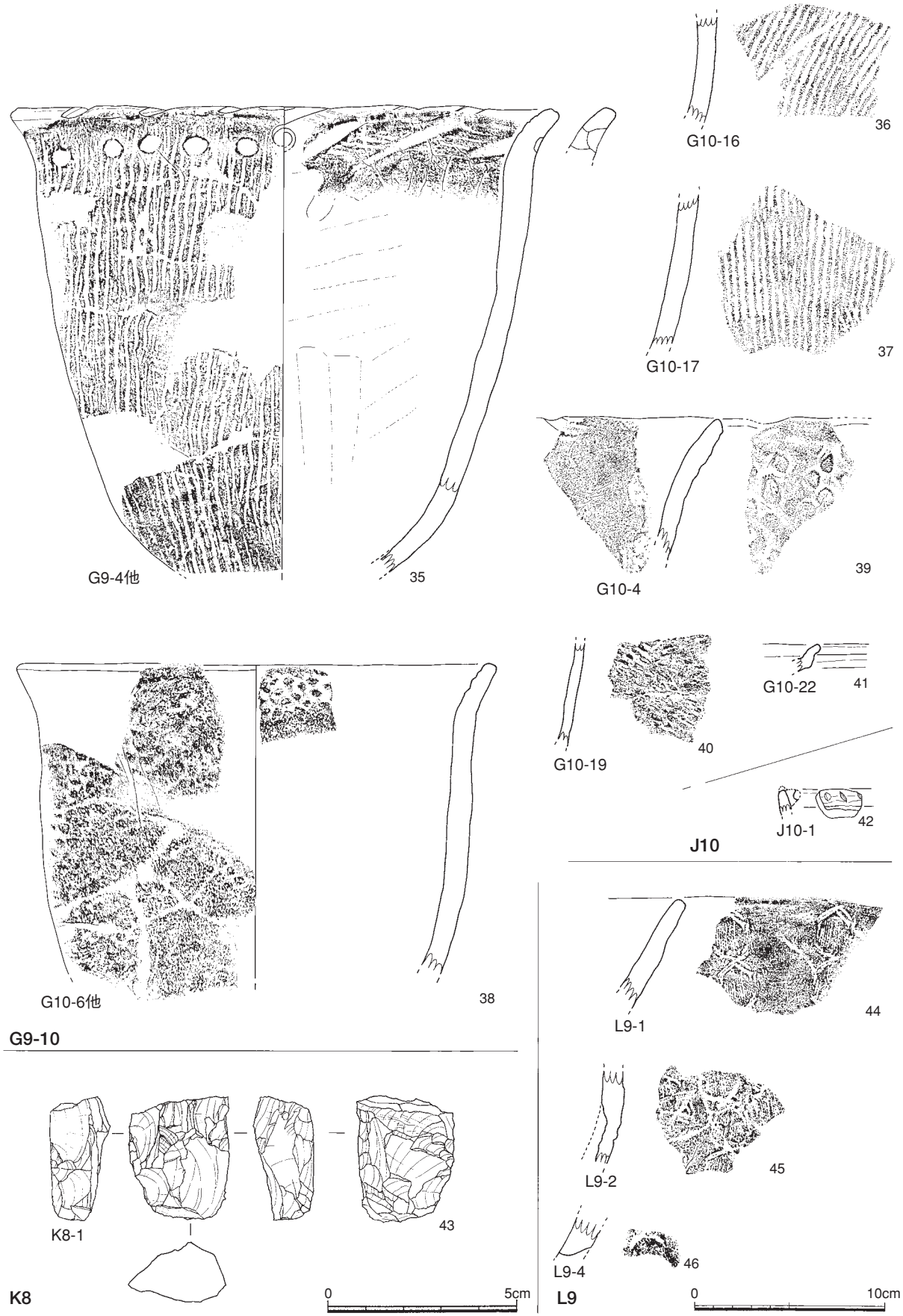
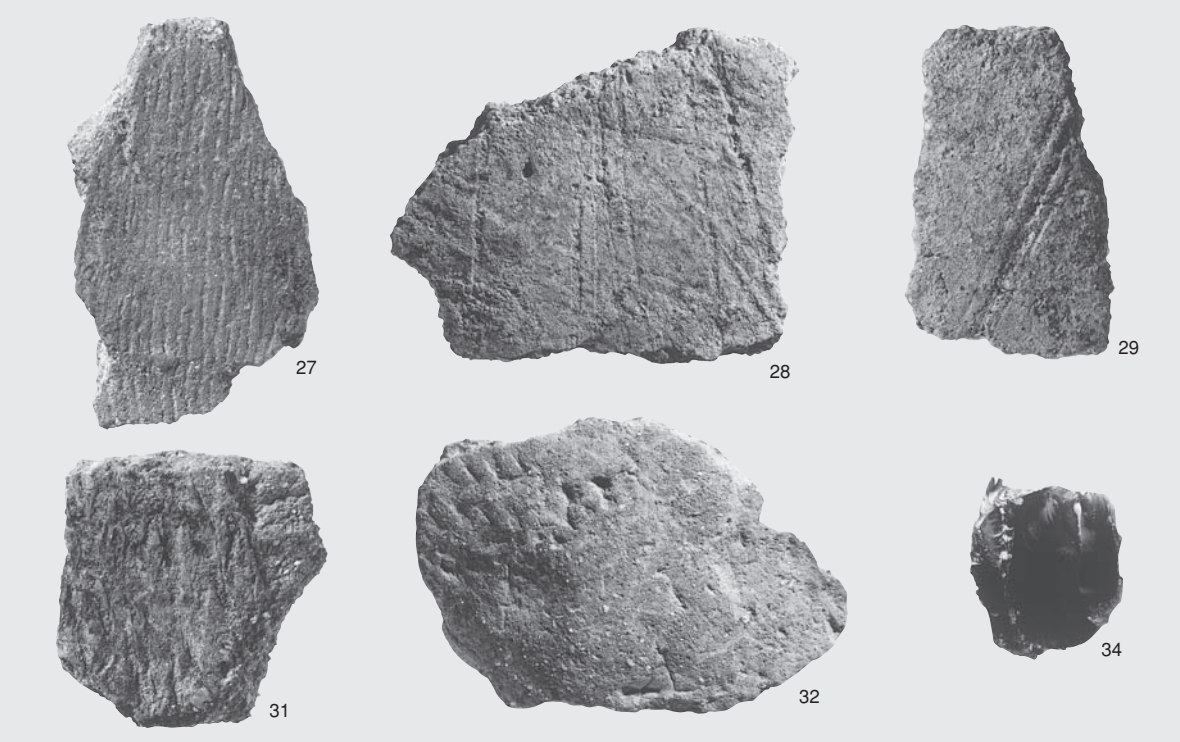


Fig.10　1区縄文グリッド出土遺物実測図．1（1/3・2/3）



Ph.2　1区縄文グリッド出土遺物．1

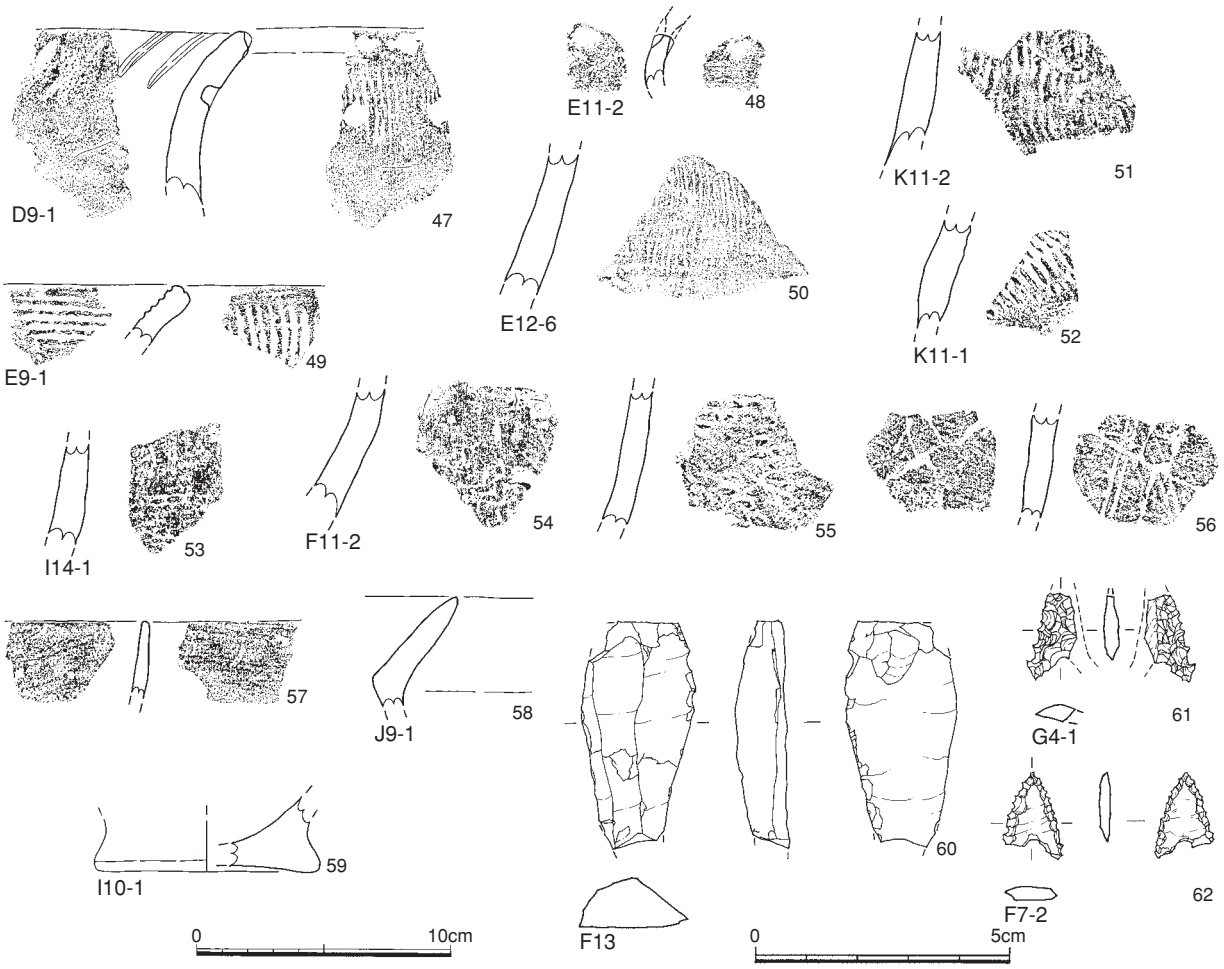
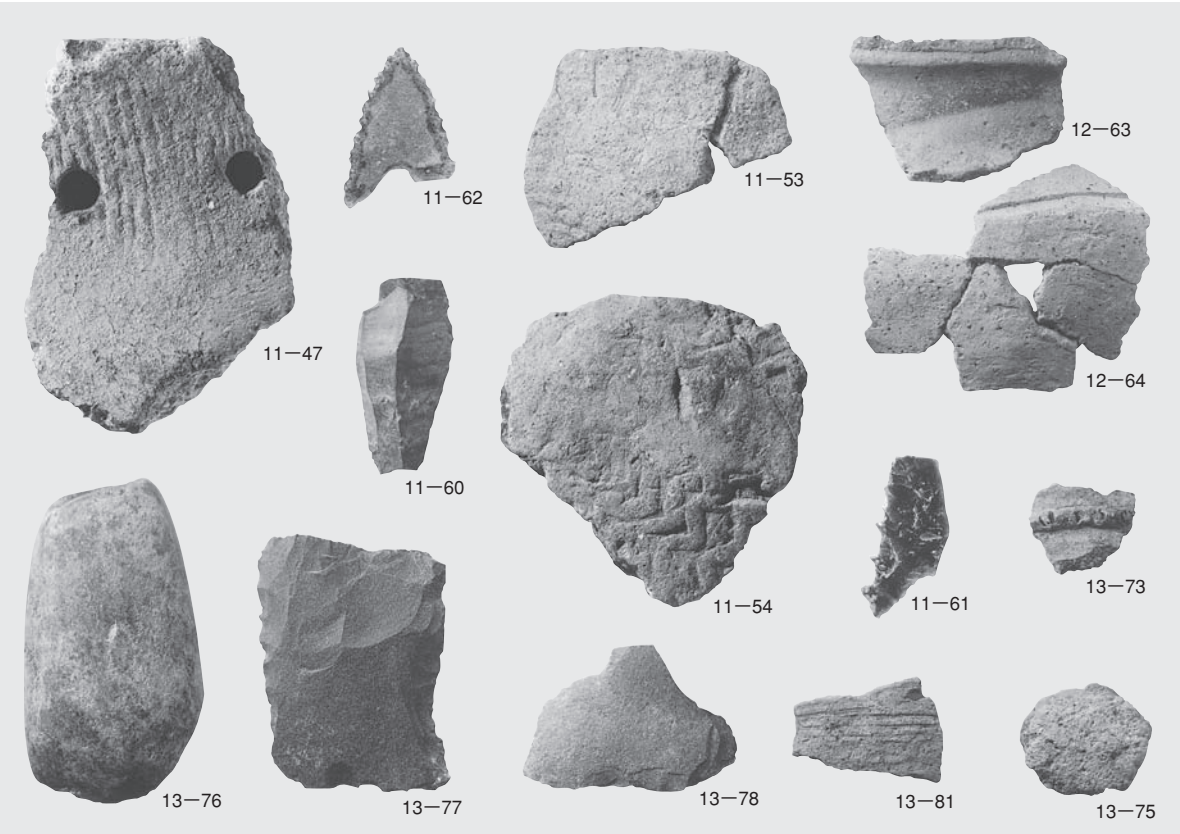


Fig.11　1区縄文包含層検出面出土遺物実測図（1/3・2/3）

Ph.3　1区縄文グリッド出土遺物．2



Ph.4　その他の1区出土縄文遺物

㎜の抉りによる列点文を18～27㎜間隔で施文。1点のみ内面から焼成後の穿孔で補修孔とする。下半は被熱により赤変。内面はタテ・ヨコナデ後ケンマ、口唇から内面にかけ横位の撚糸文施文後、原体の内から外への押し引き凹線文を5㎝間隔で施す。器厚は口縁で14下端で10㎜と下方ほど薄い。口径29㎝。全周の1/4が残存。胎土は8㎜以下の砂粒を多く含む。36は別個体の左下がりの撚糸文土器で、内面はヨコナデ。胎土は1.5㎜以下の砂粒を多量に含む。37は縦位の撚糸文土器で、内面は丁寧なヨコナデ後ケンマ。38はもう一方の中心となる楕円押型文土器で破片が広く散布。口径25.8㎝で、全周の1/2が残存。縦位の楕円押型文を施文、内面は口縁下に一段の横位の楕円押型文を、以下に丁寧なヨコナデ後ケンマを施す。器厚は8㎜程。胎土に1㎜以下の砂粒を多量に含む。39は縦位の粗大・扁平な楕円押型文を施文。内面はヨコナデ、口縁下にナナメ凹線を施す。胎土はカクセン石他1㎜以下の砂粒を多量に含む。40は右下がりの細かな楕円押型文を施文。胎土は2㎜以下の砂粒を含む。器厚は6㎜と薄い。41は晩期半精製土器で、口縁外面に沈線を1条施す。調整はヨコナデ。42はJ10グリッド暗灰褐色土出土の晩期夜臼式深鉢の口縁片で外端に刻目突帯を施す。43はK8グリッド黒灰色土出土の黒耀石製エンドスクレーパーで、角柱状の残核を利用。下面に自然面を残す。黒灰色を呈し、横縞模様が入る。44～46はL9グリッド倒木痕内出土の網目撚糸文土器で同一個体。内外面にヨコナデ後ゆるいケンマ、外面にL2段撚りの糸を芯木に右巻に詰めて19㎜の長さに巻き、端部から片面に交差させた原体を3.5㎝間隔に縦位に施文、一単位が27㎜を測る。胎土に金雲母・カクセン石他の2㎜以下の砂粒を含み橙色～暗橙色を呈す。口径は50㎝前後の大型品と思われ、器厚12㎜を測る。Fig.11は遺構検出時に包含層上面で検出した遺物。47は35とは別個体の撚糸文土器で、縦位の撚糸施文後口縁下に刺突による列点文、口唇に刻目、口唇内面に原体によるナナメ凹線。胎土は3㎜以下の砂粒を多く含む。48はヨコ条痕文の口縁に凹点文。49は糸幅の太い縦位撚糸文土器で、口唇・口縁内面に横位の撚糸文。50は糸幅の細い縦位撚糸文土器で、内面はヨコナデ後ケンマ。51は縦位撚糸文土器で、内面はヨコナデ。カクセン石・金雲母他5㎜以下の砂粒を多く含む。52は斜位撚糸文土器で煤が付着、内面はヨコナデ。カクセン石・金雲母他3㎜以下の砂粒を多く含む。53は横位ベルト施文の楕円押型文土器。内面はヨコナデ。カクセン石・金雲母他1.5㎜以下の砂粒を多く含む。器厚は11㎜。54は斜位山形押型文土器、内面はヨコケズリ後ヨ

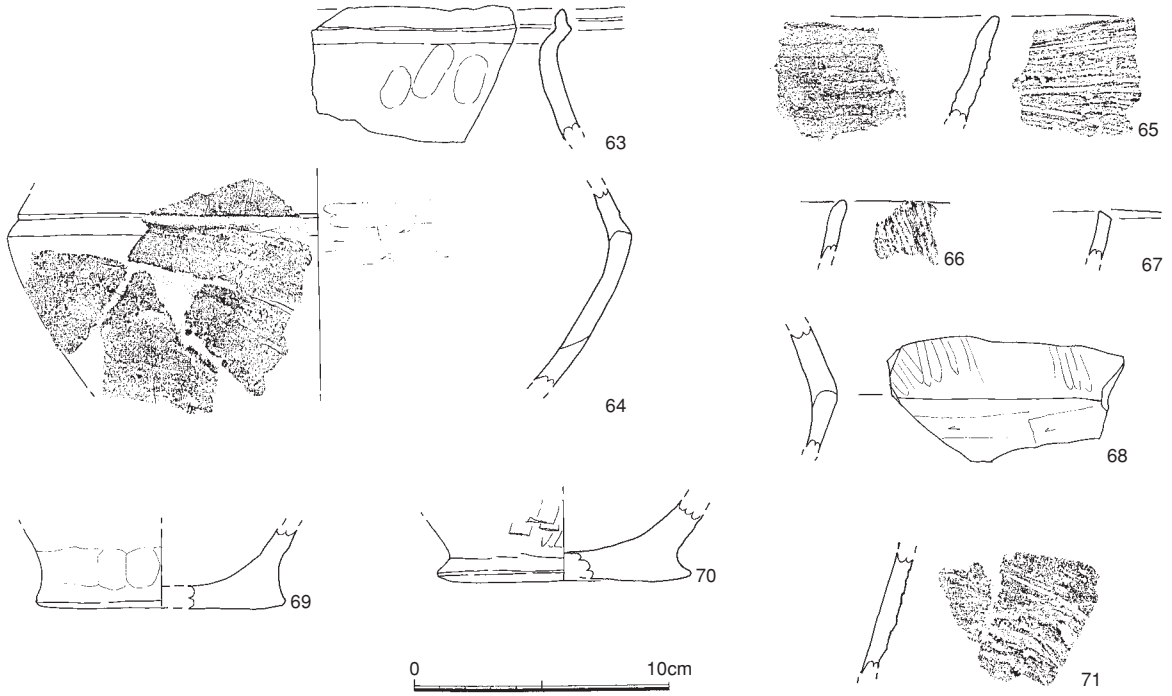


Fig.12　SK81 出土遺物実測図．1（1/3）

コナデ。カクセン石・金雲母他3㎜以下の砂粒を多く含む。55は横位楕円押型文土器、内面はヨコナデ後ケンマ。3㎜以下の砂粒を含む。56は早期ヨコ・ナナメ貝殻条痕後ヨコナデ、外面に2本単位の貝殻沈線を斜位に施す。57は晩期ヨコ条痕文土器。58は晩期粗製土器。内外面はヨコナデ。カクセン石・金雲母他1㎜以下の砂粒を含む。59は晩期粗製土器底部。内外面はヨコナデ。径9㎝。3㎜以下の砂粒を多く含む。60は旧石器の黒耀石使用剥片。縦長剥片の左側縁を使用。風化が進み暗灰色を呈し横縞模様が入る。61は黒耀石石鏃。先端・右側を欠損。残存17㎜。62は黒耀石局部磨製石鏃。2次調整剥離後ナナメに研ぎ。長17㎜重0.34g。

Fig.12は焼土壙SK81出土の晩期一括品。63・64は半精製深鉢。同個体と思われ、口縁外面に沈線・内面は段、屈曲肩部上位に段を施す。ヨコケズリ後下位は粗いナデ上位はケンマを施す。肩径24.7㎝。胎土に気泡を多数含む。65はヨコ貝殻条痕文土器。煤が付着。内面はヨコヘラナデ。胎土に気泡を多量に含む。66は径10㎝弱の小品。貝殻条痕を施す。67は粗いナデ調整の粗製土器。胎土に気泡を多量に含む。68は半精製深鉢肩部。屈曲肩部下位はヨコケズリ後粗いナデ上位はタテケンマを施す。下位は被熱で赤変。69・70は粗製土器底部。69は内外面はヨコナデ。径9.8㎝。70はタテヘラナデ後ヨコナデ。径10㎝。71はヨコ条痕文土器。内面はヨコナデ。

Fig.13は混入資料。72～79はSD01出土。72は楕円押型文土器。73・74は晩期粗製土器。75は粗製土器片円盤。76は緑泥片岩製の磨製石斧。欠けた刃部を再生途中。長118㎜重399g。77・78は晩期サヌカイト製のサイドスクレーパー。79は黒耀石使用剥片。80～82は粗製条痕文土器。口縁81・82には山形突起が付く。83は半精製深鉢。内外にヨコケズリ後ヨコナデ。内面にケンマを施す。

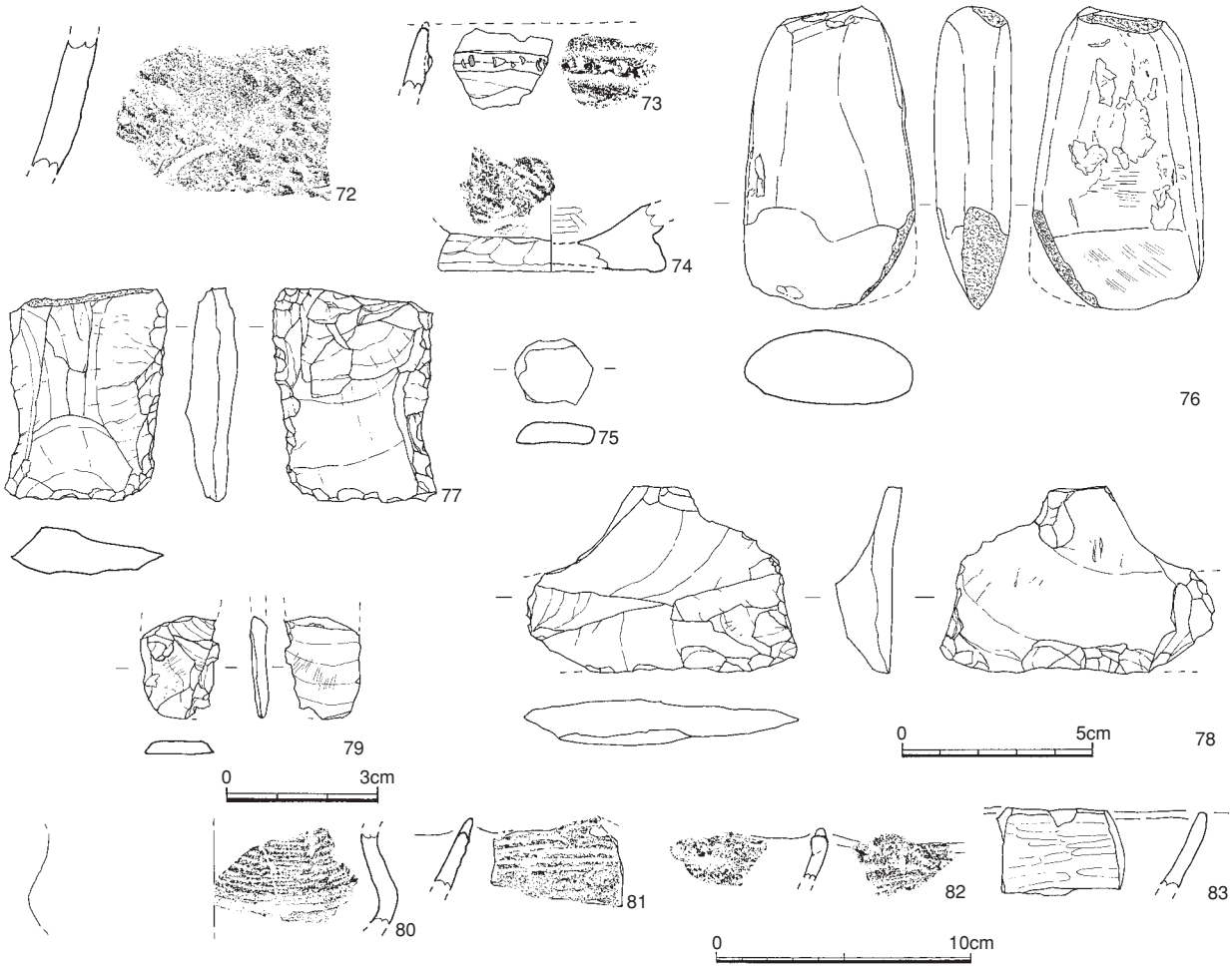


Fig.13　1区混入縄文遺物実測図（1/3・2/3・1/4）

2）中世の遺物

中世では居館の方形区画溝1条・焼土壙29基・土器焼成壙１基・土壙９基・掘立柱建物１棟他柱穴多数を検出し（Fig.14）、遺物の大半は溝SD01から出土している。

①SD01出土遺物（Fig.15～20 Ph.5）

SD01は南辺中央に陸橋を有し、西半と東半で底面の堆積が異なり、西半は澱んだ状態、東半は粗砂が堆積し水が流れている。Fig.15は西半部最下層出土土師器。84～87は坏。口径・器高はそれぞれ15.8×3.6・140×2.8・14.4×3.0・14.4×2.9㎝を測り、みな右回転糸切り後内底ををタテにナデ

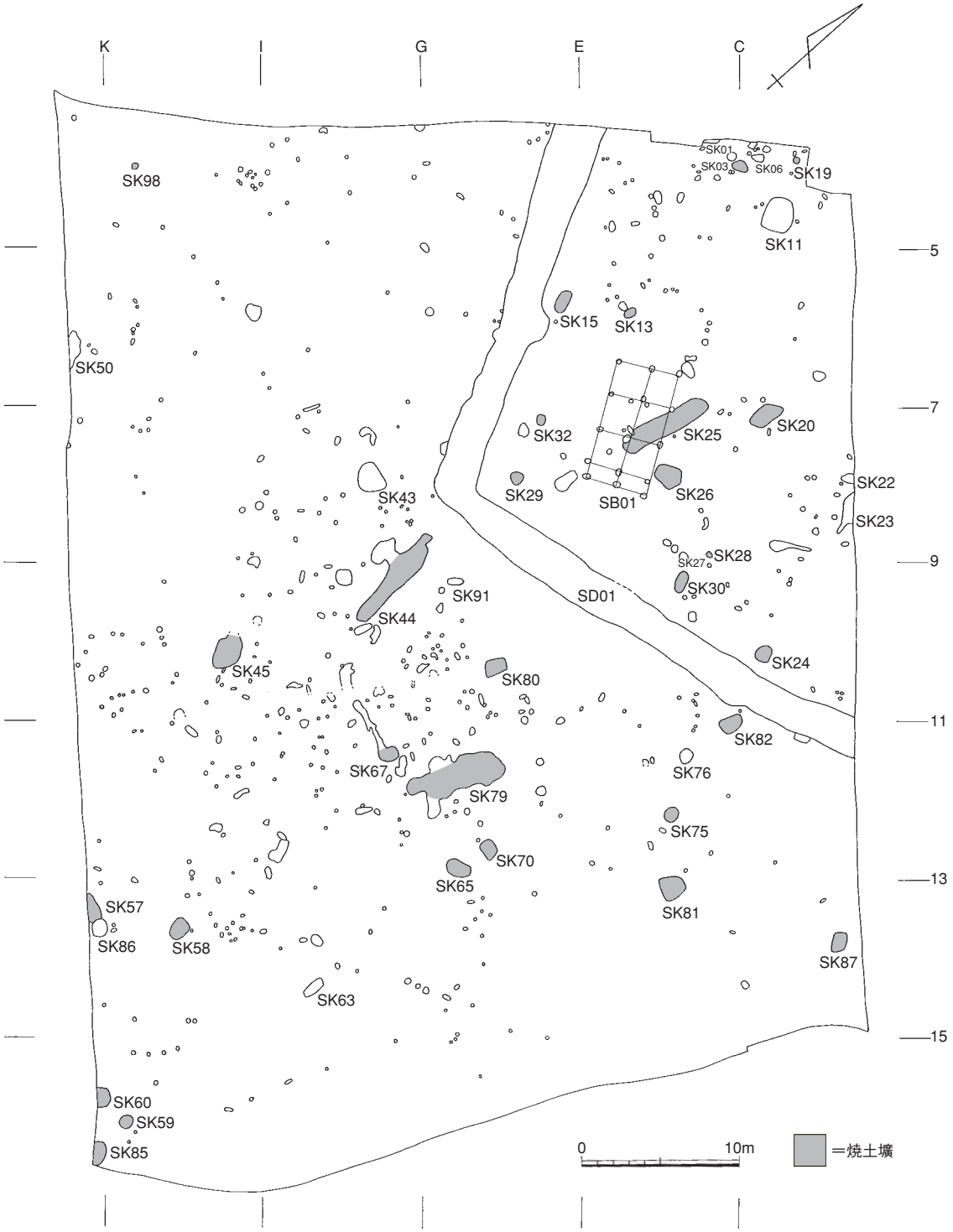


Fig.14　1区中世遺構分布図（1/400）

外底に板圧痕を有する。体部は緩く外湾するものが多い。胎土は1㎜以下の細砂を含み、器厚は薄手で黄橙～浅黄橙色を呈すが86は底面に黒斑を有す。88～91は皿。口径・器高はそれぞれ9.0×1.1・9.0×1.0・7.5×0.9・8.8×1.1㎝を測り、坏同様、右回転糸切り後内底をタテにナデ外底に板圧痕を有する。胎土は1㎜以下の細砂を含み、器厚も薄手で黄橙～浅黄橙色を呈す。88は大半に黒斑を、90はにぶい暗黄橙色を呈す。

Fig.17～19は陸橋東部の溝外側から、底面に5m程の範囲に堆積した土器溜まり出土遺物である。92～96は青磁。92は龍泉窯系Ⅰ類の碗。胎土は黒色粒を少量含む灰白色で、明緑灰色の透明釉を外面高台際まで施釉する。高台内に目跡が残る。底径5.6㎝。93～96は同安窯系。93はⅡ類碗。内面に片切彫りの劃花文を外面に櫛描きで縦線を施す。胎土は灰白色で灰オリーブの透明釉を高台脇近くまで施釉する。底径は5.6㎝。94・95は平底皿。内底に片切彫りと櫛描きで草花文を施す。95は外底に墨書で花押を描く。胎土は淡灰色で、灰オリーブの透明釉を全面に掛け外底を掻き取る。口径・器高はそれぞれ9.6×2.4・11.1×2.3㎝を測る。97～99は陶器瓶。97はほぼ完形の小口瓶で、口径1.8器高18.6底径6.4㎝を測る。左回転ロクロで成形する。口縁から肩部に灰黄褐色の不透明釉を施し、肩部4カ所に目跡が残る。胎土は黄灰色で1㎜以下の白・黒細砂粒を多く含む。磁灶窯。

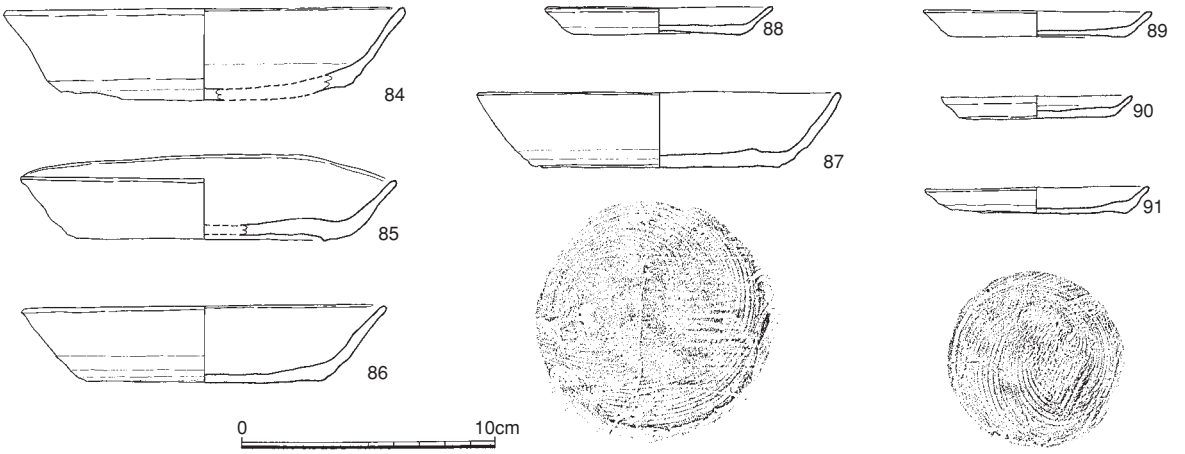


Fig.15　SD01 西部最下層出土遺物実測図（1/3）

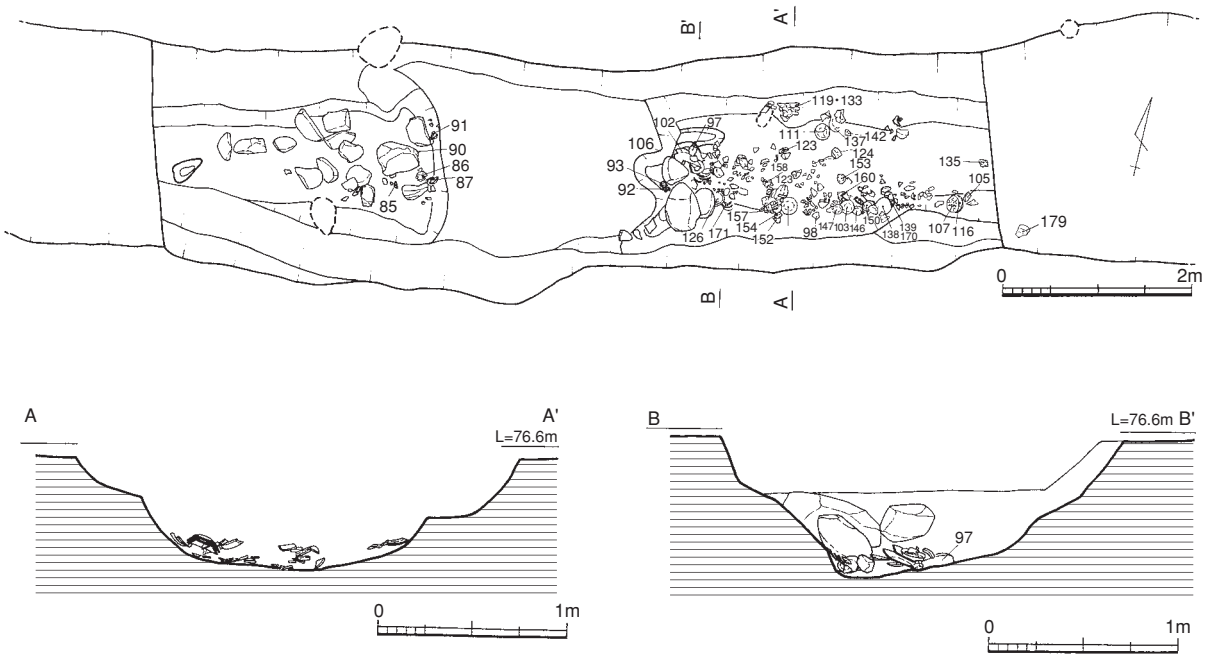


Fig.16　SD01 陸橋部遺物出土位置図（1/40・1/80）

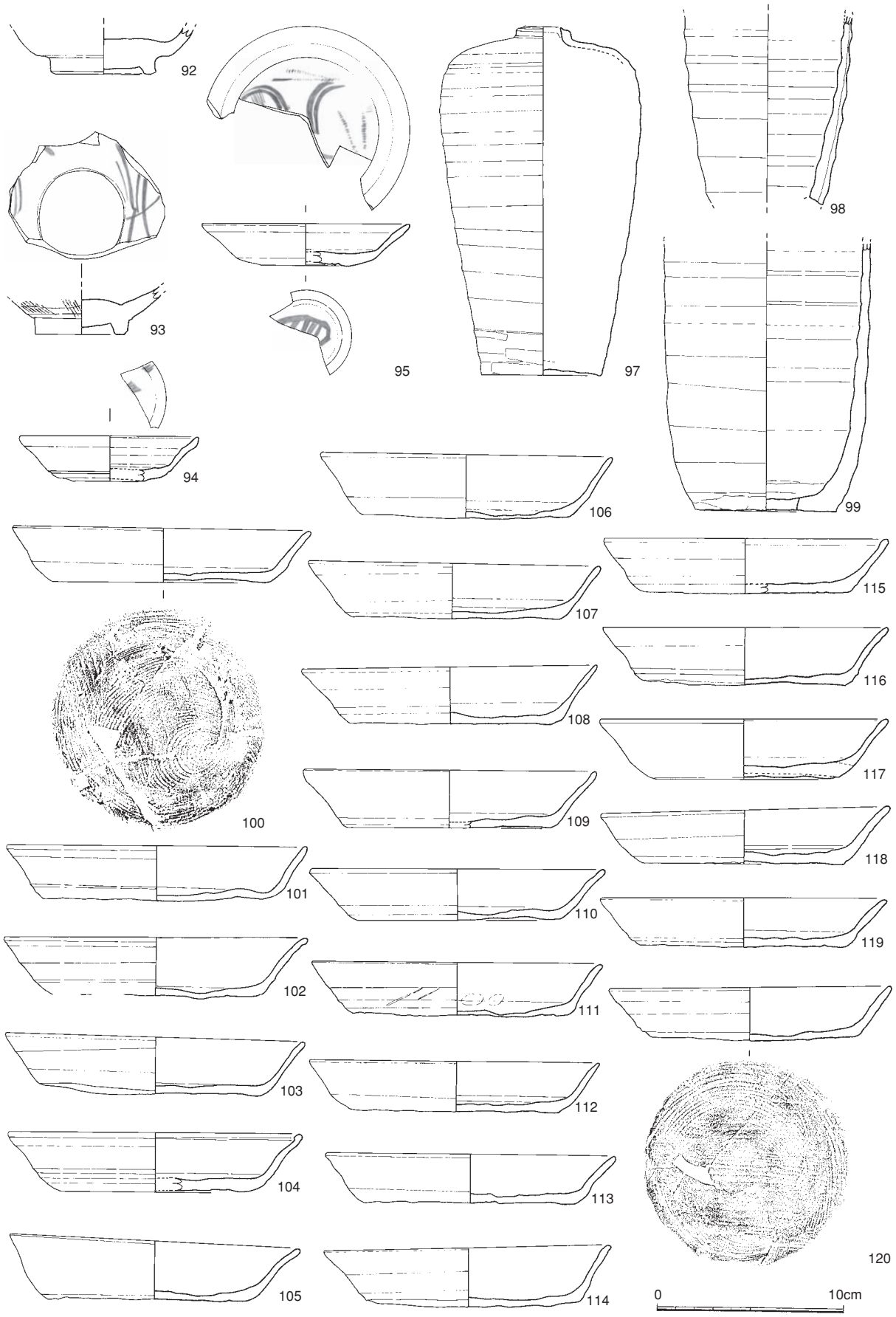


Fig.17　SD01 東部土器溜まり出土遺物実測図．1（1/3）

98・99は長瓶胴部小片で、98は淡灰色の胎土に黒色砂粒を多く含み、灰オリーブ色の釉を内外に薄く施す。99は赤褐色の胎土に茶褐色砂粒を含み、灰オリーブ色の釉を外面に雑に施す。100～145は土師器坏。口径・器高で100～103の16.2～16.5・3.0～3.5㎝、104～109の15.6～15.8・3.0～3.5㎝、110～113の15.5～15.8・2.7～2.8㎝、114～129の15.0～15.4・2.6～3.4㎝、130～139の14.6～15.0・2.5～3.1㎝、140～141の14.4～14.6・2.8～2.9㎝、142～145の13.3～14.5・2.0～2.6㎝のグループに分別される。成形は何れも右回転ロクロで、糸切り後内底をタテナデし、図化46点中29点の外底に板圧痕が残る。圧痕ナシは中・小型品に目立ち37%を占める。体部は緩く外湾するものが大部分を占める。胎土は2㎜以下の砂粒を少量含み精良で、色調は鈍い浅黄橙色～橙色を呈す。35点の鈍い橙色～浅黄橙色品中14点に黒斑が、明るい橙色11点中２点に黒斑がある。外底から底部脇にあり、３㎝程の帯状のものが多い。橙色は中・小型に多く、24%を占める。焼成時に大型品から下にして重ねたため、中・小型品は高熱で明るく発色し、大型品で、下位ほど鈍い発色となり、最下品に黒斑が生じたためと思われる。黒斑の出現率は35%。Fig.19は土師器皿。同様に口径・器高で146～147の9.9～10.0・0.8～1.1㎝、148～153の9.3～9.6・1.0～1.2㎝、154～156の9.5～9.6・0.8～1.0㎝、157～163の9.0～9.4・1.0～1.2㎝、164～167の9.1～9.4・0.8～0.9㎝、168～175の8.6～9.0・0.8～1.1㎝のグループに分別される。成形は何れも右回転ロクロで、糸切り後内底をタテナデし、図化30点中17点の外底に板圧痕が残る。圧痕ナシは43%と半数に近い。坏同様、体部は緩く外湾するものが大部分

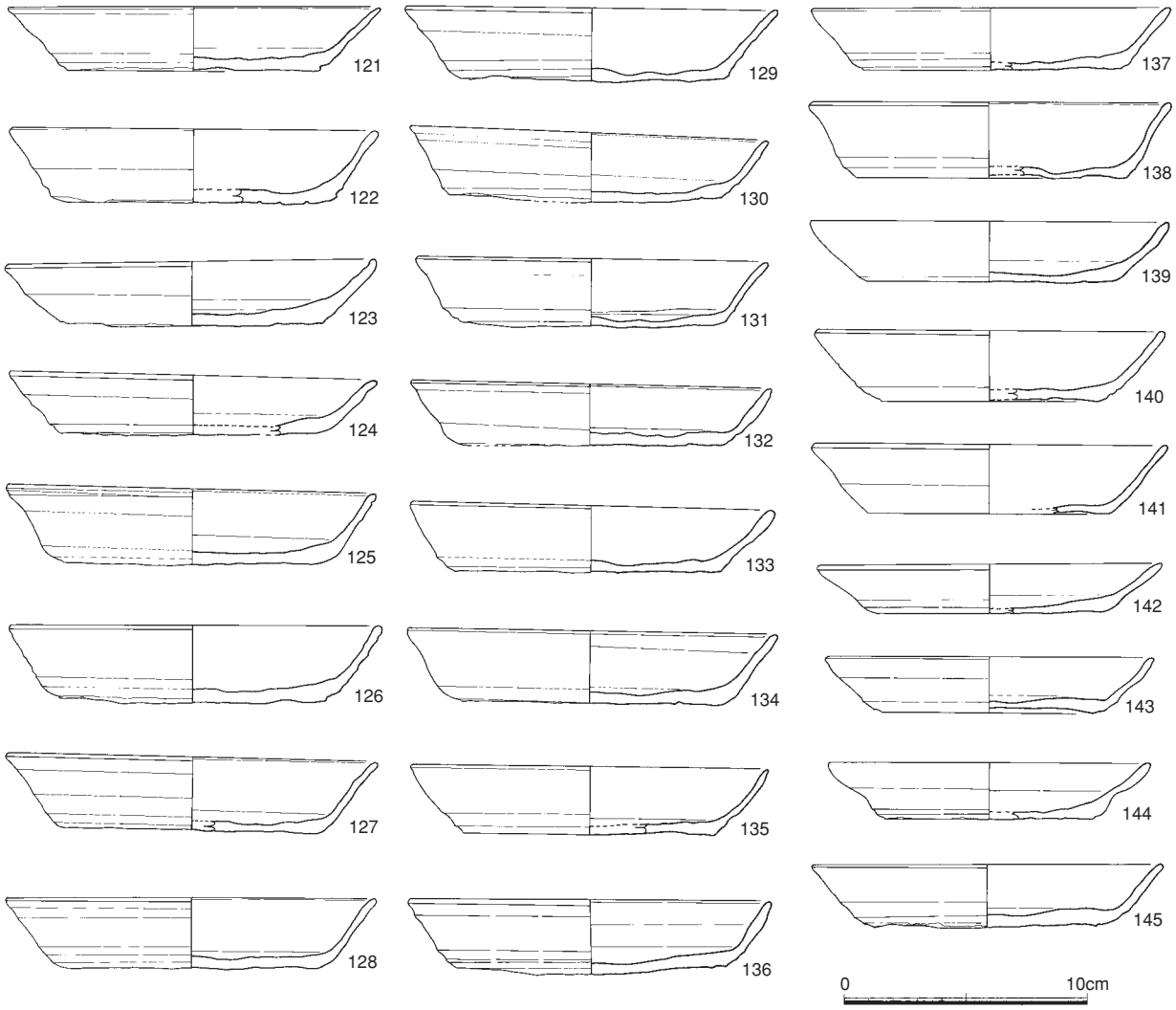
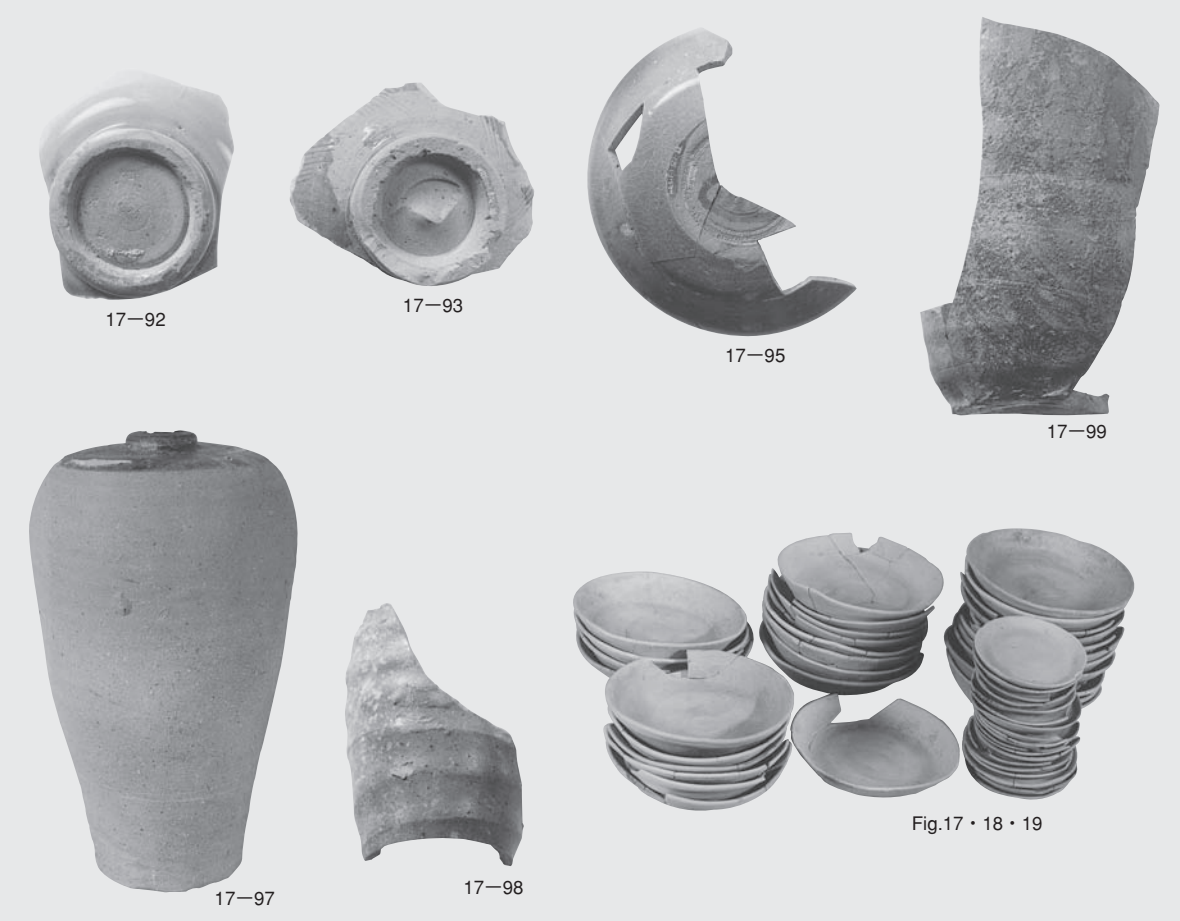


Fig.18　SD01 東部土器溜まり出土遺物実測図．2（1/3）



Ph.5　1区 SD01 土器溜まり出土遺物

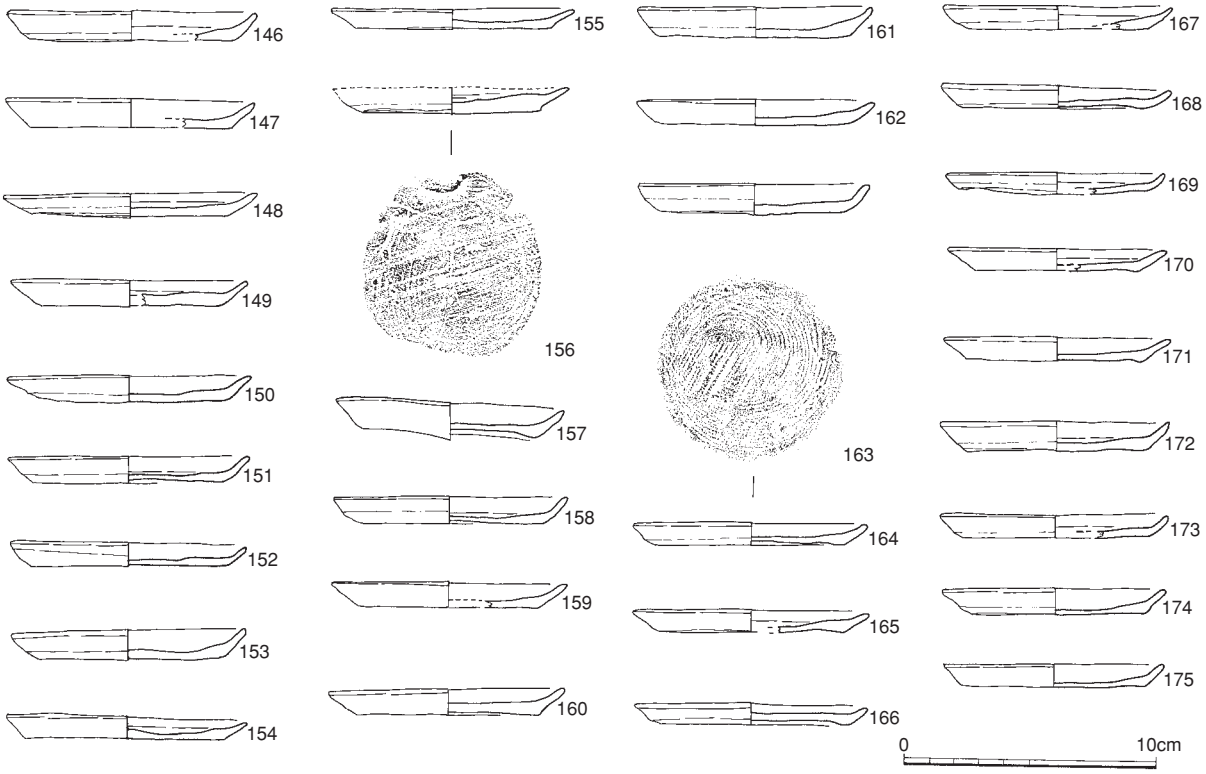


Fig.19　SD01 東部土器溜まり出土遺物実測図．3（1/3）

を占める。胎土は2㎜以下の砂粒を少量含み精良で、色調は鈍い黄橙色～橙色を呈す。21点の鈍い黄橙色～浅黄橙色品中4点に鈍い変色が、明るい橙色9点中にはない。橙色の出現率は30%、黒斑の出現率は13.3%であり、坏より高位で焼かれたことを示している。一括廃棄品としては寸法の変異幅が大きいと感じられるが、時期は12世紀後半～末に収まるとおもわれる。

Fig.20はSD01上層（865集Fig.12 1～3層）出土遺物。176は龍泉窯系青磁Ⅰ類碗。内面に片切彫りと櫛描きで蓮華折枝文を描く。胎土は淡灰色で、青緑色の透明釉を外面高台際まで施釉する。高台内に目跡が残る。底径5.6㎝。177は白磁Ⅶ類碗。内面にヘラ・櫛描きで花文を描き、オリーブがかった灰白釉を高台脇まで施釉する。胎土は黄味がかった淡灰色。178～180は土師器坏。178・180は体部が内湾して口縁が開く器形で、口径・器高はそれぞれ16.0×3.1、15.0×2.9、14.8×2.6㎝を測る。成形は何れも右回転ロクロで、糸切り後内底をタテナデし、179・180の外底に板圧痕が残る。胎土は精良で、鈍い橙色～浅黄橙色を呈する。181は土師器坏底部転用の土器片円盤で、周囲を丸く打ち欠き、径4㎝を測る。182は大型の滑石石鍋底部片で、底径34.4・器厚2.0㎝。外面に5段にわたって横方向に幅1～2㎝程のハツリ痕が残る。煤が厚く付着する。内面はケンマする。破損した1/5程の底面に径8㎜の穿孔を3カ所施し、転用の石材として8㎝程上位を矩形に鋸引きした痕跡が残る。183は含鉄鉄滓で、上面と側面2面は熔解し、下面に酸化土砂が付着し細かな気泡が見える。総じて12世紀末～13世紀初を中心とする。

Fig.21は柱穴出土遺物。184は建物SB01・E6SP2（865集Fig.13）出土滑石石鍋底部片で184と同個体の可能性がある。煤が厚く付着し、底面と脇に2孔穿孔する。破断面の一部は面取りされ、再加工の途中である事を示している。185はB8SP4出土土師器皿。口径9.6器高1.0㎝。外底糸切り後板圧痕が残る。胎土は精良で鈍い黄橙色を呈す。186はG3SP1出土土師器皿。口径9.8器高1.1㎝。胎土・色調・調整は同様。187はC3SP2出土龍泉窯系青磁Ⅰ類碗。内面2条の沈線下に片切彫りで

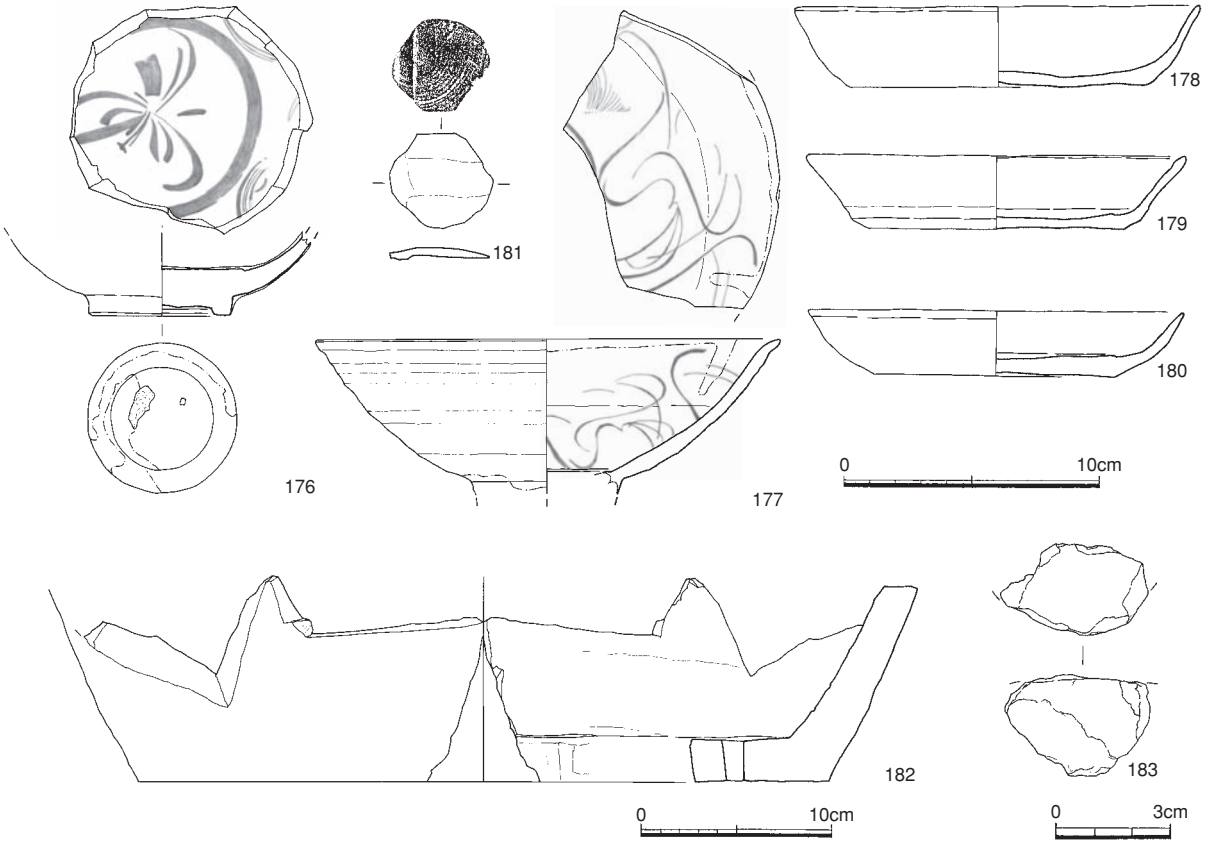
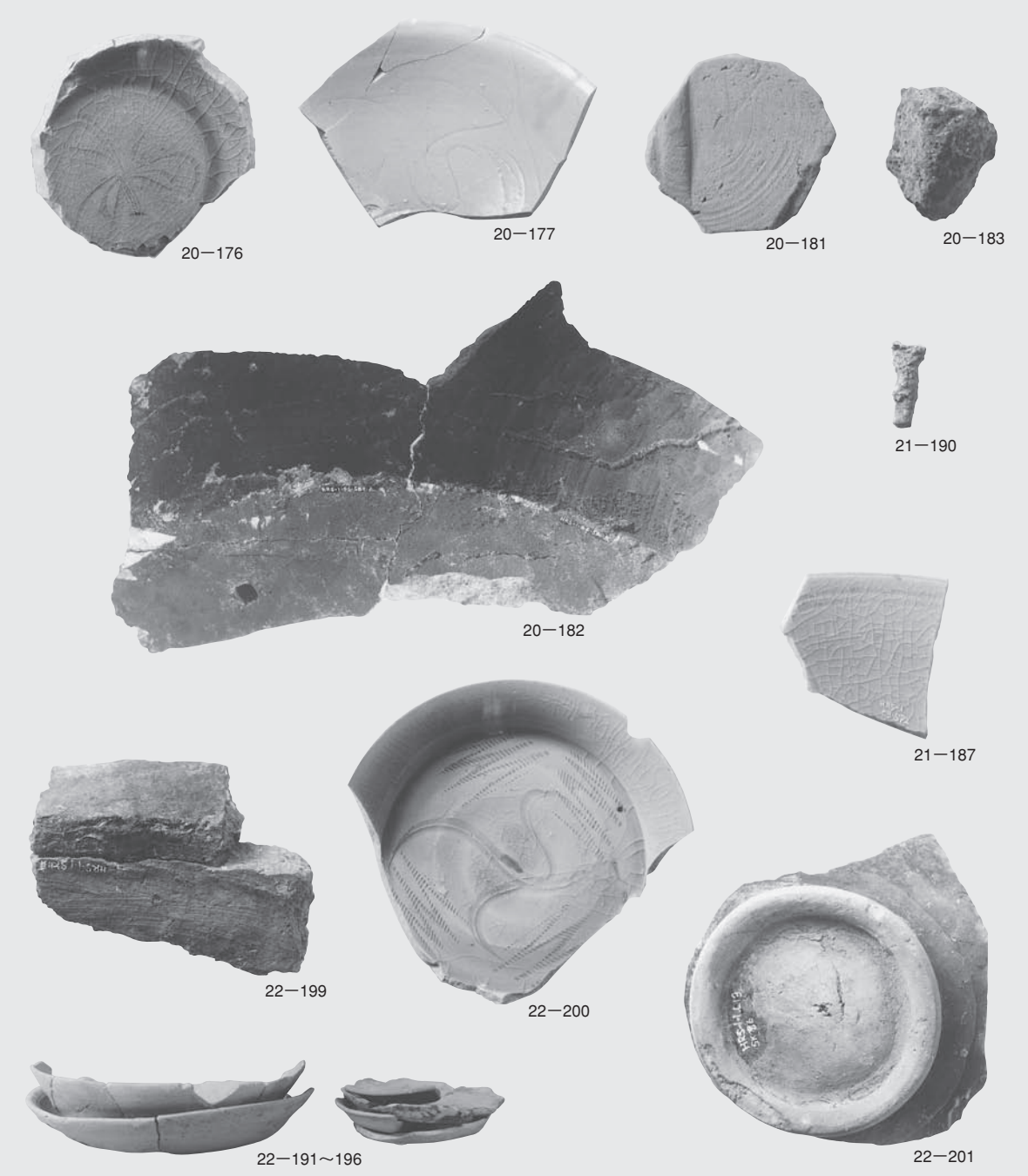


Fig.20 SD01 上層出土遺物実測図（1/3・1/2・1/4）



Ph.6　1区出土中世遺物

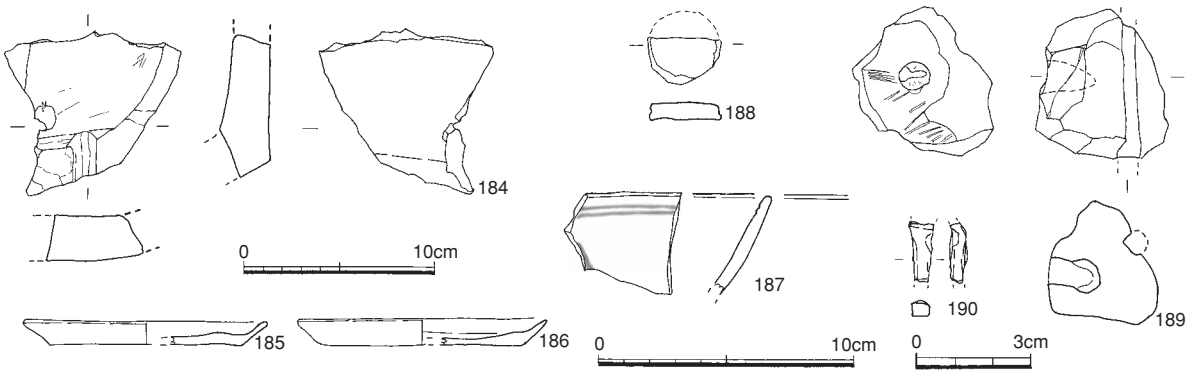


Fig.21　1区SB・SP 出土遺物実測図（1/3・1/2・1/4）

蓮弁を描く。胎土は明灰色。淡いオリーブ色の透明釉を掛ける。188はJ7SP1出土土器片円盤で、径2.8㎝。189はB10SP1出土。炉壁と思われ径1㎝の直交方向の模骨痕があり、スサを多く含み一部黒変する。190はK3SP1出土鉄製和釘頭部。残存長1.6㎝を測る。時期は12世紀後半～末を示すものが多い。

Fig.22はSD01区画内検出の土師器焼成壙SK11出土土器。全て破片で数十片出土している。191～194は坏。191～193は口径・器高それぞれ15.3×2.7・16.0×3.2・14.6×3.3㎝。外底糸切り後内底タテナデで、外底に板圧痕が残る。胎土は1㎜以下の細砂粒を含み精良。色調は浅黄橙色から鈍い橙色を呈す。193・194は破片の一部が被熱しており、浅黄橙と鈍い橙色の破片が接合し、皿195と鍋199も同様で、焼け損じをそのままに次の土器を焼成している。195～198は皿。195～197は口径・器高それぞれ9.4×1.1・9.4×1.1・9.0×1.4㎝。外底糸切り後195・197には内底タテナデで、外底に板圧痕が残る。色調は浅黄橙色から鈍い橙色を呈す。197は鈍い黄橙色を呈し、外底に2㎝程の帯状に黒斑が残る。198は底径5.8㎝の皿底部を丸く打ち欠いた土器片円盤。199は筑前系鍋小片。口縁平坦面はナデ、内面はヨコイタナデ、外面はハケ後ナデを施す。胎土は3㎜以下の砂粒を含み、鈍い褐色と黒褐色の破片が接合する。

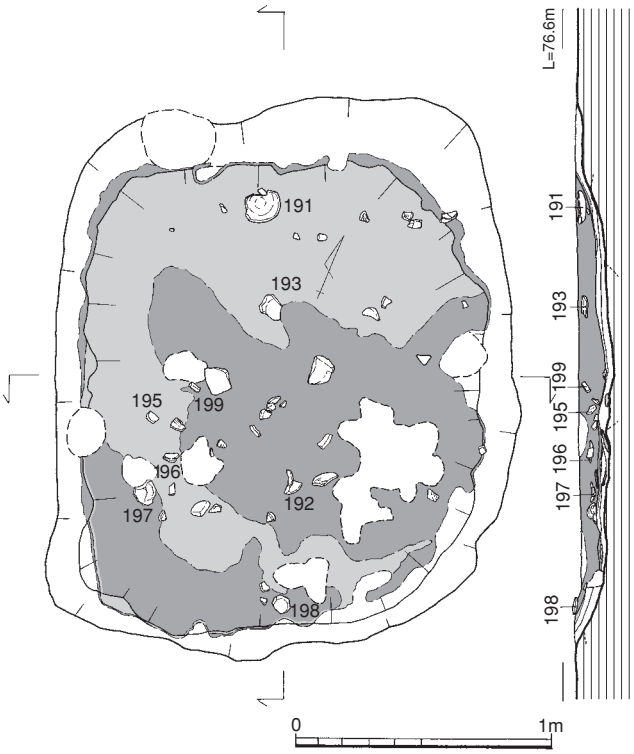


Fig.22-1　1区土器焼成壙 SK11 遺物出土位置図（1/30）

以上、SD01出土土器溜まり土師器と同期と思われ、これの中程度のものに主に対応する。

200は土壙SK01出土同安窯系青磁皿。口径11.4器高2.2㎝を測り、口縁の1/2を欠損する。内底に片切彫りの花文と櫛歯文を施す。胎土は灰色でオリーブがかった灰色の透明釉を全体に掛け外底を掻き取る。

201はSK86出土瓦器椀底部。径5.9㎝。内面はケンマ。高台は低く、高台内に板圧痕が残る。胎土は3㎜以下の砂粒を含み、灰黒色を呈す。

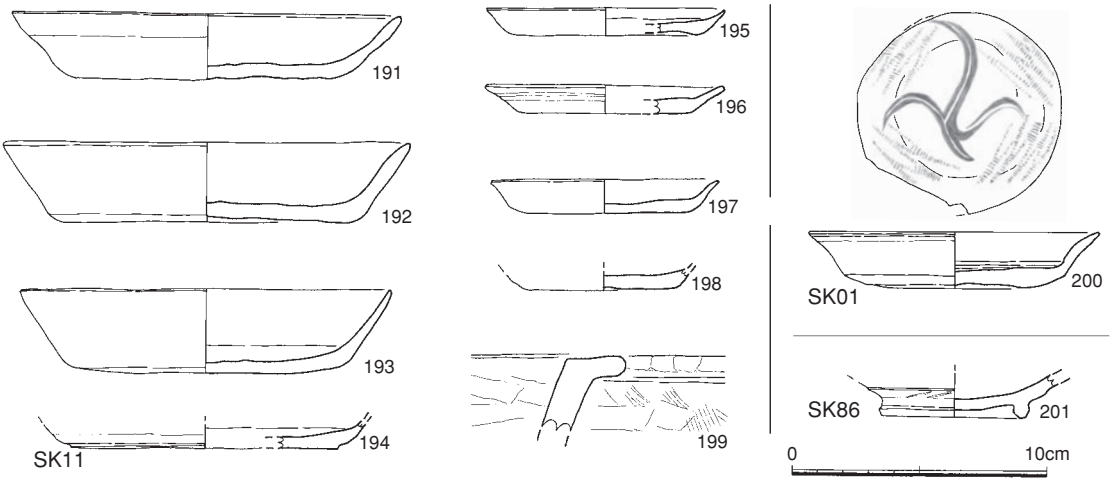


Fig.22-2　1区中世土壙出土遺物実測図（1/3）

3）近世の出土遺物

近世では、溝1条・土壙3基・水田開墾時の廃石土壙10基・柱穴少数を検出している（Fig.24）。水田・畑など耕作地としてのみ利用されているため出土遺物は極めて少ない。（Fig.23）

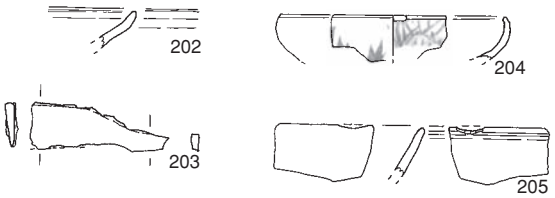


Fig.23　1区近世遺構出土遺物実測図（1/3）

202・203はSD02出土。202は肥前系陶器皿口縁小片。胎土は赤褐色を呈し精良。内外面に暗褐色の鉄釉を薄く掛ける。203は鉄製刀子。残存長5.4・刃幅1.6㎝。先端部と下半を欠き、大きくゆがむ。

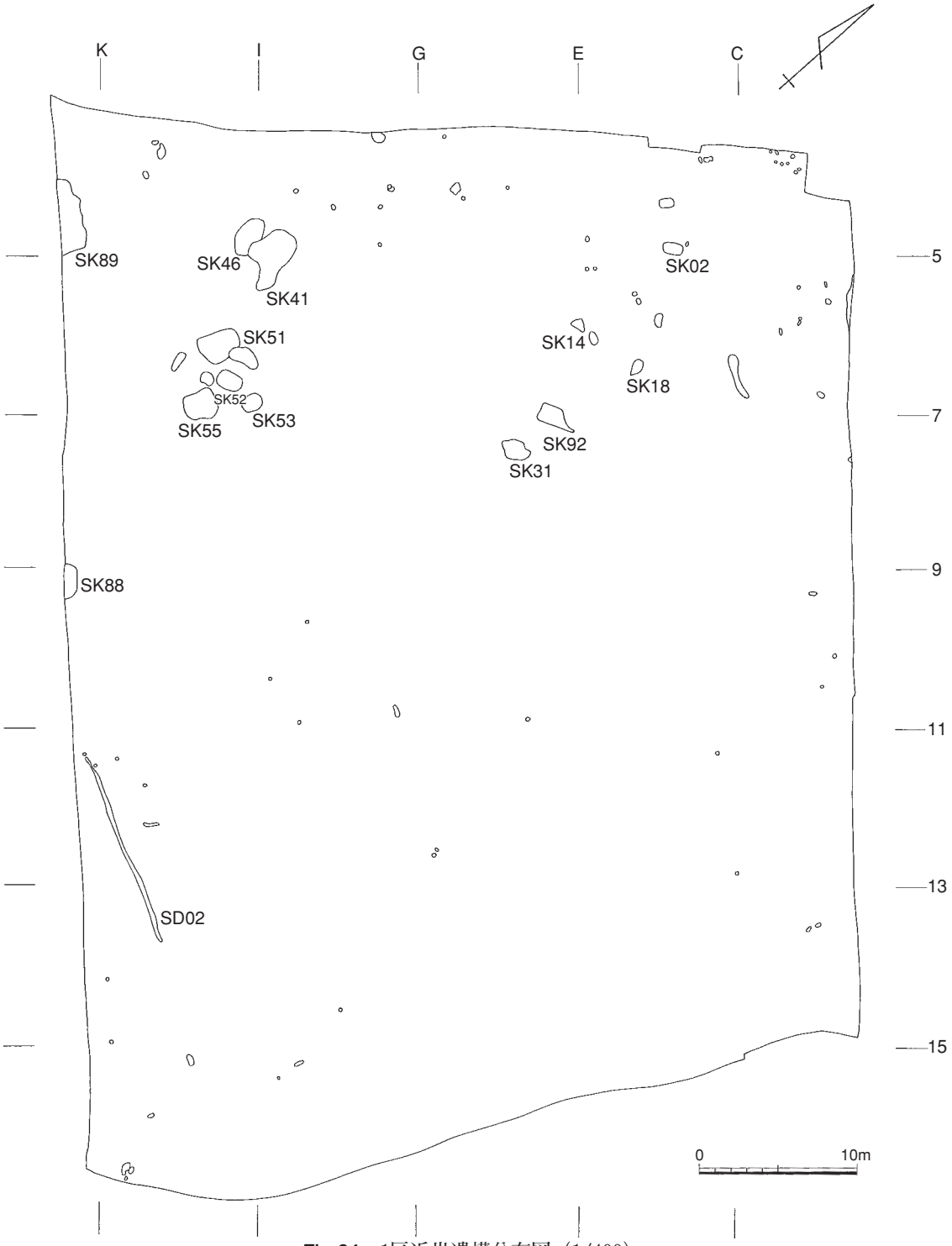


Fig.24　1区近世遺構分布図（1/400）

204は廃石土壙SK46出土肥前系染付皿。外面に濃藍色の呉須で牡丹文を、内面ににじんだ暗青色で袈裟襷文を施文する。胎土は白色で精良。口径9.0㎝。18世紀代。

205は廃石土壙SK53出土肥前系染付碗口縁小片。口唇外面は小さな玉縁状をなし、口縁内面に淡い藍色の呉須で圏線１条を施す。胎土は白色で精良。内外に乳白色の釉を掛ける。18・19 世紀か。

３．２区の出土遺物

調査第２区は第１区の南８ｍの1.5ｍ高い田面に位置する。調査面積145㎡で、縄文時代の包含層、中世焼土壙1基・柱穴を検出している。

遺物は縄文時代では、中央の７×７ｍ深さ30㎝程に暗黄灰色～灰褐色シルトの包含層が残り早期田村・手向山式期撚糸文土器を検出している。

中世では南部で焼土壙SK01を１基検出し、他にトレンチ・表土から白磁皿・土師器坏・皿・鍋を検出している（Fig.25）。

１）縄文時代の遺物

206はＮ９グリッド暗黄灰色～灰褐色シルトの包含層出土の早期田村・手向山式期撚糸文土器。外面に糸幅1.5㎜、間隔１～3.0㎜のタテ撚糸文を施す。内面にはヨコナデを施し、胎土に３㎜以下の砂粒を多く含む。外面は暗褐色・内面は暗黄褐色を呈する。

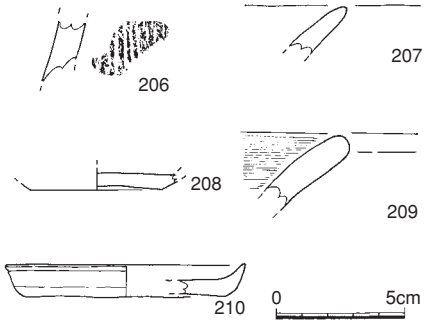


Fig.25　２区出土遺物実測図（1/3）

２）中世の遺物

207は焼土壙SK01出土の土師器土鍋の口縁小片。色調は橙色を呈し、胎土は２㎜以下の砂粒を多く含む。内外面はヨコナデ、外面に煤が付着する。

208はトレンチ埋土出土口禿げ白磁皿底部。見込みに圏線を１条施す。胎土は灰白色。灰白色の不透明釉を全面に掛け外底を粗く拭き取る。底径5.2㎝。

209・210は表土検出。209は瓦質鍋口縁小片。外面はヨコナデ、内面はヨコイタナデ。黒灰色を呈し、外面に煤が厚く付着する。胎土は１㎜以下の砂粒を含む。210は土師器皿。外底糸切り後内底をタテナデ。胎土は１㎜以下の細砂粒を含み精良。色調は鈍い黄橙色を呈す。

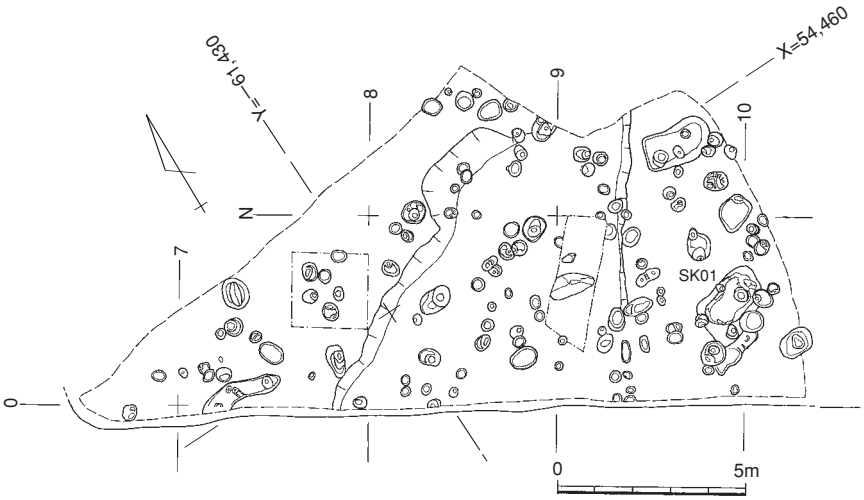


Fig.26　２区遺構全体図（1/200）

4．3区の出土遺物

調査第3区は第1区の南西80ｍ、標高80ｍの田面に位置する。調査面積355.5㎡で、縄文時代の倒木痕16基・土壙3基、弥生時代の倒木痕1基、中世溝1条・焼土壙1基・柱穴を検出している(Fig.27)。削平は深く縄文包含層は残存しない。遺物は土壙・倒木痕内で検出される。

1）縄文時代の出土遺物（Fig.29 Ph.7）

縄文時代は倒木痕1基・土壙3基から晩期遺物を検出している。

Fig.27　3区遺構全体図（1/200）

211～219は倒木痕SK06出土（Fig.28）。211・212は精製浅鉢。211は刻目を有する口縁片で、外面はヨコケズリ後ゆるいナデ・ケンマを内面はヨコケンマを施す。黒褐色を呈し細砂粒を含む。212は屈曲した肩部片で外面上半はヨコナデ後ゆるいケンマ下半はヨケズリ後ナデ、内面はケンマを施す。細砂粒を多く含む。213～217は粗製深鉢。213は大きく開く口縁片で外面は粗いヨコ条痕内面はヨコ条痕後ゆるいナデ・ケンマを施す。金雲母をはじめ細砂粒を多く含む。色調は明黄褐色。214は内外にヨコ条痕を施し外面はゆるくナデる。3㎜以下の砂粒を多く含み内面は暗黄橙色外面は黒褐色を呈す。215は半精製で外面はヨコ条痕後ゆるいナデ・ケンマ内面は口縁に段をつくり丁寧なヨコナデ後ゆるいケンマを施す。細砂粒を含み外面は煤が付着。内面は暗黄橙色を呈す。216は肩部片。内外にヨコ条痕後内面はゆるくナデ、外面に煤が付着する。胎土は3㎜以下の砂粒を含み外面は暗黄橙色内面は灰褐色を呈す。217も肩部片。外面はヨコケズリ後上半は丁寧なナデ後ゆるいケンマ下半はゆるいナデ、内面はヨコ条痕後ゆるいナデ。金雲母他4㎜以下の砂粒を多く含み、外面は暗黄橙色内面は暗褐色を呈す。218は粗製土器片転用の土器

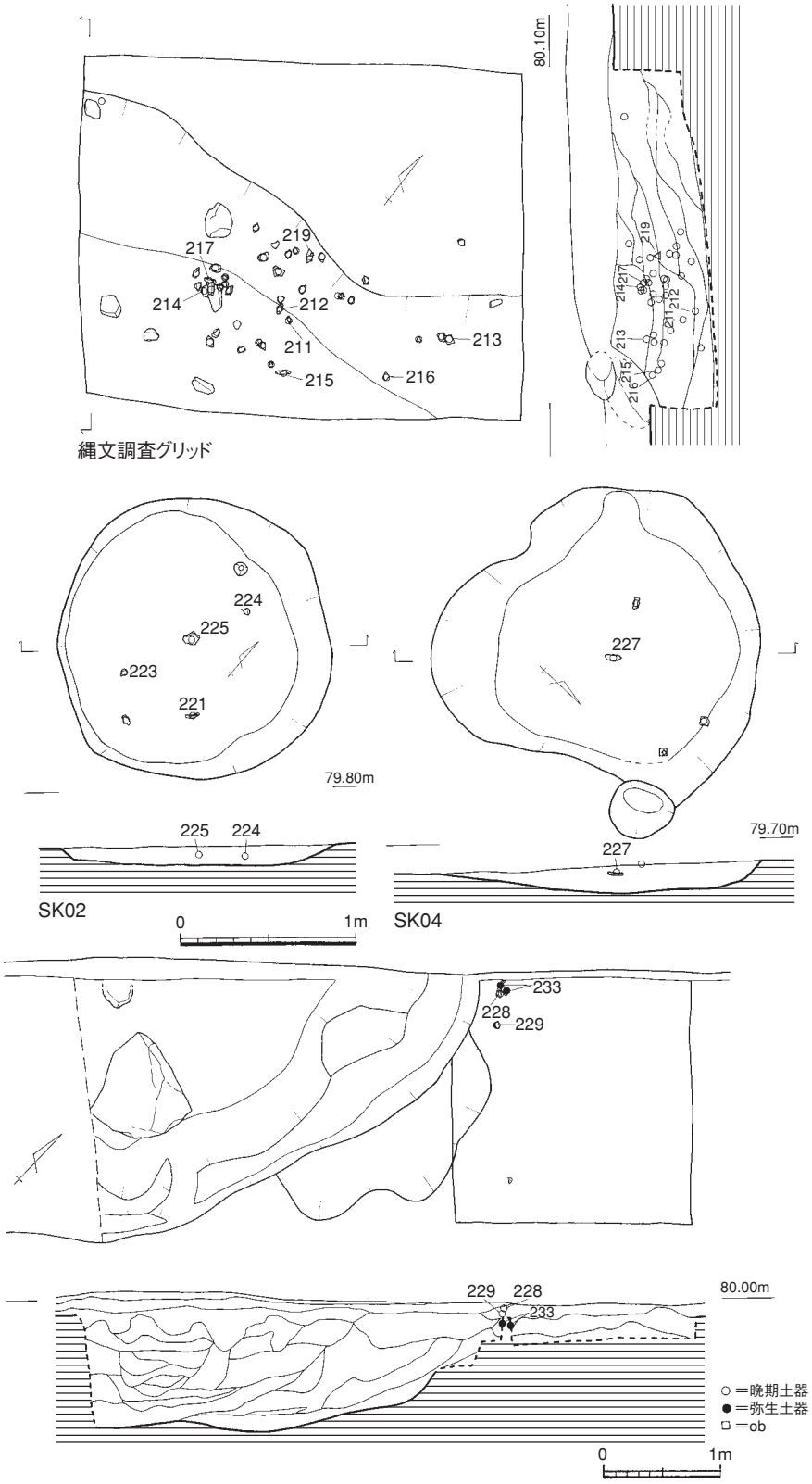


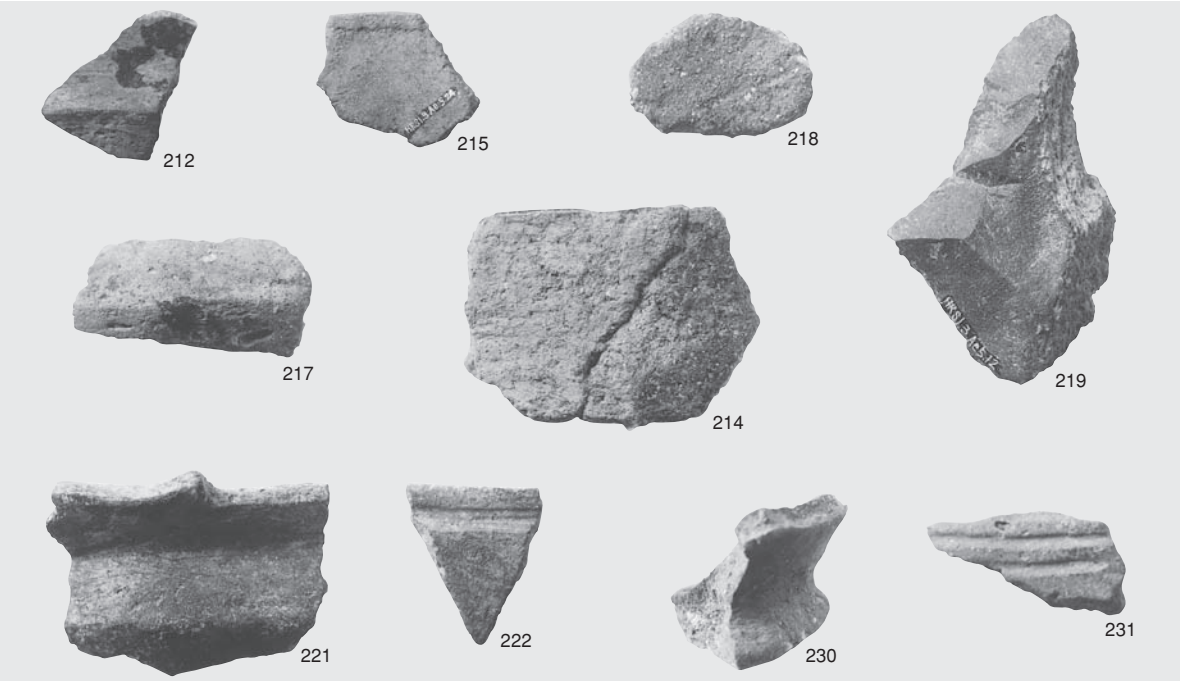
Fig.28　3区遺物出土位置図（1/40・1/60）

片円盤。周縁を打ち欠き径3.1㎝を測る。219はサヌカイトの使用剥片。打面と右側面に自然面を残し、両側を使用する。長6.4㎝。220はSK01出土。粗製土器口縁片で内面にヨコ条痕後内外にヨコナデを施す。暗橙色を呈し粗砂を多量に含む。221～225はSK02出土（Fig.28）。221・222は精製浅鉢。口径12.7㎝を測り、口唇にリボン状突起を貼付、口縁内面は段を成す。内外面はヨコケズリ後肩部上から内面は丁寧なナデ後ケンマを施す。細砂粒を含み外面は黒褐色、内面は黒灰色を呈す。222は外面口縁下に沈線、内面は段をなす。内外にヨコケンマを施す。胎土に細砂粒を含み、外面は黒褐色を呈す。223～225は粗製深鉢。223は胴部片で内外面にヨコ条痕後ヨコナデ、胎土に金雲母他4㎜以下の砂粒を多く含み暗橙色を呈す。224も胴部片で内外面に粗いヨコ条痕後内面をヨコナデ、胎土に4㎜以下の砂粒を多く含み暗橙色を呈す。225は径9.5㎝の底部で、外方より周縁を打ち欠いている。ヨコナデを施し、底面にシイ等堅果類の殻圧痕を多数印する。胎土に金雲母他2㎜以下の砂粒を多く含み暗橙色を呈す。

227はSK04出土（Fig.28）。粗製土器口縁片で内外にヨコナデを施す。胎土に金雲母他細砂粒を含み、暗橙色を呈す。226はSK03混入資料。精製浅鉢肩部片で内外にケンマを施す。胎土に細砂粒を含み、暗橙色～黒灰色を呈す。228・229はSK05混入資料。228は精製浅鉢口縁片で、屈曲した外面に沈線を2条施し内外にケンマを施す。229は粗製土器胴部片。内外に粗いヨコ条痕後ゆるいナデを施す。胎土に金雲母他3㎜以下の砂粒を多く含み、暗灰褐色を呈す。230はZ6SP1出土の粗製土器底部。径5.8㎝を測り内外面にナデを施す。胎土に金雲母他2㎜以下の砂粒を多く含み、外面は橙色で煤が付着し内面は黒褐色を呈す。231はＺ６ＳＰ２出土の曽畑式土器。外面にヨコ沈線を内面にヨコ条痕を施す。器厚は5.2㎜とうすく、胎土に滑石を多量に混入する。外面明赤褐色、内面暗赤褐色を呈す。232はＺ５ＳＰ１出土の黒耀石の使用剥片で打面に自然面を残す縦長剥片の左側を使用する。

2）その他の出土遺物（Fig.29 Ph.7）

233は倒木痕SK05出土の板付Ⅱ式甕。口径25.4㎝。外面はヨコナデ後ゆるいケンマ、下半は被熱で赤変・剥落し上半に厚く煤が付着する。内面はヨコ・ナナメイタナデ後ヨコナデを施す。胎土に



Ph.7　3区出土遺物

金雲母他5㎜以下の砂粒を多く含み、暗褐色を呈する。

234は中世溝SD01混入板付Ⅱ式甕胴部片で、内外面はヨコナデ後ゆるいケンマ、外面に浅い2条の平行沈線を施す。胎土は金雲母他3㎜以下の砂粒を多く含み、外面は暗黄褐色で煤が付着し内面は暗褐色をを呈す。

235は中世溝SD01出土黒色土器A類埦。外面はヨコナデ内面はケンマを施す。胎土は精良で外面は暗黄橙色外面は黒灰色を呈す。

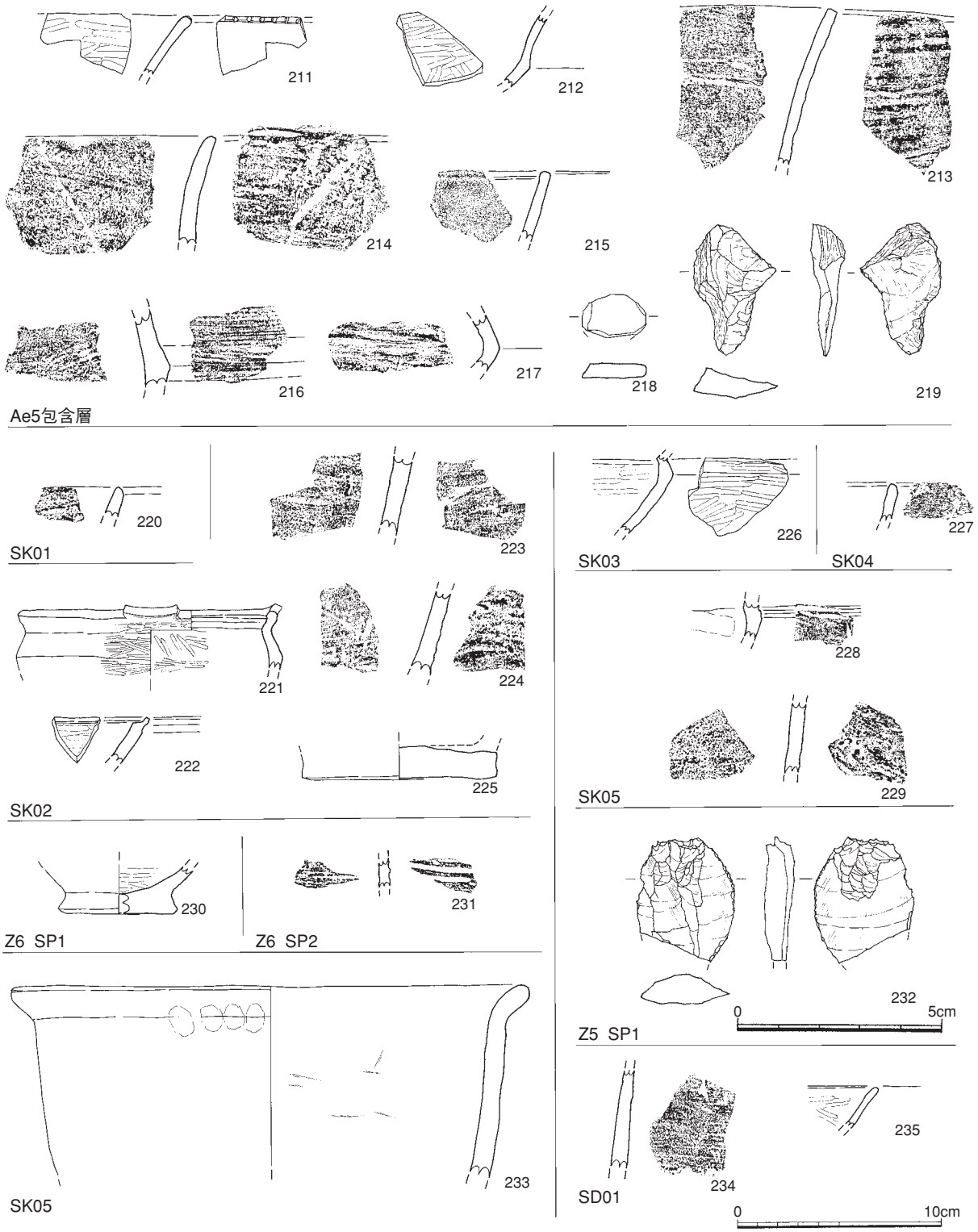


Fig.29 3区出土遺物実測図（1/3・2/3）

5．4区の調査

調査第4区は、中央の市道より南西150m程の農道部分にあたり（Fig.2）、南北9m東西40m弱の細長い調査区で調査面積390㎡。遺構は表土下の暗黄灰～黒灰色シルト上面で検出され、東西両側に集中し、縄文時代の倒木痕1基、古代～中世溝3条・焼土壙2基・土壙2基・倒木痕・柱穴、近世廃石土壙2基・柱穴を検出している。西半部には暗黄灰色の早期・晩期遺物が混在する縄文包含層が薄く広がる。検出面の標高は84.25m（Fig.30 Ph.8）。

Fig.30　4区遺構全体図（1/200）

1）縄文時代の遺物

該期の遺構はなく、大半は中世遺構への混入と西半部の包含層で検出される。

①出土遺物(Fig.31)

236はN1SP1出土の押型文土器。外面に縦位の楕円押型文を施文し、内面はケズリ後ナデる。金雲母他2㎜以下の砂粒を多く含み暗黄橙色を呈す。237～244は包含層出土。237は晩期精製浅鉢口縁小片。口唇に2本の粘土紐をリボン状に貼付する。調整不明。金雲母他細砂粒を多く含み明赤褐色を呈す。238は晩期粗製土器。内外に粗いナナメ条痕を施し、金雲母他4㎜以下の砂粒を多く含み暗橙色を呈す。239～242は石鏃。239は腰岳産黒耀石製で先端と両脚が欠損。残存長1.7㎝。

240はサヌカイト製で先端を欠損。全長2.5㎝2.0gを測る。241

Ph.8　4区全景（西から）

は腰岳産黒耀石製で縦半分に欠損したものに刃部を再生している。残存長1.8㎝。

242は腰岳産黒耀石製で先端と片脚が欠損したものの、残った脚基部にノッチを入れ、脚端を再加工し、石錐として再生している。残存長2.5㎝。243はサヌカイト製石匙。横長剥片の上下辺に両面から調整剥離を行い摘部と刃部を形成している。右側辺には自然面が残り、左を打ち欠き対称とする。8.0×3.6㎝を測る。244は旧石器～草創期の牟田・針尾産黒耀石の残核で、黒灰色を呈し風化が進み不透明となっている。上面に打面形成の剥離を行っているがこの面からの剥離は無い。背面には円

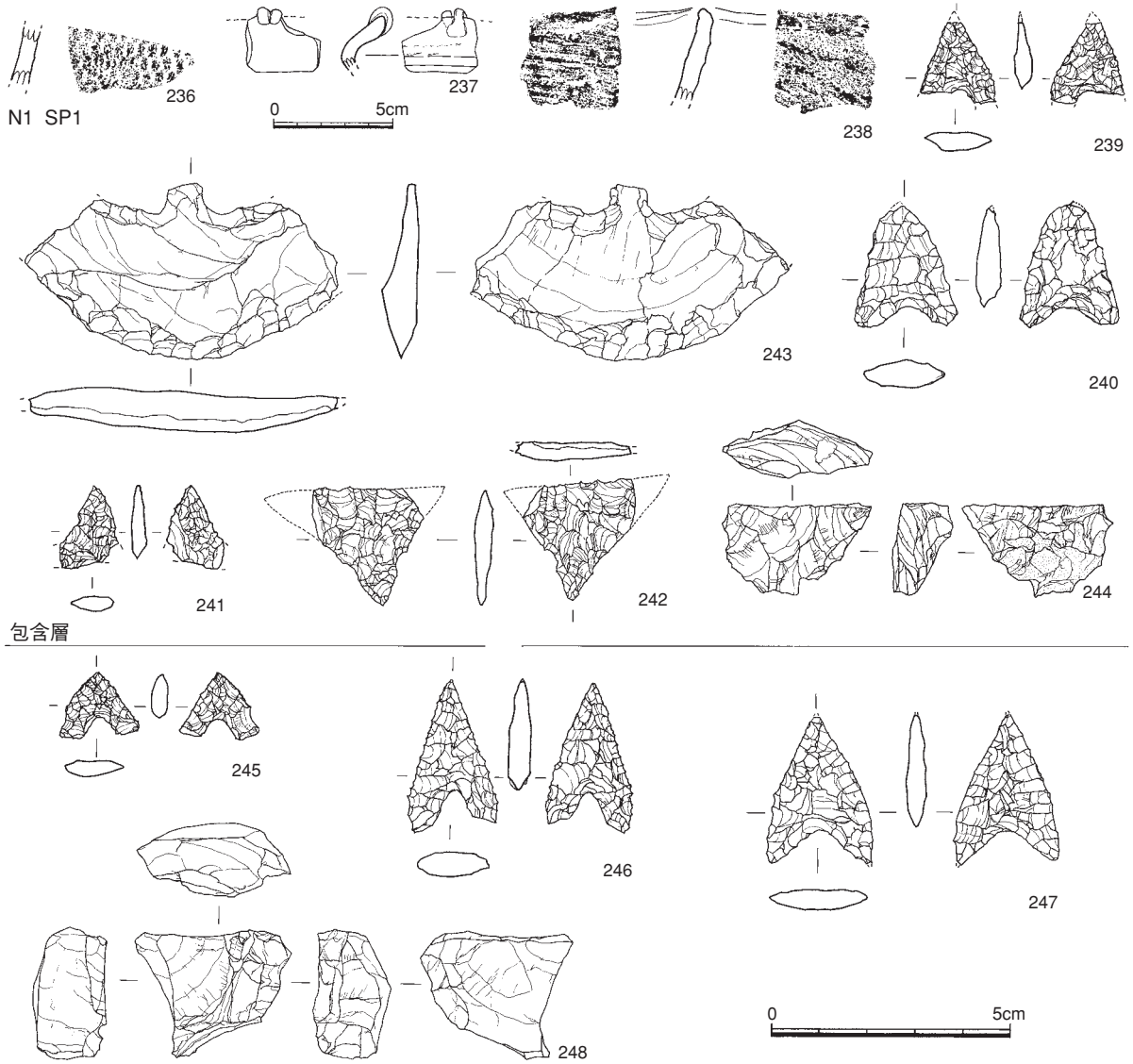


Fig.31　4区出土縄文遺物実測図．1（1/3・2/3）

礫の自然面がのこる。3.1×1.9×1.1㎜を測る。

245～248は検出面・中世遺構等の出土。245は腰岳産黒耀石の細石鏃。1.4×1.7㎝0.4gを測る。246・247はサヌカイト製石鏃。ともに先端を若干欠く。246は3.2×1.4×0.6㎝1.8gを測り細かなリタッチを施す。247は扁平な器体で3.2×2.2×0.5㎝1.7gを測る。248はサヌカイトの残核で上面の打面から小口に縦長剥片を剥離する。3.2×2.6×1.6㎝を測る。

2）中世の調査

中世は東西両端部に遺構が集中する。

①流路　西部に流路**SD01・02**が西方向に、東部に流路**SD03**が北方向に流れる。幅は1～2m弱。深さ10～50㎝程で覆土は暗灰色砂質土。平断面ともに不整形で自然流路の可能性がある。

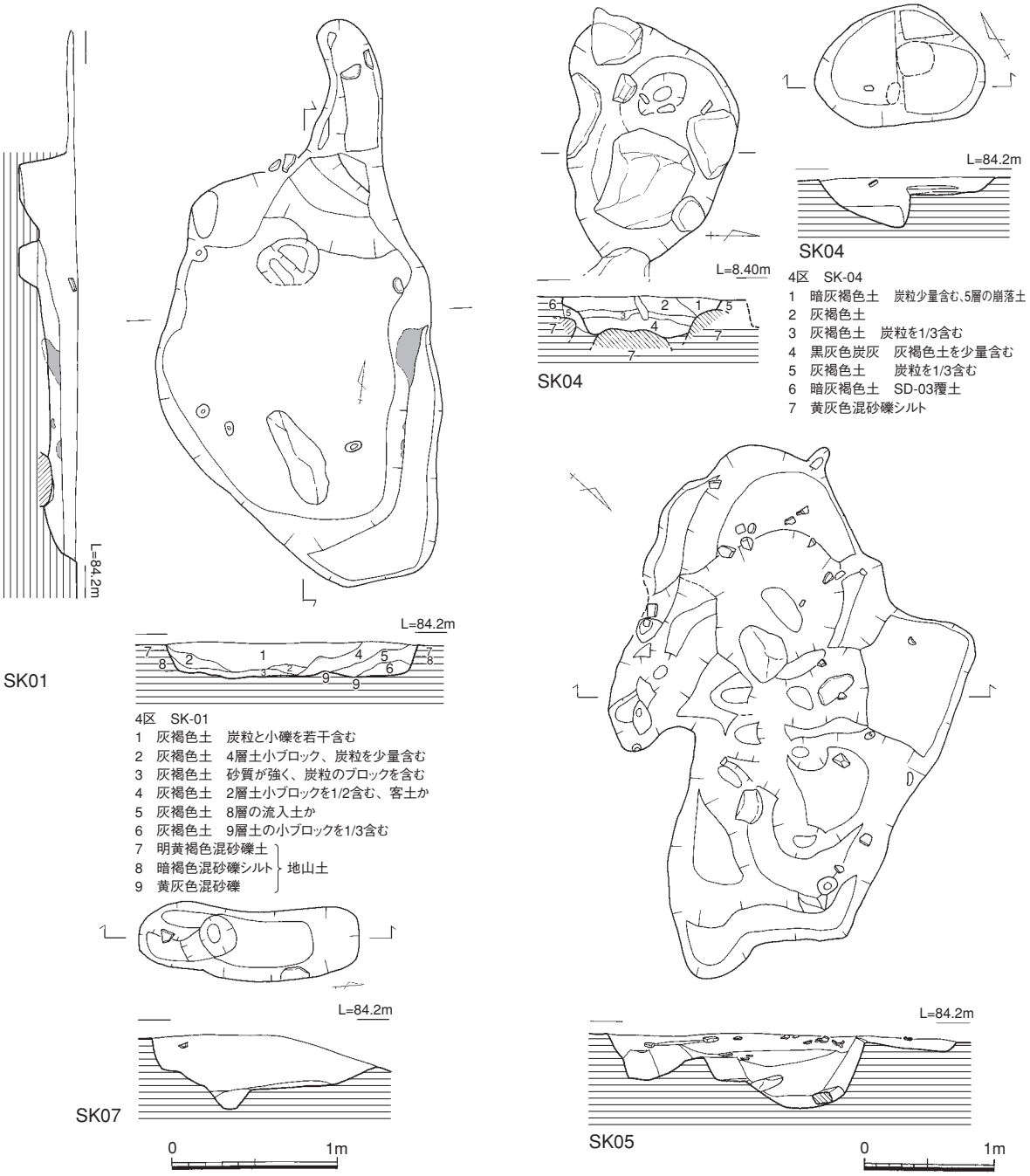


Fig.32　4区中世遺構実測図（1/40・1/50）

出土遺物（Fig.33） 249はSD02出土の同安窯系青磁皿。底径4.6㎝。250～254はSD03出土。250は口禿白磁皿。口径10.8器高2.9㎝。淡オリーブ灰色の不透明釉を掛ける。251・252は土師器坏・皿。器高1.7・1.2㎝を測る。253は瓦質捏鉢。254は天草石製の仕上げ砥石。

②土壙　土壙は東部にSK06・07の２基が分布する。

SK06（Fig.32）L５グリッドに位置し、1.0×0.7を測る円形土壙で、断面不整形。土師器皿・鍋の小片が出土する。258は肥前系鍋。口唇は肥厚し、内面に細かなヨコハケを施す。煤が付着する。

SK07（Fig.32）06北側のK５グリッドに位置し、1.35×0.45×0.32mを測る長方形土壙。

出土遺物　255は東播系捏鉢口縁片。内外面にヨコナデ胎土は細砂粒を含み淡灰色を呈す。口唇幅1.9㎝。256は龍泉窯系青磁Ⅱ類碗。口径15.6㎝。鎬蓮弁文を施す。13世紀。

③焼土壙　焼土壙は東部にSK01・04の２基が分布する。焼土壙は１区で平面台形のA類・狭い長台形のA′類・小型長方形のB類・円形のC類・長大なD類に分類した。

SK01（Fig.32 Ph.9）L５グリッドに位置する大型の不整形土壙。南東壁と土層断面中央に焼土があり、重なった土壙を外側まで掘り過ぎている。1.6×1.8m程に復元されるA類となる。白磁碗・土師器坏・皿が出土。壁・床に沿って炭灰層が３㎝程堆積する（３層）。

出土遺物　257は白磁Ⅴ類碗。底径6.6㎝。内面に灰白釉を施釉する。11・12世紀。

SK04（Fig.32 Ph.9）K６グリッドに位置し、SD03を切る。1.5×0.95×0.24mを測るA類。平面の石が若干焼け、炭灰層が10㎝程堆積する（４層）。下に堆積層があり、使用まで間が開く。

出土遺物　259は瓦器埦口縁小片。暗橙色を呈し、口唇部が黒色を呈す。12世紀。

Ph.9　4区 SK01（北東から）

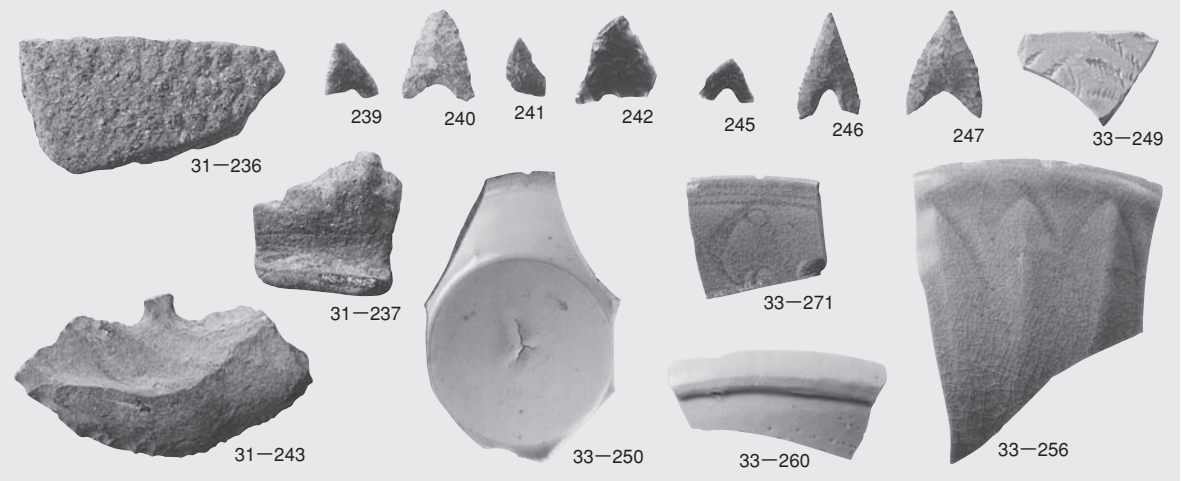
④倒木痕SK05（Fig.32 Ph.9）東部K５グリッドに位置する3.6×2.3ｍ深さ55㎝を測る。平断面とも不整形で床面の凹凸が著しい。

出土遺物　260は白磁Ⅳ類碗。261は口禿白磁皿。262～265は土師器坏。262・264は口径12.0・11.4器高3.1・3.0㎝。266・267は土師器皿。266は9.2・1.8㎝。268は土師質鍋。269は瓦質捏鉢。13世紀末～14世紀初。

270～273は柱穴・表採等資料。270は瓦器埦。口径15.0㎝。271は龍泉窯系青磁Ⅰ類碗。272は土師器埦。273は備前捏鉢。底径12.4㎝。

Ph.10　4区 SK04（南から）

Ph.11　4区 SK05（西から）



Ph.12　4区出土遺物

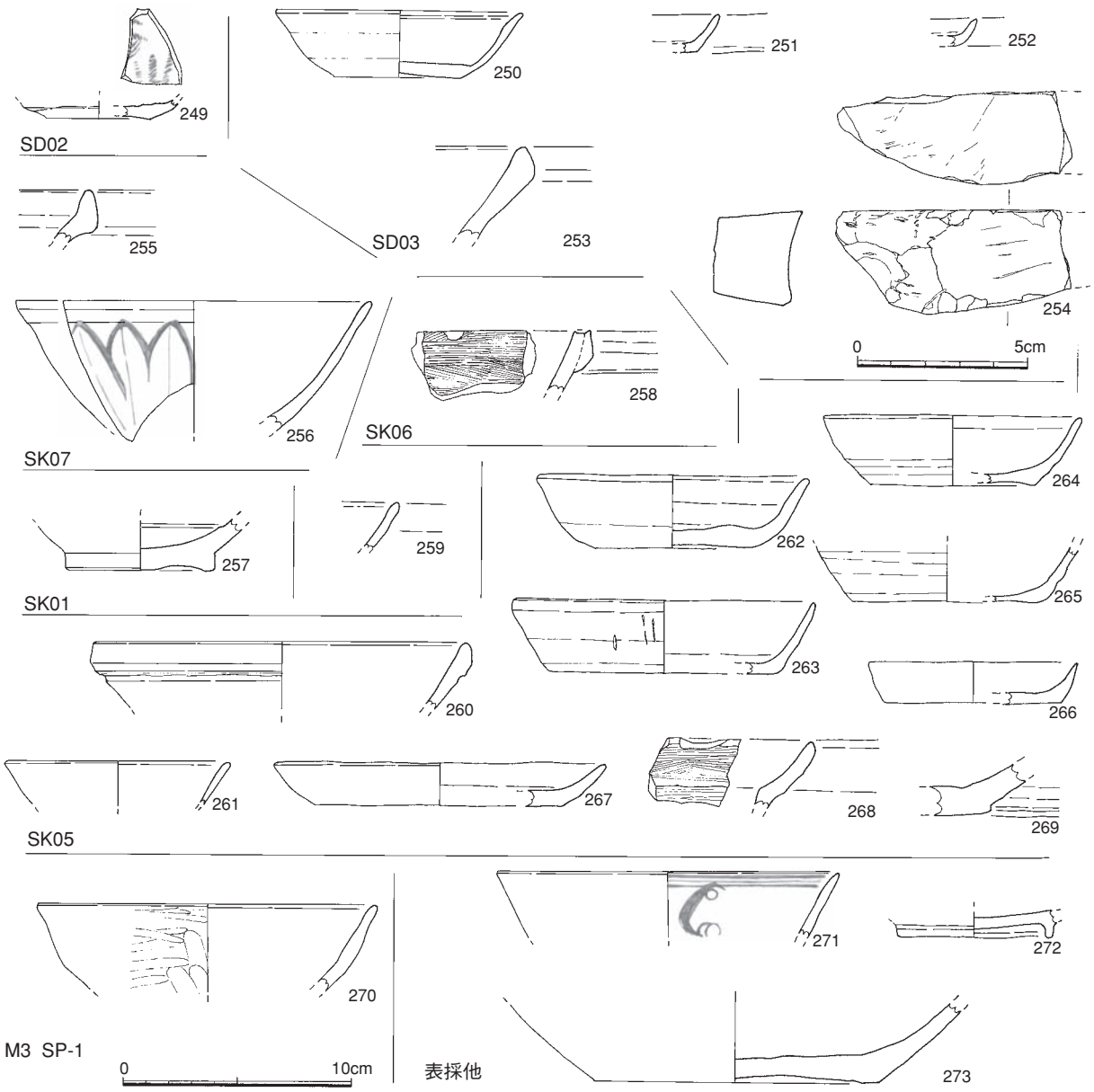


Fig.33　4区出土中世遺物実測図（1/3・1/2）

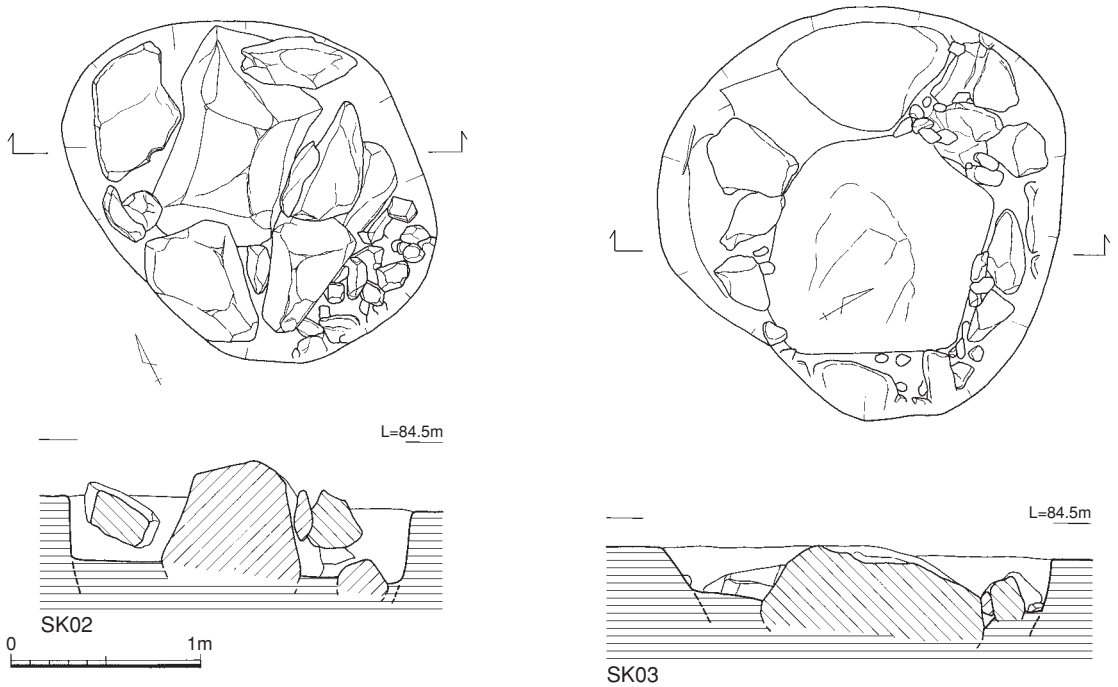


Fig.34　4区近世遺構実測図（1/40）

Ph.13　4区 SK02（南から）

Ph.14　4区 SK03（西から）

3）近世の調査

近世は西部に、水田開墾時に、支障となった岩石を埋め込んだ廃石土壙2基を検出した。

SK02（Fig.34 Ph13）M3グリッドに位置する2.06×1.6ｍの円形土壙で、中央の花崗岩塊を打ち割り、周囲に岩屑を埋め込んでいる。覆土は灰色砂質土で、遺物の出土は無い。

SK03（Fig.34 Ph14）02の西に隣接し、M2グリッドに位置する2.15×2.1ｍの円形土壙で、中央の1.3m程の花崗岩塊とこれを小割にした岩屑・中程度の岩塊を周囲に埋め込む。遺物は陶器甕小片・鉄釘等が出土している。

6．5区の調査

調査第5区は、中央の市道より南西200m程の農道用水路工事部分にあたり（Fig.2）、幅6～8m長さ70・50mの矩形調査区で、調査面積961㎡。南側直線部は段丘上に立地し、3m程高く、北側直線部は下位の段で、水田造成の削平が深く中位段丘礫面が露出する。遺構は表土下の暗黄灰～黒灰色シルト及び礫層上面で検出され、遺構面の残りのよい南側上段部に多い。縄文時代の倒木痕19基・土壙6基・柱穴・包含層、中世焼土壙8基・土壙8基・柱穴を検出している。上段部中央を主に、下段部北端に若干、300点を超える早期・晩期遺物が混在する暗黄灰色シルトの縄文包含層が薄く広がる。検出面の標高は上段部で86.5～87.25m下段部で83～84mである（Fig.36 Ph.15・16）。

1）縄文時代の調査

遺構は、下段で4基、上段で2基の晩期を中心とする土壙と倒木痕19基が検出され、上段中央部を主に下段部北端に若干、早期・晩期遺物が混在する薄い縄文包含層が検出されている。

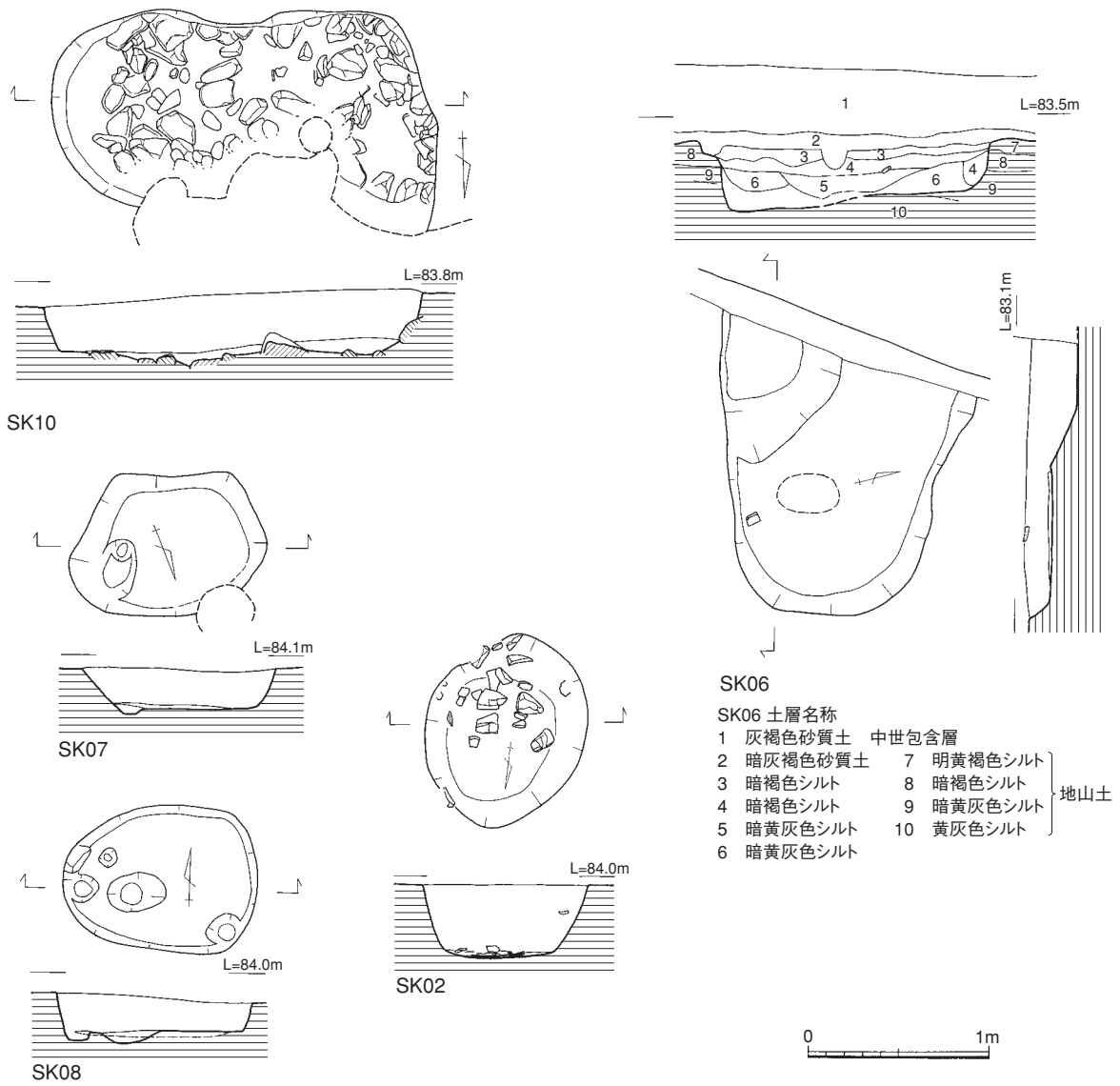


Fig.35 5区縄文遺構実測図（1/40）

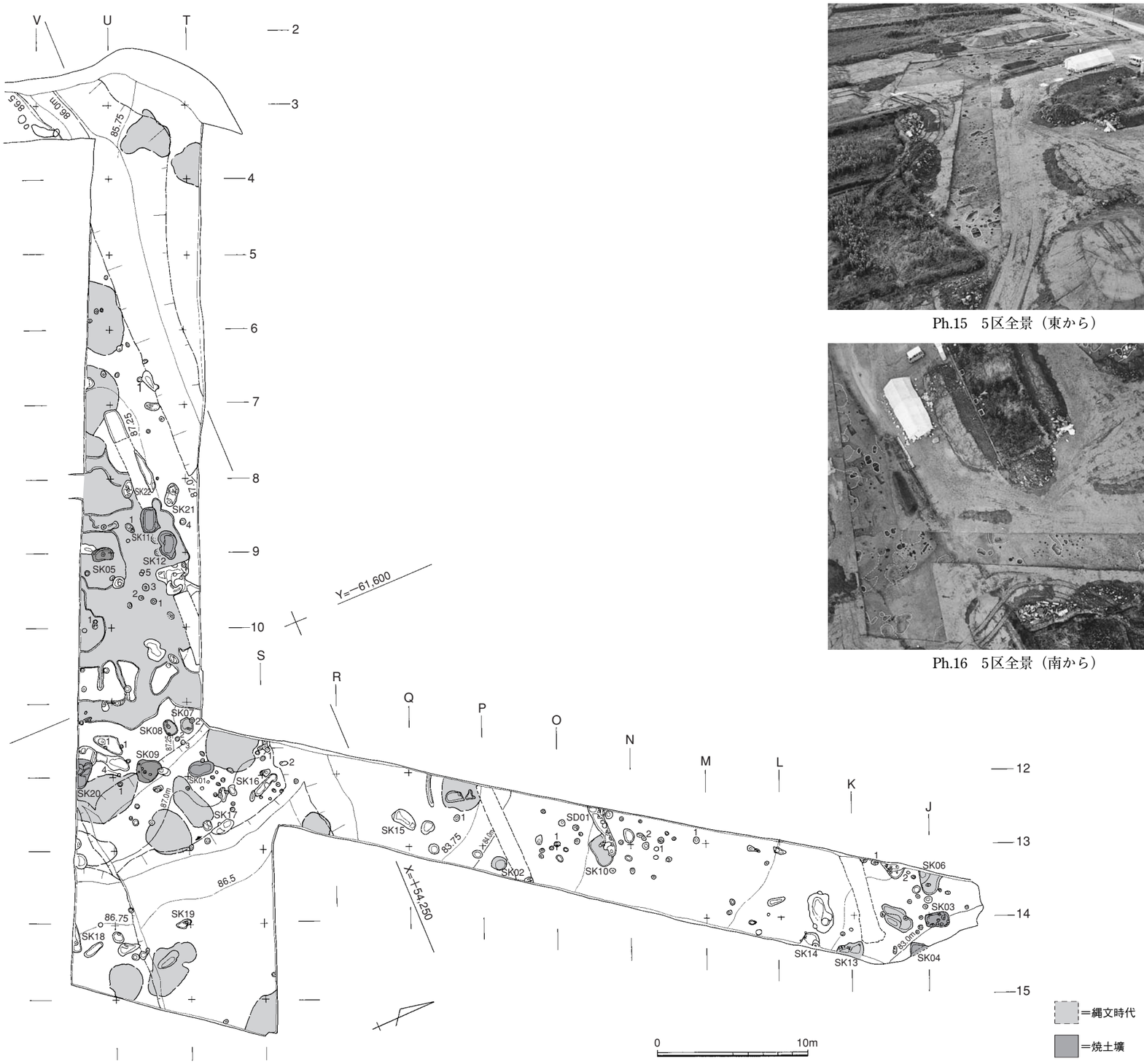


Fig.36　5区遺構全体図（1/300）

Ph.15　5区全景（東から）

Ph.16　5区全景（南から）

Ph.17　5区 SK10（南から）

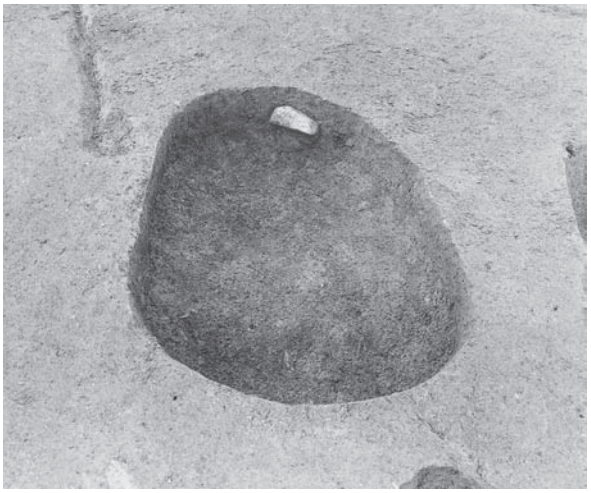
Ph.18　5区 SK06（南から）

①土壙　土壙は下段でSK02・06・10・13の４基、上段でSK07・08の２基の晩期を中心とする土壙が検出されるが不整形で、遺物の出土も少ない。

SK10（Fig.35 Ph17）下段O13グリッドに位置する2.15×1.0深さ27㎝の不整円形土壙で、礫層を掘り込む。覆土は暗黄灰色シルトで、早期の黒耀石石鏃・使用痕剥片・サヌカイト剥片が出土。

出土遺物（Fig.37 Ph.22）273は黒耀石製の鍬形鏃で完形。2.2×1.6×0.6㎝0.7gを測る。黒色透明で横縞が入る。

Ph.19　5区 SK07（南から）



Ph.20　5区 SK08（南から）

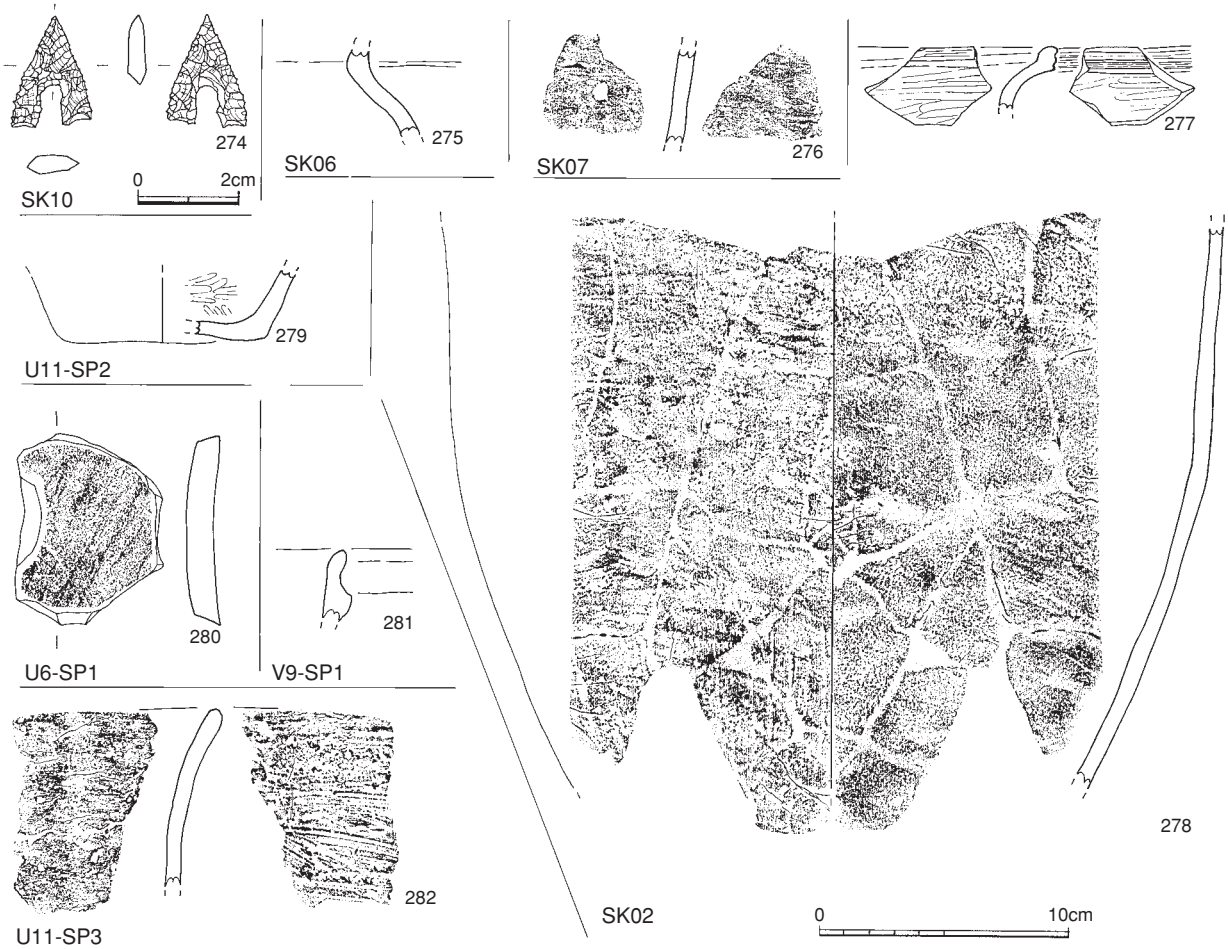


Fig.37　5区縄文遺構出土遺物実測図（1/3・2/3）

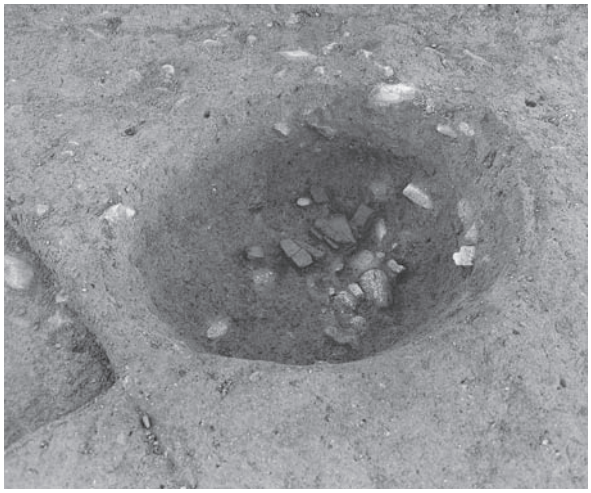
SK06（Fig.35 Ph18）下段J13グリッドに位置する1.55×1.35深さ17㎝の隅丸方形土壙で、西半部が調査区外に延びる。明黄褐色シルト（7層）から掘り込み暗褐色～暗黄灰色シルトが堆積する。晩期土器片が出土する。

出土遺物　275は夜臼式期の壺形土器で、50㎝を超える大型品。外面はヘラナデ後ケンマ内面はヨコナデで下半に炭化物が付着。金雲母他2㎜以下の砂粒を含み暗黄橙色を呈す。

SK07（Fig.35 Ph19）上段T11グリッドに位置する1.05×0.75深さ25㎝の小型土壙で底面は平坦。黄褐色シルトを掘り込み暗黄灰色シルトが堆積する。晩期精製・粗製土器片が出土する。

出土遺物　276は晩期粗製土器の胴部片で内外にヨコ条痕後ナデを施す。内面に径7㎜の堅果類の圧痕がある。胎土はカクセン石他2㎜以下の砂粒を含み明赤褐～暗褐色を呈す。

SK08（Fig.35 Ph20）07の南に隣接し、1.05×0.8深さ20㎝の小型土壙。暗黄灰色シルトが堆積する。晩期精製・粗製土器片・黒耀石剥片が出土する。

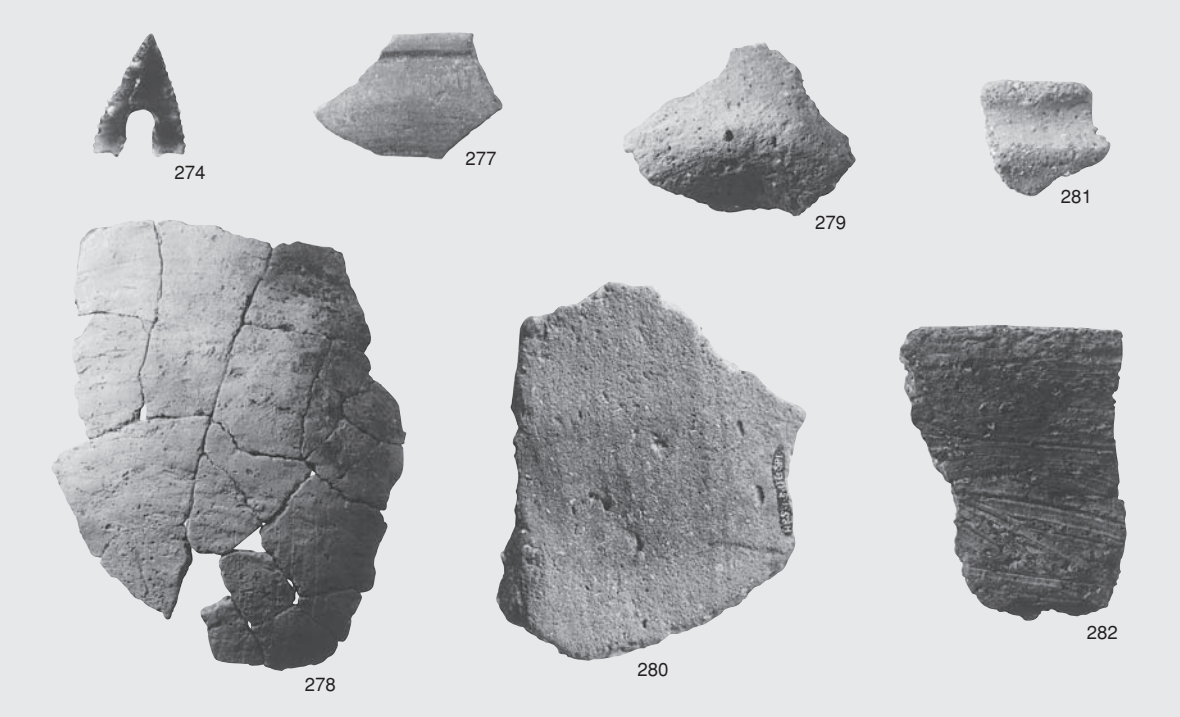


Ph.21　5区 SK02（北から）

SK02（Fig.35 Ph21）下段P13グリッドに位置する1.1×0.9深さ41㎝の円形土壙で、黄褐色シルト上面で検出される。底面から晩期土器片がまとまって出土する。

出土遺物　277は精製浅鉢口縁部で外面に沈線2条を施す。内外面にケンマ。金雲母他1㎜以下の砂粒を含み暗橙～黒褐色を呈す。278は粗製深鉢の1/4程の胴部破片。内外にヨコ条痕後ナデを施す。金雲母他3㎜以下の砂粒を多く含み暗黄橙～灰黄褐色を呈す。

279～282は柱穴出土土器。279は粗製土器・280は粗製素材の円盤・281は無刻目突帯・282は粗製深鉢口縁。胎土に気泡を多数含む。



Ph.22　5区縄文遺構出土遺物

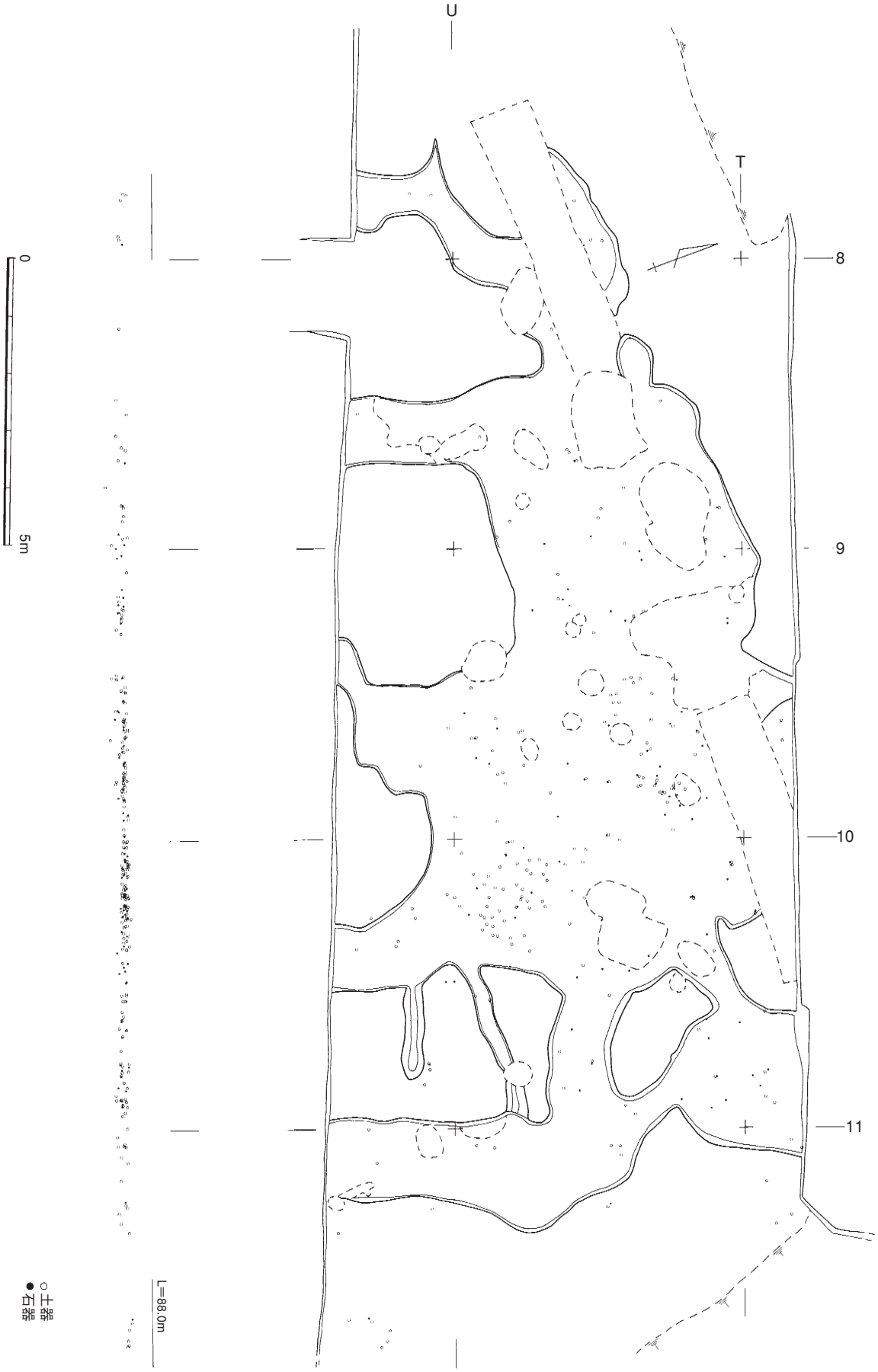
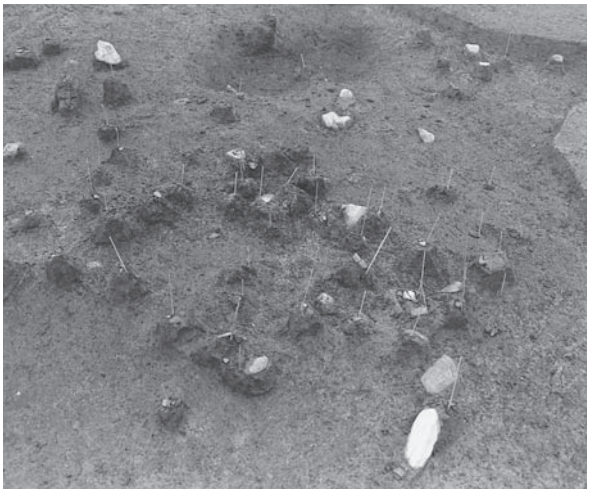


Fig.38　5区中央縄文包含層遺物位置図．1（1/100）

Ph.23　5区包含層遺物出土状況（西から）

②包含層　上段中央部を主に、下段部北端に若干、晩期遺物に少量の早期遺物が混在する、暗黄灰色シルトの薄い縄文包含層が検出されている(Fig.38 Ph23～25)。

中央部出土遺物（Fig.39～42 Ph.26・27）283～290は早期土器。283～287は 細かな横位の楕円押型文を施文し、内面は丁寧なヨコナデを施す。283は金雲母他5㎜以下の砂粒を含み暗黄褐色を呈す。284・285は斜格子に近いシャープな押型文で、胎土にカクセン石他2㎜以下の砂粒を含み灰黄褐～暗黄橙色を呈す同個体。285は口縁下片で内面上端に縦位の原体擦痕を施す。286・287は内面にヨコ・ナナメナデを施す同一個体。



Ph.24　5区包含層遺物出土状況（西から）

Ph.25　5区包含層土器出土状況（南から）

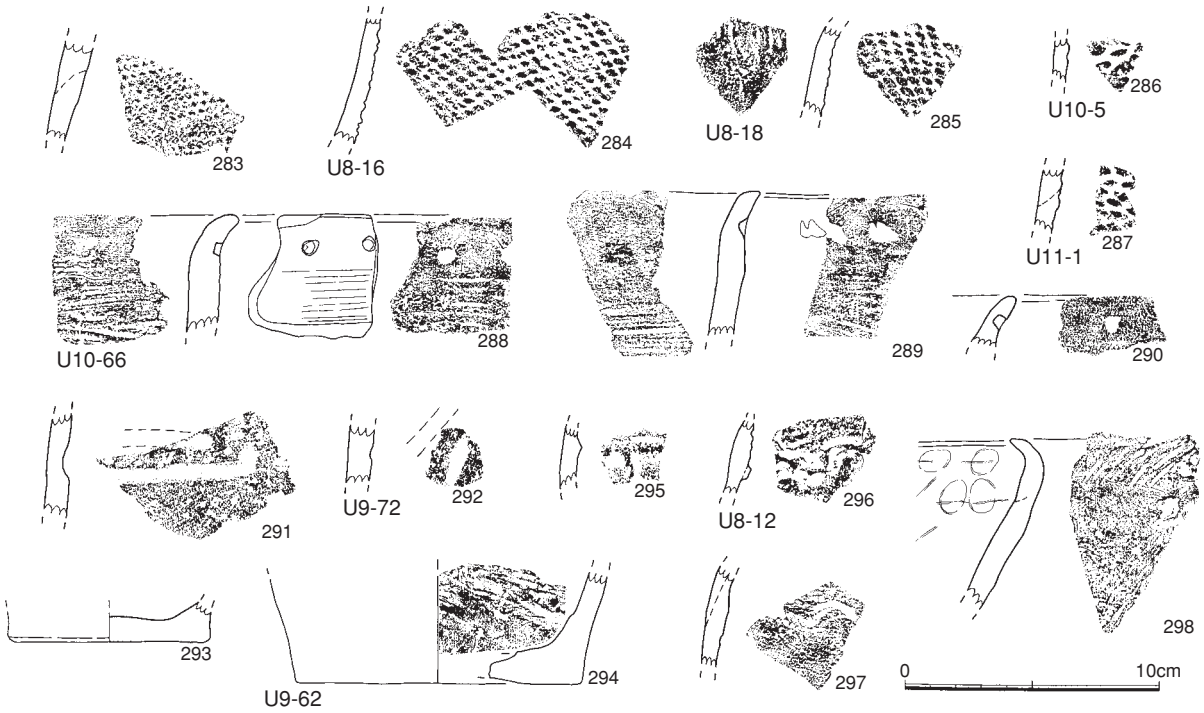


Fig.39　5区中央縄文包含層出土土器実測図．1（1/3）

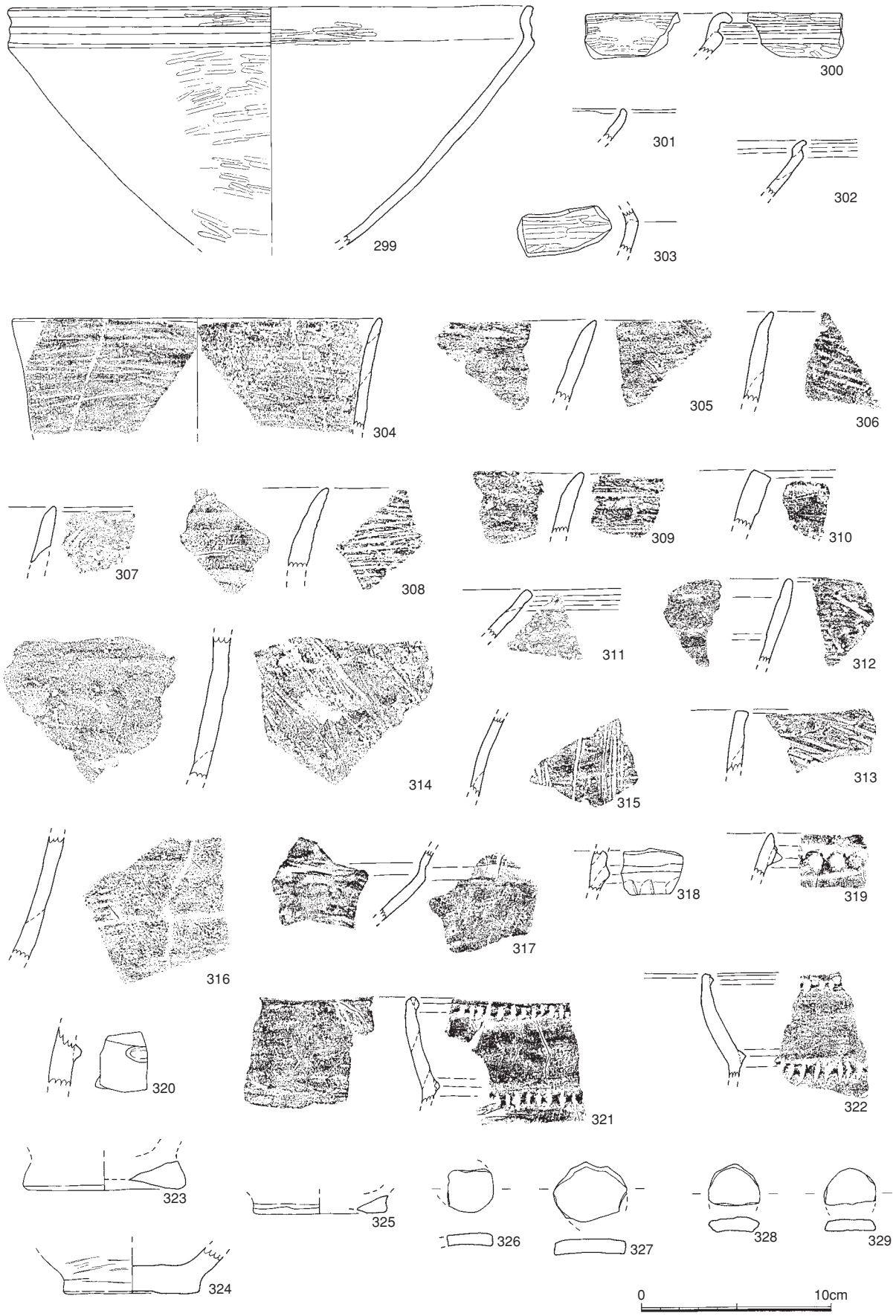
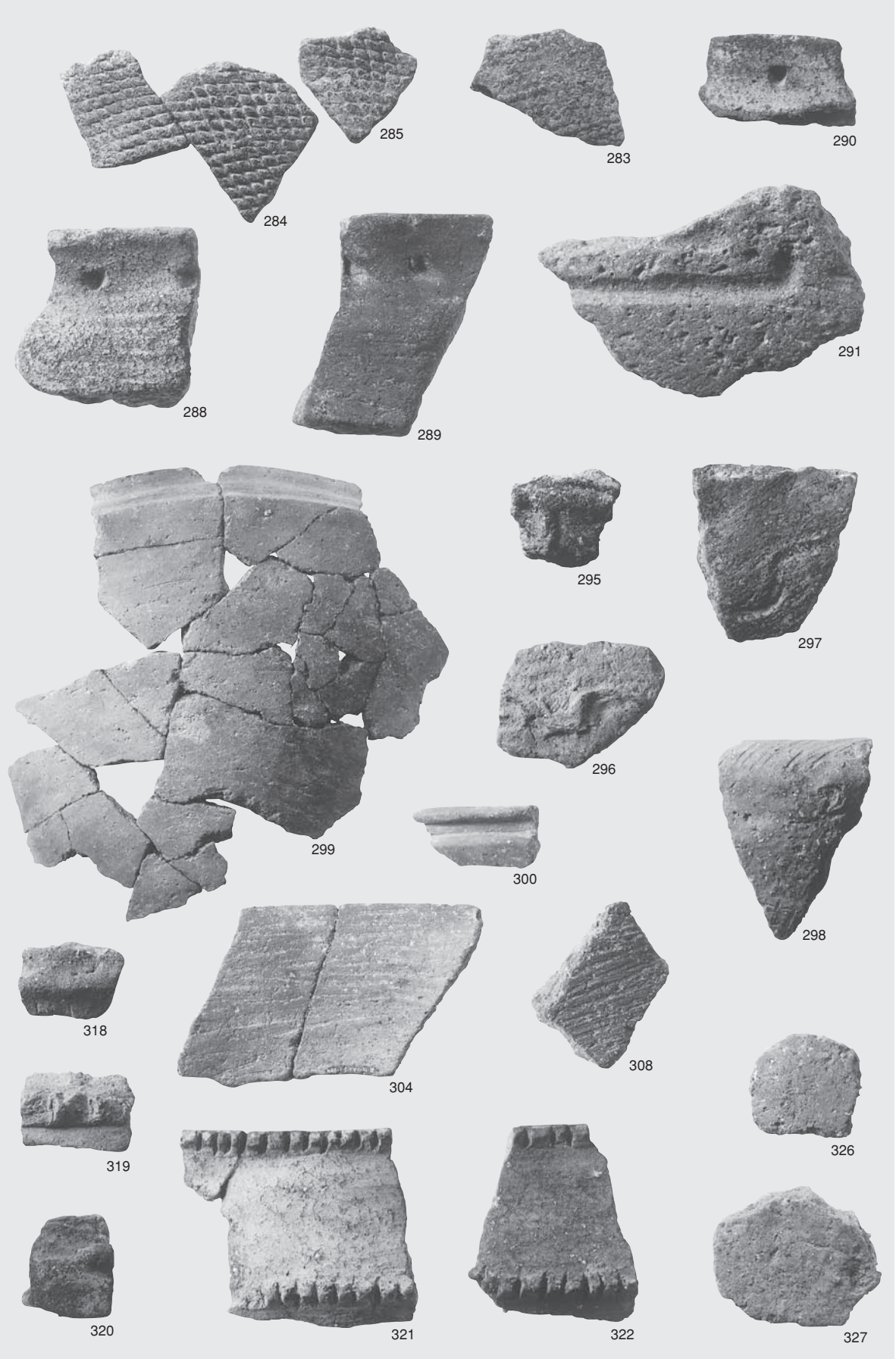


Fig.40　5区中央縄文包含層出土土器実測図．2（1/3）



Ph.26　5区包含層出土土器

288～290は緩く外反する口縁下に列点を施す土器群。内外面にヨコ条痕後口縁部にヨコナデを施し、器厚は1.1～1.3㎝と厚い。288は径６～７㎜の列点をヘラの抉りにより2.4㎝間隔で施し、カクセン石・金雲母他１㎜以下の砂粒を多く含み灰黄褐色を呈す。289は切れ込みを入れた棒状施文具を押し引いて列点を２㎝間隔で施す。カクセン石・金雲母他１㎜以下の砂粒を多く含み黒褐色を呈す。290は径５㎜程の棒状具を刺突で施文し裏面が張り出す。1㎜以下の砂粒を多く含み暗黄橙色を呈す。291・292は中期阿高式で同一個体。291はヨコ凹線と凹点を施し内面はヨコケズリ後ゆるいナデ。胎土に滑石他１㎜以下の砂粒を多く含み明赤褐色を呈す。292はタテ凹線を施す。293は中・後期の深鉢底部。径８㎝。内面はケズリ後ナデ。カクセン石他２㎜以下の砂粒を含み明褐～暗灰褐色を呈す。294は後期深鉢底部。径11.2㎝。外面はヨコナデ内面はヨコ条痕を施す。３㎜以下の砂粒を含み、気泡を多く含む。明褐～暗灰褐色を呈す。295～297は船元式系土器。295は細い貼付突帯をＴ字に施し、内外をナデ。カクセン石他１㎜以下の砂粒を含み暗黄橙色を呈す。296はR撚りの粗い横位縄文上に1.5㎝単位の波状の細い貼付突帯を横位に施す。金雲母他３㎜以下の砂粒を含み黄橙色～暗灰褐色を呈す。297はヨコナデ後Ｒ2段撚りの粗い縄文を横位に施文する。カクセン石・金雲母他１㎜以下の砂粒を含み暗灰褐色を呈す。298は北久根山式系の鉢。外面は条痕後ナデ口縁にナナメ貝殻条痕を施す。堅果類の圧痕がある。金雲母他２㎜ 以下の砂粒を多く含み明赤褐～黒褐色を呈す。

Fig.40は晩期土器。299～303は精製浅鉢。299は口径28㎝で全周の1/5程の破片。内外にヨコケズリ後ヨコナデ、ケンマを施し、屈曲した口縁外面には２条の凹線を施す。金雲母他１㎜ 以下の細砂粒を多く含み黄橙色～黒褐色を呈す。300は外面肩部下はケズリ後ナデ他はケンマを施し口縁下に沈線２条を施す。カクセン石他２㎜以下の砂粒を含み黒褐色を呈す。301は小型の浅鉢で内外にヨコナデ後内面をケンマ。金雲母他１㎜ 以下の砂粒を含み橙色を呈す。302は内外にヨコナデ後ケンマ。口縁外面に沈線を１条内面は段を成す。金雲母他２㎜ 以下の砂粒を含み暗褐色を呈す。303は

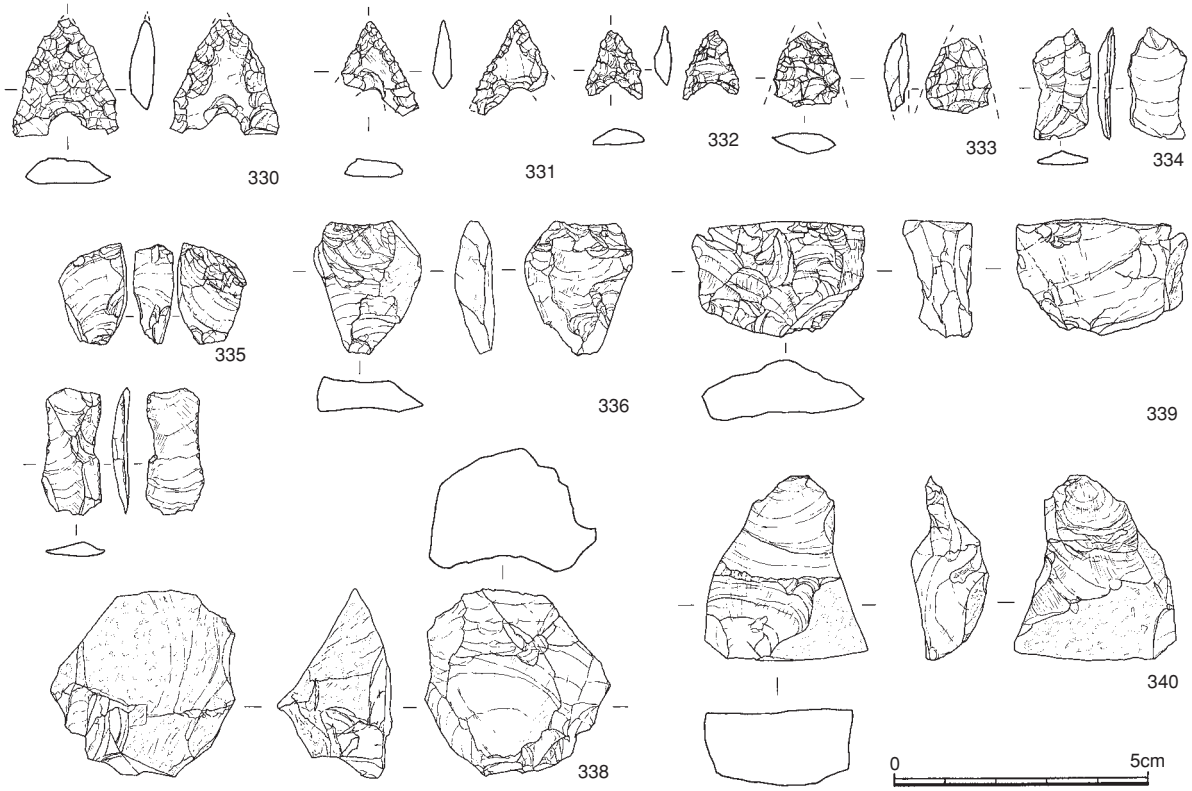


Fig.41　5区中央縄文包含層出土石器実測図．1（2/3）

肩部小片で内外にヨコナデ後ケンマを施す。胎土はカクセン石・金雲母他1㎜以下の砂粒を含み灰黄褐～橙色を呈す。304～316は粗製土器。304は口縁で内外面にヨコ貝殻条痕後内面をゆるくヨコナデ。口径19.6㎝。大粒の金雲母を多量に含み、暗黄橙～灰黄褐色を呈す。305は外面ヨコ・ナナメ条痕、内面はヨコケズリ後ヨコナデを施し、1㎜以下の砂粒と気泡を含み褐～黒褐色を呈す。306は外面にナナメ貝殻条痕、内面にヨコナデを施し、3㎜以下の砂粒を含み灰黄褐～明黄褐色を呈す。307は外面にナナメ貝殻条痕、内面はヨコナデを施し、金雲母他3㎜以下の砂粒を含み暗黄橙色を呈す。308は外面ヨコ貝殻条痕、内面はヨコケズリ後ヨコナデを施し、金雲母他1㎜以下の砂粒を含み黒褐色を呈す。309は内外面にヨコ条痕後内面をゆるくヨコナデ。金雲母他2㎜以下の砂粒と気泡を含み暗黄橙色を呈す。310は口唇を面取りし外面ヨコ条痕後ナデ、内面はヨコナデを施し、金雲母他1㎜以下の砂粒を含み明黄褐色を呈す。311は半精製の浅鉢で外面に条痕後口縁下に沈線、内面は段を成しナデを施す。カクセン石・金雲母他1㎜以下の砂粒を含み橙色を呈す。312は外面ヨコ貝殻条痕、内面はヨコケズリ後ヨコナデを施し、2㎜以下の砂粒と気泡を多く含み

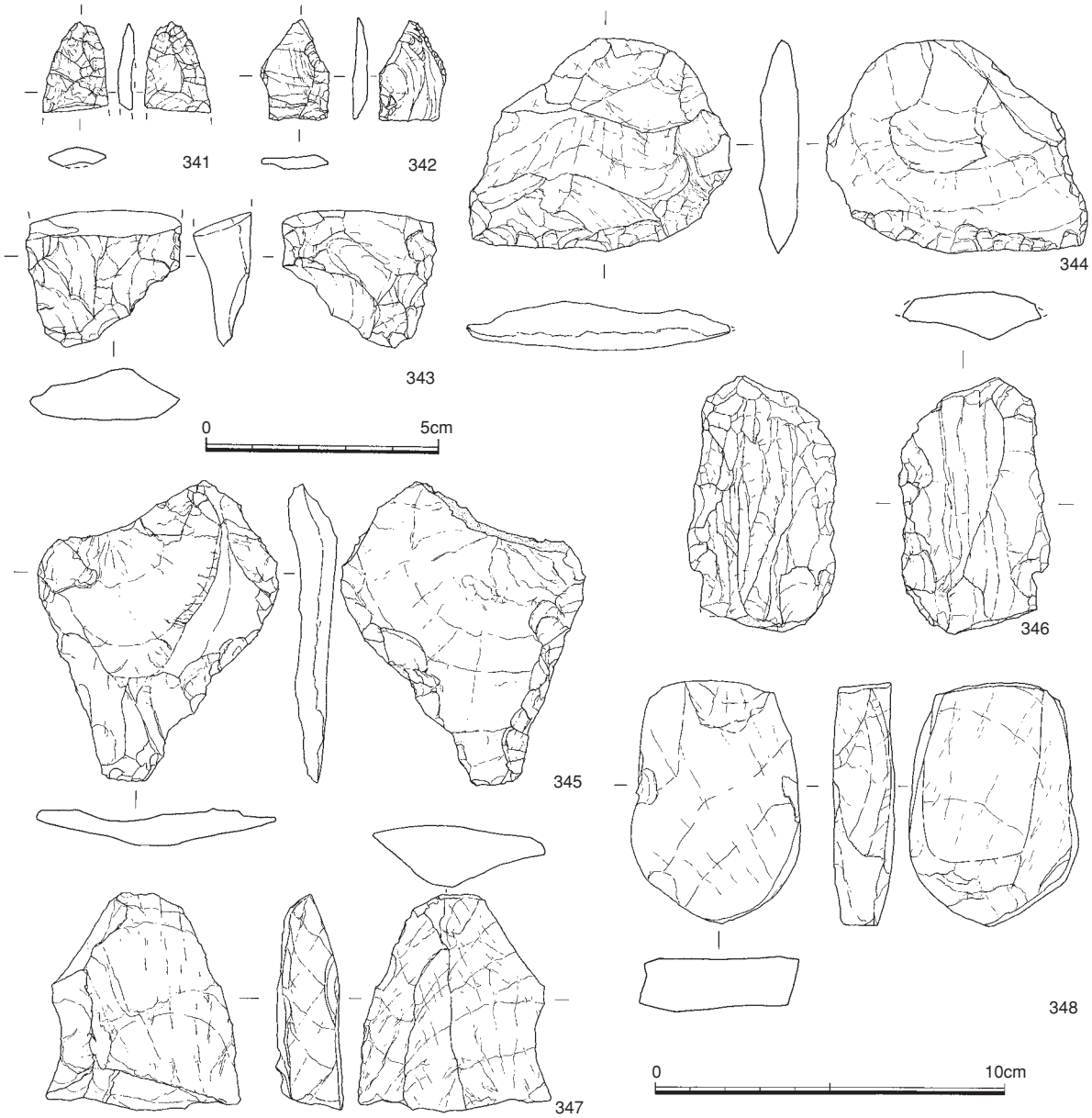
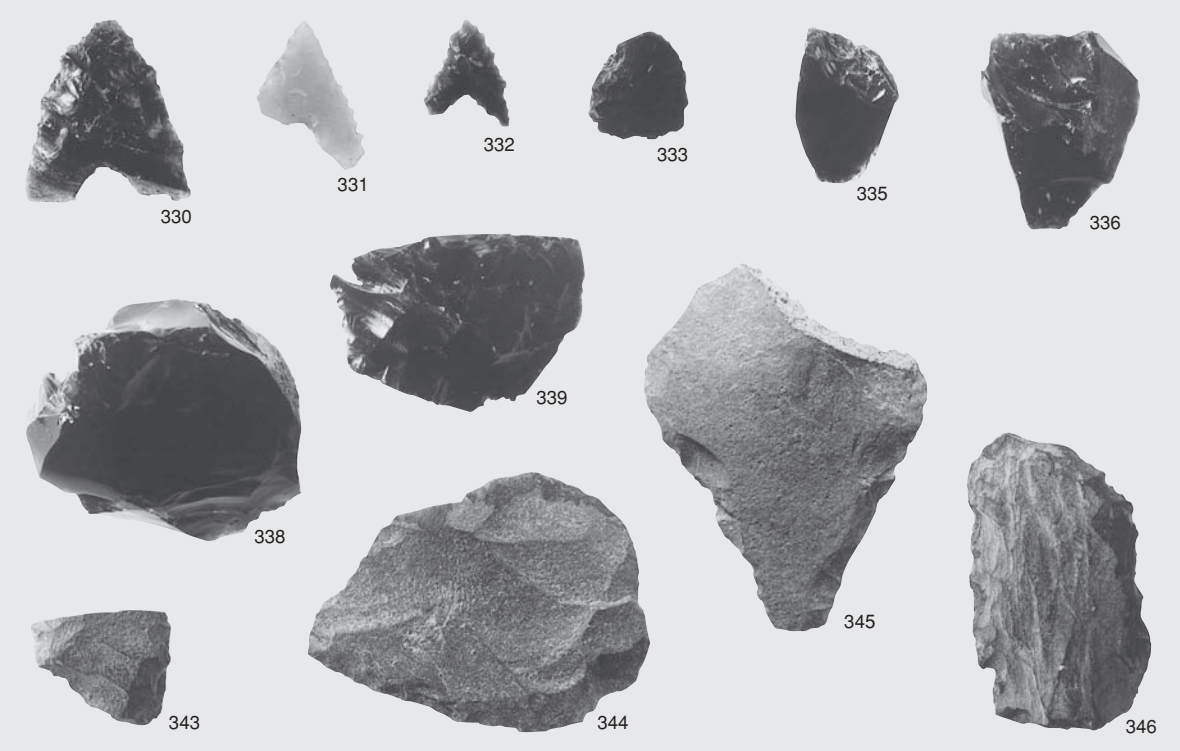


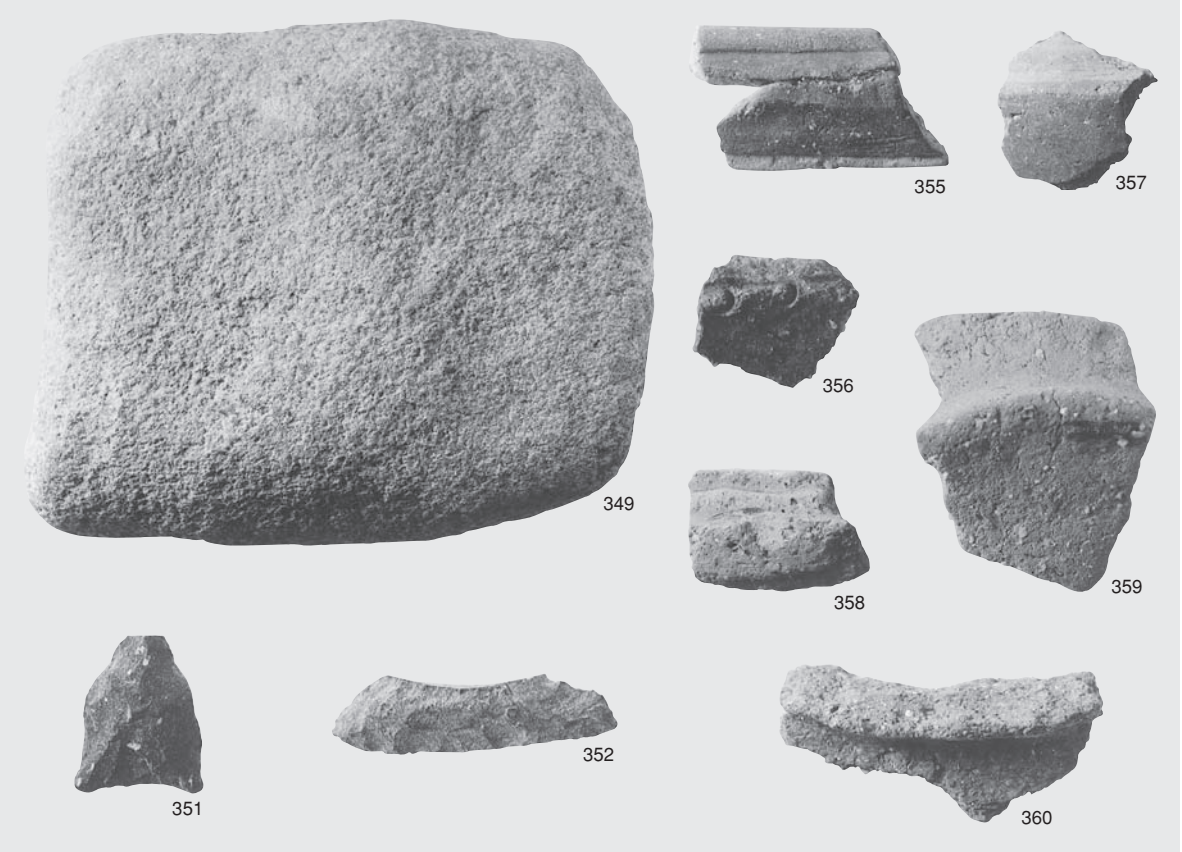
Fig.42　5区中央縄文包含層出土石器実測図．2（2/3・1/2）

暗黄橙色を呈す。313は外面ナナメ貝殻条痕、内面はヨコケズリ後丁寧なヨコナデを施し、金雲母他1㎜以下の砂粒を含み暗橙色を呈す。314は胴部片で外面ナナメ条痕、内面はヨコケズリ後ヨコナデを施し、金雲母他5㎜以下の砂粒を含み暗橙～褐色を呈す。315は口頸部片で外面はヨコナデ後数本単位のタテ条痕、内面はヨコ条痕後ヨコナデを施し、3㎜以下の砂粒と気泡を多量に含み暗黄橙色を呈す。316は早期の胴部片で外面はヨコ貝殻条痕、内面はヨコナデを施し、カクセン石他1㎜以下の砂粒を多量に含み暗黄橙色を呈す。317は晩期半精製の浅鉢肩部片で外面はヨコケズリ後ヨコナデ、煤が付着する。内面はヨコ条痕後ヨコナデを施し、金雲母他1㎜以下の砂粒を含み黄橙～黒褐色を呈す。318～325は突帯文土器。318は肩部小片で、内外面にヨコナデ、突帯下半に浅い刻目を施す。金雲母他1㎜以下の砂粒を多く含み褐色を呈す。319は口縁小片で内外面にヨコナデ、口縁下の突帯に太目の刻目を施す。1㎜以下の砂粒を含み明黄褐色を呈す。320は胴外面に2㎝程の粘土瘤を貼付したもので、内外面はナデ、カクセン石他2㎜以下の砂粒を多量に含み暗黄橙～暗灰褐色を呈す。早期か。321・322は口縁端と肩部に低い刻目突帯を施すもので、外面はヨコ条痕後ヨコナデ、内面はヨコケズリ後丁寧なヨコナデを施し、突帯に貝殻条痕具で刻目を施す。金雲母他2㎜以下の砂粒を多く含み、321は浅黄橙色～黒灰色322は灰黄褐色を呈す。323～325は底部。323は円盤貼付で径8.6㎝。2㎜以下の砂粒を多く含み明黄褐色を呈す。324は径7.0㎝。条痕後ナデを施す。3㎜以下の砂粒と気泡を多量に含み橙～暗褐色を呈す。325は径7.0㎝。1㎜以下の砂粒を含み暗黄褐色を呈す。326～329は粗製土器片を円形に打ち欠いて成形した土器片円盤。全て欠損し、326は径2.2器厚0.6㎝・327は径3.8器厚0.7㎝・328は径2.7器厚0.7㎝・329は径2.7器厚0.6㎝を測る。

Fig.41は黒耀石製石器。330～333は石鏃。330は完形の剥片鏃で24×21×5㎜1.9gを測る。黒色透明で灰色の縞が入る。331は片脚を欠損する鍬形鏃。残存で18×15×3㎜を測る。乳灰色の姫島産。332は完形の小石鏃で14×11×3㎜0.3gを測る。主剥離面が少々残る。黒灰で灰色の縞が入る。333は先端と脚部を欠損する。残存で15×13×5㎜を測る身の厚い鏃で黒灰色を呈し風化が進み不透明となっている。早期。334は縦長剥片を用いたスクレーパー。左側縁に刃潰し加工を行い右側縁を



Ph.27　5区包含層出土石器



Ph.28　その他の5区出土縄文遺物

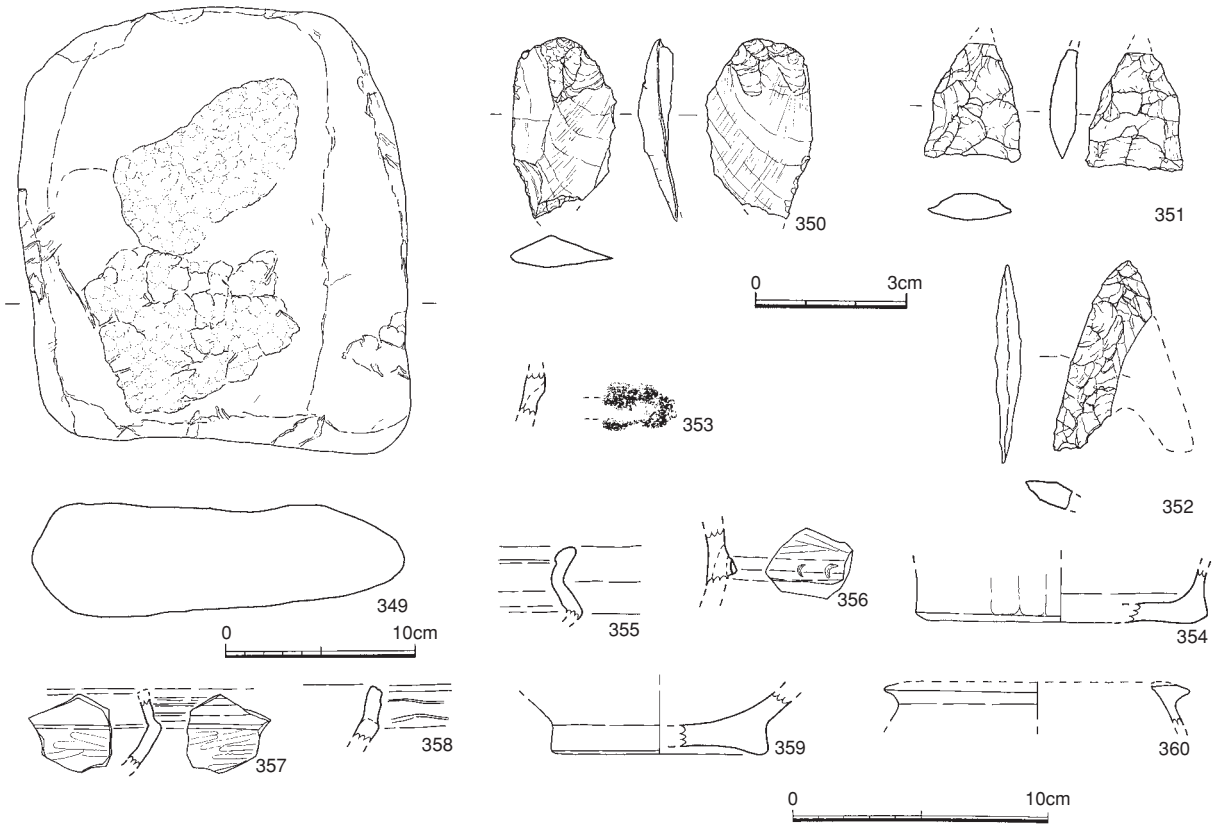


Fig.43　その他5区出土遺物実測図（1/3・2/3・1/4）

使用する。バルブ部は折断する。22×11×3.5㎜を測る。黒灰色を呈し透明。335・336は楔形石器。縦長の厚めの剥片を用い、使用による打圧で上下辺が内外に細かく階段状に剥離し潰れる。335は20×14×８㎜を測り、漆黒色を呈し透明。336は26×22×７㎜を測り、黒色を呈し不透明。背面に自然面が残る。337は縦長剥片を用いた使用剥片。バルブを打ち欠き両側辺を使用する。25×12×３㎜を測り、黒灰色を呈し透明。338～340は石核。338は腰岳産の角礫の隅角を打ち取ったもので、３面に自然面が残る。バルブ面を横から剥離して打面を作りこの面と下端の自然面から剥離を行う。34×36×23㎜を測り、漆黒色を呈す。339は上・側の直角２面に自然面が残る。下面を裏面から剥離し打面とする。23×34×13㎜を測り、漆黒色に横縞が入り不透明。340は扁平礫の３面に自然面が残る。上面表裏からの階段状剥離と下面から剥離する。46×32×15㎜を測る。

Fig.42はサヌカイト製石器。341は５㎝前後の大型鏃の脚部。残存で19×14×４㎜を測る。風化は薄い。342～346はスクレーパー。342は小型の横長剥片素材で、先端部と折断部に刃潰しを行い打面側に両面剥離で刃部を形成する。22×14×３㎜を測る。343は厚い横長剥片素材で、両面剥離で周縁に刃部を形成する。上半は折損する。残存で29×33×12㎜を測る。344は大型の横剥剥片素材で、剥片先端と右側辺に両面剥離で刃部を形成する。バルブは除去される。風化が進み灰色を呈し早期以前と思われる。上辺に黒色の新しい剥離があり、晩期に再利用を図っている。61×75×11㎜を測る。345は大型の縦剥剥片素材で、打面に自然面を残す。両面剥離で両側辺・先端に刃部を形成する。暗灰色を呈する。87×70×９㎜を測る。346は大型の縦長剥片素材で、上辺の打面に自然面を残す。両面剥離で上辺以外の3辺に刃部を形成する。暗灰色を呈する。裏剥離面左辺を主に黒色の新しい剥離があり、晩期に再利用を行っている。74×44×18㎜を測る。347は大型の縦長剥片を用いた使用剥片。上半を主剥離面側から折断し、先端と左辺を使用する。黒灰色を呈し、62×56×20㎜を測る。348は残核で、厚い縦長剥片を周縁の上下からの打撃で横長剥片を剥離する。黒灰色を呈し、70×49×17㎜を測る。

Fig.43（Ph.28）は検出面・中世混入資料など。349はS11検出面出土。花崗岩の大型方形自然礫を使用した台石で、叩石の敲打により上面を主に窪みを生じる。23.4×20.5×6.7㎝を測る。350はQ12包含層出土。黒耀石縦長剥片素材の石錐で、先端部の両側主剥離側から浅いノッチで先端を形成。右側辺も使用する。黒灰色で透明。35×31×７㎝を測る。351はU９検出面出土のサヌカイト製駒形石鏃。先端を欠損。主剥離面は残らない。23×19×５㎜2.0gを測る。352～358は混入資料。352はサヌカイト製大型石鏃。縦半分近くを欠損する。残存で40×11×4.5㎜を測る。353は阿高式系土器小片。ヨコ凹線を施し、赤褐色で滑石を多量に含む。354は中・後期深鉢底部。径11.6㎝。内外面にナデ。底面に条痕が残る。胎土は金雲母他１㎜以下の砂粒を含み黄橙～赤褐色を呈す。355は晩期精製浅鉢。肩は屈曲し口縁内面は段を成す。内面ヨコケズリ後全面にナデ。金雲母他１㎜以下の砂粒を含み灰褐色を呈す。356はSK13出土の晩期突帯文土器肩部小片。外面は条痕後ヨコナデ、突帯に半裁竹管で刻目を施す。内面はナデ。２㎜以下の砂粒を含み赤褐～黒褐色を呈す。外面に煤が付着。357は晩期精製浅鉢小片。内外にナデ後ケンマ、屈曲した口縁外面に沈線を２条施す。金雲母他１㎜以下の砂粒を含み暗黄橙～灰褐色を呈す。358は晩期粗製深鉢口縁。内外面にナデ、小さく屈曲した口縁外面に浅い沈線を２条施す。２㎜以下の砂粒と気泡を多く含み暗橙色を呈す。359はL13検出面出土晩期深鉢底部。径8.6㎝。内外面にナデを施す。金雲母他３㎜以下の砂粒を多く含み橙～暗黄褐色を呈す。360は数少ない弥生土器で中期初頭。T11SP1出土。三角口縁で内面をヨコケズリ後全面にナデ。口径12㎝を測る。金雲母他３㎜以下の砂粒を多く含み明赤褐色を呈す。

2）古代・中世の調査

遺構は、下段の南北両端で土壙２基・焼土壙２基、上段は中央と東部の２カ所にまとまり、中央で土壙２基・焼土壙２基、東部で土壙３基・焼土壙３基を検出している。遺物の出土は少ない。

①土壙　土壙は下段２基、上段中央で２基・東部で３基検出している。遺物は少なく、明確な時期を示す資料が出土したのはSK16・17の2基のみで、他は灰褐色砂質の覆土で時期比定している。

SK17（Fig.44）調査区上段東部のＴ12グリッドに位置する1.6×0.6ｍ深さ19㎝を測る不整楕円形の土壙で底面は２段になる。遺物は土師器小片・瓦器?小片が出土した。

出土遺物（Fig.45）363は瓦器?底部で、径7.2㎝。畳付を欠く。調整は不明。胎土は精良で暗灰色、断面黒灰色を呈する。12世紀。

②焼土壙　焼土壙は下段で２基、上段中央で２基・東部で３基が固まって検出している。土壙同様遺物は少なく、明確な時期を示す資料が出土したのはSK03・20の2基のみで、他は灰褐色砂質の覆土で時期比定している。

SK03（Fig.17 Ph.29）下段北端部のＪ14グリッドに位置し、1.6×0.9ｍ深さ24㎝を測るA′類土壙。削平は深く、焼土壁が床面から10㎝程上位に若干残る程度で大部分は崩落している。壁面と炭灰層に間層があり（４層）、２度の使用が考えられる。床直上には５～10㎝程に炭灰層が堆積する。

Ph.29　5区 SK03 上層断面（東から）

Ph.30　5区 SK04（西から）

Ph.31　5区 SK01 土層断面（南から）

Ph.32　5区 SK09（南から）

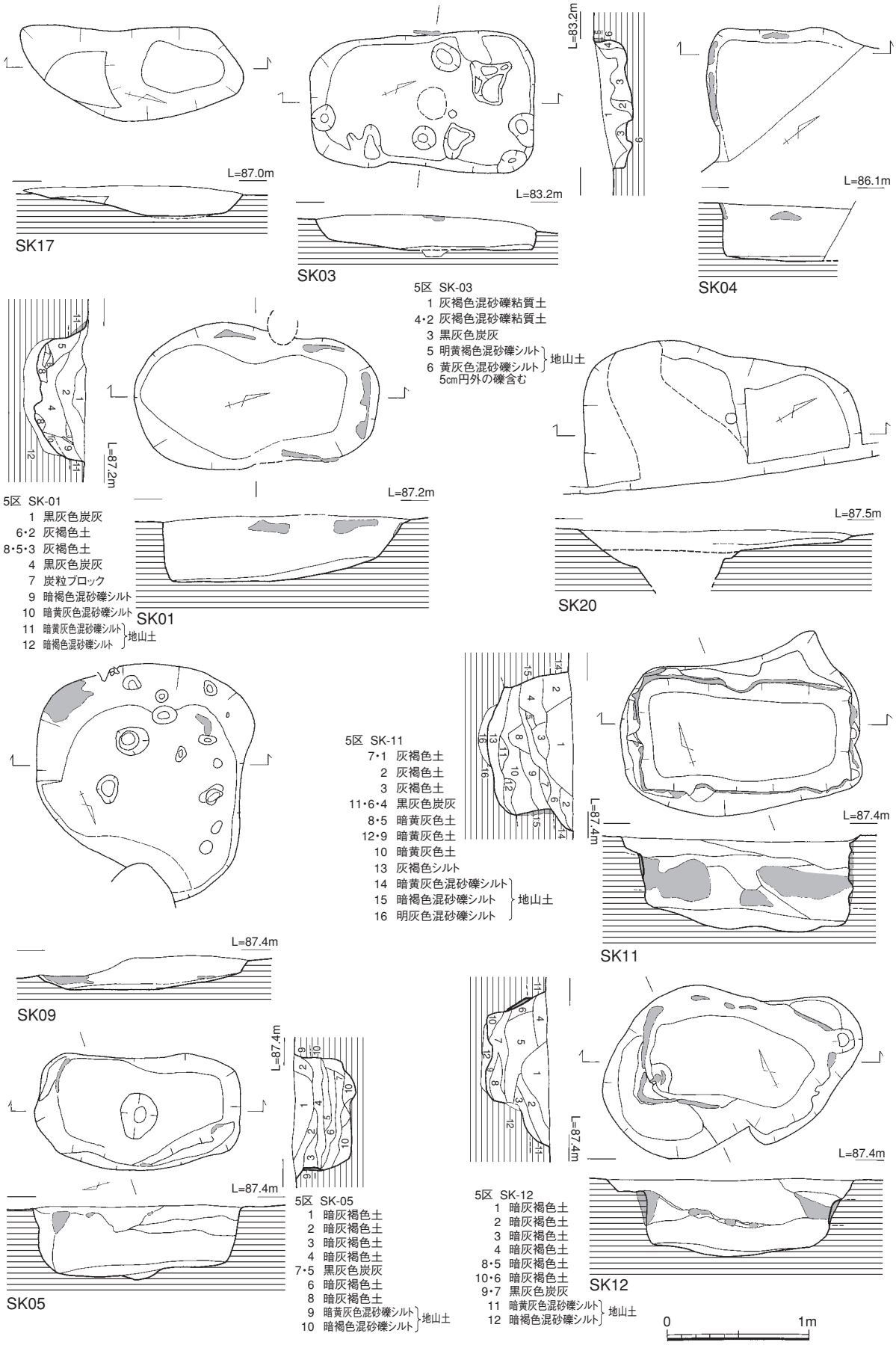


Fig.44 5区中世遺構実測図（1/40）

遺物はめずらしく白磁・土師器等まとまって出土した。

出土遺物（Fig.45）364は口禿白磁皿で、口径11㎝。胎土は灰白色、灰白色の不透明釉を掛ける。13世紀後半～14世紀初。

SK04（Fig.44 Ph.30）SK03の東に方向をそろえて隣接する。K14グリッドに位置し、北東部が調査区外にある。現況で1.3×0.75ｍ深さ41㎝を測る。焼土壁は床面から30㎝程の位置に上端から10㎝程が残る程度で大部分は剥落している。床直上10㎝程に炭灰層が堆積する。遺物の出土は無い。

SK01（Fig.44 Ph.31）上段東部に３基が直線方向に並ぶ一群の北端、T11グリッドに位置し、1.7×1.0ｍ深さ46㎝を測る長方形のＢ類土壙。焼土壁は床面上15㎝程から上位に広がり部分的に剥落する。初回の操業後大部分が自然に埋没し（５～10層）、内側を再度掘り上げ２度目の操業を行っており炭灰層（４層）が堆積し内側の壁面が焼ける。遺物は周囲の縄文遺物が混入するのみである。

SK09（Fig.44 Ph.32）01の南２ｍ程のU11グリッドに位置し、1.65×1.6ｍ深さ20㎝を測る円形で浅いC類土壙。他と異なり東西方向に軸を採る。焼土壁は床面近くまで広がるが大部分は剥落する。床面の小穴は樹木の根跡である。遺物は同様に周囲の縄文遺物が混入するのみ。

SK20（Fig.44）３基の南端、V11グリッドに位置し、南半部が調査区外にある。現況で2.0×0.9ｍ深さ15㎝を測る台形のＡ類土壙。削平は深く焼土壁は残らない。床面下に樹木痕があり、同時に掘削したため、床面の南半を失っている。遺物は土師質鍋の小片と周囲の縄文遺物が混入するのみ。

SK05（Fig.44 Ph.33）上段中央の一群の南端、U９グリッドに位置し、1.45×0.8ｍ深さ44㎝を測る長方形のＢ類土壙。残りは良好で、焼土壁は床面から20㎝程の位置から上位に広がるが大部分剥落する。土層断面の３層の炭灰層（４・５・７層）から、３回の操業が知れる。遺物は周囲の縄文遺物が混入するのみである。

Ph.33　5区 SK05 土層断面（西から）

SK11（Fig.44 Ph.34）上段中央の一群の西端、U8グリッドに位置し、1.7×1.05ｍ深さ68㎝を測る長方形のＢ類土壙。他と異なり東西方向に軸を採る。残りは良好で、焼土壁は床面から10㎝程の位置から上位に30㎝程広がりさらに上は自然に崩落する。土層断面から、最低２回の操業が知れる（4・6・11層）。遺物は縄文遺物が混入するのみ。

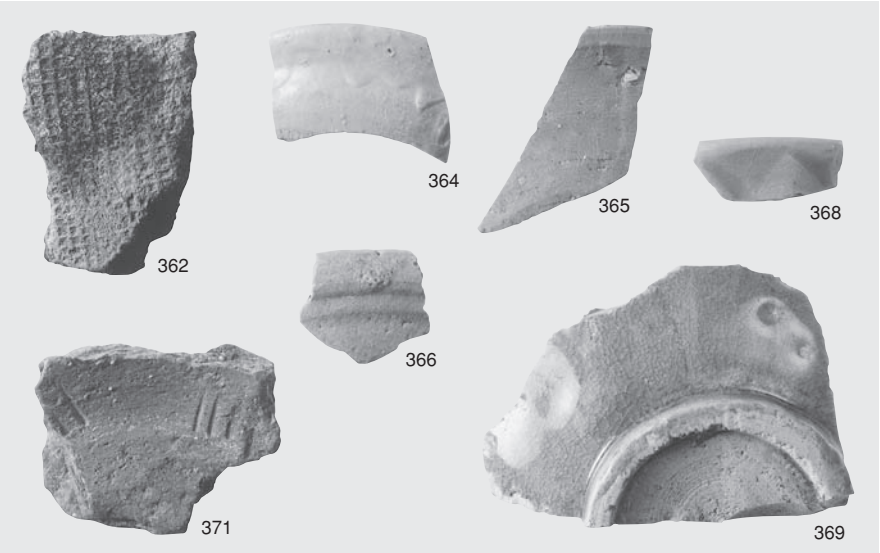
Ph.34　5区 SK11 土層断面（北から）

Ph.35　5区 SK12 土層断面（北から）

SK12（Fig.44 Ph.35）SK11の東に方向をそろえて隣接する。U８グリッドに位置し、1.9×1.0ｍ深さ58㎝を測る長方形のＢ類土壙。残りは良好で、焼土壁は床面から15㎝程の位置から上位に15㎝程広がりさらに上は自然に丸く崩落する。土層断面から、最低２回の操業が知られ（７・９層）、南半は撹乱を受ける。遺物は周囲の縄文遺物が混入するのみである。

③その他の中世遺物

Fig.45は検出面等の出土遺物。362は撹乱出土の土師質土鍋の底部片で外面に格子目叩きを施し煤が付着する。内面はケズリ後ナデを施す。365は検出面出土白磁Ⅴ類碗。口径14㎝。見込み近くに圏線を施す。胎土は淡灰色で黒色粒を少量含み、淡オリーブ灰色の透明釉を掛ける366はトレンチ埋土出土白磁碗Ⅳ類。淡灰色の胎土にオリーブがかった淡灰白釉を掛ける。367は表採の白磁Ⅴ類碗。灰白色の胎土に灰白透明釉を掛ける。368・369は検出面出土龍泉窯系青磁Ⅱ類碗。外面に鎬蓮弁文を施す。368は灰白色の胎土、369は浅黄橙色の胎土に暗青緑色の釉を高台際まで掛ける。底径６㎝。370はトレンチ埋土出土土師器坏。橙色を呈し１㎜以下の砂粒を含む。口径10器高2.5㎝を測る。外底は糸切り。371は検出面出土瓦質擂鉢底部片。淡灰色を呈し１㎜以下の砂粒を含む。



Ph.36　5区出土中世遺物

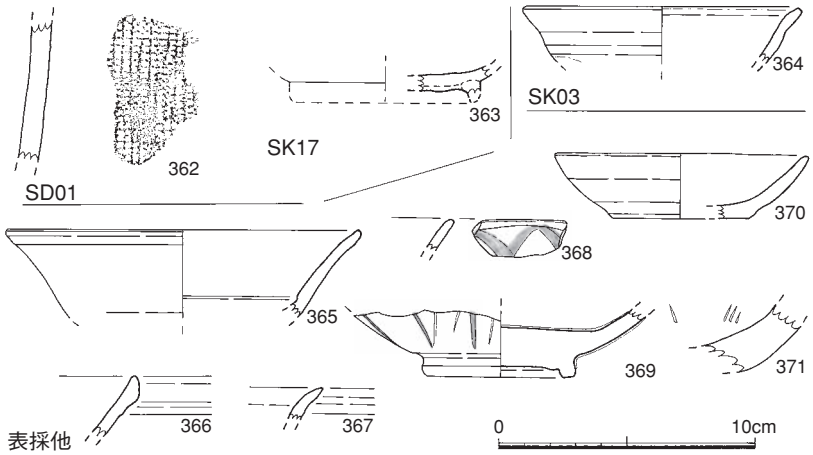


Fig.45　5区出土中世遺物実測図（1/3）

7．6区の調査

調査第6区は、中央の市道より南西200～300m、第5区の西端に連結して南に延びる農道用水路・農道拡幅工事部分にあたり（Fig.2）、幅6m長さ95mの細長い調査区で、調査面積558㎡。段丘上に立地し、3段の旧水田面に合わせ南から6－1区～6－3区の3小区に分け、調査を実施した。調査区西端から、西の丘陵際、現道路面下には12・13世紀代と昭和38年大水害の土石流が厚く堆積し遺構面の一部が削られる。遺構は表土下の黄褐色・黒灰色・明黄灰色シルト上面で検出される。縄文時代の倒木痕18基・土壙1基・柱穴、中世溝2条・焼土壙2基・土壙1基・柱穴、近世土壙1基・廃石土壙1基・倒木痕1基を検出している。中段6－2区に早期～晩期遺物が混在する暗黄灰～黄褐色シルトの縄文包含層が薄く広がる。遺物は5区上段程集中しない。検出面の標高は上段6－1区で88～88.25m中段6－2区で87.5m下段6－3区で86.75～87mである（Fig.47 Ph.37・38）。

1）縄文時代の調査

遺構は、上段で倒木痕5基、中段で晩期土壙1基・倒木痕5基、下段で倒木痕9基が検出され、中段6－2区に早期～晩期遺物が混在する薄い暗黄灰～黄褐色シルトの縄文包含層が検出されている。

①土壙　土壙は中段でSK04の晩期土壙1基を検出した。遺物の出土も少ない。

SK04（Fig.46 Ph39）中段Ag6グリッドに位置する1.25×0.8深さ53㎝の楕円形土壙で倒木痕を切っている。覆土は暗黄灰色シルトで、晩期の条痕文土器・土器片円盤・叩石等が出土した。

出土遺物（Fig.49 Ph.42）372は粗製深鉢胴部片で外面にナナメ貝殻条痕、内面にヨコ条痕を施す。胎土は金雲母他1㎜以下の砂粒を含み橙色を呈する。373は粗製土器素材の土器片円盤で周縁を打ち欠きで整形する。完形で径3.6×4.0㎝10.7gを測る。374は花崗岩円礫の叩石で6.4×5.1×4.0㎝170.5gを測る。側面と下面を敲打し下面は平坦に磨り減る。

②包含層　中段北側で、早期～晩期遺物が混在する暗黄灰～黄褐色色シルトの薄い縄文包含層が検出されている（Fig. 48 ）。遺物は少ない。

出土遺物（Fig.49・50 Ph.42）375は早期押型文土器で内外に原体幅23㎜の横位の山形文を重ねて施文する。口縁内面には縦位の原体条痕を施す。376は中期船元式系土器。外面にRR撚りの粗い縦位の縄文を内面にヨコ貝殻条痕後ナデを施す。1.5㎜以下の砂粒を多く含み外面黒褐色内面暗橙

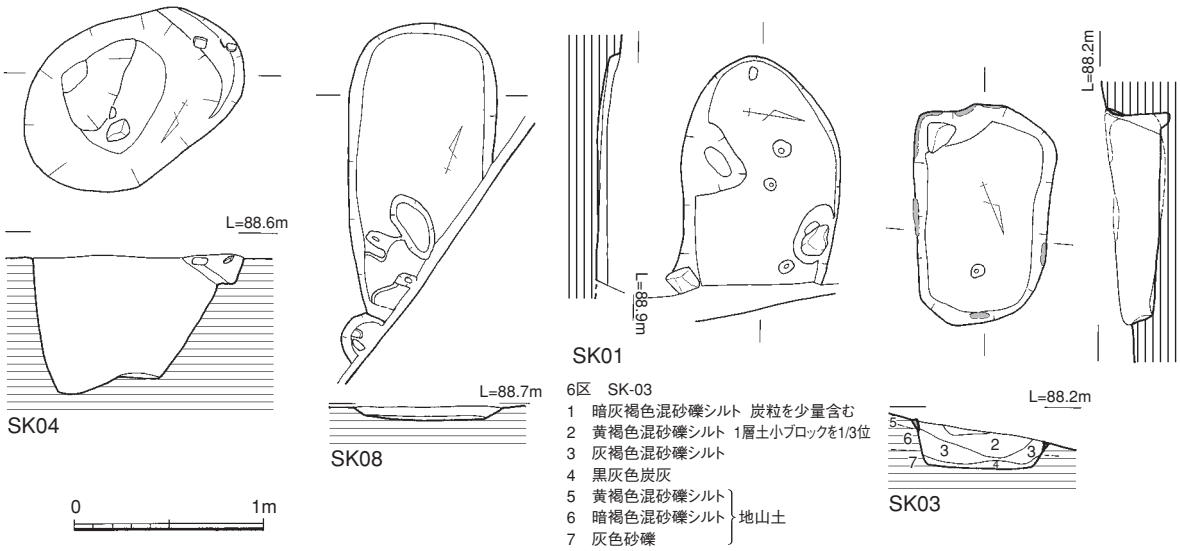


Fig.46　6区土壙実測図（1/40）

Ph.37　6区全景（南から）

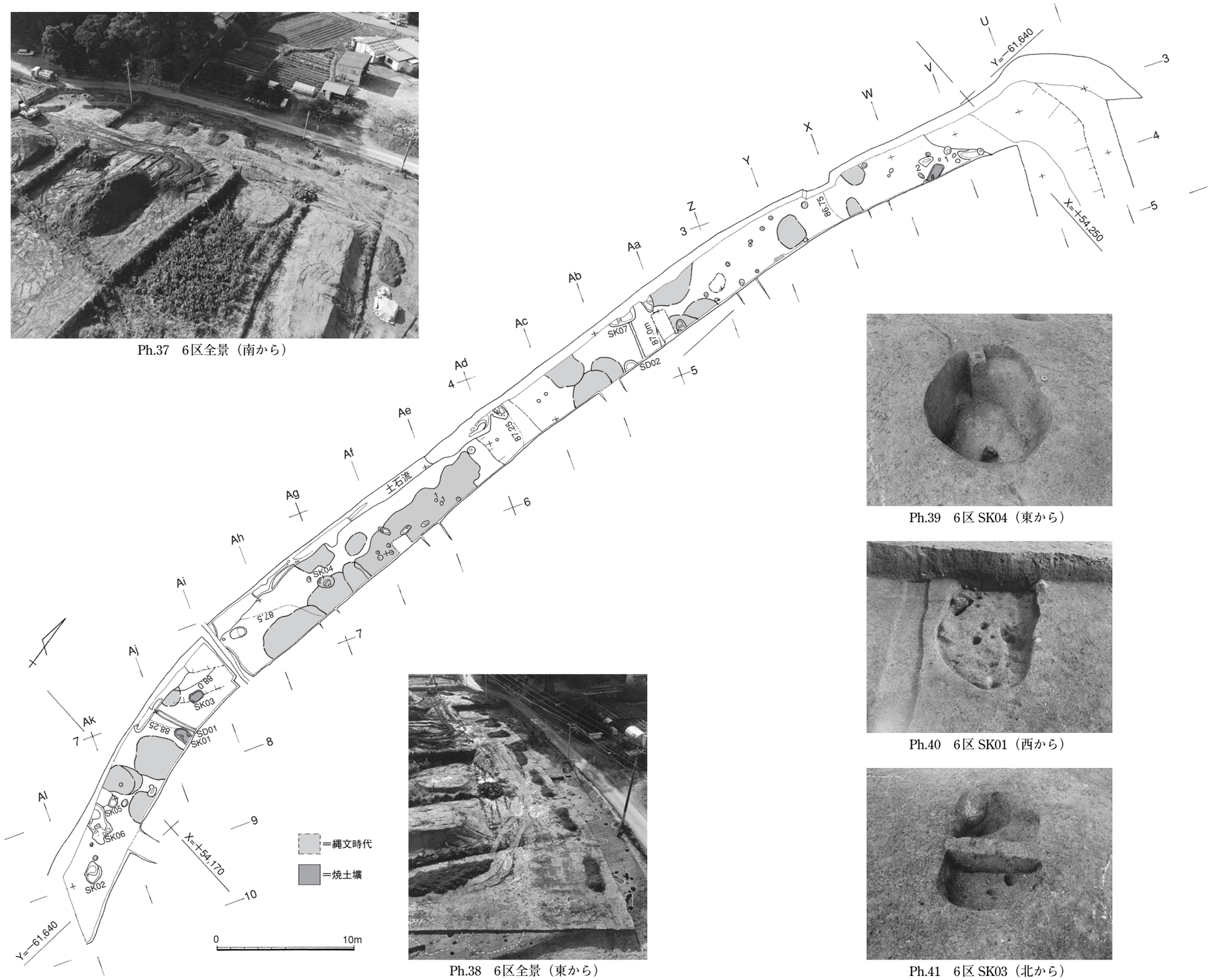


Fig.47　6区遺構全体図（1/300）

Ph.38　6区全景（東から）

Ph.39　6区 SK04（東から）

Ph.40　6区 SK01（西から）

Ph.41　6区 SK03（北から）

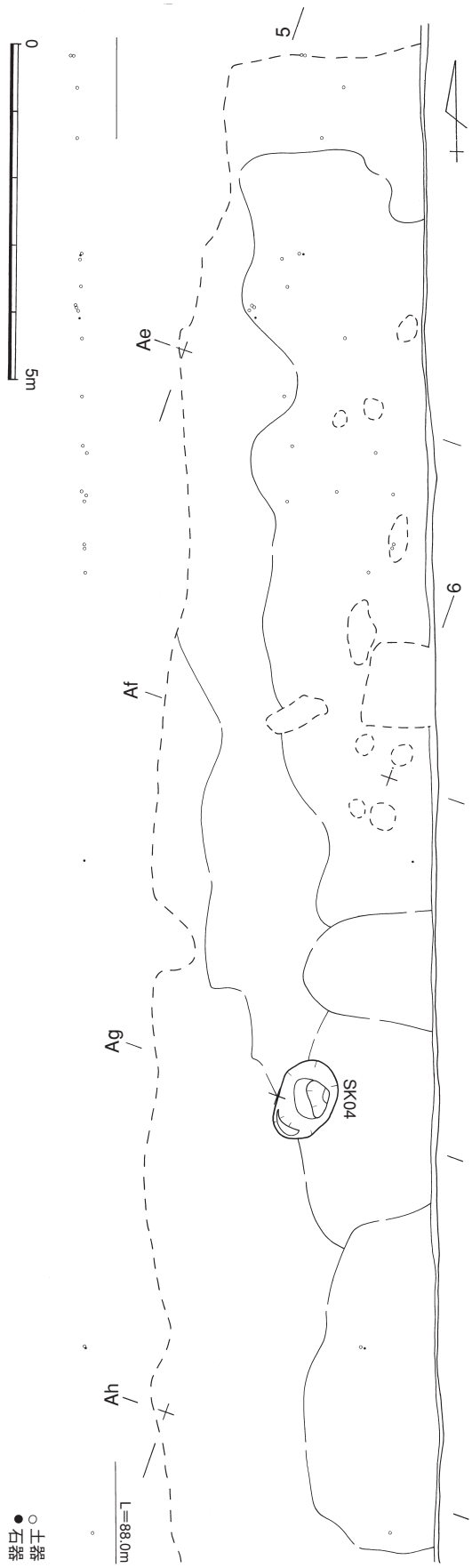
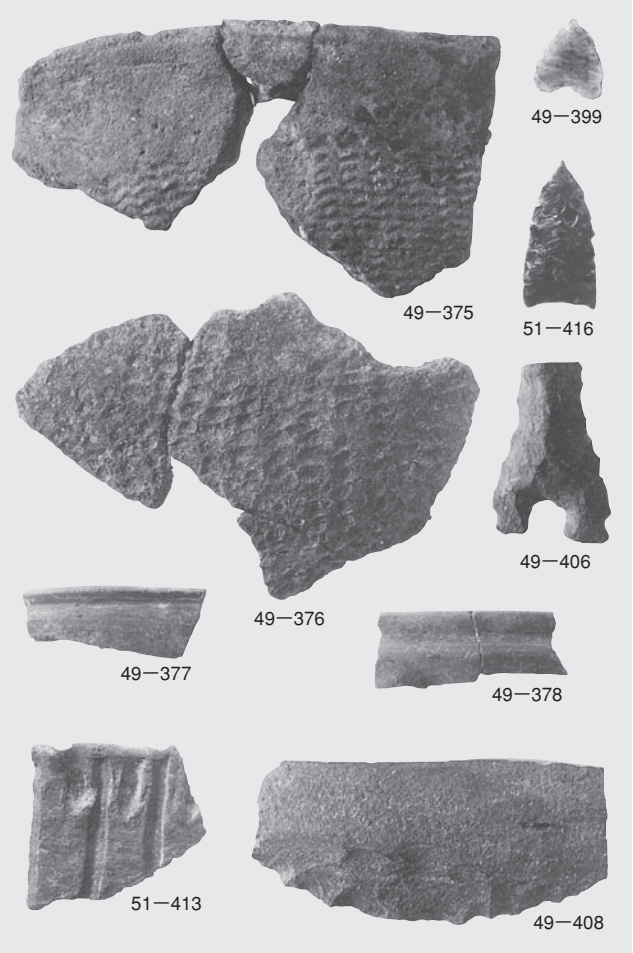


Fig.48　6区中央縄文包含層遺物位置図．1（1/100）

色。377～384は晩期精製浅鉢。内外にケンマを施す。381は口径25㎝、382・384は波状を成す。385～395は晩期粗製深鉢。内外面に条痕もしくはこれをナデ消し、387・388は山形口縁・391は波状口縁を成す。396～398は粗製土器素材の土器片円盤で周縁を打ち欠きで整形。径3.0・4.0・5.0㎝を測り、396・397は半分、398は一部を欠損。399～405は黒耀石製石器。399は長16㎜の石鏃、400・404は小型スクレーパー、401～403はＵfl、406は旧石器～草創期の小礫残核、406～410はサヌカイト製石器。406・407は石鏃で、406は大型で残存長36㎜、408は早期スクレーパーで長68㎜、409は黒灰色晩期Ｕfl、410は灰色を呈す早期残核、411は緑泥片岩製扁平打製石斧。幅52㎜。

Fig.51は検出面他出土。412は山形押型文土器、413は阿高式系土器、414・415は晩期粗製土器、416～419は黒耀石製石器で、417・418は早期、419は旧石器～草創期のＵfl、420は旧石器～草創期のサヌカイト残核。



Ph.42　6区出土縄文遺物

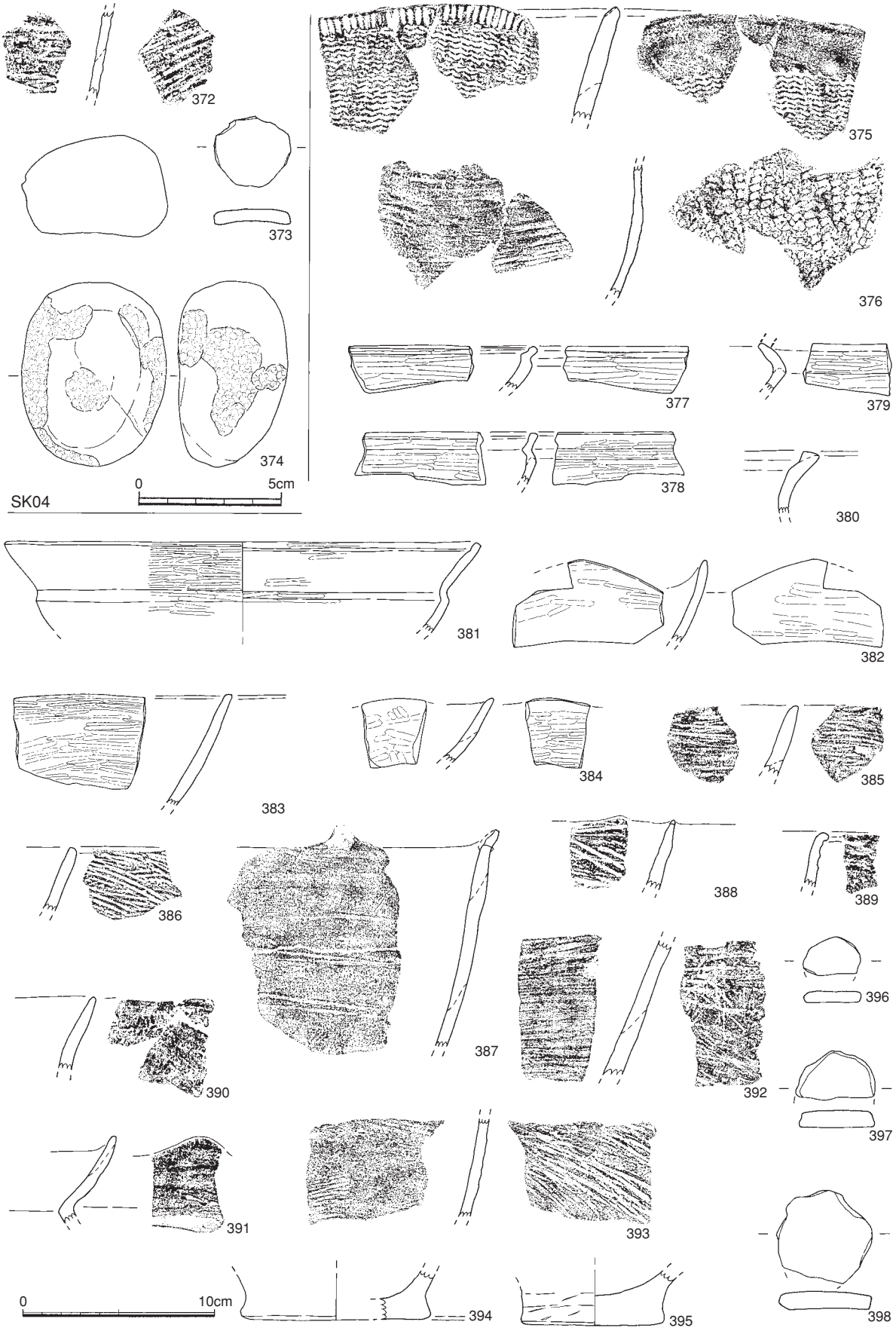


Fig.49　6区中央縄文包含層出土遺物実測図（1/3・1/2）

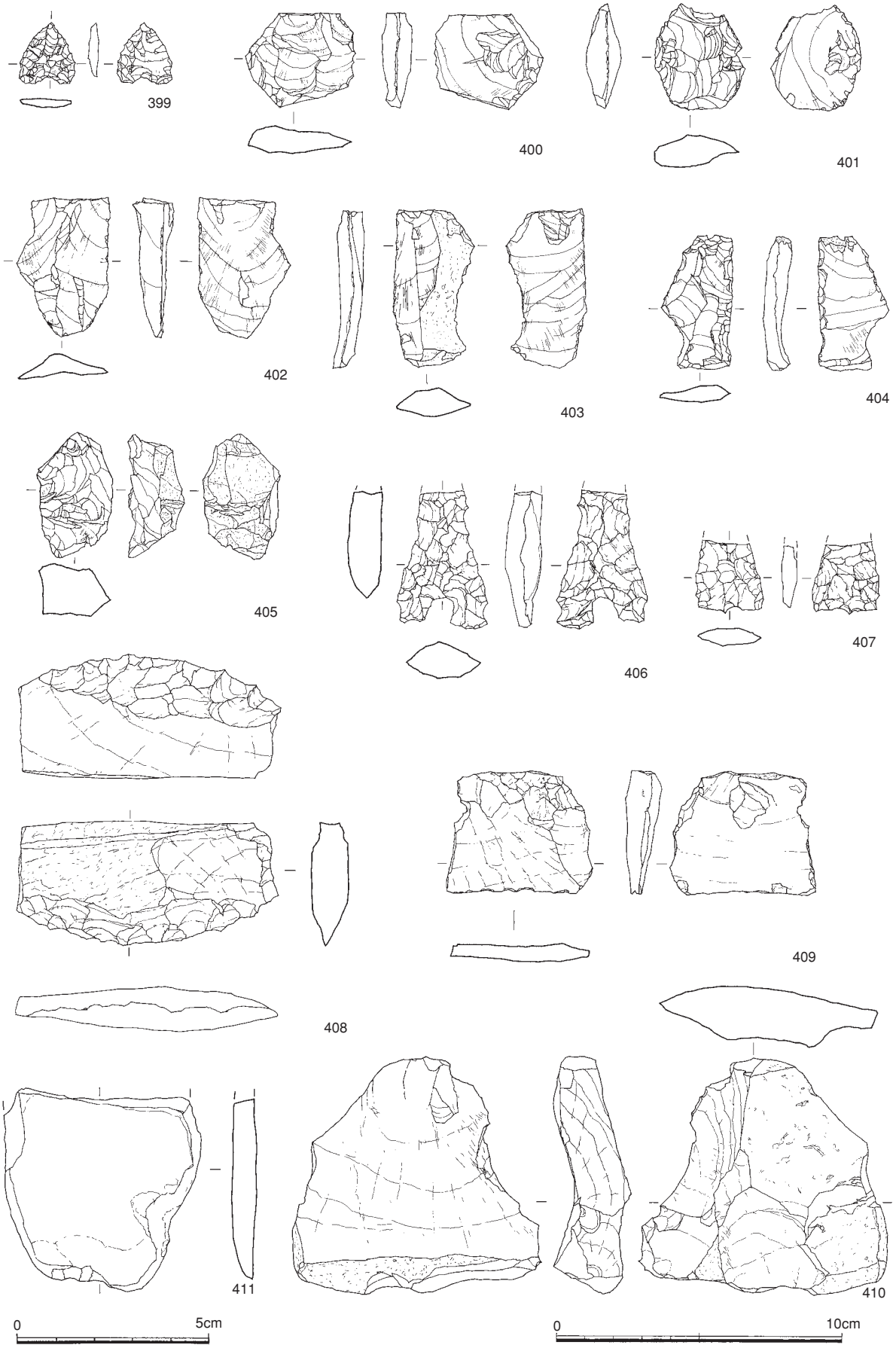


Fig.50　6区中央縄文包含層出土石器実測図（2/3・1/2）

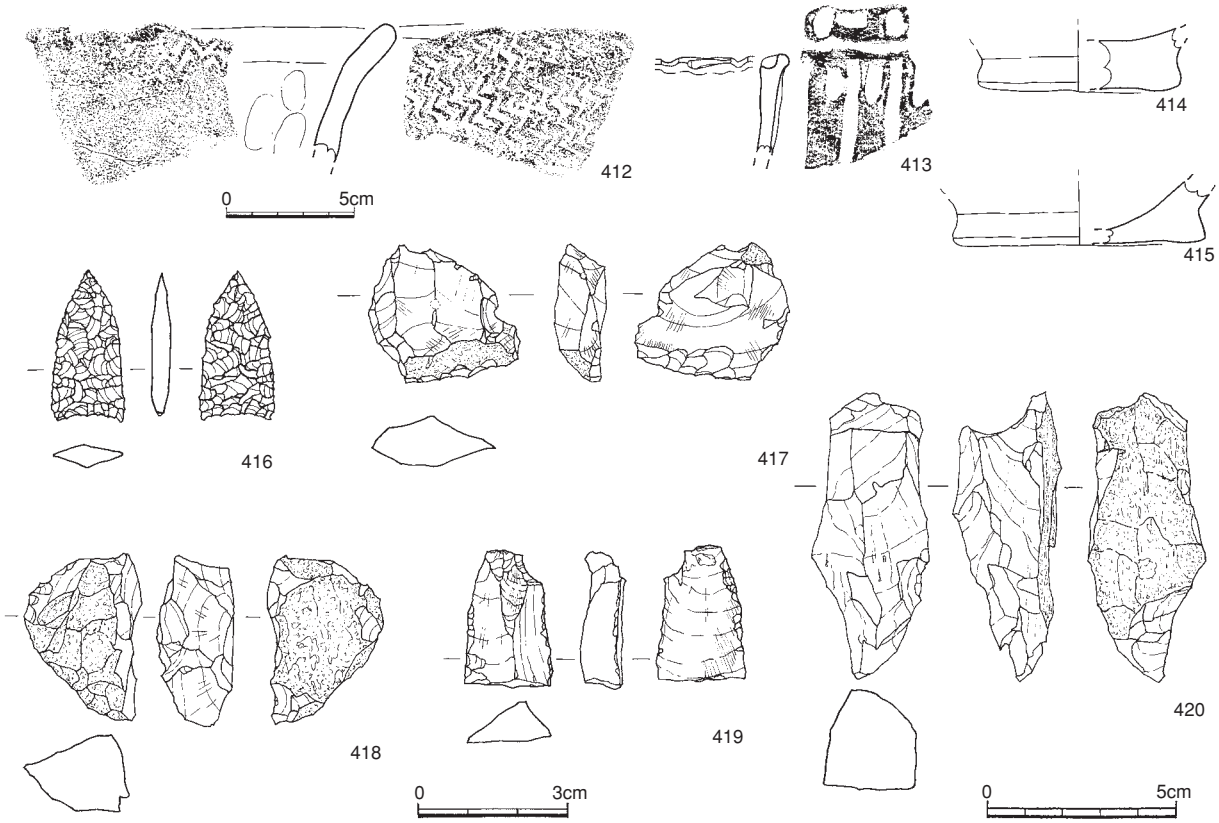


Fig.51　その他6区縄文遺物実測図（1/3・2/3・1/2）

2）古代・中世の調査

遺構は、中世溝2条・焼土壙2基・土壙1基・柱穴と土石流を検出した。

①溝　溝は上段で幅25深15㎝のSD01を、中段で幅15深10㎝のSD02を検出。等高線に並行に掘られ潅漑用と思われる。421はSD02出土の白磁皿。灰白色の胎土に薄い透明釉を掛ける。

②土壙　SK08（Fig.46）下段W3グリッドに位置し、一部は調査区外に延びる。1.55×0.77ｍ深さ5㎝を測る浅い長方形の土壙。内部に炭灰が堆積。遺物の出土はない。焼土壙の可能性もある。

③焼土壙　焼土壙は上段6－1区で2基検出された。SK01（Fig.46 Ph.40）は上段Aj7グリッドに位置し、東部は調査区外に延びる。1.2×0.8ｍ深さ10㎝を測る。上端に焼土が若干残る。遺物の出土は無い。SK03（Fig.46 Ph.41）は01の直交方向のAj7グリッドに位置し1.15×0.7ｍ深さ29㎝を測るB類の土壙。床から20㎝程上位に幅5㎝程部分的に焼土壁が残る。遺物の出土は無い。

④土石流　調査区西側を灰色粗砂礫が深く削る。白磁碗・龍泉窯系Ⅰ類碗・土師器等が出土。422・423は白磁碗で422はⅡ類。口径18㎝。釉は黄味を帯びる。423はⅣ類。12世紀中～13世紀初。

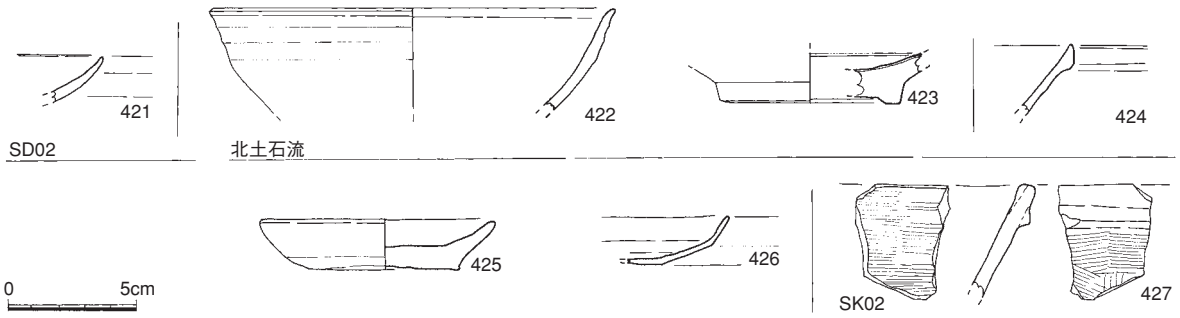


Fig.52　6区出土中世遺物実測図（1/3）

8．7区の調査

調査第7区は、中央の市道より南西100m程に位置し、田面切り下げ工事部分にあたり（Fig.2）、調査面積346㎡。検出面は表土下の黄褐色・黒灰色シルト・段丘礫層上面で、標高は83mである。縄文時代の倒木痕9基・柱穴、中世焼土壙1基・柱穴を検出した（Fig.53 Ph.43）。

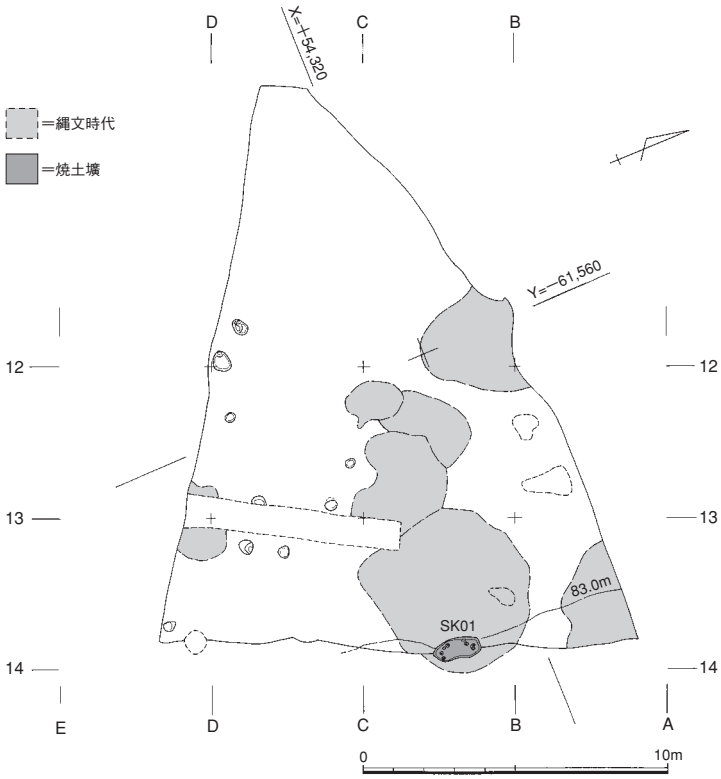


Fig.53　7区遺構全体図（1/200）

Ph.43　7区全景（南から）

Ph.44　7区 SK01（東から）

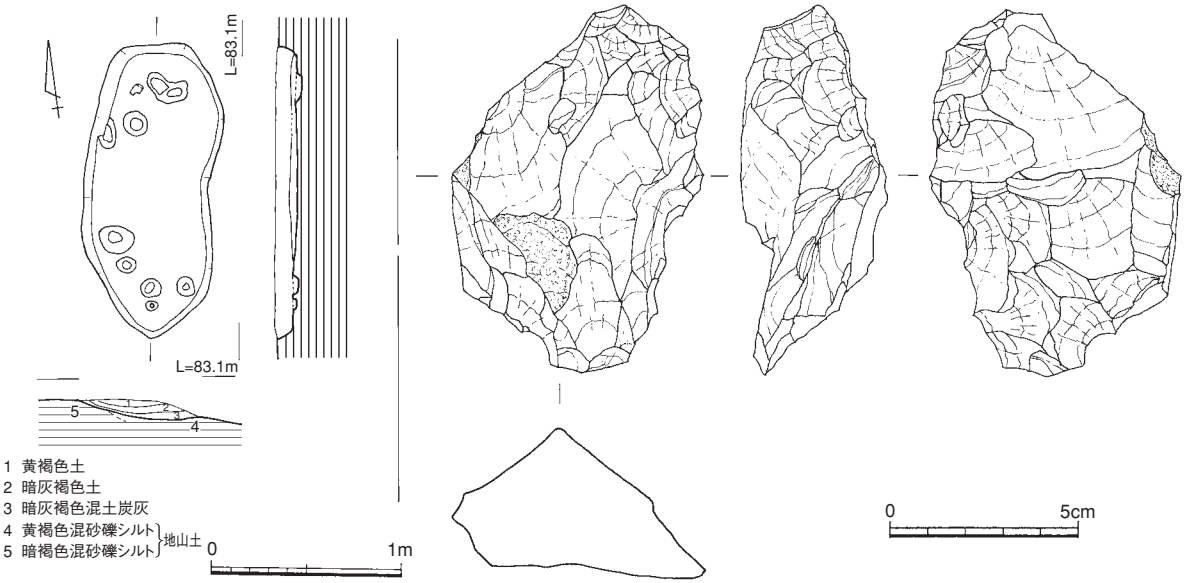


Fig.54　7区土壙・出土遺物実測図（1/40・1/2）

1）縄文時代の調査

遺構は、倒木痕が９基と多く、他は柱穴のみで土壙等の検出はない。削平が深く、包含層は残っていない。柱穴Ｅ13ＳＰ1から晩期粗製土器片が出土している。

2）古代・中世の調査

遺構は、東の丘陵落ち際で焼土壙を１基・柱穴を検出したのみである。

①焼土壙　**SK01**（Fig.54 Ph.44）C13グリッドに位置し、1.55×0.65ｍ深さ11㎝を測る不整楕円形で、遺存状態は悪い。上端が被熱で若干赤化し、床面に土混じりの炭灰層が５㎝程堆積する（３層）。遺物の出土は無い。方位は地形と直交方向にとる。

3）出土遺物

428はC13グリッド倒木痕内出土。サヌカイト製の石核で9.6×6.6×3.9㎝を測る。３面の大剥離面を主に階段状剥離を施す。風化が進行し灰白色を呈す。旧石器と思われる。

Ⅳ．小結

今回の調査では、東から1区3,491.5㎡・2区145㎡・3区355.5㎡、市道を挟んでさらに7区346㎡・4区390㎡・5区961㎡・6区558㎡（Fig.2）の延べ6,247㎡の調査を実施した。

検出した遺構は、総計で縄文時代の倒木痕110基・集石炉１基・貯蔵穴３基・土壙39基・柱穴・包含層、弥生時代倒木痕１基、古代～中世焼土壙44基・中世溝７条・土器焼成壙１基・土壙20基・掘立柱建物１棟・柱穴多数・倒木痕１基、近世土壙４基・水田開墾時の廃石土壙13基・溝１条・倒木痕１基・柱穴多数である。

遺物は旧石器時代から散見され、剥片・石核等が出土している。峯・馬立山・上広瀬遺跡等周辺遺跡でもナイフ形石器から細石器まで出土しており、該期の良好なフィールドとなっている。

縄文時代は本遺跡の一方の中心となる。１・４・５・６区で黄褐～黄灰色シルトを包含層とし、早期押型文期・晩期黒川式期をメインに、若干の前期～後期資料が混入して出土する。遺構は倒木痕110基・集石炉１基・貯蔵穴３基・土壙39基で、時期が明確なものは早期で土壙５基・倒木痕１基、晩期で土壙13基・貯蔵穴１基・倒木痕４基と、早期の３倍を占める。また、時期判明の倒木痕５基中４基は晩期であり、倒木時期における晩期の占める割合が高い。また、早期資料が集中するG10グリッド包含層中の炭化物のＡＭＳ測定年代はBC510～460、Ｊ10グリッドの黄灰色シルト下の暗灰褐色シルト層中で検出されたのが突帯文土器で（Fig.９・10）、縄文早期包含層にまで晩期以降の攪乱が及んでいることを示しており、炭粒を多く含んだ上広瀬１次調査２区包含層のＡＭＳがBC1400～1250・BC1420～1290と、晩期以降に急速に森林伐開が進んだ事を示している。遺物は撚糸文土器が特徴的で、田村式押型文土器に伴う、Fig.10－35を代表とする口縁内面から口唇への連続斜行沈線と外面縦位の撚糸文と外反する口縁下に列点文を施す土器で、資料を実見した橿原考古学研究所岡田憲一氏より関東田戸上層式・近畿高山寺式との類似を指摘された。回転施文具の施文方法は田村式古式の38と共通し連続斜行沈線は高山寺式に似る39に通じる。列点は刺突ではなくヘラで抉るもので、撚りの少ない撚糸・列点の類似・器壁の厚さ等から、当初早期前葉の松木田遺跡撚糸文土器と草創期の大原D遺跡等刺突文土器との中間形式かと考えたが、各個別の様相としては新しい。また、L9グリッド出土の網目撚糸文土器（Fig.10－44）は同氏より南九州石峰式の「変形撚糸文

土器」との類似を教授、原体の復元・送付までしていただいた。厚くお礼申し上げたい。同土器は鹿児島県新東晃一氏より手向山式期の変形撚糸文土器との指摘も受けている。中期にはFig.49－376他の船元式、晩期黒川式期には東九州・瀬戸内系の281・279等、本市内陸部での広範な交流を示す資料である。

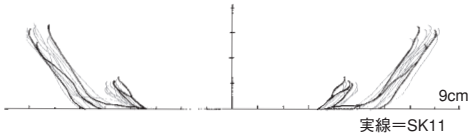
中世では1区先端近くで12世紀後半～13世紀初の幅2.5ｍ・一辺約50ｍと思われる方形区画溝が検出され、内側には2×3間の掘立柱建物をはじめ多数の柱穴と土壙が検出され、該期での内野・石釜地区での中心施設と考えられる。このほか遺構・遺物は14世紀初めまでは散見されるが、13世紀中頃～14世紀には中心集落は東隣の峯遺跡に移行している。1区東・6区西・上広瀬遺跡で13世紀初めまでを示す土石流が確認されており、この水害を契機にした可能性が高い。

この区画溝開削直後に祭事を執り行っており、用いられた土師器は区画内の土器焼成壙SK11で焼成された可能性が高い。グラフは両遺構土師器坏・Ⅲを重ねたもので同一範疇である。また、溝出土土器の暗色が多く外底に黒斑が多い事も黒変した焼成壙底面と符合する。

他に目立つのは焼土壙で、44基を検出しているが詳細は18年度「上広瀬遺跡3」でまとめる。

参考資料：「松木田遺跡群2」福岡市埋蔵文化財調査報告書686集2001年
「大原D遺跡群4」福岡市埋蔵文化財調査報告書741集2003年
「峯遺跡2」福岡市埋蔵文化財調査報告書618集1999年
「広瀬遺跡1」福岡市埋蔵文化財調査報告書865集2005年
「石峰遺跡」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書12集1980年
「弥生時代の実年代」春成秀爾・今村峯雄編2004年

Ph. 網目押型文原体施文



Tab. 焼成壙･溝出土土師器シルエット（1/3）

Tab.1　4区遺構一覧表

遺構番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	種　別	時　期	規模／縦×横×深さ(m)	主な出土遺物	備　考	写真番号	挿図番号
SK01	L5	焼土壙	11C～12C	3.4×1.6×0.23	白磁（碗）土師器（坏・Ⅲ）		9	32
SK02	M3	排石壙	近世	2.05×1.6×0.43			13	34
SK03	M2	排石壙	近世	2.15×2.1×0.22	陶器(甕) 土師器(坏・Ⅲ) ob(fl) 鉄器(釘)		14	34
SK04	K6	焼土壙	12C	1.5×0.95×0.24	土師器(坏･Ⅲ･甕) 瓦器(碗) ob(鏃) ob(fl) 炭		10	32
SK05	K5	倒木痕	13C末～14C初	3.6×2.3×0.55	白磁(Ⅳ碗･口禿Ⅲ) 青磁(碗･Ⅲ) 中陶 土師器(坏･Ⅲ) 土師質(鍋) 須恵質(甕) 東播系(捏鉢) サヌカイト(石核) 鉄器 鉄さい(鍛冶) ob(fl) 炭		11	32
SK06	L5	土壙	14C	1.0×0.7×0.17	土師器（Ⅲ・鍋）　縄文　ob（fl）			32
SK07	K5	土壙	13C	1.35×0.45×0.32	龍泉Ⅱ(碗) 東播系(擂鉢) 土師器(Ⅲ･坏)			32
SK08	N1	焼土壙	古代～中世	0.89×0.66×0.12				
SD01	M2	流路	中世	4.2×1.0×0.6	土師器(坏) 土師質(鍋) サヌカイト(fl) ob(調整fl・fl)			
SD02	M2	流路	12C中～後	2.5×1.2×0.5	白磁(小碗) 同安(Ⅲ) 土師器（坏･Ⅲ）			
SD03	K6	流路	13C後～14C初	4.6×1.9×0.5	白磁(Ⅲ) 瓦質(捏鉢) 土師器(坏･Ⅲ) 土師質(鍋) 中陶（瓶）砥石　ob（鏃）			

Tab.2　5区遺構一覧表

遺構番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	種　別	時　期	規模／縦×横×深さ(m)	主な出土遺物	備　　考	写真番号	挿図番号
SK01	T11	焼土壙	古代～中世	1.7×1.0×0.46	縄文（粗製・阿高式）サヌカイト（fl）炭		31	44
SK02	P13	土壙	縄文晩期黒川	1.1×0.9×0.41	土師器(擂鉢）縄文(粗製深鉢･精製浅鉢)		21	35
SK03	J14	焼土壙	13C後～14C初	1.6×0.9×0.24	土師器(坏･Ⅲ）縄文　白磁(口禿Ⅲ）炭		29	44
SK04	K14	焼土壙	古代～中世	0.75+α×1.3×0.41	炭		30	44
SK05	U9	焼土壙	古代～中世	1.45×0.8×0.44	縄文(粗製･精製浅鉢）ob(fl）サヌカイト(fl･石匙)		33	44
SK06	J13	土壙	縄文晩期夜臼	1.55+α×1.35×0.17	縄文（壺形）		18	35
SK07	T11	土壙	縄文晩期	1.05×0.75×0.25	縄文（粗製・精製）		19	35
SK08	U11	土壙	縄文晩期	1.05×0.8×0.20	縄文（粗製・精製）ob（fl）		20	35
SK09	U11	円形焼土壙	古代～中世	1.65×1.6×0.20	縄文（粗製・精製）サヌカイト(fl・石核）炭		32	44
SK10	O13	土壙	縄文	2.15×1.0×0.27	ob（鏃・ufl）サヌカイト（fl）		17	35
SK11	U8	焼土壙	古代～中世	1.7×1.05×0.68	縄文(粗製）ob(fl･ufl）サヌカイト(fl）炭		34	44
SK12	U8	焼土壙	古代～中世	1.9×1.0×0.58	縄文(粗製･精製）ob(fl･ufl･核）サヌカイト(fl)		35	44
SK13	L14	土壙	縄文	1.7×0.65+α×0.25				
SK14	L14	土壙	中世	1.05+α×1.3×0.07	縄文（粗製・粗製深鉢）			
SK15	R12	土壙	中世	1.75×0.9×0.30	縄文（粗製）			
SK16	S12	土壙	中世	1.95×0.55×0.27	土師器　縄文			
SK17	T12	土壙	12C	1.6×0.6×0.19	土師器　瓦器（碗）縄文（粗製）ob(fl・ufl)			
SK18	V14	土壙	近代	1.0+α×0.5+α×0.16	磁器（碍子）			
SK19	U13	土壙	中世	1.05×0.55×0.10	縄文（粗製）			
SK20	V11	焼土壙	古代～中世	2.0×0.9+α×0.39	土師器（鍋）縄文（粗製）ob（fl） サヌカイト（ufl・fl）			
SK21	U8	土壙	中世	1.55×0.75×0.16	縄文（粗製）			
SK22	U8	土壙	中世	1.15×0.75×0.17	ob（fl）			
SD01	O12	流路	13・14C		土師器（鍋）縄文（粗製）サヌカイト(fl)			

Tab.3　6区遺構一覧表

遺構番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	種　別	時　期	規模／縦×横×深さ(m)	主な出土遺物	備　　考	写真番号	挿図番号
SK01	AJ7	焼土壙？	中世	1.2＋α×0.8×0.1			40	46
SK02	Al8	排石壙	近世	1.4×1.1×0.1	土師器（坏･Ⅲ･鍋）縄文（粗製）国陶 ob（fl・スクレーパー）			
SK03	AJ7	焼土壙	中世	1.15×0.7×0.29	炭		41	46
SK04	Ag6	土壙	縄文晩期	1.25×0.8×0.53	縄文（条痕文・丸底底部）土器片円盤 石器(叩石）ob(ufl）サヌカイト(fl）礫(焼石)		39	46
SK05	Al8	土壙	近世	0.9×0.65×0.33	土師器(坏･Ⅲ･鍋）青磁(龍泉Ⅰ碗）サヌカイト(fl)			
SK06	Al8	倒木痕	近世	1.7＋α×1.45×0.14	陶器（甕）白磁　土師器（坏・Ⅲ・鍋） ob（ufl）ハリ質安山岩（調整fl）			
SK07	Ab3	石柱	近世～近代	0.7＋α×2.2×0.38				
SK08	W3	土壙	中世	1.55＋α×0.77×0.05		炭粒廃棄		46
SD01	AJ7	溝	中世	3.3＋α×0.25×0.15	土師器			
SD02	Ab4	溝	11・12C	3.0×0.15×0.1	白磁（Ⅲ）縄文（阿高式）			
土石流		土石流	12C中～13C初		白磁（Ⅱ・Ⅳ碗）青磁（龍泉Ⅰ碗） 土師器（坏・Ⅲ）			

Tab.4　7区遺構一覧表

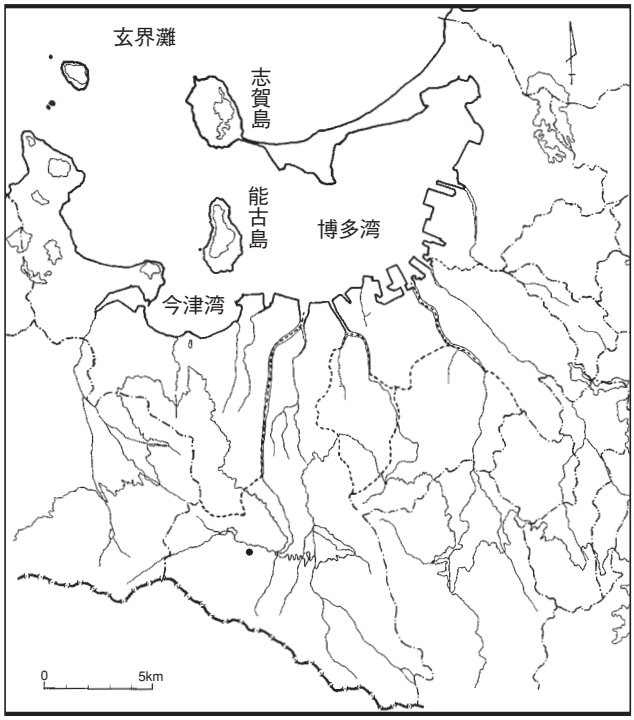
遺構番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	種　別	時　期	規模／縦×横×深さ(m)	主な出土遺物	備　　考	写真番号	挿図番号
SK01	C13	焼土壙	古代～中世	1.55×0.65×0.11			44	54

福 岡 市

KAMI HIROSE

上広瀬遺跡 1

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第901集



調査番号　０４１８
調査略号　ＫＨＩ-１

２００６

福 岡 市 教 育 委 員 会

1．1次調査区全景（北西から）

2．14区遠景（南西から）

3．3区焼土壙SK14（西から）

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

本遺跡の調査は、平成15年（2003）年度から開始された「石釜地区基盤整備促進事業」（受付番号13－1-557）の４箇年事業の２年次（平成16年度）施工事業予定地を対称に、事業計画について遺跡遺存の状況を把握するための試掘調査など、必要な事項の事前協議を行ったことを契機とする。埋蔵文化財課では施工予定地45,500㎡の大半に上広瀬遺跡が含まれる事を確認、刈り取りの終了した平成15年11月27日から12月10日まで施工予定地全域に計55本の試掘調査を実施した（調査開始後4箇所追加試掘を実施）。結果事業地東半部の丘陵尾根部分を中心に焼土壙・柱穴をはじめとする中世の遺構を確認した。

この結果を受け保存する方針で調整を進めたが、遺跡の包蔵地は全面切り下げ予定地で、傾斜地であるため盛土による設計変更も困難であることを確認、結果事業予定地内の遺跡包蔵地全てに発掘調査を実施することとなった。事業地は棚田となっており、調査区は現田面ごとを調査区として１～14小区に分け、東西約120ｍ・南北約250ｍの範囲に点在する（Fig.２）。

発掘調査は西側谷部の１・２区から平成16年４月１日に着手し、尾根部分を南から順次調査を実施、同年11月12日に全ての行程を終了した。調査面積は試掘調査も含め10,800㎡である。

調 査 番 号	0418	遺 跡 略 号	KHI-1
調査地地籍	早良区大字西字広瀬地内	分布地図番号	早良17（内野）0801
開 発 面 積	45,500㎡	調査実施面積	10,800㎡
調 査 期 間	040401～041112	事前審査番号	13-1-557

2．調査の組織

【調査委託】農林水産局農林部農業土木課（当時）
【調査主体】福岡市教育委員会　教育長　植木とみ子
【調査総括】文化財部長　山崎純男　　文化課長　山口譲治　　調査第1係長　田中壽夫（当時）
【調査庶務】文化財整備課　後藤泰子
【発掘調査】加藤良彦
【発掘作業】菊地栄子　鶴田喜美恵　中園登美子　山田ヤス子　岩見敏子　鶴田佑子　岩見征子
伊東絹子　脇山千代美　中園輝夫　岩見美津代　菅野武　松尾和子 尾崎泰
川嶋京子　貴田潔　永嶌重俊　海津宏子　有江笑子　平田政子　宮原邦江
網田美代野　和田裕見子　森山早苗　鍋山千鶴子　小柳和子　倉光京子　倉光アヤ子
井上紀世子　一宮義幸　大塩晧　高橋茂子
【整理作業】木村厚子　国武真理子　南里三佳　竹田幸子　平川泰世

Fig.1　調査区位置図（1/8,000）

Fig.2　調査区地形測量図（1/2,000）

Ⅱ．調査の記録

1．調査の概要

遺跡は福岡市西部の早良平野を貫流する室見川の上流部、南岸の河岸段丘上に立地する。段丘は北を室見川に南を長尾川に開析され、北東に延びる舌状台地となっており、北東に延びる同一丘陵の段丘下段100m程先には広瀬遺跡の第1次調査区が広がり、長尾川をはさんだ東側の舌状台地上には峯遺跡が広がる（Fig.1）。

本事業の初年度調査として平成15年度実施された広瀬遺跡第１次調査では、6,247㎡の調査面積で、検出した遺構は、縄文時代早期～晩期の包含層・倒木痕110基・集石炉１基・貯蔵穴３基・土壙39基、中世溝７条・焼土壙44基・土器焼成壙１基・土壙20基・掘立柱建物１棟・倒木痕１基、近世溝１条・土壙４基・水田開墾時の廃石土壙11基・倒木痕１基を検出。中心となるのは縄文時代早期・晩期と13世紀前後の中世である。調査１区では12世紀後半～13世紀初の幅2.5ｍ・一辺約50ｍと思われる方形区画溝をもつ居館が検出され、内野・石釜地区での中心施設と考えられる。区画内からは同期の土師器焼成壙１基も検出されている。遺物は包含層を中心に、旧石器時代石器、縄文時代早期田村・手向山式期押型文土器・撚糸文土器・石鏃 ・石匙・中期阿高式土器・瀬戸内船元系土器・晩期黒川式・夜臼式土器・石器を、中世溝を中心に多くの土師器・貿易陶磁器を検出している。平成16年度実施した第３次調査では、第１次調査１区と同時の12世紀後半～13世紀初の、斜面に開墾の支障となった岩石を大量に廃棄して、縄文包含層の大部分を削平し客土として整地を行い遺構面とした開墾跡が検出されている。13～14世紀には畑地に転用された事も判明している。

峯遺跡では平成９年度に調査が実施され、13世紀中頃～14世紀を主とする16棟の掘立柱建物群・小型竪穴・焼土壙・中世墓等が検出され、貿易陶磁等コンテナ30箱分の遺物が出土し、該期の中心

Ph.1　調査前風景（南から）

集落となっている。

本遺跡はこれらの中世遺跡の南西に位置し、本調査区は遺跡の北東部に位置する。西の谷部から東丘陵尾根部の標高109ｍ～123ｍの範囲に分布する（Fig.２）。 遺構は耕作土下の赤橙色粘土上面で検出され、部分的に黄灰色シルトの縄文時代包含層が残る。

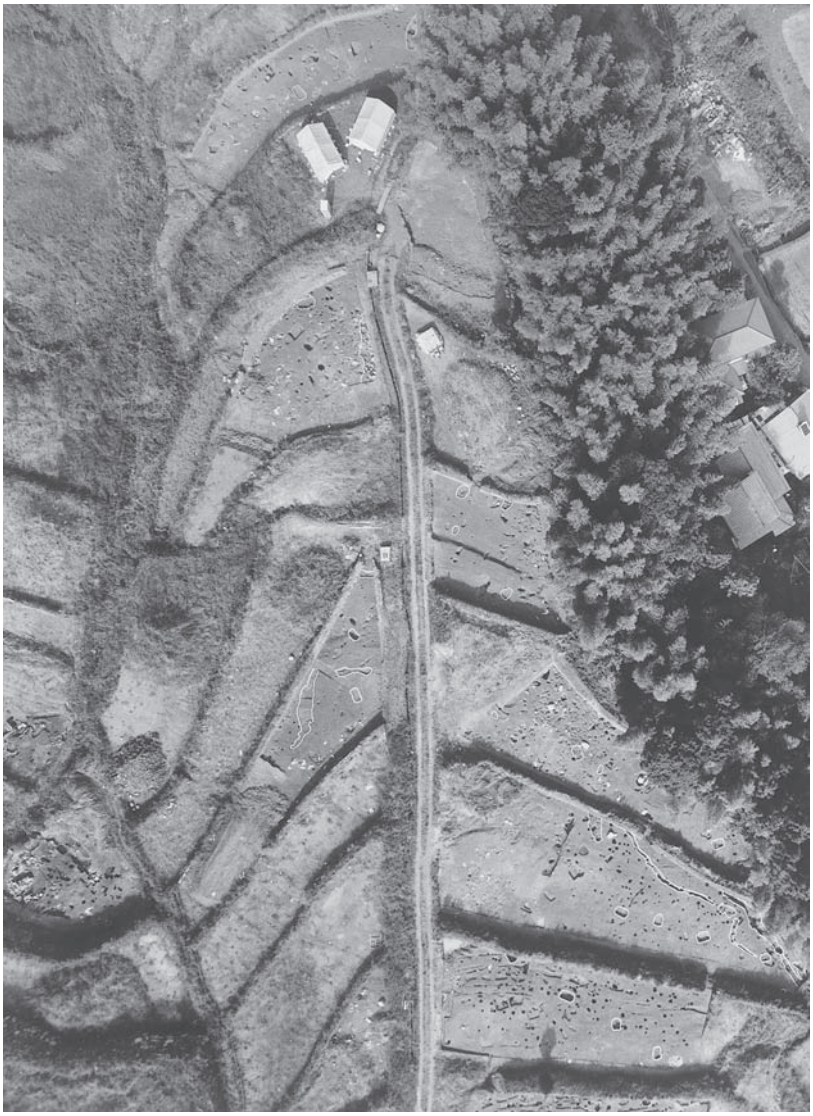
調査区は現田面ごとを調査区として１～14小区に分け、測量のため主な田面の区画に合わせ任意で５m間隔のグリッド線を設定した。これは旧座標系北より42°東偏する。

検出された遺構は、縄文時代の土壙２基・柱穴・倒木痕89基・流路８条、中世溝17条・焼土壙47基・土壙27基・掘立柱建物29棟他柱穴多数・倒木痕５基、近世溝62条・土壙33基・水田開墾時の廃石土壙14基・開田以前の畑畝溝多数・柱穴・倒木痕13基である。

遺物は、縄文時代早期押型文土器・石鏃 ・晩期土器・石器を、中世整地層・溝を中心に12～15世紀代の土師器坏・皿・貿易陶磁器等をコンテナ３箱分と少ない。

縄文時代は晩期を中心とするが明確な生活遺構は検出されない。倒木痕の多くは該期に属すと思われ、広瀬遺跡同様、晩期に開墾された可能性を示している。

中世は掘立柱建物29棟他柱穴多数を検出し、集落を形成しており、このうち調査区先端の14区で、丘陵鞍部の焼土を多量に含む12世紀後半～13世紀初の整地層の上面で、中心となる４面庇の２間×３間の掘立柱建物１棟、下面で一回り大型の２間×３間の掘立柱建物１棟を検出した。居館と考えられる500m程北に位置する広瀬遺跡１次調査１区と同時期である。遺物が集中するのはこの一角だけで、他の地点では建物は検出されるものの、遺物は殆ど伴わない。長期間居住した状況ではなく、短期間で廃絶したものとおもわれる。近世溝の多くは開田以前の畑の畝溝で等高線に並行に長さ６ｍ前後５～６条程がまとまって検出される。



Ph.2　３～10区全景（南から）

参照：「広瀬遺跡1」福岡市埋蔵文化財調査報告書第865集　2005年

「広瀬遺跡２」福岡市埋蔵文化財調査報告書第901集　2006年

「広瀬遺跡３」福岡市埋蔵文化財調査報告書第902集　2006年

「峯遺跡２」福岡市埋蔵文化財調査報告書第618集　1999年

2．1・2区の調査

調査第1・2区は本調査の中心となる東部の主丘陵と西部の小支丘陵間の谷部の調査区で、調査面積は1区で131㎡、下段の2区で173㎡である。検出面は表土下の赤褐～黄褐色粘質土シルト上面で、標高は1区で116m、2区で114.5mである。遺構は1区で縄文時代の倒木痕1基、古代～中世暗渠2条・焼土壙1基・掘立柱建物1棟を、2区で縄文時代晩期の包含層、古代～中世の流路・溝3条・焼土壙2基・柱穴を検出している。

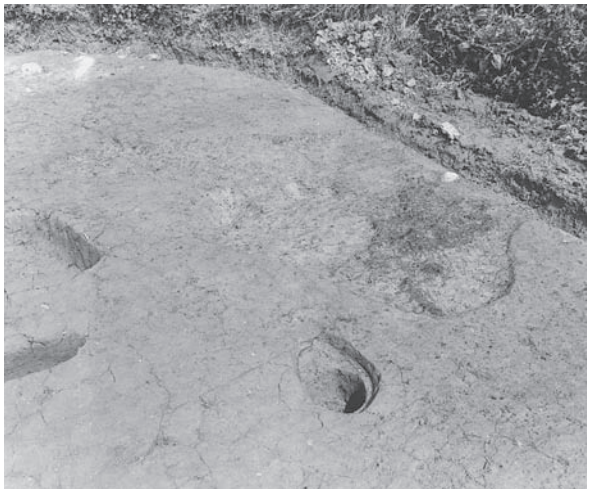
Ph.3　1区全景（東から）

1）1区の調査（Fig.4 Ph.3）

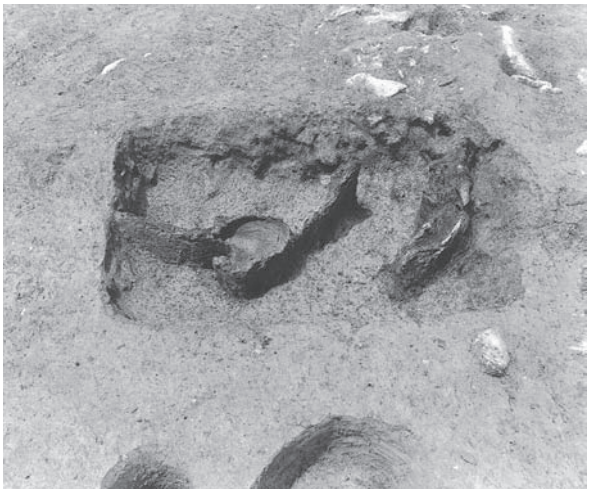
旧田面の平坦部と、中近世包含層が堆積し西に下がる傾斜面からなる。

(1) 縄文時代の調査

①倒木痕　**SX06**は傾斜面際のR41グリッドに位置し、3.3×1.3ｍ深さ24㎝を測る。暗渠SX05に切られる。覆土は炭粒混じりの黄灰色シルトで縄文土器小片が出土。晩期の可能性が高い。



Ph.4　1区 SX02 炭化根（南西から）



Ph.5　1区 SK01（北から）

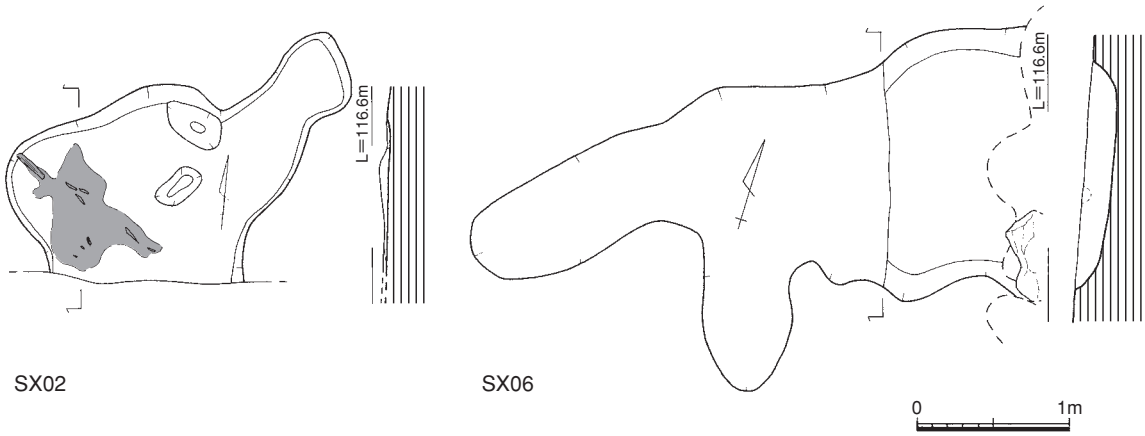


Fig.3　1区 SX02・06実測図（1/50）

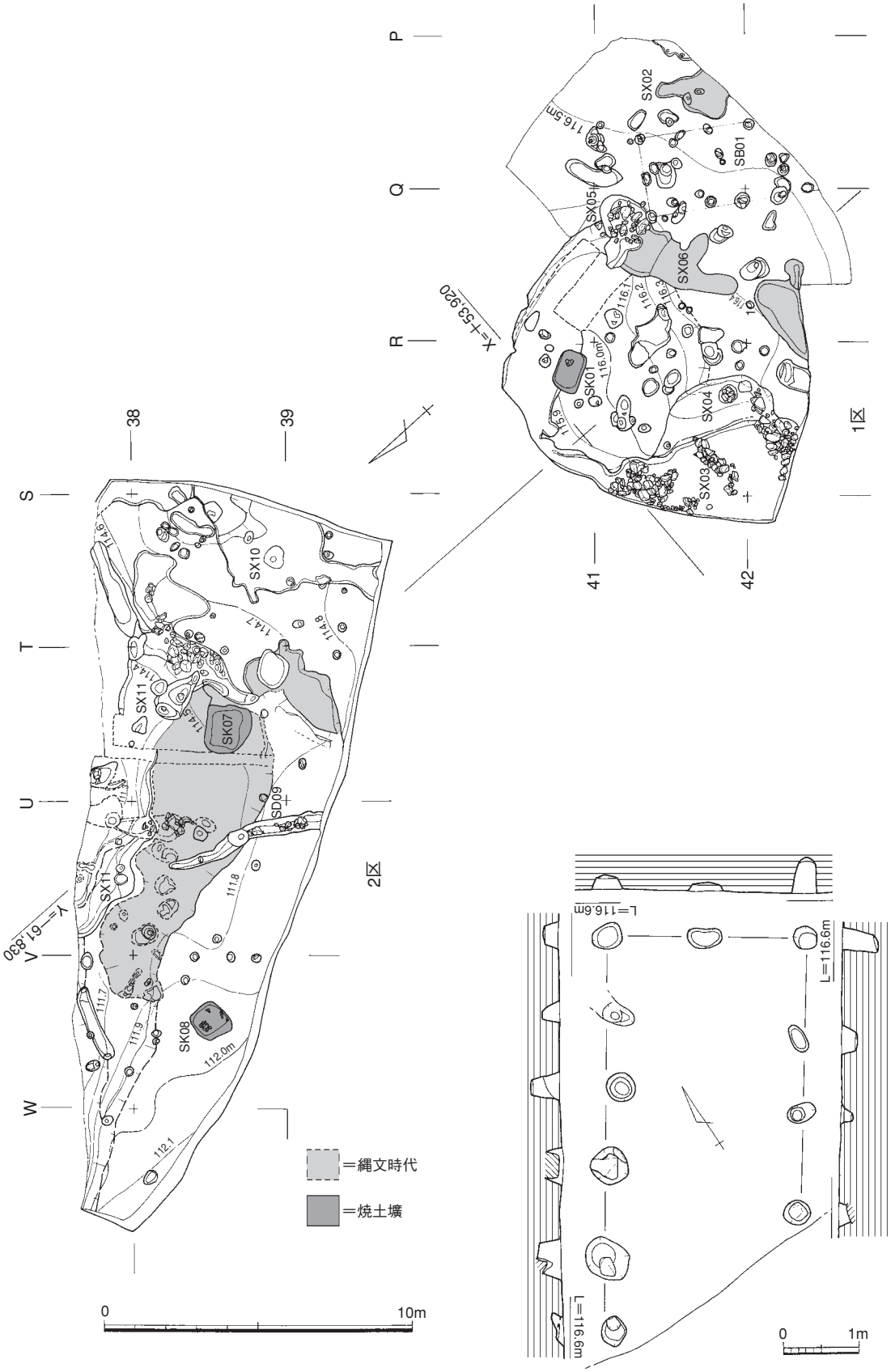


Fig.4　1・2区遺構全体図（1/200）

Fig.5　1区 SB01実測図（1/80）

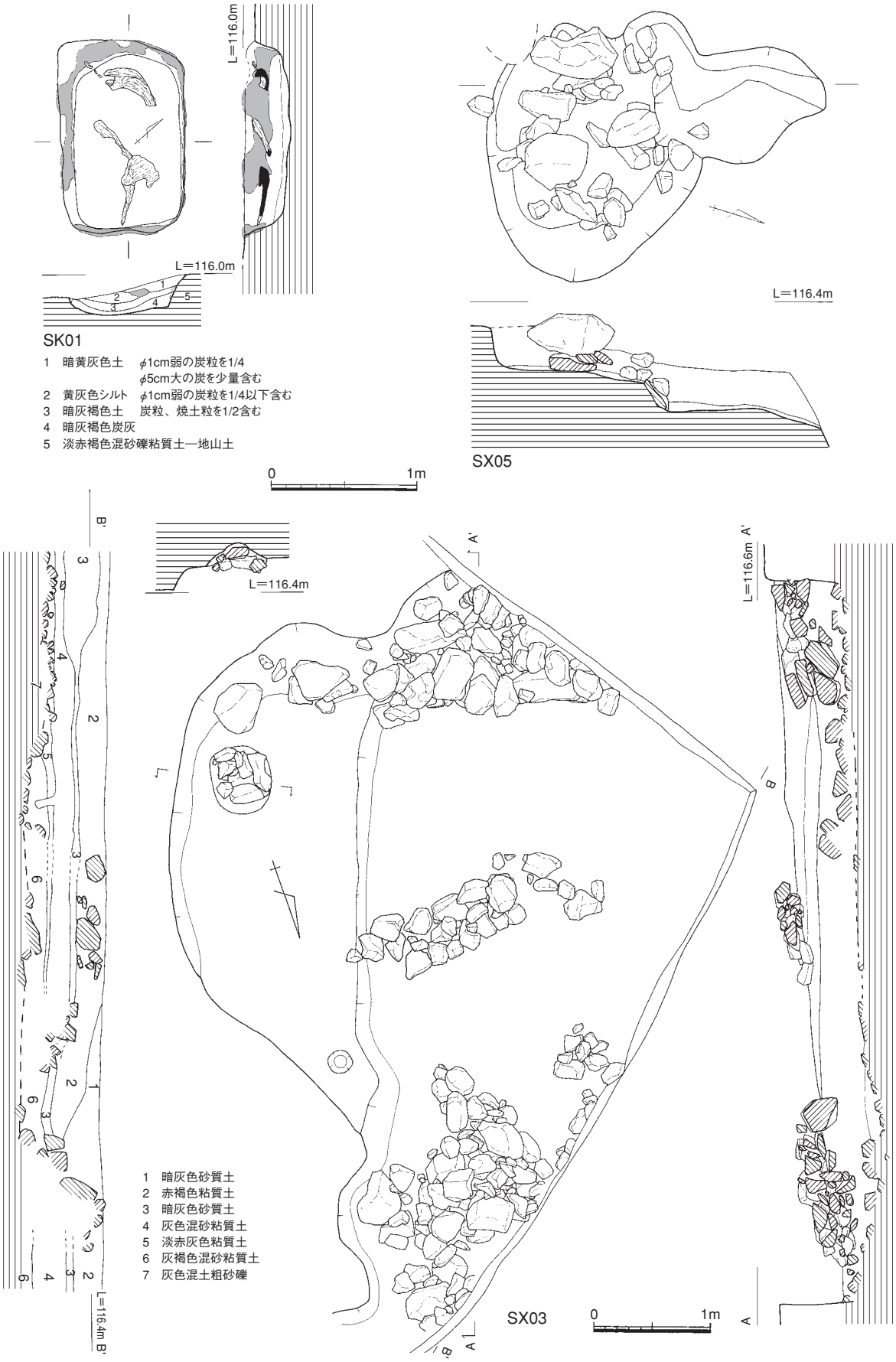


Fig.6 1区 SK01・SX03・04・05 実測図（1/50・1/40）

Ph.6　1区 SX03（北から）

（2）古代～中世の調査

①倒木痕　**SX02**（Fig.2 Ph.4）　調査区北東のQ41グリッドに位置する。現況で1.2×1.2ｍ深さ4㎝を測る。覆土は黄灰色シルトで南に径1m程、樹根状に炭化物が広がるため、縄文期の樹木痕と判断しサンプルを採取AMS測定をした結果、AD1030～1160の年代結果となった（付偏）。

②焼土壙　**SK01**（Fig.6 Ph.5）　調査区西傾斜面のS40グリッドに位置し1.5×0.9ｍ深さ32㎝を測る方形土壙でＢ類。焼土壁は床面上10㎝程から上位に広がり部分的に剥落するが遺存状態は良い。主軸を地形の直交方向にとる。床面に5㎝程炭灰層（4層）が堆積する。西側に炭化材が検出されるが自然埋土の中（1・2層）にある。遺物の出土は無い。

Ph.7　2区全景（東から）

③掘立柱建物　**SB01**（Fig.45）　Q41グリッドに位置する5間＋α×2間5.2＋α×2.6ｍの側柱建物。桁行間隔が1ｍ前後と狭く、当地の特徴となっている。方位をN－33°－Eにとり、地形と直交する。堀方は円形で径25～50㎝を測り、深さ10～45㎝とばらつく。遺物の出土は無い。

④暗渠　**SX05**（Fig.6）　調査区西傾斜面際のR41グリッドに位置し2.3×1.1ｍ深さ29㎝を測

Ph.8　2区トレンチ土層断面（北から）

Ph.9　2区トレンチ炭粒包含層（西から）

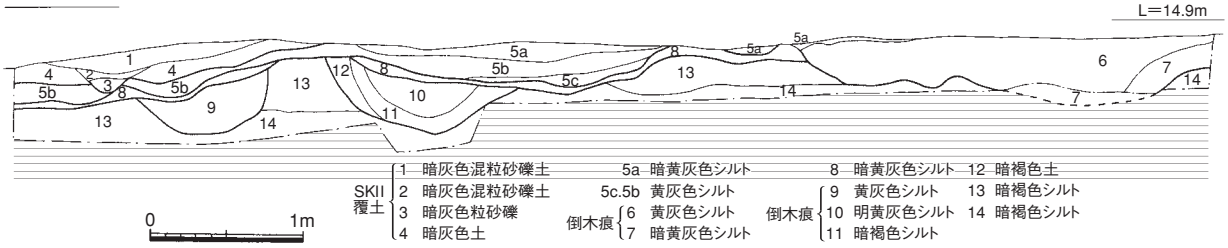


Fig.7　2区トレンチ土層断面図（1/50）

る。主軸を地形の直交方向にとり、大型のSX03と7mの間隔をとって並行し、西に流れる。縄文倒木痕SX06を切る。床面に50～10前後の礫を投げ込み、遺物の出土は無い。

SX03（Fig.6 Ph.6） 西端のS41グリッドに位置し半分は調査区外に広がる。現況で8.0×3.8m深さ62㎝を測る。主軸を地形の直交方向にとり、SX05と並行する。現況の用水路はこの真上に設置される。土石流堆積の灰色粗砂礫層（7層）～灰色混砂粘質土（4層）上に地山土の客土を成し（2層）、前面に礫を積み上げ仮の土留めとし、約2.5m間隔でこの先にさらに客土を行う。これを調査区内で3回行い、この上に現耕作土が乗る。水は土石流堆積間を西に流れている。

⑤出土遺物（Fig.10）1は検出面出土サヌカイト製石鏃。28×17×5.5㎜1.3gを測る。早期。

Ph.10 2区 SK07（西から）

2）2区の調査（Fig.4 Ph.7）

幅3m程の旧田面が1面に整理されている。

(1) 縄文時代の調査

①包含層（Fig.7 Ph.8.9）包含層は中央の東傾斜面側に幅12m厚さ30㎝程、谷地形で厚い堆積であったため残存する。炭粒を少量含む暗黄灰色（5a層）黄灰色（5bc層）明黄灰色（8層）暗褐色（13層）シルトで5bc層から晩期土器が出土、5・8層が広瀬1次の包含層1層13層が同2層に対応する。包含層2層（5bc層）と13層採取の炭粒をAMS分析を行い、BC1400～1250・BC1420～1290の結果を得ている（付編）。

出土遺物（Fig.10）2はU39グリッド包含層2層出土。晩期精製浅鉢の胴部片で、内外面をケズリ後ナデ、外面にケンマを施す。

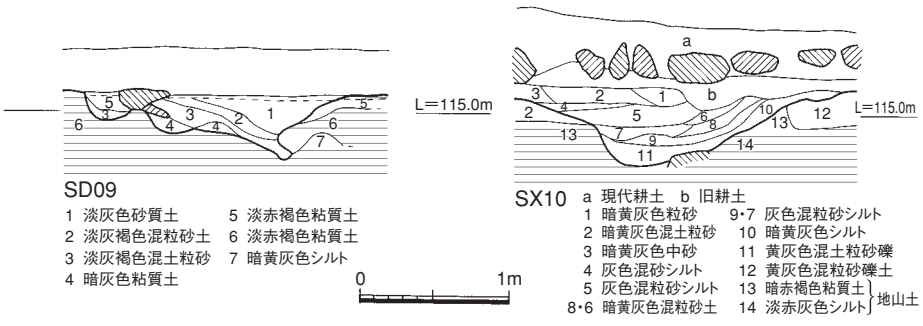


Fig.8 2区 SD09・SX10 土層断面実測図（1/50）

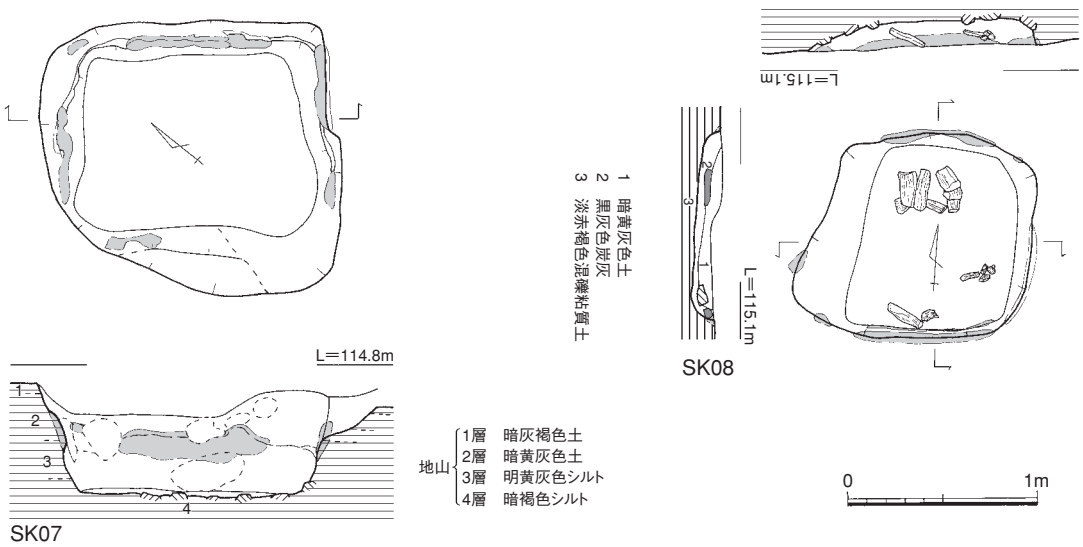


Fig.9 1区 SK07・08 実測図（1/40）

(2) 古代～中世の調査

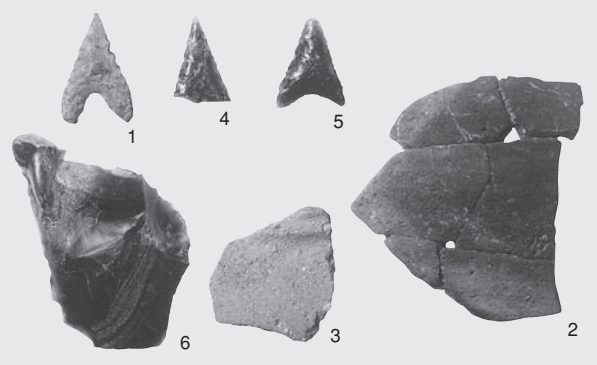
①溝・流路　**SD09**（Fig.8）溝SD09は調査区中央V38グリッドに位置し5.0×1.2ｍ深さ25㎝を測る。地形の直交方向の南西に流れる。灰褐色土～粗砂が堆積する中世覆土で、遺物は無い。

SX10（Fig.8）自然流路SX10は調査区東を、主軸を地形の直交方向にとり西に流れる。9.5×2.5ｍ深さ40㎝を測る。不整形で凹凸が著しい。遺物の出土は無い。直交方向に分岐したSX11が南に流れる。

Ph.11　2区 SK08（西から）

②焼土壙　**SK07**（Fig.9 Ph.10）縄文包含層中のU38グリッドに位置する。1.5×1.4ｍ深さ57㎝を測るB類土壙。軸は地形に平行する。比較的残りは良く壁面中央に焼土が幅20㎝程残る。上位は自然に流失している。床直上には5・6㎝炭粒・灰層が堆積する。遺物は無い。

SK08（Fig.9 Ph.11）W38グリッドに位置する。1.1×1.0ｍ深さ36㎝を測る正方形に近いB類土壙。軸は地形に平行する。削平が深く、焼土は幅5㎝程しか残らない。20㎝程の炭化材が数本、縦・横に並んで5㎝程の炭灰層上に残る。



Ph.12　1・2区出土遺物

③出土遺物（Fig.10 Ph.12）全て混入資料で、3は弥生土器壺頸部小片。低い三角突帯下にナナメハケが残る。後期前半か。4・5は腰岳産黒耀石製石鏃。4は両脚を欠き22×14×5㎜1.0gを測る。5は完形で23×17×5㎜1.3gを測る。6は黒耀石製の使用剥片。打面からの階段状剥離でバルブを除去する。主剥離側右辺を使用する。風化が進み流理が見える。早期。

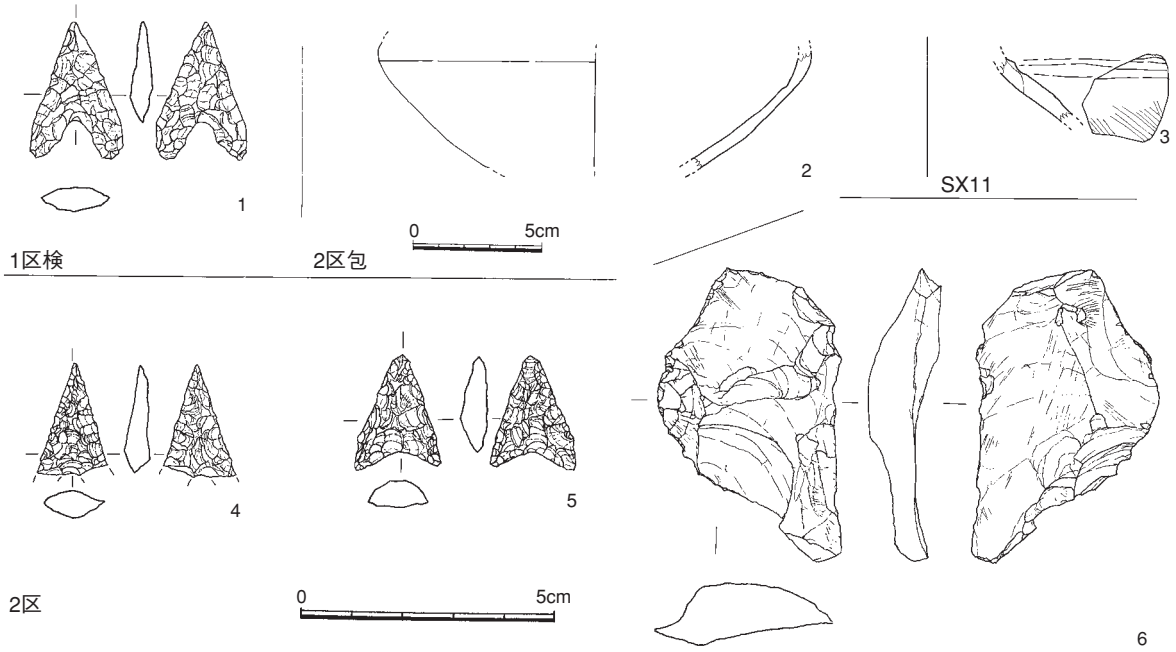


Fig.10　1・2区出土遺物実測図．1（1/3・2/3）

3．3・4区の調査

調査第3～14区は本調査の中心となる東部の主丘陵上に分布しており、一連の遺跡で地形的な分断は無く、便宜上、南から隣接した2区分を報告する。

第3・4区は丘陵上南端の調査区で、調査面積は3区で288㎡、4区で243.5㎡である。検出面は表土下の赤褐～黄褐色粘質土シルト上面で、標高は3区で123.5m、4区で122.5mで南から北に傾斜する。遺構は3区で縄文時代の倒木痕2基・流路1条・包含層、古代～中世の掘立柱建物2棟・柱穴・焼土壙3基・土壙3基、近世で廃石土壙6基・畝溝6条以上・柱穴を検出している。4区で縄文時代の土壙1基・倒木痕1基・包含層、古代～中世の掘立柱建物4棟・柱穴・焼土壙2基・倒木痕1基、近世の廃石土壙1基・畝溝18条以上・柱穴を検出している。

Fig.11　3・4区遺構全体図（1/200）

1）3区の調査（Fig.11 Ph.13）

旧田面の平坦部と、中近世包含層が堆積し北に下がる傾斜面からなる。

Ph.13　3～8区全景（南から）

(1) 縄文時代の調査　SX20・45の倒木痕2基とSX18の自然流路1条・傾斜面に一部暗黄褐色の包含層を検出した。遺物は極めて少なく、黄灰～暗黄褐色の覆土で判別した。

①出土遺物（Fig.16）7～16は黒耀石製石器。7は倒木痕SX20出土の使用剥片。バルブを打ち欠き主剥離面左辺を使用する。裏面に自然面を残す。長32㎜。8は包含層出土押型文土器。外面に摩滅著しい縦位の楕円押型文を口縁内面を斜めに削り縦位に原体条痕を施す。9は包含層出土使用剥片。縦長剥片の両側にノッチを入れバルブを折断したものの利用。風化がやや進む。長25㎜。10はB44SP01出土使用剥片。主剥離面左辺に刃潰しを施し下辺を使用する。右辺の一部を欠損。長23㎜。風化がやや進む。11はB44SP2出土残核。側辺に横剥ぎの最終剥離を行う。風化が進み黒色不透明。長18㎜。旧石器～草創期。12～15は検出面出土。12は鍬形鏃で片脚を折損。長29㎜。13はスクレーパー。バルブと下半を折断し、左辺と下辺に刃部を形成する。風化が進む。長19㎜。

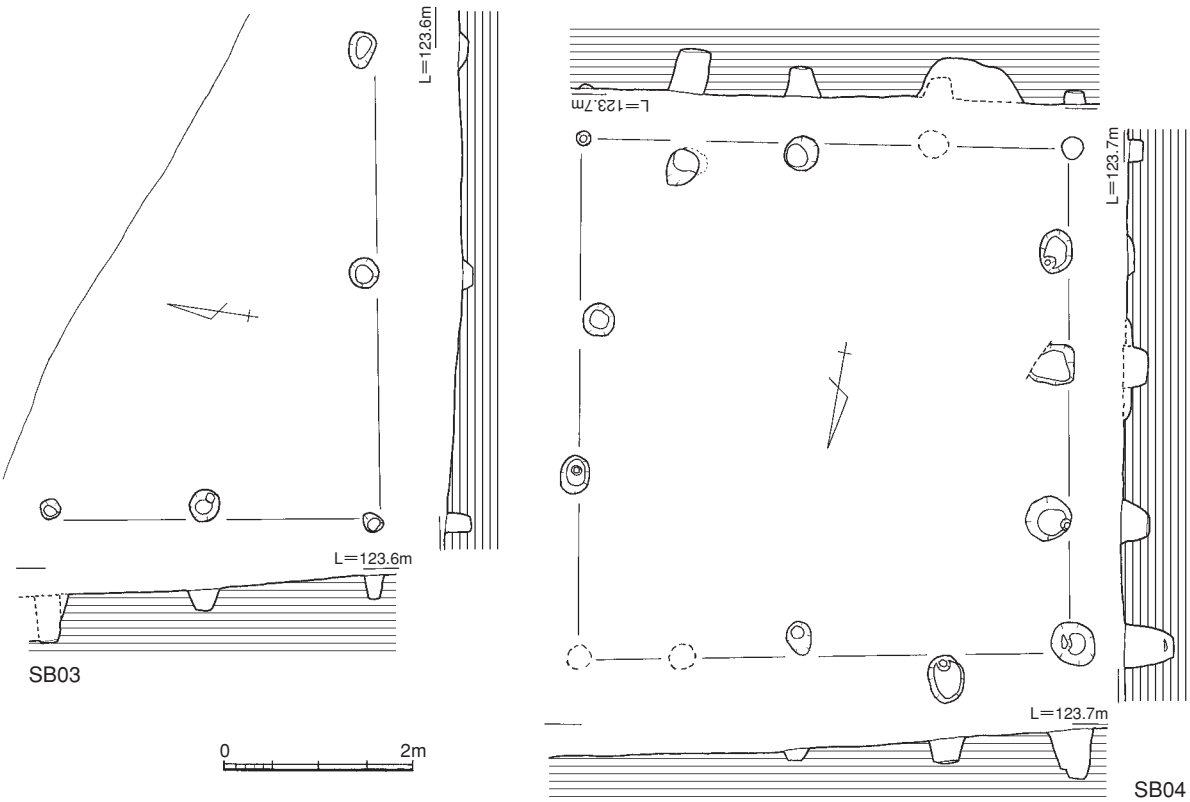


Fig.12　3区 SB03・04 実測図（1/80）

Ph.14　3区 SK12（南から）

旧石器～草創期。14はスクレーパー。半折した打面調整剥片の打面に両面剥離で刃部を形成。剥離が新しく晩期の再利用。長24㎜。15は斜軸剥片の主剥離面左辺に刃潰しを施し右辺に使用痕を有するもので、斜軸尖頭器の可能性もある。裏面に自然面が残る。33×23×９㎜2.6gを測る。16は混入の使用剥片。半折した縦長剥片の両辺を使用する。長34㎜。やや風化が進行する。

Ph.15　3区 SK14（北から）

Ph.16　3区 SK17（東から）

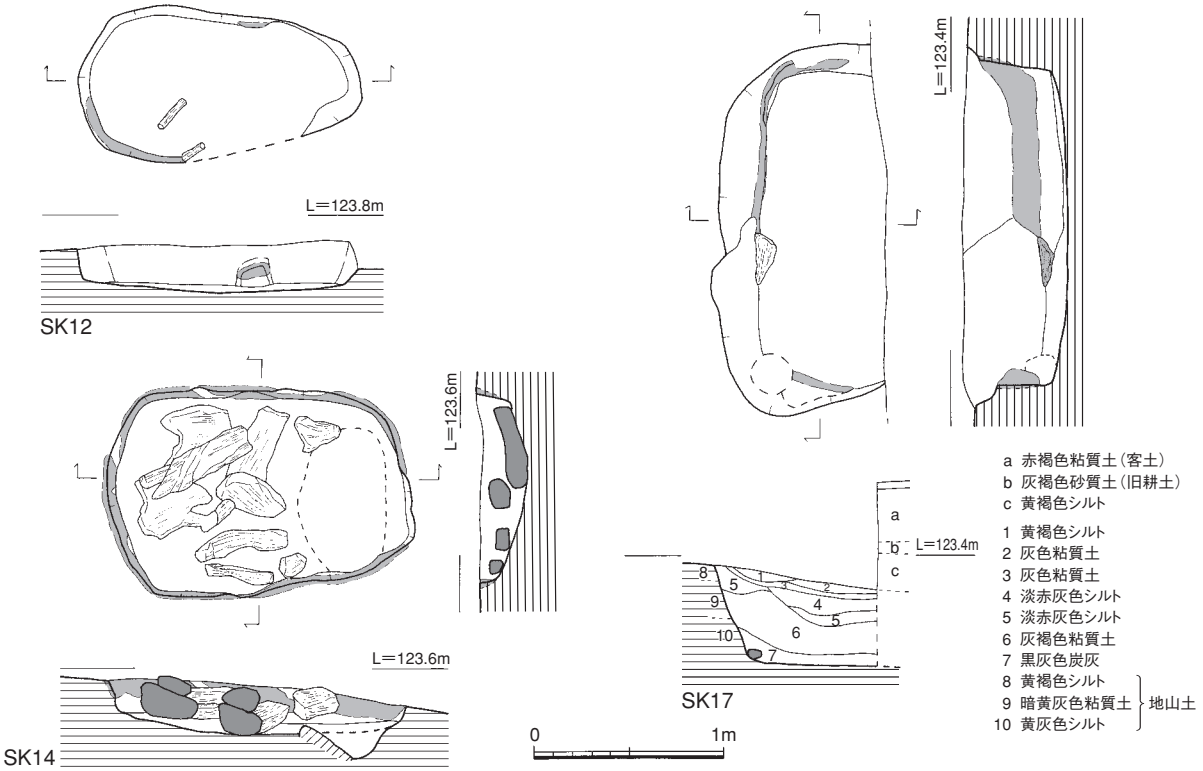


Fig.13　3区 SK12・14・17 実測図（1/40）

(2) 古代～中世の調査

①掘立柱建物（Fig.12） 磁北に近い方位を取る２棟を検出している。

SB03 Ｅ44グリッドに位置する２＋α×２＋α間6.8＋α×4.1＋αｍの側柱建物。方位をＮ－9°－Ｗにとり、磁北に近い。梁間2.3～2.6m・桁行は1.6～1.8mと狭い。堀方は円形で径20～30㎝を測る。

Ph.17 3区 SK16（北から）

SB04 03から南５m程のＣ45グリッドに位置する４×４間5.2×5.1mの側柱建物。方位をＮ－3°－Ｗにとり、03に近い。同様に梁間・桁行は1.1～1.6mと狭い。堀方は径20～45㎝を測る。斜面下側は削平で欠失すると思われる。

②焼土壙 南寄りに３基検出している。

SK12（Fig.13 Ph.14） 尾根線寄りの斜面中央F46グリッドに位置する。1.5×0.83ｍ深さ25㎝を測るA′類土壙。軸は地形に平行する。壁面の部分的に幅10㎝弱焼土が残る。床直上には５・６㎝炭灰層が堆積し、上面に20㎝弱の炭化

Ph.18 4区 SK27（南から）

Ph.19 4区 SK26（北から）

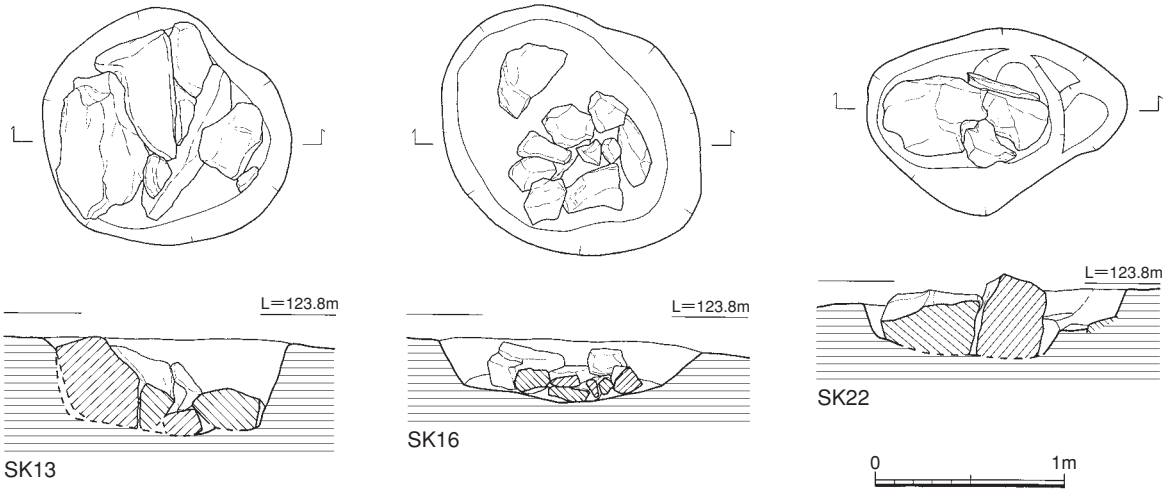


Fig.14 3区 SK13・16・22 実測図（1/40）

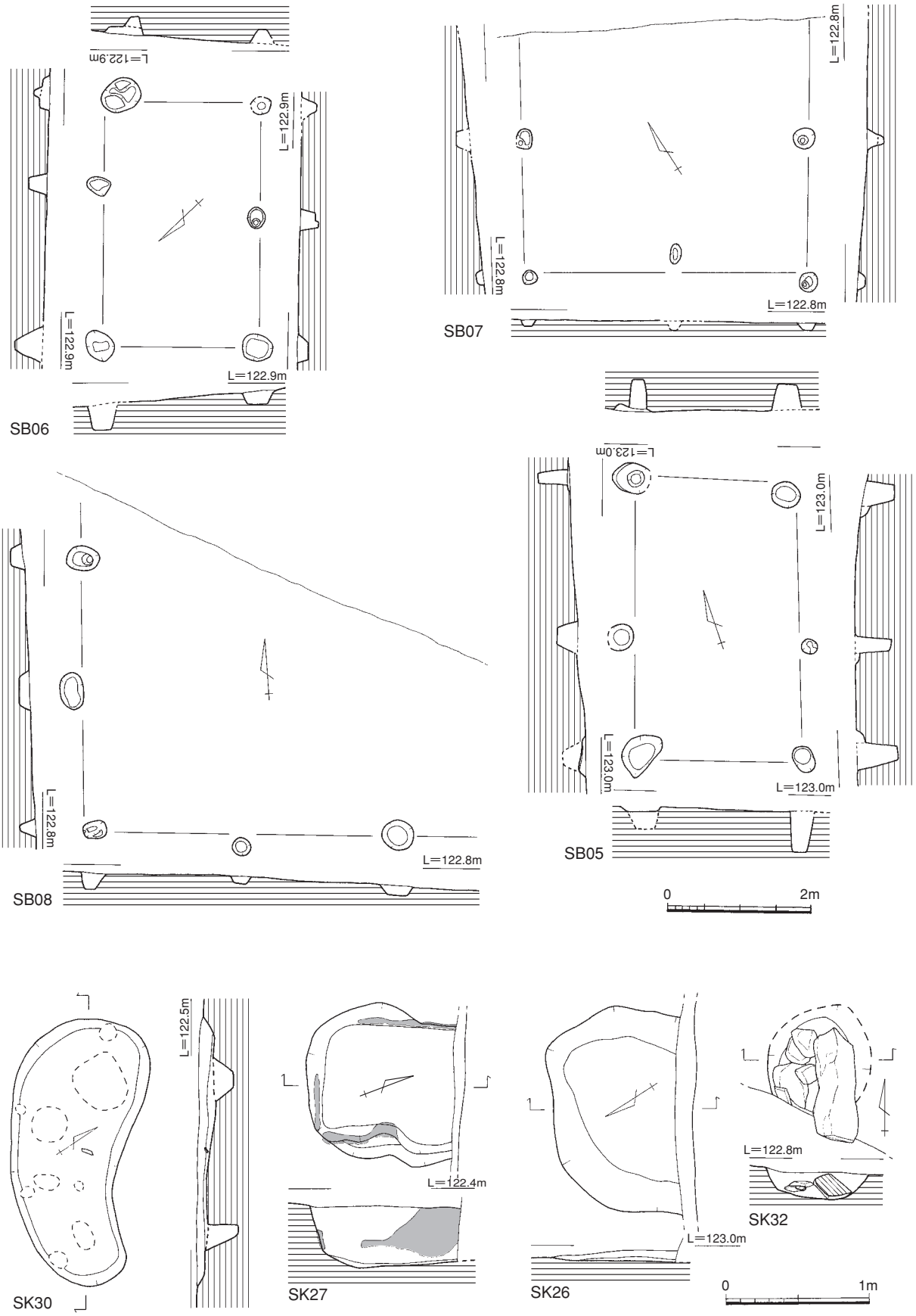


Fig.15　4区遺構実測図（1/80・1/40）

材が２点残る。遺物の出土は無い。

SK14（Fig.13 Ph.15）斜面中央D44グリッドに位置する。1.6×1.1ｍ深さ27㎝を測るＢ類土壙。軸は地形に直交する。床面から10㎝程上位の壁面に焼土がめぐる。覆土は全て炭灰層で南側に径10～15長35～60㎝の炭化材が２段に主に縦に並んで検出された。下段中央の材を分析し、ＡＭＳではAD670～820・樹種はシイノキ属と同定された（付編）。

SK17（Fig.13 Ph.16）調査区南西のＦ44グリッドに位置する。1.9×1.0ｍ深さ56㎝を測るA′類土壙。軸は地形に平行する。壁面に中央に幅20㎝程焼土が残る。床直上には５・６㎝炭灰層が堆積し、上端まで自然に埋没する。SB03に切られる。縄文遺物が混入する。

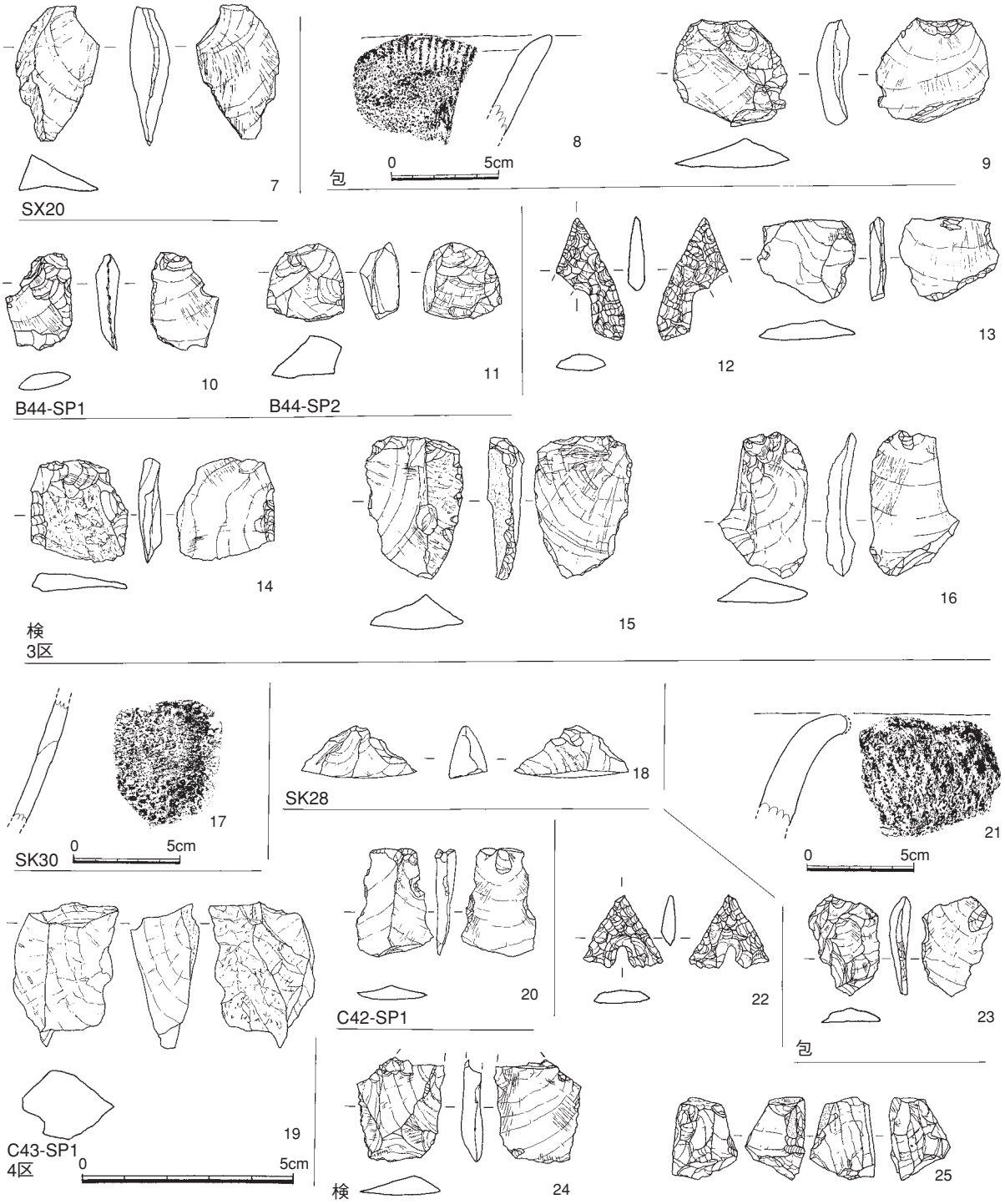


Fig.16　３・４区出土遺物実測図．１（1/3・2/3）

（3）近世の調査

近世では水田開墾時の廃石土壙６基、開田以前の幅40㎝程の畑の畝溝６条以上を検出している。

①廃石土壙　田面平坦部に、東西に並んだ６基を検出した。

SK13（Fig.14 Ph.17）調査区西のＦ46グリッドに位置する。1.2×1.2ｍ深さ48㎝以上を測る。1.2m程の地山からの露頭を、東に掘り込んだ壙内に、耕作面上に突出した部分を割り取り、岩屑を埋め込んでいる。覆土は灰色砂質土。遺物の検出は無い。

SK16（Fig.13 Ph.18）　調査区東のＢ45グリッドに位置する。1.4×1.2ｍ深さ26㎝を測る。壙内に10～40㎝程の自然礫を集め、耕作面下に埋め込んでいる。縄文倒木痕ＳＸ45を切る。遺物の検出は無い。

SK22（Fig.14 Ph.19）SK13・16間のＤ46グリッドに位置する。1.3×0.7ｍ深さ26㎝以上を測る。13同様、露頭の周りに掘り込んだ壙内に、耕作面上に突出した部分を割り取り埋め込んでいる。遺物の検出は無い。

2）4区の調査（Fig.11 Ph.13）

3区の北下段に位置し、大部分が北に下がる傾斜面からなる。

（1）縄文時代の調査　土壙１基とＳＸ28他の倒木痕２基・傾斜面西部に淡暗褐色の包含層を検出した。遺物は極めて少ない。

①土壙**SK30**（Fig.15）調査区北西のＦ42グリッドに位置する。1.8×0.8ｍ深さ11㎝を測る不整円形の土壙。中央床面近くで押型文土器片を検出。

出土遺物（Fig.16）17は押型文土器片で、外面に横位の楕円押型文をベルト施文し内面はナデる。3㎜以下の砂粒を多く含み、器厚は薄い。外面は黄橙色内面は黒褐色を呈す。早期前半か。

②倒木痕**SX28**は傾斜面南のE43グリッドに位置し、2.0×1.1ｍ深さ17㎝を測る。覆土は淡暗褐色土で石器が出土。

出土遺物（Fig.16）18は黒耀石製尖頭器・石槍の基部で、身部を欠失する。残存で13×28×9㎜を測る。下端に縦長剥片剥離時の打点が残る。

③柱穴出土遺物（Fig.16）19はG45SP01出土サヌカイト残核。側面に上下から横長剥片を剥離し、自然面が残る裏面には階段状剥離を施す。風化が進み暗灰色を呈す。20はＣ42ＳＰ01出土黒耀石製使用剥片。折断した石刃状剥片の両側を使用する。26×18×５㎜を測る。

④包含層・検出面出土遺物（Fig.16）21は押型文土器口縁片で、摩滅が著しいが、外面に縦位の格子に近い楕円押型文を、内面は口縁に横位に施文しナデる。４㎜以下の砂粒を多く含み、器厚は17㎜と厚い。橙色を呈す。22～25は黒耀石製石器。22は石鏃。17×18×３㎜0.6gを測る。23・24はスクレーパー。23は主剥離面左辺に刃潰しを行い右辺を使用する。24は主剥離面右辺に刃潰しを行

Ph.20　5区全景（西から）

Ph.21　6区全景（西から）

Fig.17　5・6区遺構全体図（1/200）

い左辺と下辺を使用する。バルブは除去する。25は細石刃の残核で、自然面の打面から幅2.5㎜程の細石刃を３枚剥離する。19×16×13㎜を測る。

Ph.22　5区 SK35（南から）

（２）古代～中世の調査　掘建柱建物４棟を中心に焼土壙２基・倒木痕１基を検出している。

①掘立柱建物（Fig.15）　磁北に近い方位を取る２棟と地形に沿う２棟を検出している。

SB05　調査区中央Ｅ42グリッドに位置する２×１間4.0×2.3mの側柱建物。方位をN－18°－Eにとり、地形に直交する。梁間2.3・桁行は1.6～2.1mと狭い。堀方は径20～40㎝を測り30～50㎝と深い。

SB06　Ｅ43グリッドに位置し、05と切り合う。２×１間3.4×2.3mの側柱建物。方位をN－46°－Wにとり、地形に沿う。梁間2.3・桁行は1.6～2.1mと狭い。堀方は径20～40㎝を測り30～50㎝と深い。

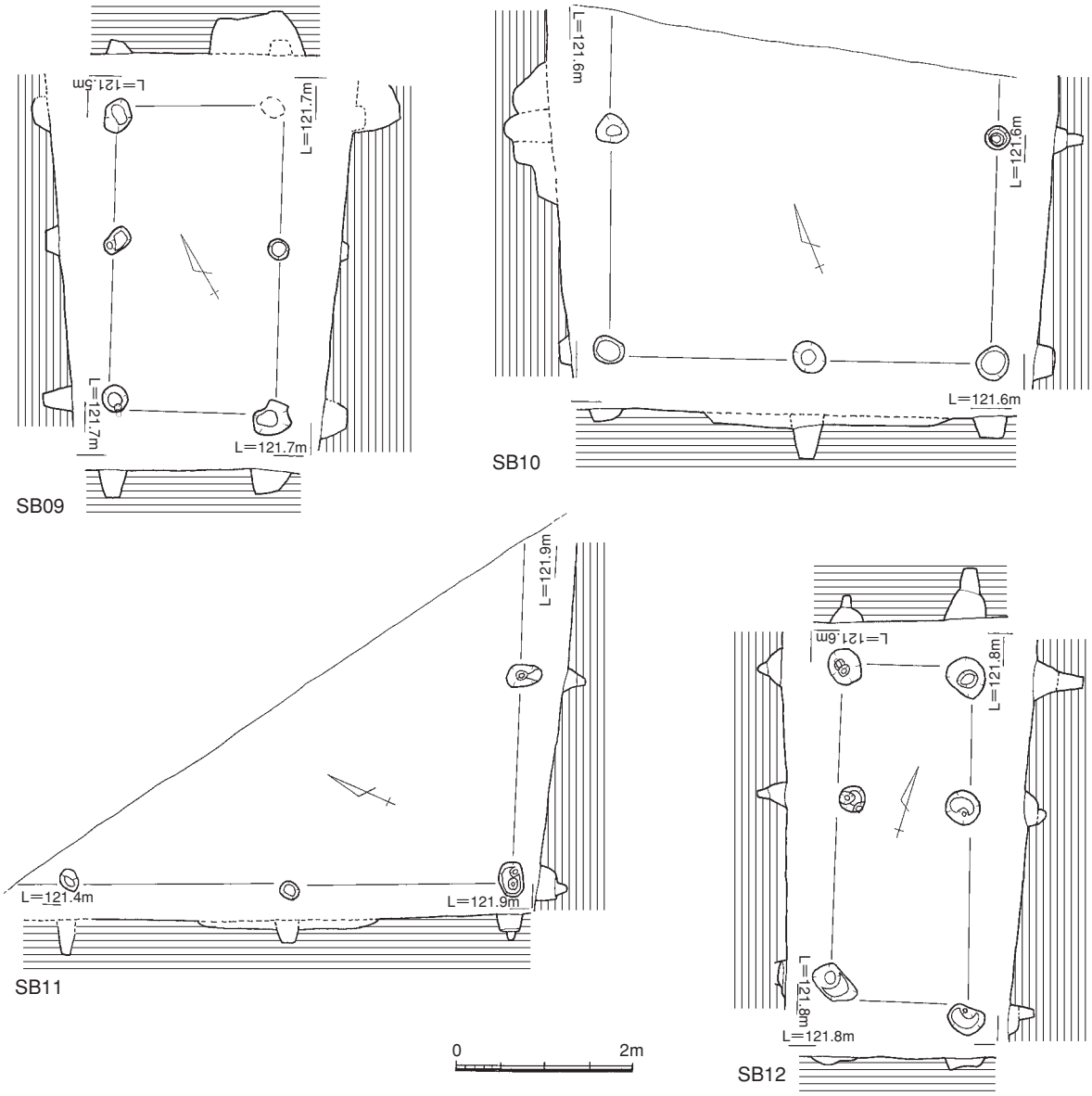
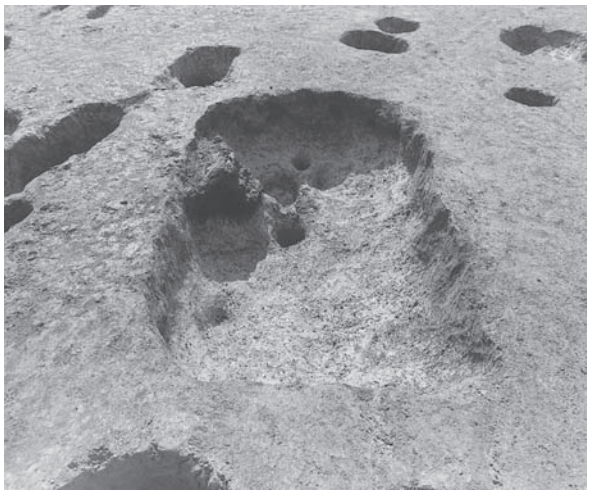


Fig.18　5区 SB09・10・11・12 実測図（1/80）

SB07　調査区北西C42グリッドに位置する2×1＋α間4.0×3.6＋αmの側柱建物。方位をN－32°－Eにとり、地形に直交する。梁間1.9～2.2・桁行は1.91mを測る。堀方は径20～30㎝と小さい。底面は傾斜に平行する。SB08・焼土壙SK27と切り合う。

SB08　調査区北西隅B42グリッドに位置する2＋α×2＋α間5.7＋α×4.9＋αmの側柱建物。大半が調査区外に広がる。方位をN－4°－Eにとり、磁北に近い。柱間1.8～2.2mを測る。堀方は径25～40㎝を測り、深さは15～20㎝と浅く底面は傾斜に平行する。SB07と切り合う。

Ph.23　5区 SK36（北西から）



Ph.24　5区 SK37（西から）

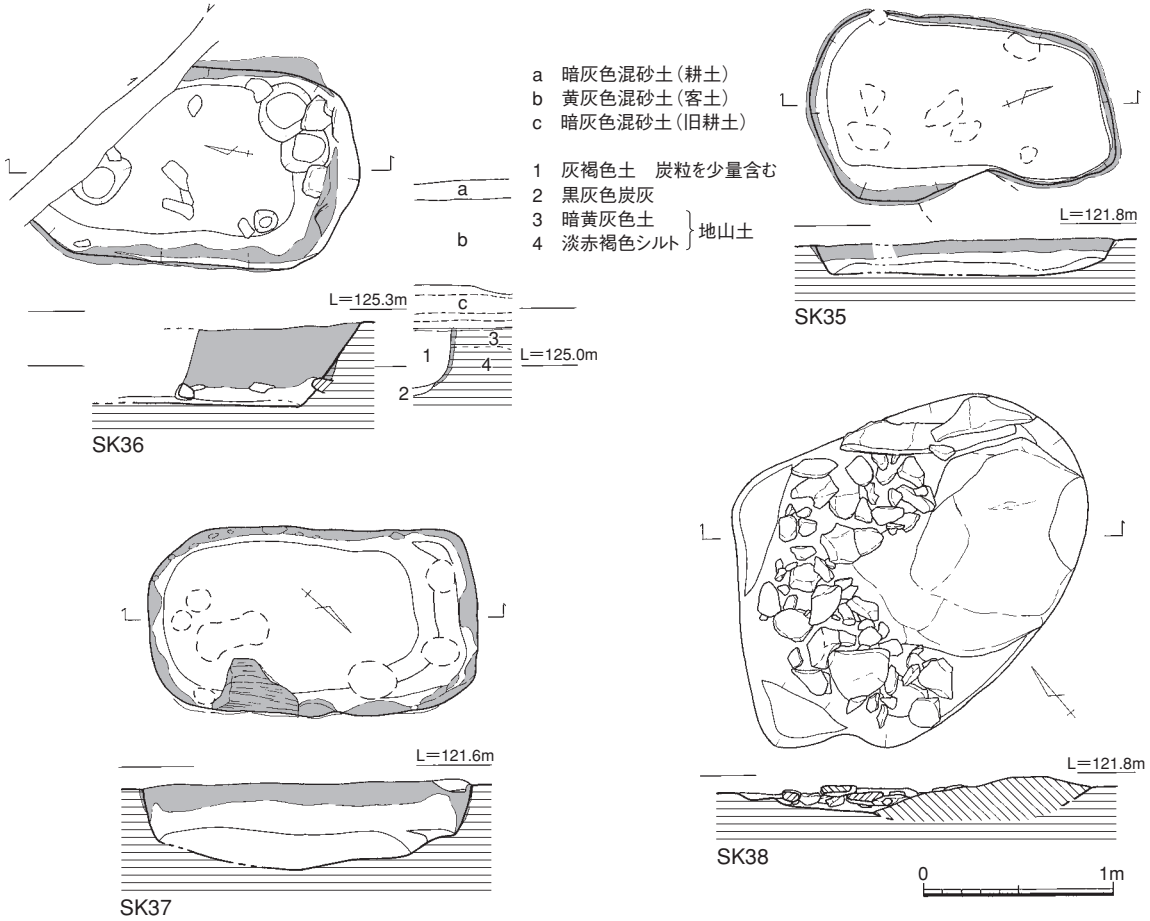


Fig.19　5区 SK35・36・37・38 実測図（1/40）

②焼土壙　北寄りの東西端に２基検出している。

SK27（Fig.15 Ph.18）調査区北東斜面Ｃ42グリッドに位置し、北半が調査区外に延びる。1.0＋α×1.0ｍ深さ40㎝を測るＢ類土壙。軸は地形に直交する。床上15㎝から上の壁面に焼土が残る。SB07と切り合う。

Ph.25　6区 SD69（東から）

SK26（Fig.15 Ph.19）調査区南東平坦面Ｂ43グリッドに位置し、南半が調査区外に延びる。1.0＋α×1.4ｍ深さ６㎝を測る。軸は地形に直交する。上端まで炭灰が堆積する。

（３）近世の調査　廃石土壙１基・畑畝溝18条以上・柱穴を検出している。

①廃石土壙**SK32**（Fig.15）中央東端Ｅ43グリッドに位置し、南半は調査区外。0.7＋α×0.6ｍ深さ30㎝を測る。20～80㎝の自然礫を集め埋め込む。

②畑畝溝（Fig.11）残存状況が良好で、等高線に平行に、長さ６ｍ前後幅40㎝前後の溝５～６条程が１ブロックで、４ブロックが並んで検出される。覆土は灰色砂質土で、土師器坏皿小片と縄文遺物が混入する。

Ph.26　6区 SX67（南から）

Ph.27　SX67 土師器出土状況（南東から）

Ph.28　6区 SK63（東から）

Ph.29　6区 SK65（北から）

4．5・6区の調査

第5・6区は第3・4区北側に隣接する調査区で、調査面積は5区で376.5㎡、6区で395.5㎡。検出面は表土下の赤褐～黄褐色粘質土シルト上面で、標高は5区で121.5m、6区で120mで南西から北東に傾斜する。遺構は5区で縄文時代の流路1条、古代～中世の掘立柱建物4棟・柱穴・焼土壙5基、近世で廃石土壙1基・畝溝18条以上・柱穴を検出している。6区で縄文時代の倒木痕2基、古代～中世の掘立柱建物5棟・柱穴・焼土壙6基・炭窯？1基・溝4条、近世の土壙1基を検出している。

Ph.30　6区 SK64（東から）

Ph.31　6区 SK66（東から）

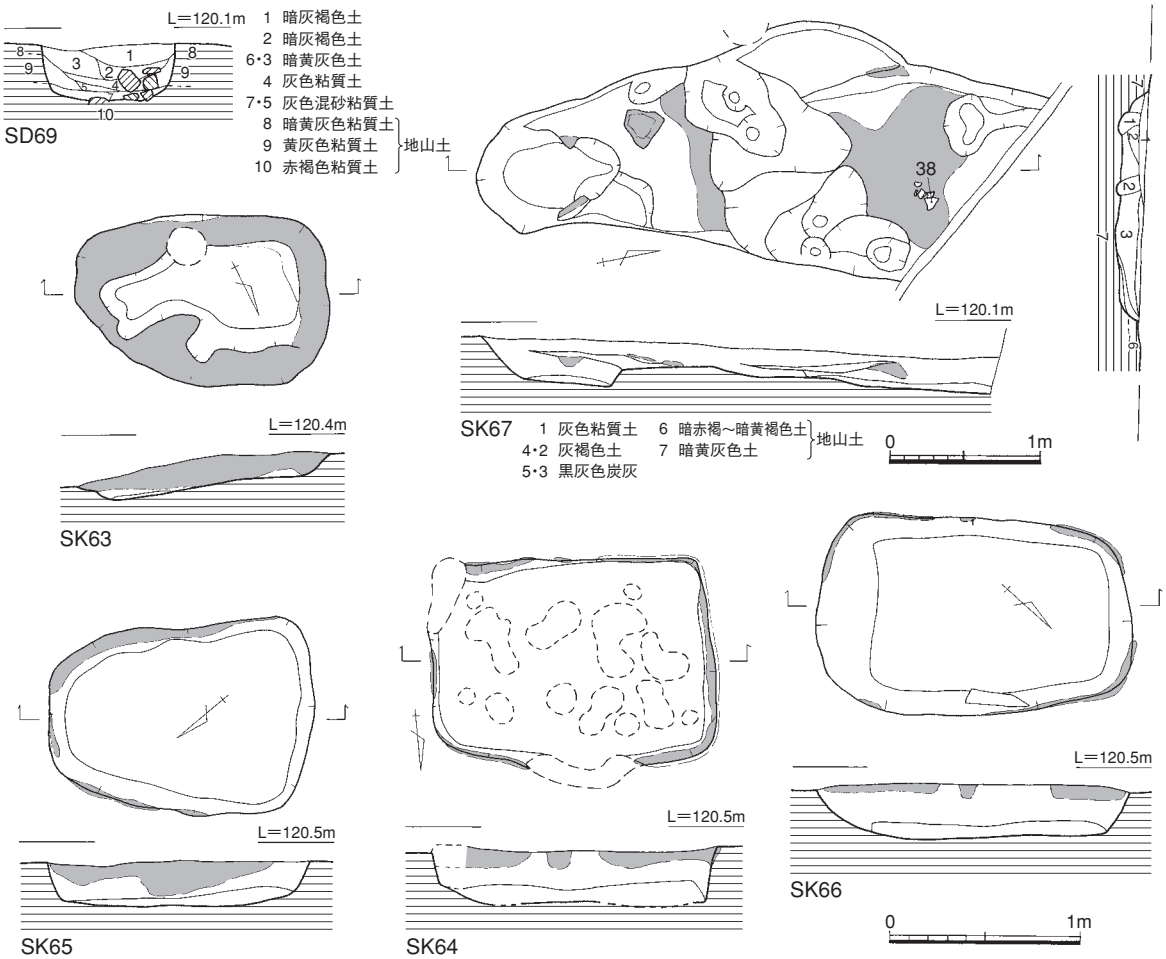


Fig.20　6区土壙他遺構実測図（1/50・1/40）

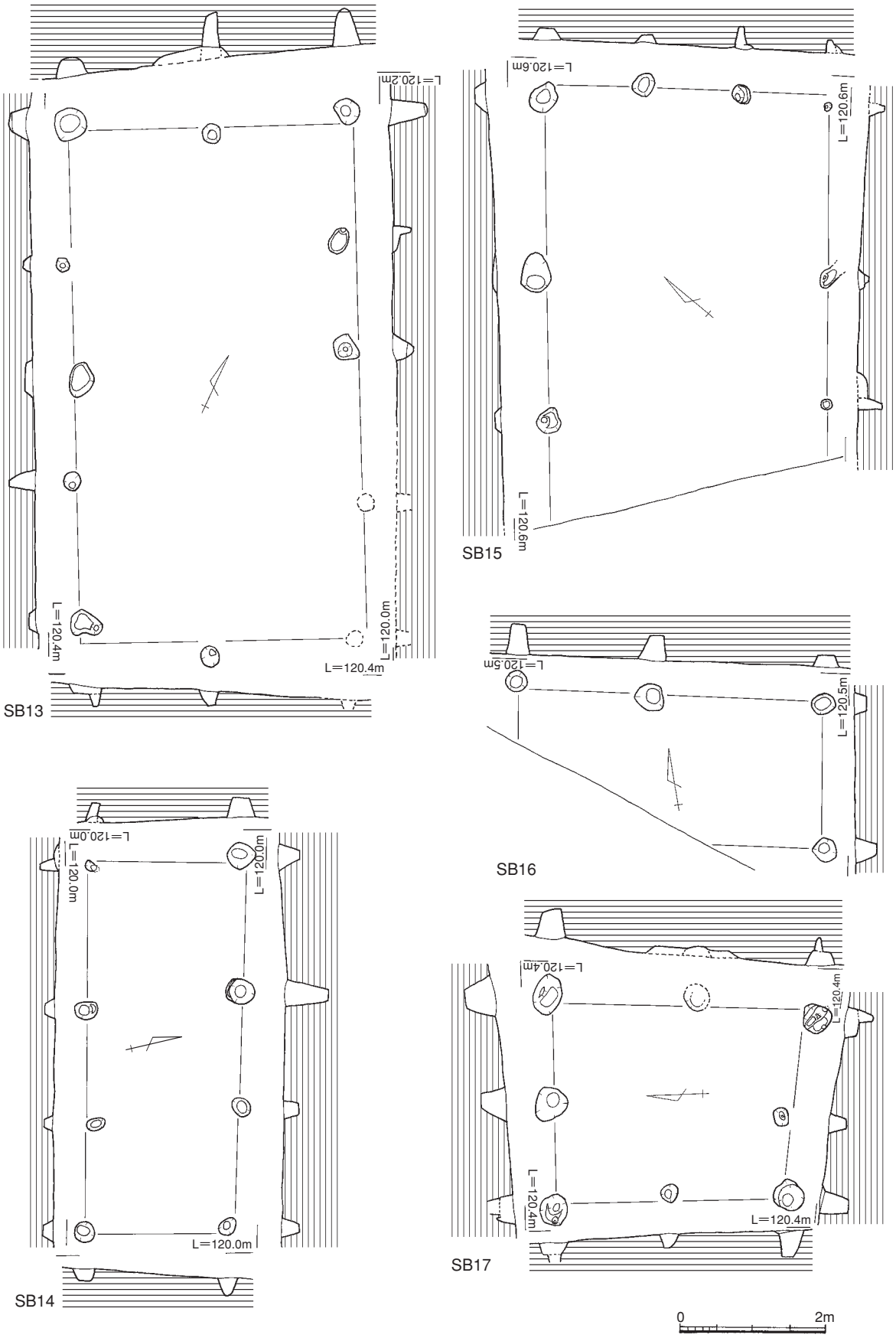
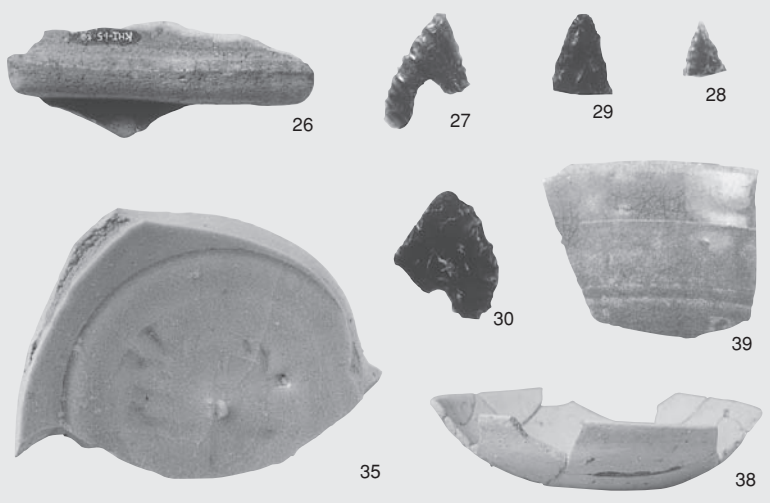


Fig.21　6区 SB13・14・15・16・17 実測図（1/80）

1）5区の調査（Fig.17 Ph.20）

4区の北下段に位置し、田面の平坦部と北東に下がる傾斜面からなり、中央がややくぼむ。



Ph.32　5・6区出土遺物

（1）縄文時代の調査　自然流路を1条検出し､包含層は遺存しない。

①出土遺物（Fig.22 Ph.32）

27～34は黒耀石製石器。混入・検出面出土資料。27～30は石鏃。27は鍬形族で、先端と片脚を欠損。現況で22×13×4㎜を測る。28・29は破損した先端部のみが遺存。30も片脚を欠損。25×20×6㎜を測り身が厚い。31・32は縦長剥片の側片に刃潰し加工を行うもの。31はバルブを打ち欠き主剥離面両辺に刃潰

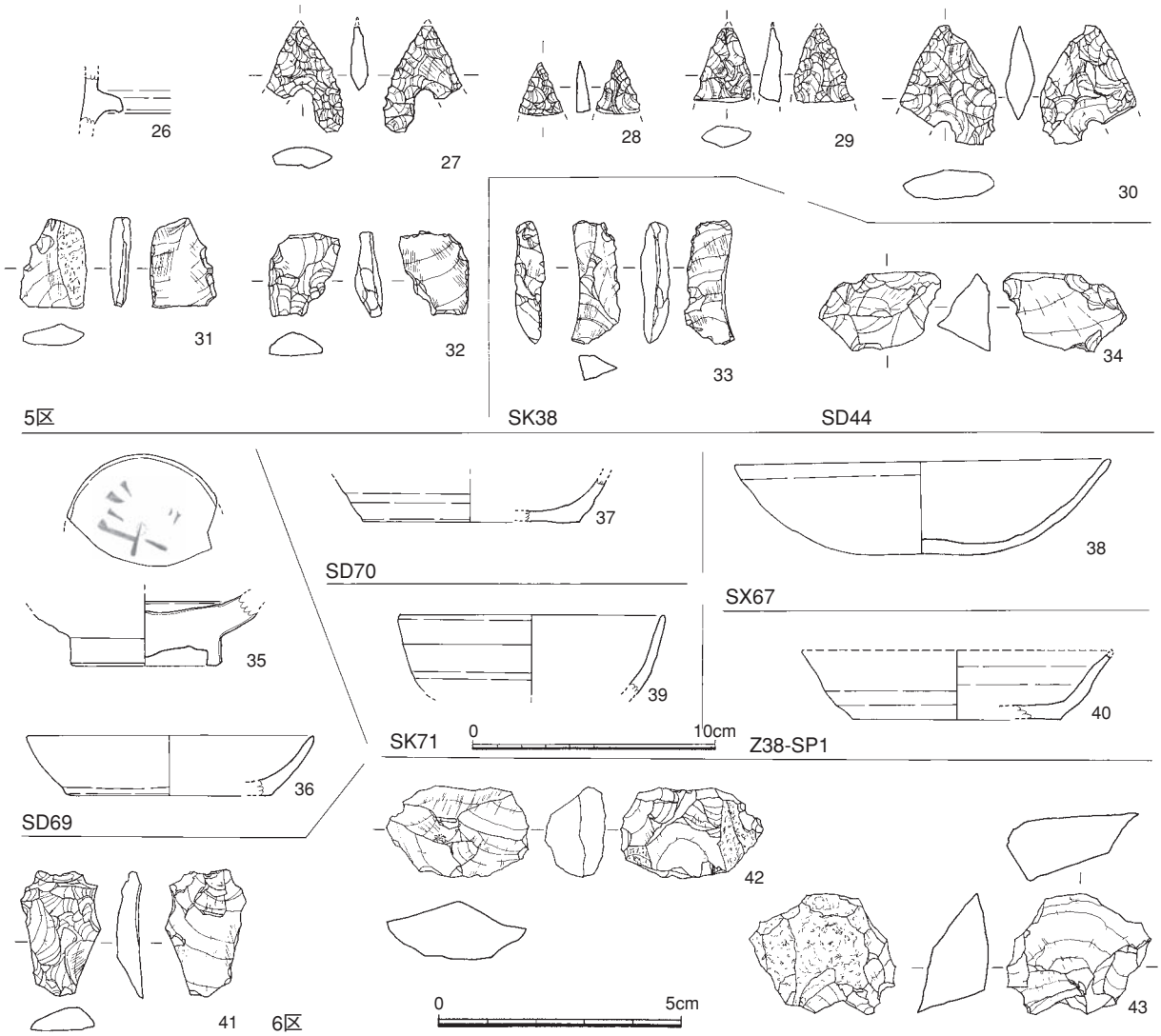


Fig.22　5・6区出土遺物実測図．1（1/3・2/3）

しを行う。裏面には自然面が残り、先端を欠損。32もバルブを除去後上辺と左辺に刃潰しを施し、右辺を使用する。先端を欠損する。33・34は使用剥片で、33はスポールの使用。右辺と下端稜線を使用する。34は残核の下辺を使用する。裏面に新しい剥離があり、後代に再利用する。風化が進行し暗灰色を呈し不透明。旧石器と思われる。

（2）古代～中世の調査　掘建柱建物4棟を中心に焼土壙５基を検出している。

①掘立柱建物（Fig.18）磁北に近い方位を取る２棟と地形に沿う２棟を検出。**SB09**は調査区北傾斜面Ｈ40グリッドに位置する２×１間3.6×1.8mの側柱建物。方位はN－28°－Eで地形に直交。梁間1.5・桁行は1.6～2.1mで梁間が狭い。底面は傾斜に平行。堀方は径30～45㎝。焼土壙SK36と切り合う。**SB10**は09の東1.3mに方位・軒を揃えて隣接する同時期の側柱建物でＧ40グリッドに位置。２×１＋α間4.4×4.0＋αm。方位はN－30°－Eで地形に直交。梁間2.1～2.2・桁行は2.51mで梁間が狭い。堀方は径25～35㎝で柱筋底面は傾斜に平行。11と切り合う。**SB11**は10の東２m程のＦ39グリッドに位置する２＋α×２＋α間5.1＋α×3.9＋αmの側柱建物。方位はN－18°－Wで磁北に近い。柱間2.2～2.5mで堀方は径20～40㎝。**SB12**は11の南東２m程のＣ40グリッドに位置する２×1間3.9×1.5mの側柱建物。方位はN－12°－Eで磁北に近い。梁間1.5・桁行は1.6～2.1mで梁間が狭い。底面は傾斜に平行する。堀方は径30～50㎝。

②焼土壙　調査区中央に等高線に並行して等間隔に５基検出している。**SK35**（Fig.19 Ph.22）はＣ40グリッドに位置し、1.5×0.9ｍ深さ19㎝を測る。軸は地形に直交。床上10㎝から上の壁面に焼土が残る。**SK36**（Fig.19 Ph.23）はH36グリッドに位置し1.1＋α×1.0ｍ深さ44㎝を測る。軸は磁北に近い。床上に５～10㎝炭灰が堆積し（２層）、壁周辺に10～15㎝程の炭化材が散布する。この上の壁面が焼ける。**SK37**（Fig.19 Ph.24）はＦ40グリッドに位置し、1.6×0.9ｍ深さ45㎝を測る。軸は地形に平行。床上に10㎝程炭灰が堆積し、壁周辺の上面に炭化材の小片が散布する。南東の大型片をAMS分析にかけ、AD670～780の結果を得ている。壁面は15～20㎝上が焼ける。

（3）近世の調査　廃石土壙１基・畝溝18条以上を検出している。

①廃石土壙**SK38**（Fig.19）東端Ｃ40グリッドに位置し、2.1×1.6ｍ深さ15㎝を測る。1.4m程の地山からの露頭を、北に掘り込んだ壙内に、突出した部分を割り取り、岩屑を埋め込んでいる。覆土は灰色砂質土。遺物の検出は無い。

②畑畝溝（Fig.11）等高線に平行に、長さ６ｍ前後の溝５～６条程が１ブロックで、５ブロック程が並んで検出される。覆土は灰色砂質土で縄文遺物が混入する。

Ph.33　7区全景（西から）

Ph.34　9区全景（西から）

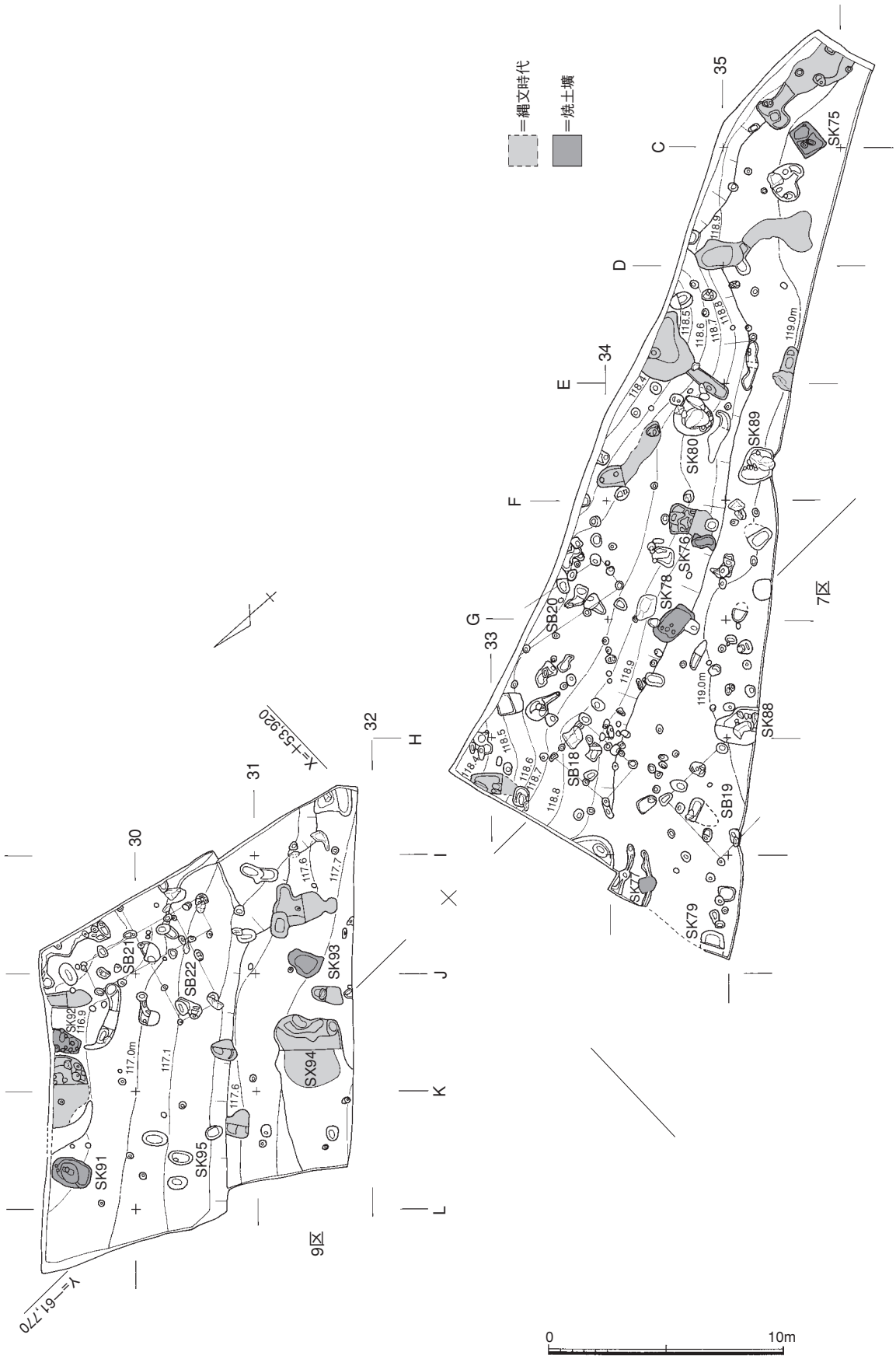


Fig.23　7・9区遺構全体図（1/250）

2）6区の調査（Fig.17 Ph.21）

5区の北東下段に位置し、台地落ち際に近く傾斜が強まり、斜面中央がくぼむ。

（1）縄文時代の調査　縄文時代の倒木痕もしくは自然流路を2基検出し、包含層は遺存しない。

①出土遺物（Fig.22）　41～43は混入・検出面出土資料で黒耀石製石器。41は打面調整剥片。42は残核で上下からの剥離後、左右から剥離を行う。裏面に自然面が一部残り左右両辺に使用痕がある。黒灰色で不透明。43は細石核で、円礫の自然面を剥いだ剥片の中位に、打点直角方向から打面剥離を行い、自然面を残したままこの直交方向の小口に剥離を3回行う。風化が進行し黒灰色を呈し不透明。針尾・牟田産。旧石器～草創期。

（2）古代～中世の調査　掘立柱建物5棟を中心に溝4条・炭窯？1基・焼土壙6基を検出している。

①溝　調査区東斜面に地形に平行する溝3条を検出している。**SD69**（Fig.20 Ph.25）はこの中央に位置し、南から北に流れ0.9～1.6mと幅を増す。断面矩形で床上に粗砂を1/4含む灰色粘質土が5㎝程堆積し、水が若干流れる。北端は塊石で埋め立てられる。

Ph.35　7区 SK75（東から）

Ph.36　7区 SK78（東から）

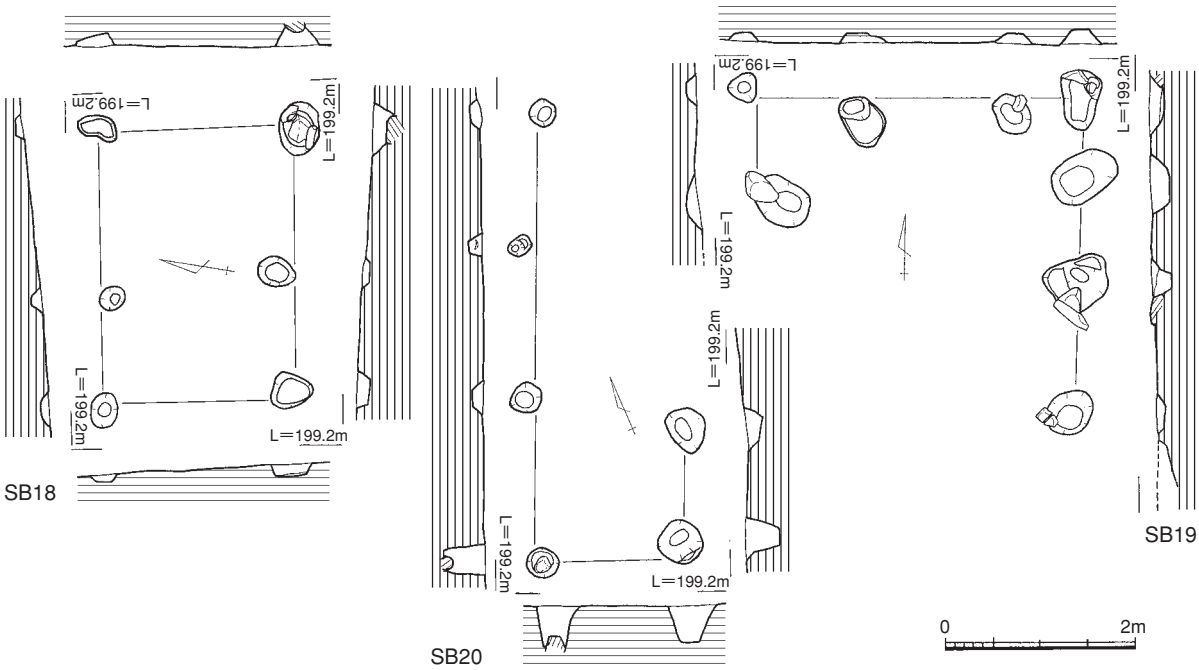


Fig.24　7区 SB18・19・20 実測図（1/80）

出土遺物（Fig.22）35は床面出土の龍泉窯系青磁Ⅳ類碗底部。全面施釉し高台内を掻き取る。見込みに文字の印刻がある。底径6.2㎝。36は土師器坏。口径12器高2.5㎝。14世紀。

②**SX67**（Fig.20 Ph.26・27）平地式の炭窯とされるもので、北東のG36グリッドに位置し地形に平行する。3.1＋α×1.5m深さ15㎝を測り、南から北に幅が広がる。ほぼ上端まで2面の炭灰層が堆積し、炭灰層上面に土師器丸底坏片が散布する。床面と壁面の一部が厚さ1・2㎝焼けて赤変する。

出土遺物（Fig.22）38は土師器丸底坏で、口径15.8器高3.9㎝。外底はヘラ切りで内底から押し出す。浅黄橙色を呈し4㎜以下の砂粒を含む。12世紀初～中頃。

Ph.37　7区 SK76（東から）

Ph.38　9区 SX94（北から）

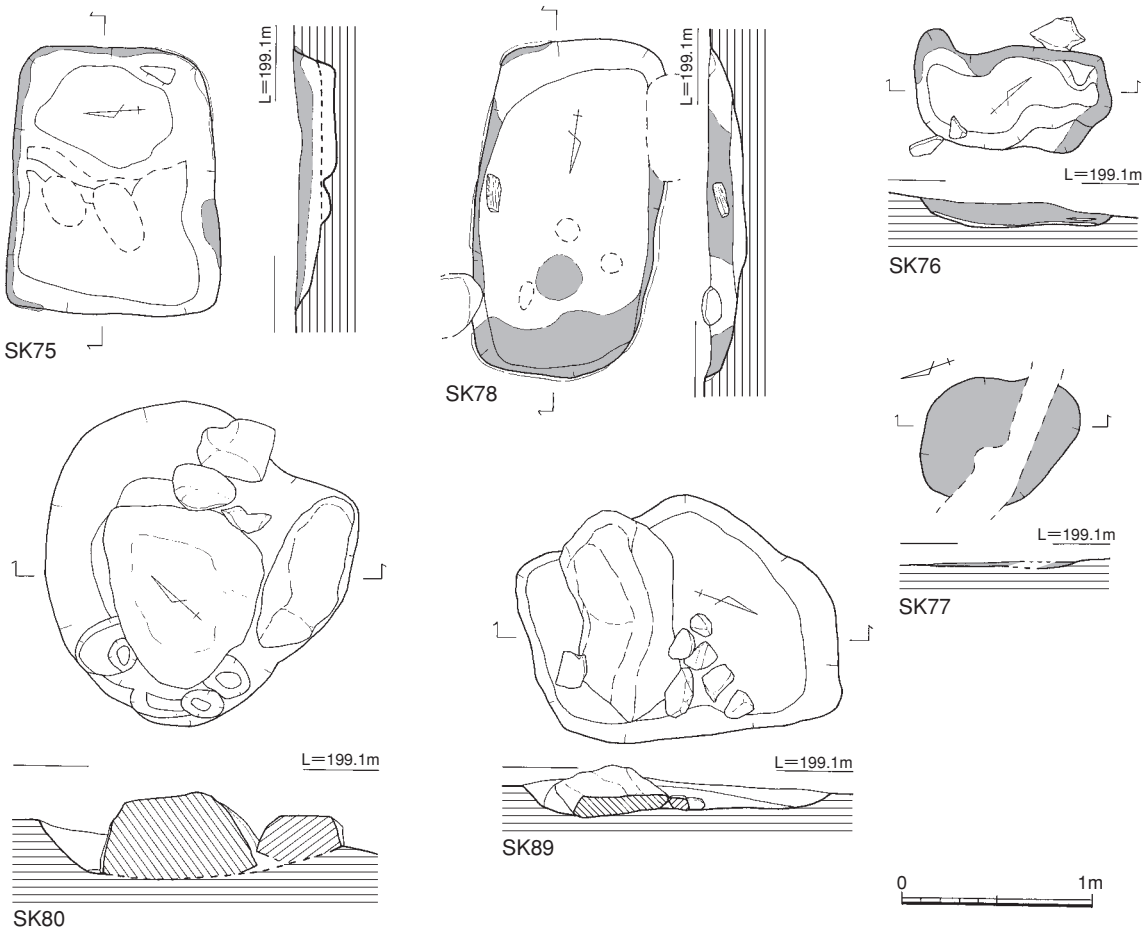
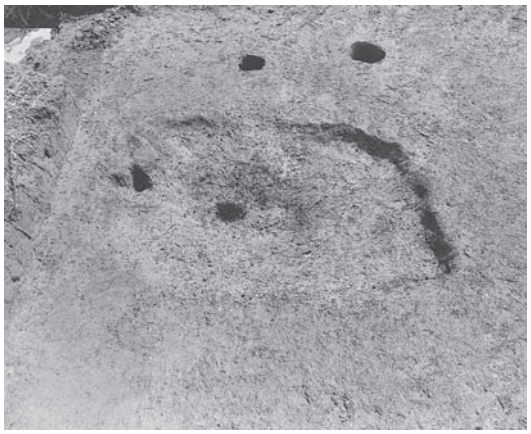


Fig.25　7区土壙実測図（1/40）



Ph.39　9区 SK91（西から）

③焼土壙　6基検出し、4基は調査区中央に等高線に並行して直線的に並ぶ。**SK63**（Fig.20 Ph.28）は1.2×0.9ｍ深さ9㎝を測る。軸は地形磁北にも沿わない。A類で床近くから壁面が焼ける。**SK64**（Fig.20 Ph.30）は1.4×1.1ｍ深さ22㎝を測る矩形のB類。軸は磁北に近い。床上20㎝程上の壁面が焼ける。**SK65**（Fig.20 Ph.29）は1.4×1.0ｍ深さ22㎝を測るA類。軸は地形に直交。床上5～10㎝程上の壁面が焼ける。**SK66**（Fig.20 Ph.31）は1.7×1.1ｍ深さ24㎝を測るB類。軸は地形に平行。床上20㎝程上の壁面が焼ける。SB15と切り合う。

Ph.40　9区 SK92（東から）

③掘立柱建物（Fig.18）　磁北に近い方位を取る2棟と地形に沿う3棟を検出。全て側柱建物。**SB13**は調査区中央の窪みに位置する4×2間7.1×3.9mの方位はN－27°－Wで地形に平行。梁間1.8～2.0・桁行1.4～1.9mで桁行が狭い。底面は傾斜に平行。堀方は径20～40㎝。SB14と切り合い、溝SD68に切られる。**SB14**は13の南で切り合い、3×1間5.1×2.1m。方位はN－79°－Wで磁北に近い。梁間2.1・桁行1.5～2.0mで桁行が狭い。底面は傾斜に平行。堀方は径20～40㎝。SD68と切り合う。**SB15**はSB13の西1.8mに同方位で位置する。2＋α×3間5.1＋α×4.0m。方位はN－50°－Eで地形に直交。梁間1.2～1.3・桁行1.8～2.3mで梁間が狭い。底面は傾斜に平行。堀方は径15～40㎝。SD68・SK66と切り合う。**SB16**は14と同方向で、南4mに位置する。2×1間4.4×2.0mと思われる。方位はN－79°－Wで磁北に近い。梁間2.0・桁行1.8～2.3m。堀方は径30～40㎝。**SB17**は14・16と同方向で、16の西6.5mに位置。2×2間3.4×2.5m。方位はN－4°－Eで磁北に近い。梁間1.2～1.5・桁行1.6～2.0m。底面は傾斜に平行。堀方は径20～45㎝。SD68に切られる。

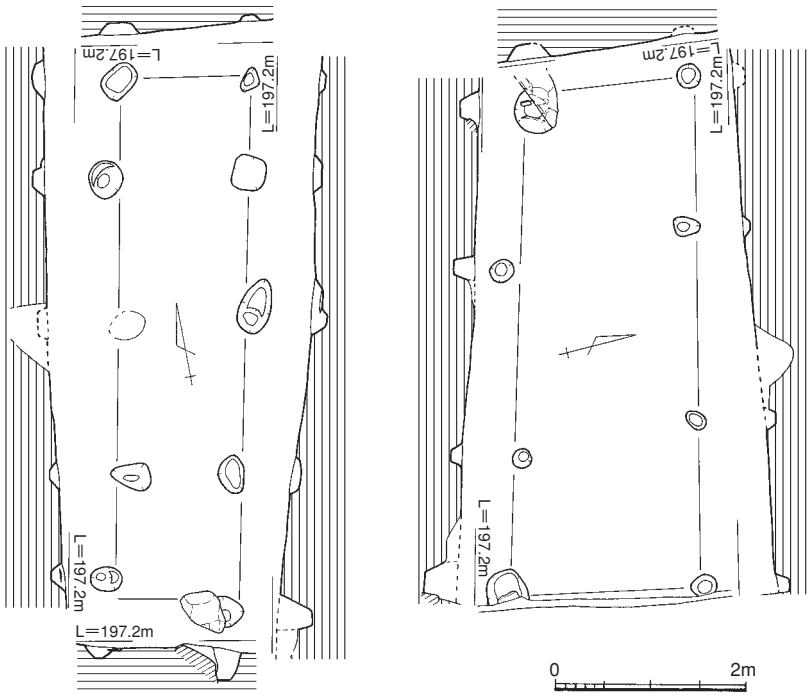
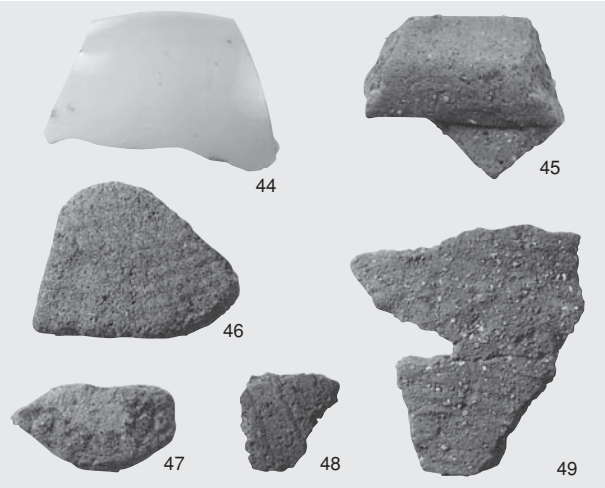


Fig.26　9区 SB21・22 実測図（1/80）

5．7・9区の調査

第7・9区は第5・6区北東側に隣接する調査区で、調査面積は7区で292㎡、9区で195㎡。検出面の標高は7区で119m、9区で117mで南西から北東に傾斜する。遺構は7区で縄文時代の流路・倒木痕7基、古代～中世の掘立柱建物3棟・柱穴・焼土壙4基、近世で廃石土壙3基・土壙1基・畝溝5条・柱穴を検出している。6区で縄文時代の流路・倒木痕7基、古代～中世の掘立柱建物2棟・柱穴・焼土壙3基・土壙1基、近世の畝溝3条を検出している。



Ph.41　7・9区出土遺物

1）7区の調査（Fig.23 Ph.33）

6区の北下段に位置し、田面の平坦部と東に下がる傾斜面からなり、東中央寄り斜面に小谷が入る。縄文包含層は遺存しない。また、北の約200㎡は遺構が検出されない。

（1）古代～中世の調査　掘立柱建物3棟を中心に焼土壙4基を検出している。

①掘立柱建物（Fig.24）磁北に近い方位を取る3棟のみで北部に「コ」字上に囲むように分布。全て側柱建物である。

SB18は調査区北端I33グリッドに位置する。

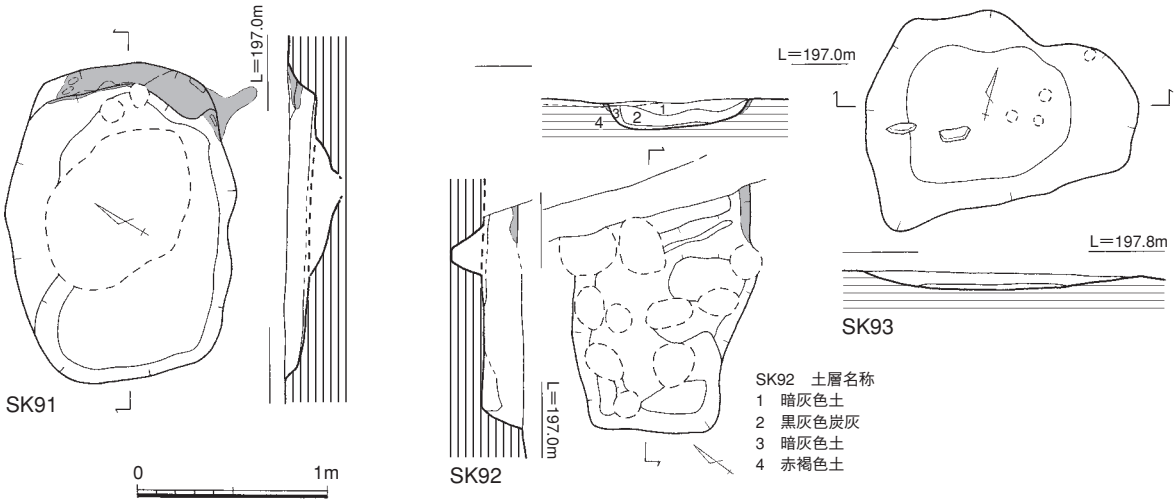


Fig.27　9区 SK91・92・93実測図（1/40）

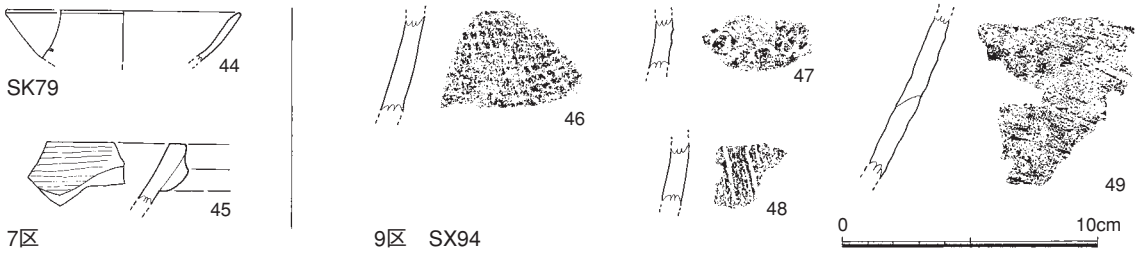


Fig.28　7・9区出土遺物実測図．1（1/3）

2×1間2.9×1.9mを測り、方位はN－84°－Eと磁北直交方向に近い。梁間2.9・桁行1.1～1.7mを測り、桁行が狭い。底面は傾斜に平行する。堀方は径25～50㎝を測る。

SB19はSB18の西2m、I34グリッドに同方位で位置する。南半は調査区外に広がる。3＋α×3間4.5＋α×3.3mを測り、方位はN－2°－Eと磁北に近い。梁間・桁行は0.8～1.6mを測り桁行が狭い。堀方は径30～70㎝を測る。SD68・SK66と切り合う。

SB20は18の東3.6mに位置し、3＋α×1間4.8＋α×1.5mを測る。同方向の9区SB21と同規模の4間となる可能性が高い。方位はN－23°－Eをとり、磁北に近い。梁間・桁行は1.4～1.6mを測る。堀方は径25～45㎝。

②焼土壙　4基検出し、6区同様、調査区中央に等高線に並行して直線的に並ぶ。

SK75（Fig.25 Ph.35）は調査区南端C35グリッドに位置し、1.3×1.0m深さ9㎝を測る。軸は磁北に直交する。矩形のB類で床上5～10㎝上の壁面が焼ける。

SK76（Fig.25 Ph.37）は調査区中央G34グリッドに位置し、1.0×0.5m深さ14㎝を測る。不整形で軸は磁北・地形に沿わない。床近くから上位の壁面が焼ける。

SK77（Fig.25）は調査区北端J34グリッドに位置し0.8×07m深さ6㎝を測る。円形で上端まで炭灰が堆積するC類。床面まで1㎝程焼け、他と異なる。中央を近世溝に切られる。

SK78（Fig.25 Ph.36）は調査区北側H34グリッドに位置し1.7×0.9m深さ20㎝を測るB類。軸は磁北に近い。床面の一部と床近くから上の壁面が焼ける。床上10㎝程炭灰が堆積し上面に炭化材の一部が残存する。

③出土遺物（Fig.28）45は表採の土師質鍋口縁。内面にヨコハケ外面にヨコナデを施す。

（2）近世の調査　廃石土壙3基・土壙1基・畝溝5条を検出している。

①廃石土壙**SK80**（Fig.25）中央F34グリッドに位置し、1.6×1.4m深さ27㎝以上を測る。1m～30㎝程の自然礫を集め、掘り込んだ壙内に埋め込んでいる。覆土は灰色砂質土。

出土遺物（Fig.28）44は肥前系染付皿。口径9.2㎝。外面に呉須の文様の一部が見て取れる。

SK89（Fig.25）80の西2mに位置し、1.6×1.2m深さ11㎝以上を測る。1m～30㎝程の自然礫を壙内に埋め込む。遺物の出土は無い。

Ph.42　8区全景（西から）

2）9区の調査（Fig.23 Ph.34）

7区の北下段に位置し、2段の田面の平坦部からなり、東隅が若干傾斜する。縄文包含層は遺存しない。

（1）縄文時代の調査　縄文時代の倒木痕もしくは自然流路を7基検出し、包含層は遺存しない。

①倒木痕**SX94**（Ph.38）は調査区上段中央に位置し、3×2m深さ12～60㎝で暗赤褐色土が堆積する。

出土遺物（Fig.28）46・47は早期楕円押型文土器片。46は小粒のもの

Fig.29　8・10区遺構全体図（1/200）

を横位に、内面はナデ後ゆるいケンマを施し、カクセン石・金雲母他2㎜以下の砂粒を多量に含む。47はやや大粒のものを縦位に施し内面はナデ。金雲母他1㎜以下の砂粒を含む。48・49は晩期粗製土器片。48は外面ナデ後斜位に2本単位の条痕を施し、内面はヨコケズリ後ヨコナデ。2㎜以下の砂粒を含み気泡を多く含む。49は外面に貝殻条痕を施す。3㎜以下の砂粒を多く含む。

Ph.43　8区 SK81（東から）

Ph.44　8区 SK82（東から）

（2）古代～中世の調査　掘立柱建物2棟棟を中心に、焼土壙3基・土壙1基を検出している。

①掘立柱建物（Fig.24）調査区下段東部で磁北に近い方位を取る直角に切り合う1間間口の建物を2棟検出した。

SB21は調査区東端J30グリッドに位置し、4×1間4.4×1.3mを測り、方位はN－12°－Eと磁北に近い。梁間1.3・桁行1.0～1.5mを測り、桁行が狭い。底面は傾斜に平行する。堀方は径25～35㎝を測る。

SB22はSB21の中央で直交方向に切り合う3×1間5.4×1.9mを測る側柱建物で、SB21より一回り大きい。方位はN－72°－Wと磁北と直交方向に近い。梁間1.9・桁行1.4～2.0mを測り、桁行が狭い。底面は傾斜に平行する。堀方は径20～40㎝を測る。

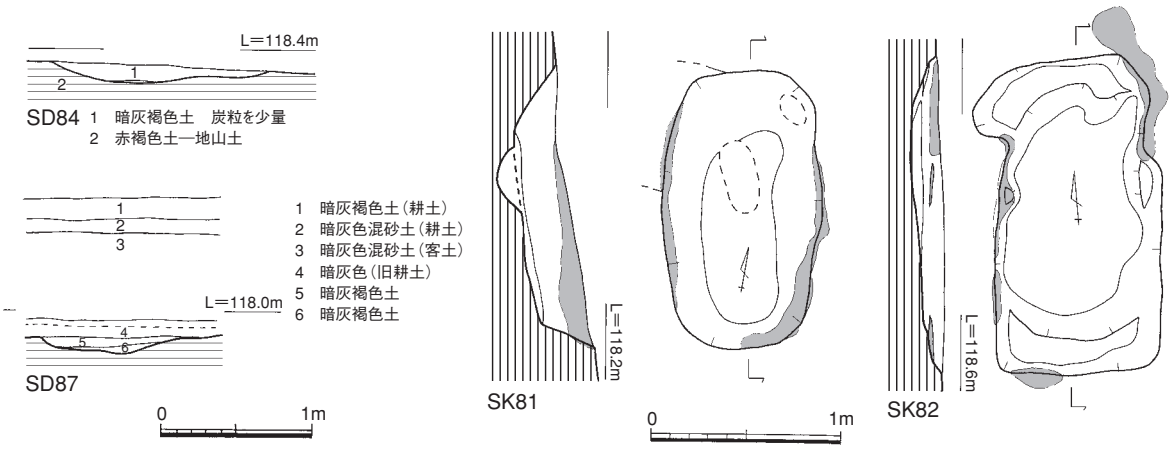


Fig.30　8区 SD84・87・SK81・82 実測図（1/50・1/40）

Ph.45　10区 SK101（北から）

②焼土壙　上段で１基下段で２基検出した。

SK91（Fig.27 Ph.39）調査区北に位置し、1.6×1.2ｍ深さ14㎝を測る。軸は地形に直交する。Ｂ類。焼土壁は床上10㎝程、西側に一部残る。

SK92（Fig.27 Ph.40）は91の南東４ｍに位置し、1.2＋α×0.8ｍ深さ15㎝を測るＡ類。軸は地形に直交。床上２・３㎝に炭灰が堆積し（２層）、掘削後使用まで期間があったことを示す。焼土壁が一部に残る。

SK93（Fig.27）調査区西に位置し、1.5×1.0ｍ深さ９㎝を測る。軸は地形に直交する。Ａ類。

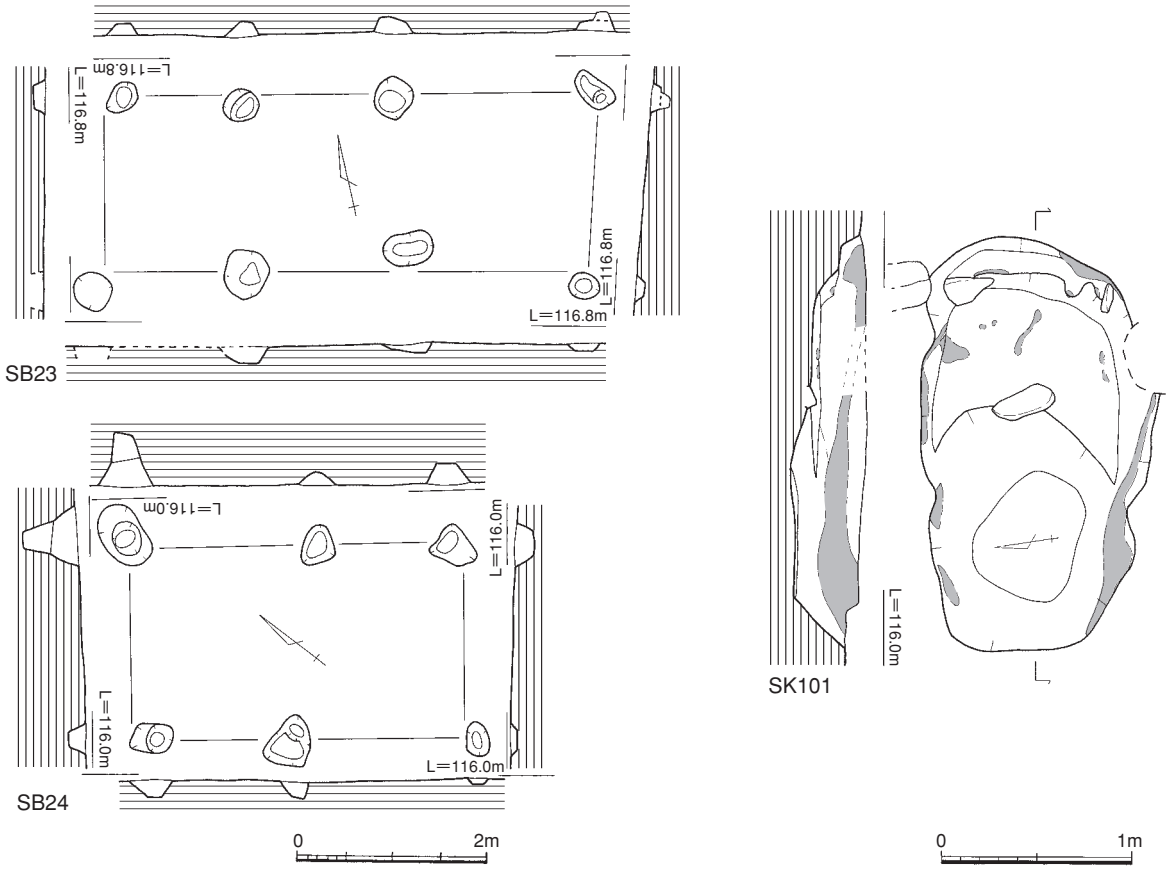


Fig.31　10区 SB23・24・SK101 実測図（1/80・1/40）

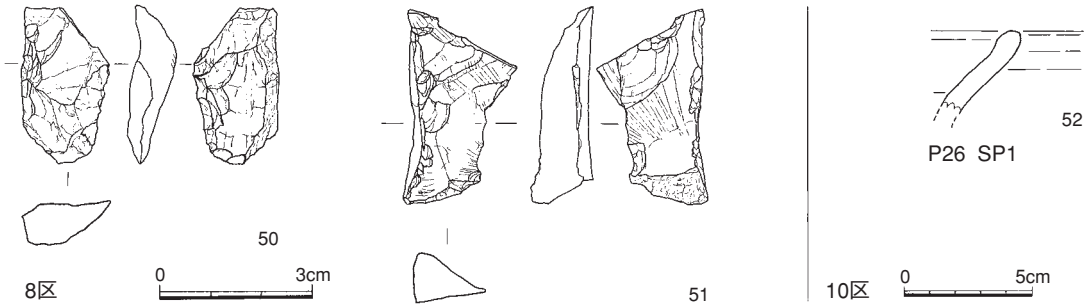


Fig.32　８・10区出土遺物実測図．１（2/3・1/3）

6．8・10区の調査

第8区・10区は第3～9区の反対側、丘陵尾根西側に位置し、第8区は7区北西に隣接し、第10区は8区の北20mに位置する。調査面積は8区で180㎡、10区で192.5㎡。検出面の標高は8区で118m、10区で116mで南から北に傾斜する。

1）8区の調査（Fig.29 Ph.42）

2段の田面からなる。縄文包含層は遺存しない。遺構は縄文時代の倒木痕1基、古代～中世の焼土壙2基・溝4条・柱穴、近世で廃石土壙1基・畝溝4条・柱穴を検出している。

（1）縄文時代の調査　①出土遺物（Fig.32）50・51は混入資料で、50はサヌカイト製スクレーパー。縦長剥片のバルブを除去後左辺に刃部を形成する。風化がやや進行する。51は黒耀石製の使用剥片で、打面に自然面を残す縦長剥片の右辺を使用する。風化面が2種あり、晩期に再利用する。

（2）古代～中世の調査　①溝　調査区上段に10m程の矩形に、間を2m程あけて**SD84**（Fig.30）の3本の溝が分布する。幅1～1.7m深さ10㎝程の溝で暗灰褐色土（1層）の中世覆土が堆積し、水は流れていない。区画内に建物は無く、SK82も方位が合わない。遺物の出土は無い。**SD87**（Fig.30）は幅0.67m深さ14㎝程の浅い溝で、SD84の11m北で同方向をとる。覆土は暗灰褐色土で遺物の出土は無い。

Ph.46　10区全景（西から）

②焼土壙　上段で1基下段で1基検出した。**SK81**（Fig.30 Ph.43）は、上段中央に位置し1.5×0.7ｍ深さ39㎝を測る。軸は地形磁北に合う。B類。焼土壁は床上20㎝程上に残る。

SK82（Fig.30 Ph.44）は、下段に位置し1.5×0.9ｍ深さ18㎝を測る。軸は地形磁北に合う。矩形のB類。焼土壁は床上10㎝程上に残る。

2）10区の調査（Fig.29 Ph.46）

北へ傾斜する緩斜面にあり、西50程には遺構が検出されない。縄文時代の流路・倒木痕4基、古代～中世の掘立柱建物2棟・柱穴・焼土壙1基・土壙1基・溝1条、近世の畝溝等を検出している。

（1）古代～中世の調査　①掘立柱建物（Fig.31）調査区東で切り合って検出した。**SB23**は3×1間5.1×2.5mを測り、方位はN－75°－Wと磁北に近い。梁間2.5・桁行1.5～1.8mを測り、桁行が狭い。堀方は径30～50㎝を測る。**SB24**は2×1間3.6×2.1mを測る。方位はN－39°－Wと地形磁北とも合わない梁間2.1・桁行1.6～2.1mを測り、桁行が狭い。堀方は径30～50㎝を測る。

②焼土壙**SK101**（Fig.31 Ph.45）は、北端中央に位置し2.1×1.1ｍ深さ29㎝を測る。軸は地形に平行する大型のB類。焼土壁が上下2段あり、2回目に拡張している。

③溝**SD103**は調査区東端に地形に直交して北に流れる。覆土は暗灰褐色土～灰色粗砂。

Ph.47　11区 SK111（東から）

Ph.48　11区 SK112（北から）

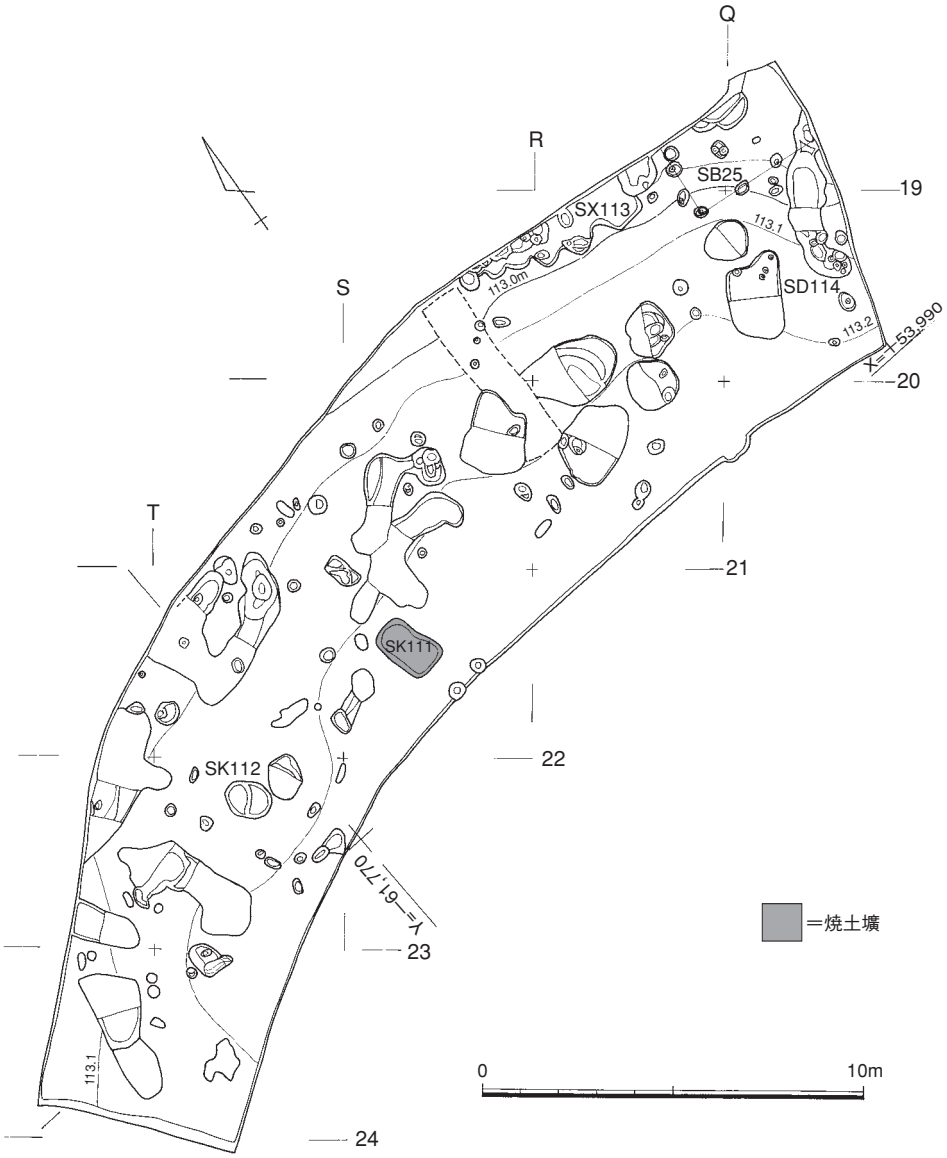


Fig.33　11区遺構全体図（1/200）

7．11区の調査

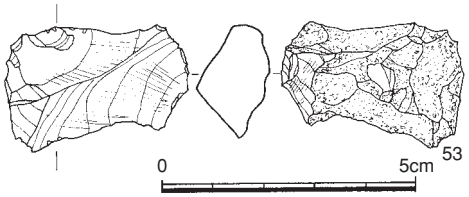


Fig.34　11区出土遺物実測図．1（2/3）

第11区は第10区の北側20m程に位置する調査区で、調査面積は235㎡、検出面の標高は113mで北へ傾斜する緩斜面にあり、東端は丘陵落ち際に位置する。古代～中世の掘立柱建物1棟・柱穴・焼土壙1基・不整土壙10基・溝1条、近世で廃石土壙1基・不整土壙11基・柱穴を検出した。

（1）縄文時代の調査　出土遺物（Fig.34）53は混入資料の黒耀石残核。腰岳産角礫の隅角を剥離したもので13面に自然面が残る。主剥離面と同じ打面からと左辺から剥離を行っている。

（2）古代～中世の調査　①掘立柱建物**SB25**（Fig.35）調査区北東で一部を検出した。3＋α×1＋α間3.6＋α×1.9＋αmを測り、方位はN－78°－Wと地形・磁北に合う。梁間・桁行1.0～1.3mを測り、底面は傾斜に平行する。堀方は径30～40㎝を測る。

②焼土壙**SK111**（Fig.35 Ph.47）は、調査区中央に位置し1.6×1.0m深さ19㎝を測るB類。軸は地形・磁北に合う。床上5～10㎝以上の壁面が焼ける。

③溝**SD114**は調査区東端落ちの底に地形に直交して北に流れる。覆土は暗灰褐色土～灰色粗砂礫で激しく流れている。SB25を切る。

（3）近世の調査　①廃石土壙**SK112**（Fig.35 Ph.48）は調査区西部に位置し1.2×1.0m深さ20㎝以上を測る。60㎝程の自然礫を打ち割り岩屑とともに集め、掘り込んだ壙内に埋め込んでいる。覆土は灰色砂質土。

Ph.49　11～13区全景（南西から）

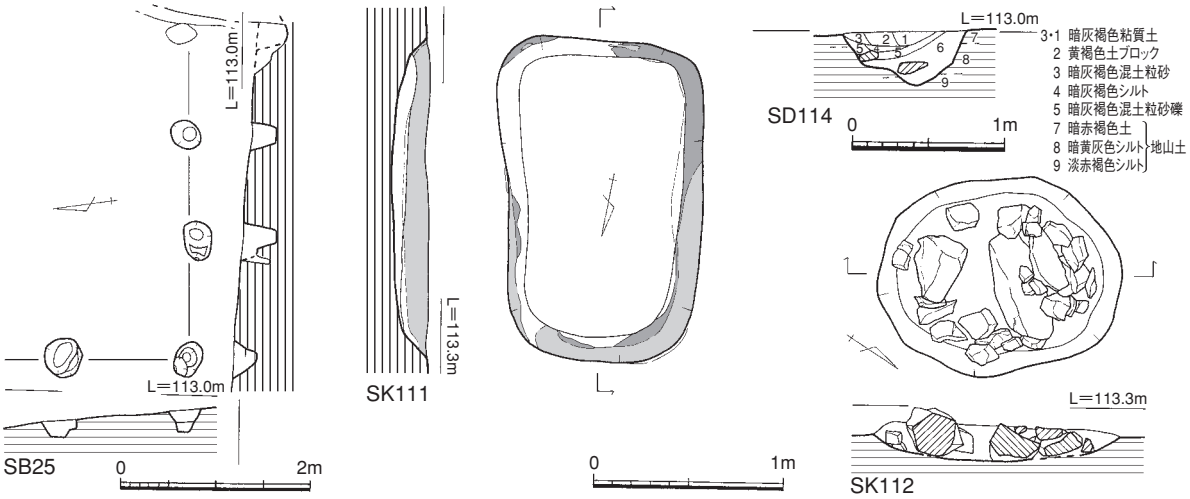


Fig.35　11区遺構実測図（1/50・1/40・1/80）

8．12・13区の調査

第12区・13区は第11区の田面を1枚はさんで北側7mに位置し、調査面積は12区で274㎡、13区で170㎡。検出面の標高は12区で111.5m、13区で111mで南から北に緩傾斜する。

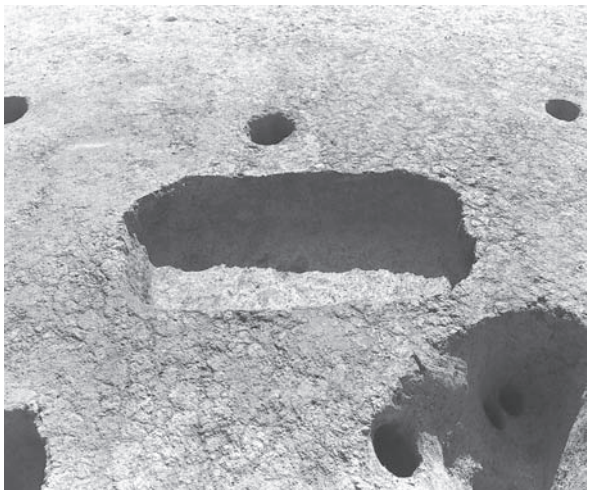
1）12区の調査（Fig.36 Ph.49）

2段の田面からなる。縄文包含層は遺存しない。遺構は縄文時代の倒木痕3基、古代～中世の掘立柱建物1棟・柱穴・焼土壙3基・土壙2基・溝1条・倒木痕1基、近世で廃石土壙1基・畝溝3

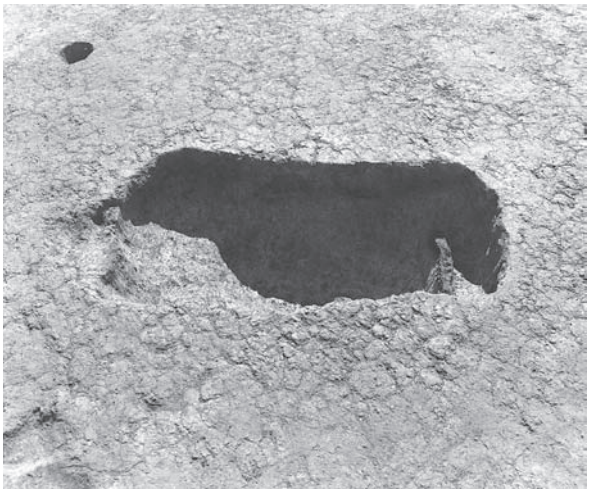
Fig.36　12・13区遺構全体図（1/200）

条・柱穴を検出している。

（1）縄文時代の調査　出土遺物（Fig.39）54は倒木痕SX126出土のサヌカイト剥片。風化が進み淡灰色を呈す。旧石器。55は倒木痕SX127出土の黒耀石製使用剥片。縦長剥片の左辺・下辺を使用。風化がやや進む。56はT16SP1出土サヌカイト製石鏃。先端・片脚を欠損。24㎜。57はU16SP1出土サヌカイト縦長剥片。風化が進み淡灰色を呈す。旧石器。



Ph.50　12区 SK121（北から）



Ph.51　12区 SK122（北から）

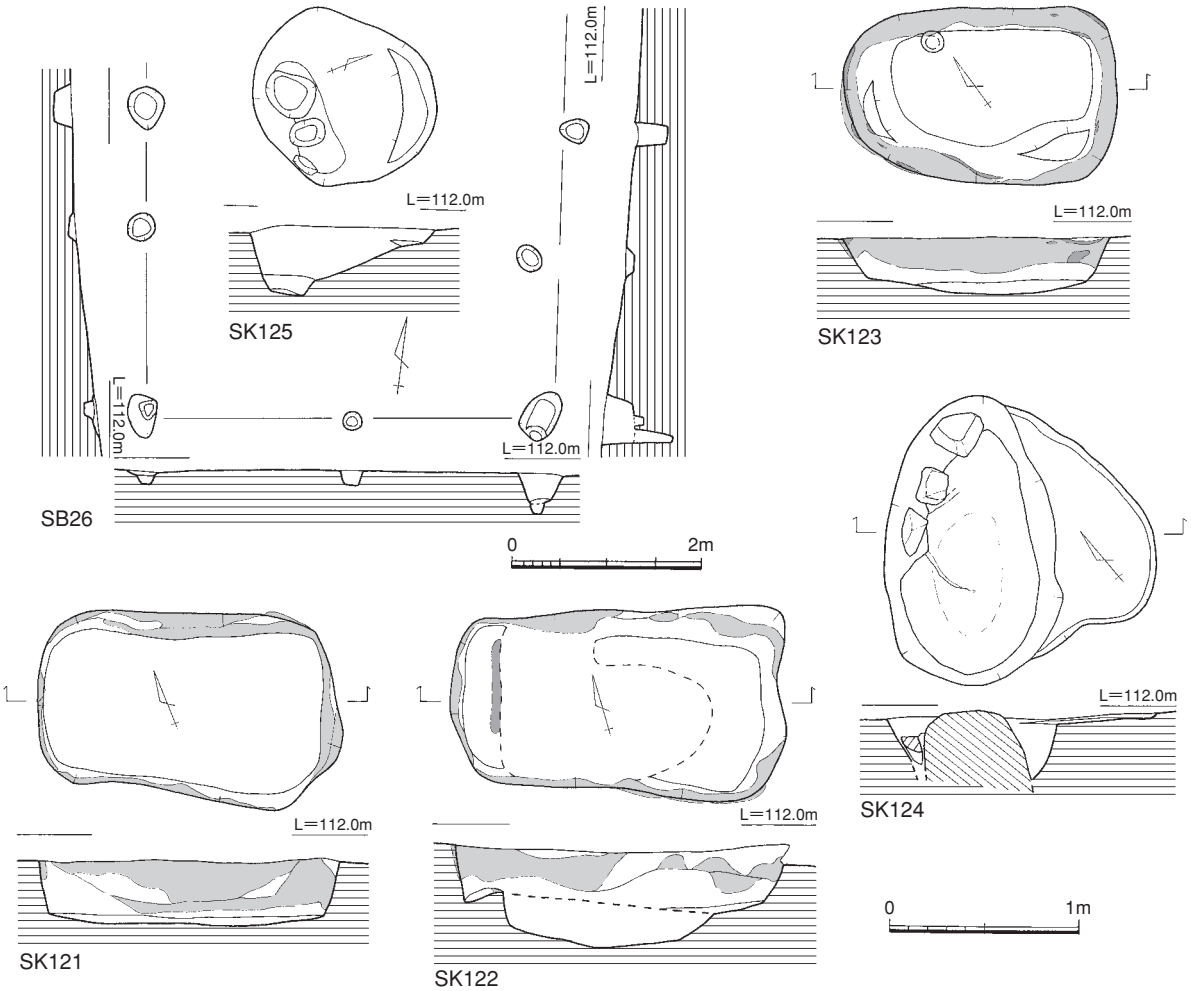


Fig.37　12区遺構実測図（1/80・1/40）

（2）古代～中世の調査

①掘立柱建物**SB26**（Fig.37）2＋α×2間4.5＋α×4.3＋αmを測り、方位はN－6°－Wと地形・磁北に合う。梁間・桁行1.2～2.0mを測り、堀方は径25～40㎝を測る。

②焼土壙**SK121**（Fig.37 Ph.50）は、調査区東部に位置し1.5×0.9ｍ深さ34㎝を測るＢ類。軸は地形・磁北に合う。床近くから上位の壁面が焼ける。**SK122**（Fig.37 Ph.51）は1.7×0.9ｍ深さ30㎝を測るＢ類。軸は地形・磁北に合う。床面10㎝程から上位の壁面が焼ける。出土炭化材のＡＭＳ年代はAD650～730である（付編）。SB121と切り合う。**SK123**（Fig.37 Ph.52）は、調査区西部に位置し1.4×0.9ｍ深さ30㎝を測るＢ類。軸は地形に平行する。床面10㎝程から上位の壁面が焼ける。

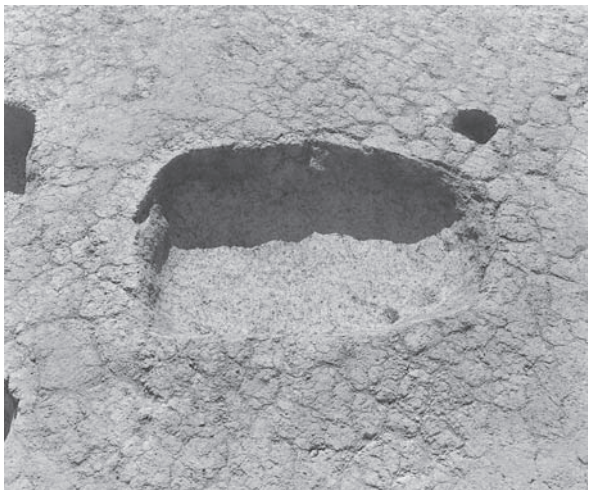
③溝は調査区西端の地形変換線に沿う。幅1.2m・深さ15㎝程。覆土は暗灰褐色土で遺物は無い。

④出土遺物（Fig.39）58はSX125出土龍泉窯系青磁碗Ⅴ類。口径11.8㎝。鈍い黄橙色を呈す。

（3）近世の調査　①廃石土壙**SK124**（Fig.37 Ph.53）は調査区中央南部に位置し1.4×1.4ｍ深さ36㎝以上を測る。150㎝程の自然礫を掘り込んだ壙内に縦に埋め込んでいる。覆土は灰色砂質土。

2）13区の調査（Fig.36 Ph.49）

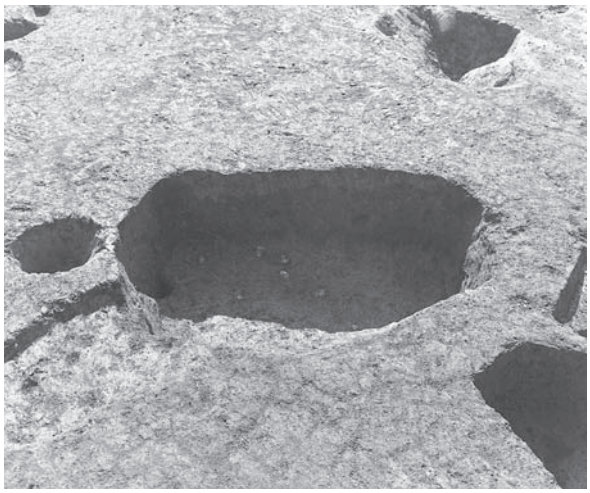
1面の田面からなる。縄文包含層は遺存しない。遺構は縄文時代の倒木痕等9基、古代～中世の掘立柱建物1棟・柱穴・焼土壙3基・溝3条、近世で畝溝等3条を検出した。



Ph.52　12区 SK123（北から）

Ph.53　12区 SK124（北から）

Ph.54　13区 SK132（東から）



Ph.55　13区 SK133（北から）

（1）縄文時代の調査　出土遺物（Fig.39）59は混入の黒耀石製使用剥片。下辺を使用。

（2）古代～中世の調査　①掘立柱建物**SB27**（Fig.38）3×2間6.3×5.3mを測り、方位はN－22°－Eと地形に直交する。梁間2.7～2.8・桁行2.40mを測り、堀方は径30～45㎝を測る。

②焼土壙**SK132**（Fig.39 Ph.54）は、SB27と切り合う。1.5×1.0ｍ深さ38㎝を測るＡ類。軸は地形に直交。床近くから上位の壁面が焼ける。**SK133**（Fig.39 Ph.55）は、132の西1.5mに位置し1.7×1.0ｍ深さ54㎝を測るＢ類。軸は地形に直交。床面10㎝程から上位の壁面が焼ける。

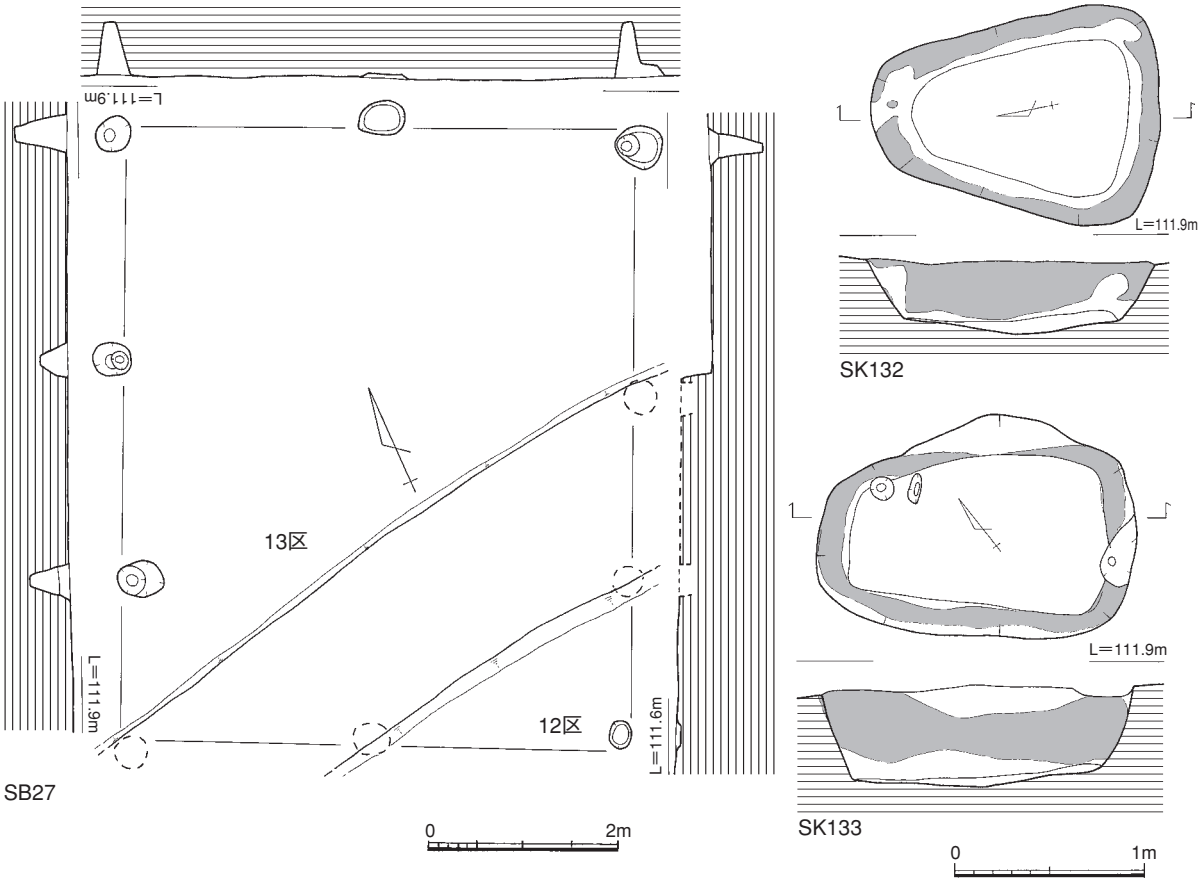


Fig.38　13区 SB27・SK132・133 実則図（1/80・1/40）

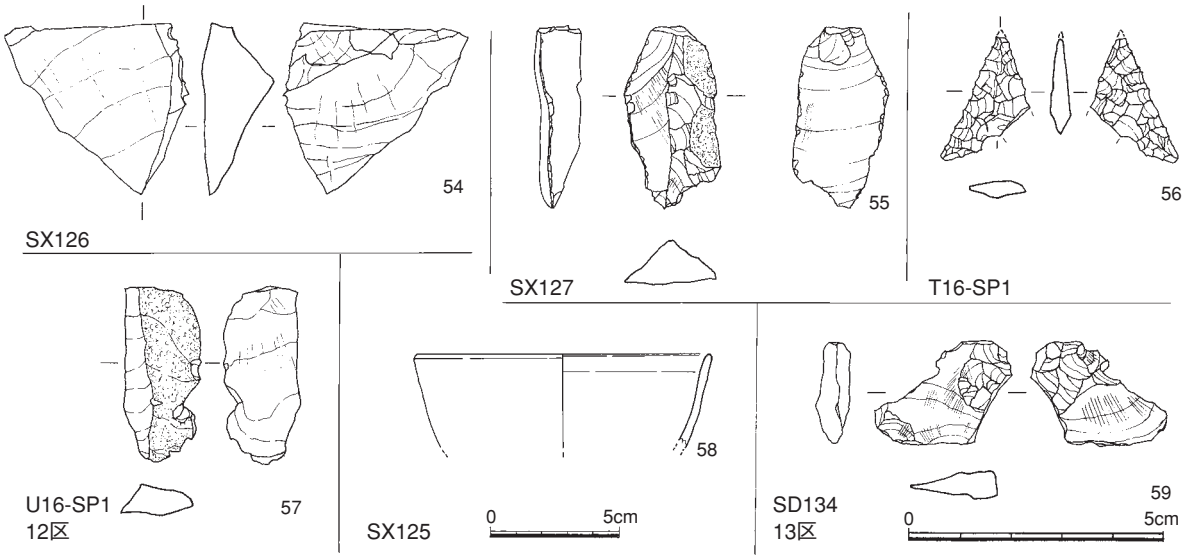


Fig.39　12・13区出土遺物実測図．1（2/3・1/3）

9．14区の調査

第14区は丘陵先端近くの鞍部に位置する最大規模の調査区で、調査面積は930.5㎡、検出面の標高は108～109.5mで田面の東西２面の平坦部と東西両端の丘陵斜面からなる。検出した遺構は縄文時代の倒木痕・流路等36基・東部の上段鞍部の中世整地層下で包含層を、古代～中世の掘立柱建物２棟・柱穴・焼土壙10基・不整土壙３基、近世で不整土壙６基・畦溝９条以上柱穴を検出した。

（1）縄文時代の調査　①包含層（Fig.41）　東部の上段鞍部の中世整地層下で包含層を検出した。

Fig.40　14区遺構全体図（1/250）

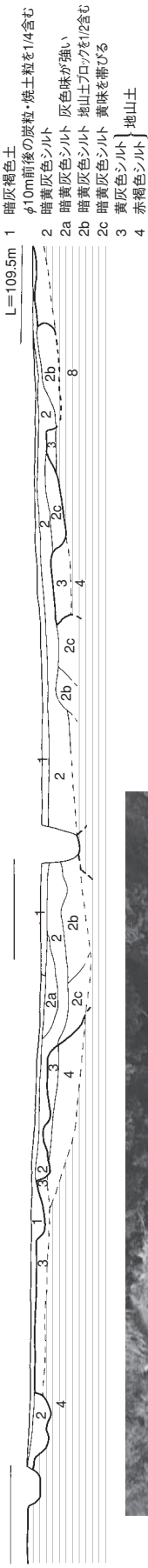


Fig.41　トレンチ土層断面図（1/50）

焼土粒混じりの暗灰褐色土（1層）下、暗黄灰色シルト（2a～c層）が30㎝程堆積する。

出土遺物（Fig.42）60～62は晩期土器。61は精製浅鉢。器面は摩滅し胎土は金雲母赤色粒はじめ1㎜以下の砂粒を含む。62は粗製深鉢で山形口縁を成す。器面は摩滅し胎土は金雲母はじめ5㎜以下の砂粒と気泡を多く含む。63は円盤貼付底部。径9㎝。器面は摩滅し胎土は金雲母はじめ5㎜以下の砂粒を多く含む。64はサヌカイトの使用剥片。横長剥片の下辺を使用する。風化が進み灰白色を呈す。旧石器で、左半を欠損し、ナイフ形石器の可能性もある。

②その他の出土遺物（Fig.42）64～66は柱穴出土。64・65は晩期粗製土器。64は外面に貝殻条痕を65は器面が摩滅。ともに2㎜以下の砂粒と気泡を多く含む。66は外面ヨコ条痕後内外にヨコナデ。胎土に5㎜以下の砂粒を多量に含む。早期。67～70は整地層混入資料。67は緑泥片岩製磨製石斧片。68～70はサヌカイト製。68はスクレーパーで縦剥ぎ剥片の左辺に両面剥離で刃部を形成。69は縦型の石匙。縦長剥片の下位両辺にノッチを入れ摘みとし、右辺の主剥離側からの二次剥離で刃部を形成する。70は風化の進んだ淡灰色を呈する剥片で旧石器。

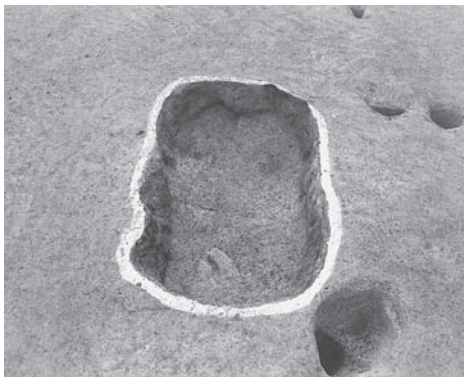
（2）古代～中世の調査

①掘立柱建物**SB28**（Fig.43）　調査区東部の丘陵鞍部、焼土粒混じりの暗灰褐色土整地層（Fig41・1層）上で検出。四面庇付の身舎で3×2間6.7×4.2ｍ庇で4×4間8.4×6.2mを測る側柱建物で、本調査での中心施設である。方位をN－85°－Wにとり、磁北に近い。庇は四方に0.8～1.4m程延びる。堀方は円形で径30～65㎝を測り、深さ30～80㎝と残りがよい。柱は径15㎝前後である。遺物は中国陶磁器・土師器坏・皿等を検出した。

Ph.56　14区全景（南から）

出土遺物（Fig.46 Ph.68）71は白磁Ⅳ類碗。口径15.4㎝。72は白磁四耳水注。灰色の胎土に灰オリーブの透明釉を掛ける。74・75は土師器坏。口径15.2～15.4器高2.5～2.6㎝。76～78は皿。口径8.4～9.2器高0.9～1.3㎝。全て糸切りで75・76・77は板圧痕がある。78は灯明皿に使用。79は東播系捏鉢。12世紀末～13世紀初。

SB29（Fig.43）28に重なり、整地層下で検出した。3×2間7.7×5.8mを測り、方位はN－22°－Eと地形に沿う。梁間2.5～3.2・桁行2.3～2.8mを測り、堀方は径25～45㎝を測る。

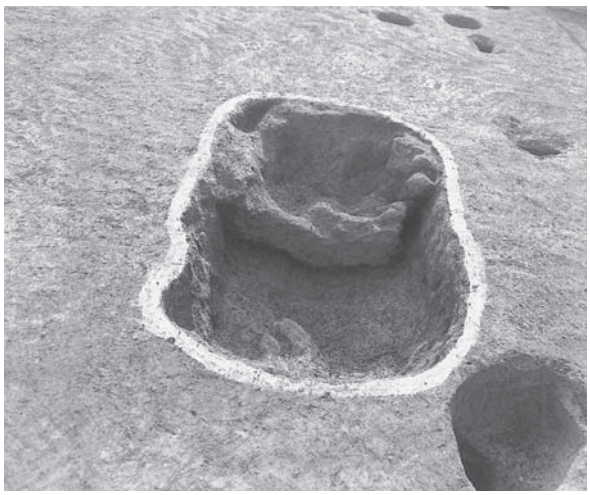


Ph.57　14区 SK143（北から）

上面を焼土混じりの整地層が覆っており、焼亡後整地し、SB28を建設している。

出土遺物（Fig.46 Ph.68）　柱穴内に図化可能な資料は無く、80～88は上面の整地層出土資料。80は口禿げ白磁碗底部で13～14世紀混入資料。81は龍泉窯系青磁Ⅰ類碗。口径15.2㎝。82・83は同安窯系青磁皿。84は陶器長瓶緑褐色の不透明釉を内外に掛ける。口径6.6㎝。85～87は土師器。85は坏。口径12㎝弱で13～14世紀混入資料。86・87は皿で86は口径8.6器高1.1㎝。板圧痕がある。87は口径7.0器高1.2㎝。88は東播系捏鉢。12世紀後半～末。

Ph.58　SK143 上面焼土（西から）



Ph.59　SK143 上面焼土断面（北から）

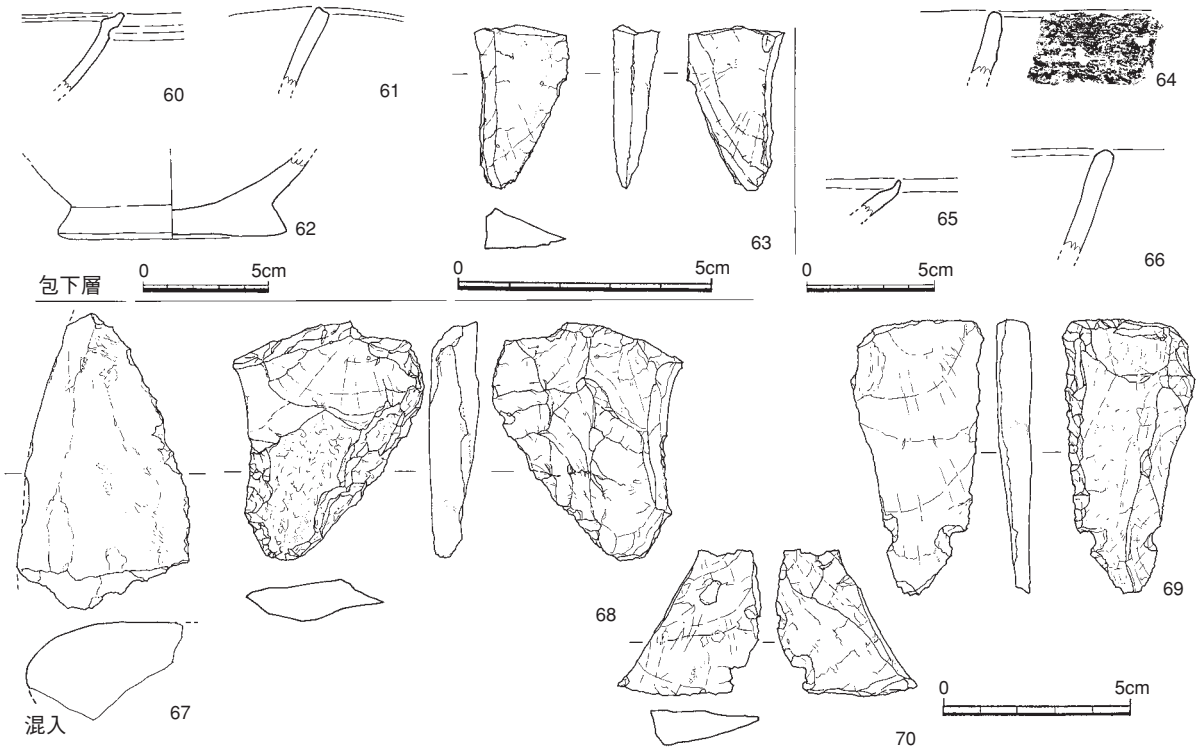


Fig.42　14区出土縄文遺物実測図（1/3・2/3・1/2）

②焼土壙　丘陵鞍部の直交方向に直線的に並ぶ3基と西側斜面に平行に並ぶ7基を検出した。

SK141（Fig.45）西側斜面に直線的に並ぶ一群の北端に位置し、1.2×0.9ｍ深さ9㎝を測る小型のA類で削平が深い。軸は地形・磁北に沿う。床上5㎝程から上位の壁面が焼ける。

SK143（Fig.45 Ph.57～59）西斜面中央に位置し1.6×0.8ｍ深さ40㎝を測るＢ類。軸は地形に平行する。床上に堆積した炭灰層上に焼土が5～10㎝程全面的に覆い、焼土壁が二重となる。上面ほど堅く焼け内面から火熱を受けている。

SK142（Fig.45 Ph.60）143の北2.5mに位置し1.8＋α×1.1ｍ深さ19㎝を測るＤ類。軸は地形に直交する。浅い床面は西に下がり焼土壁が部分的に残る。

SK144（Fig.45 Ph61）143の南8mに位置する1.9×14ｍ深さ69㎝を測る大型のＢ類で残りは良い。軸は地形に平行。床上15㎝程から上位の壁面が焼けが25㎝程から上は自然に大きく崩落する。

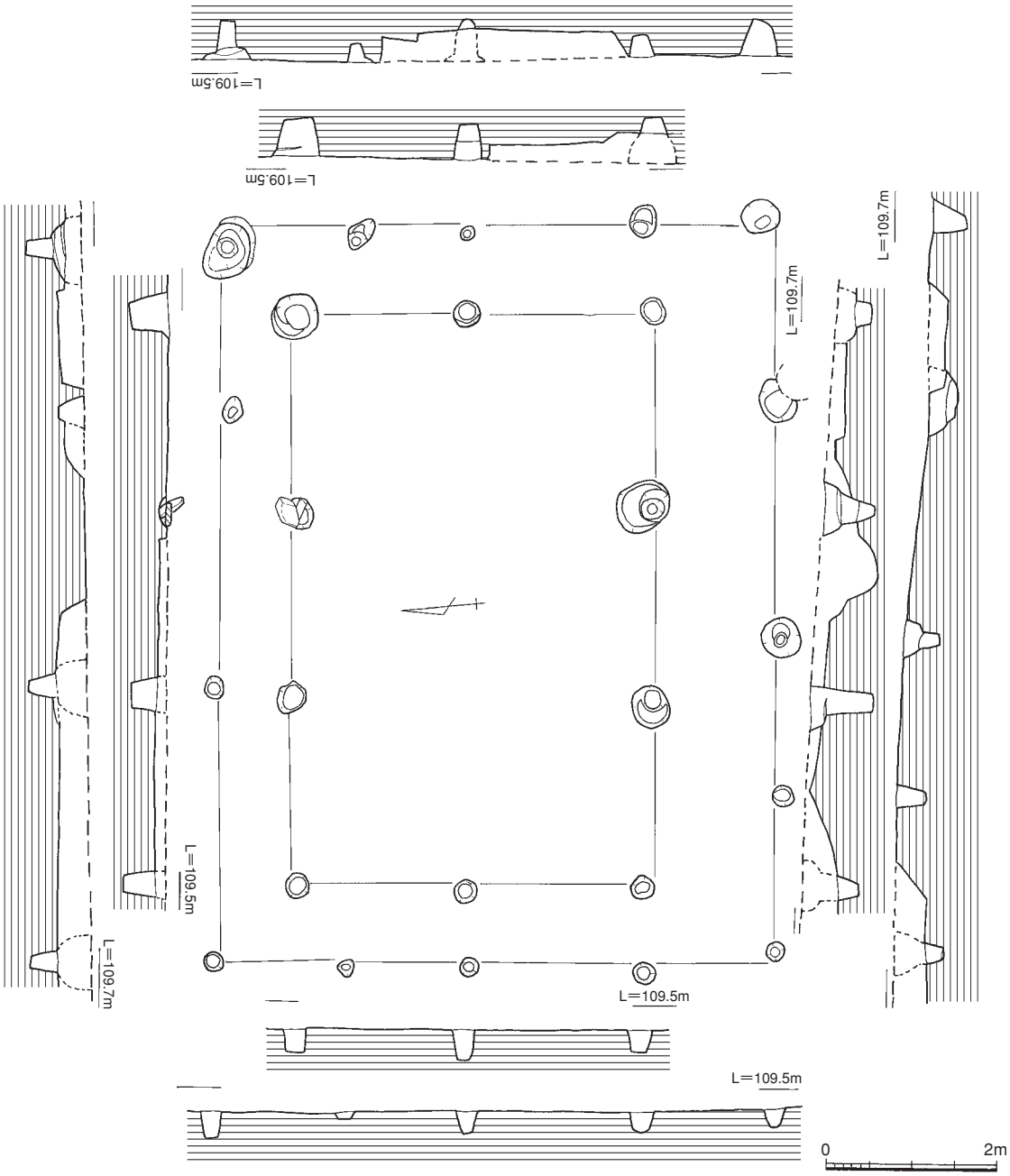


Fig.43　14区 SB28 実測図（1/80）

SK145（Fig.45 Ph.62）144の南1.5mに位置し2.0×1.3ｍ深さ55㎝を測る大型のＢ類。軸は地形に平行。床面は船底形で15㎝程から上位の壁面が焼ける。

SK146（Fig.45 Ph.63）145の東４ｍに位置し東西方向に並ぶ一群の西に位置する。1.5×0.8ｍ深さ25㎝を測るＡ類。軸は地形に平行。床上で５㎝程から上位の壁面が焼ける。

SK147（Fig.45 Ph.64）145の南3.5mに位置し1.8×1.1ｍ深さ34㎝を測るＡ類。軸は磁北の直交方向に近い。床面の一部と床近くから上位の壁面が焼ける。

SK148（Fig.45 Ph.65）147の南７ｍに位置し1.5×0.8ｍ深さ20㎝を測るＡ´類。軸は地形に直交する。床上５㎝程から上位の壁面が焼ける。

SK149（Fig.45 Ph.66）146の東10mに位置し東西方向に並ぶ一群の中央に位置する。1.7×1.0ｍ

Ph.60　14区 SK142（東から）

Ph.61　14区 SK144（北から）

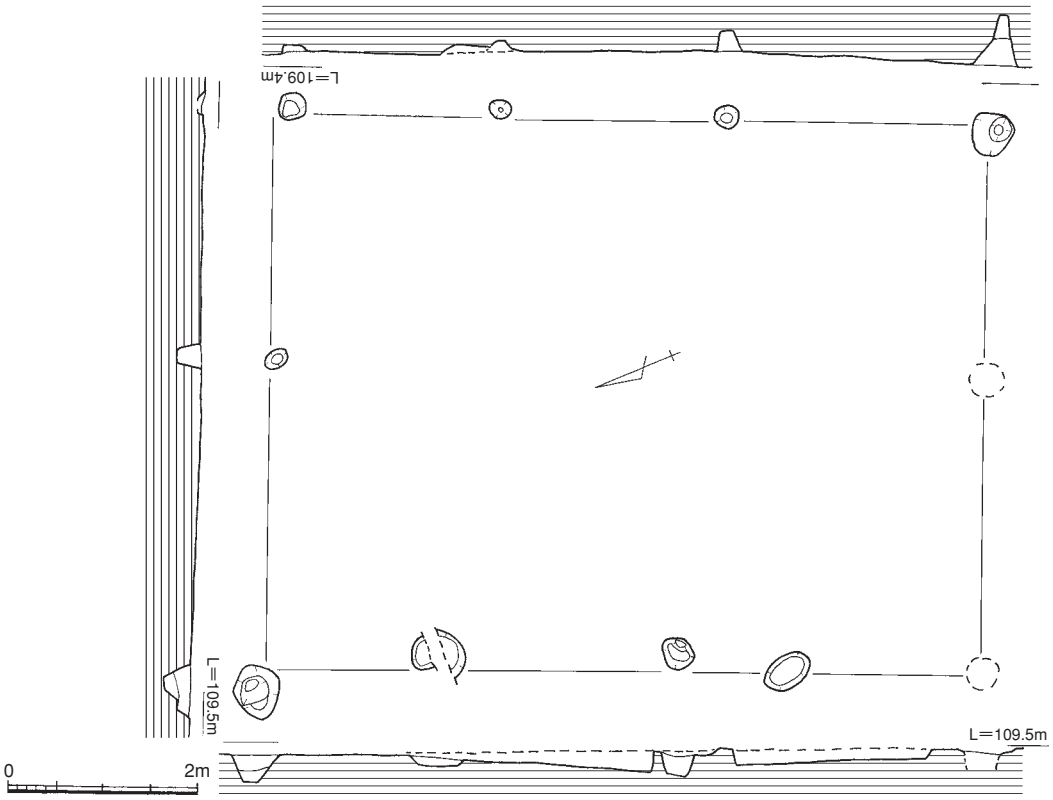


Fig.44　14区 SB29 実測図（1/80）

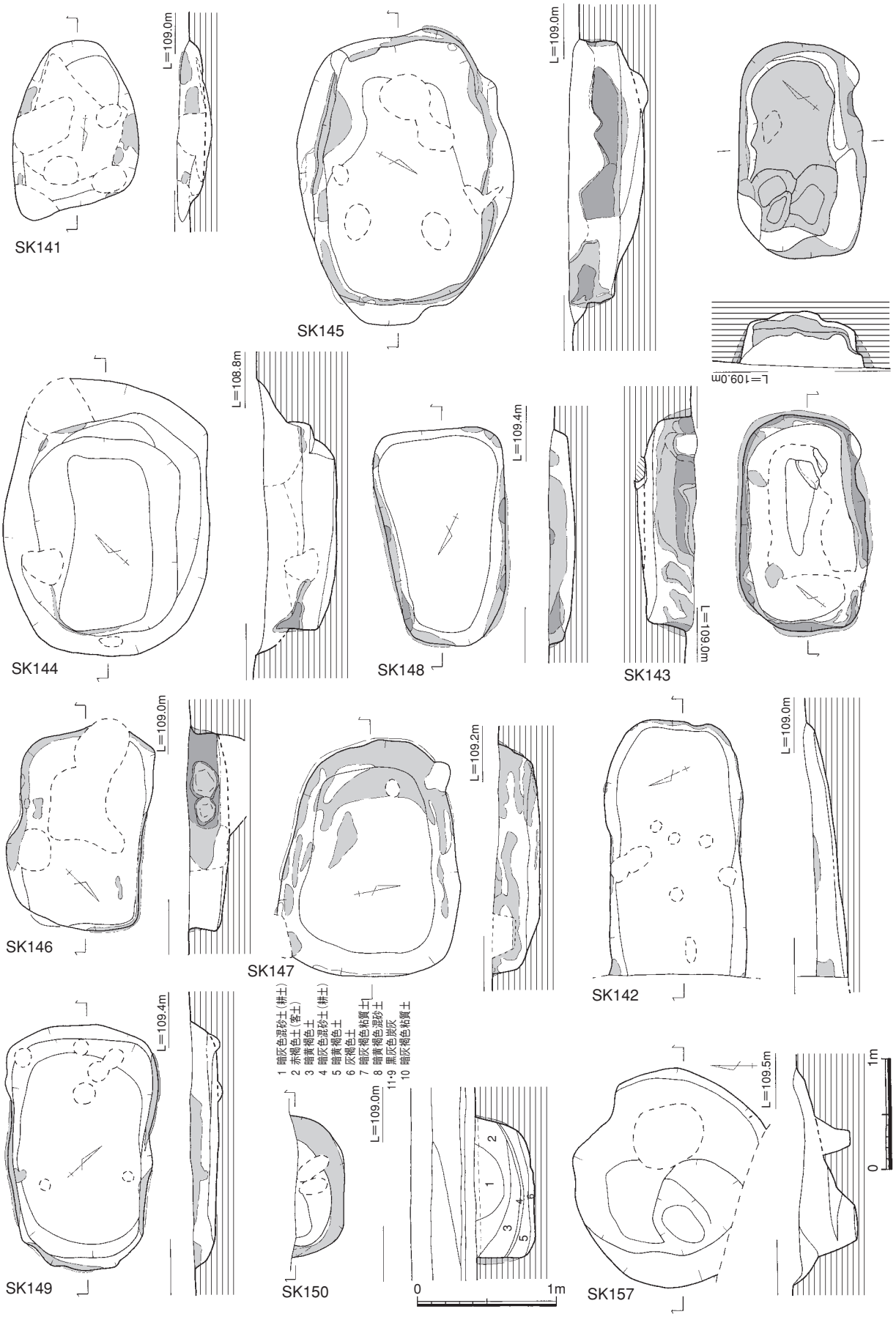
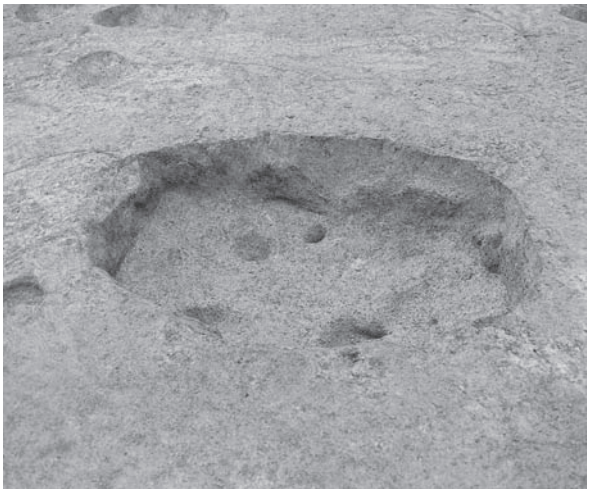


Fig.45　14区土壙実測図（1/40）

深さ20㎝を測るＢ類。軸は地形に直交する。床上10㎝程から上位の壁面が焼ける。

SK150（Fig.45 Ph.67）149の東９ｍに位置し東西方向に並ぶ一群の東端に位置する。0.3＋α×1.0ｍ深さ30㎝を測る。軸は地形に直交する。床直上と10㎝程から上位に炭灰層（４・６層）があり２度操業される。床上10㎝程から上位の壁面が焼ける。



Ph.62　14区 SK145（西から）

Ph.63　14区 SK146（東から）

Ph.64　14区 SK147（西から）

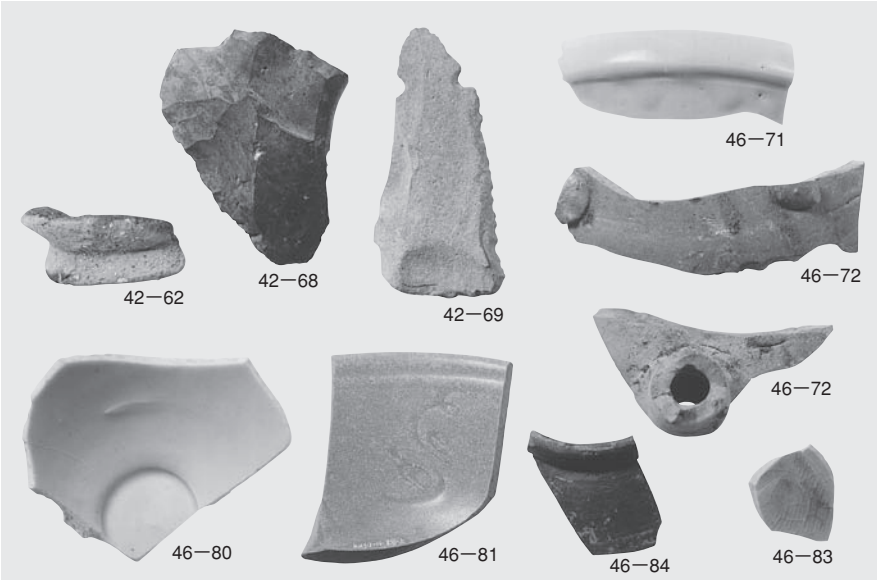
Ph.65　14区 SK148（北から）

Ph.66　14区 SK149（北から）

Ph.67　14区 SK150（西から）

③土壙　焼土壙の丘陵鞍部に直線的に並ぶ一群のSK146・149間にSK158が、西側斜面に平行に並ぶ一群のSK145・147間にSK159が位置し、ともに上端近くまで炭灰が堆積する。焼土壙内の不要な炭灰を処理した土壙と思われる。

（3）近世の調査　①畑畝溝（Fig.40）　東部上段に東西方向に幅40～50㎝長さ3m程の小溝**SD153～156**が2.5～3mの等間隔にSB28を切って4条並ぶ。等高線に平行に、長さ6m前後幅40㎝前後の溝5～6条程が1ブロックで、4ブロックが並んで検出される。覆土は灰色砂質土で、土師器坏皿小片等と縄文遺物が混入する。段丘礫層が深いためか廃石土壙は検出されない。



Ph.68　14区出土遺物

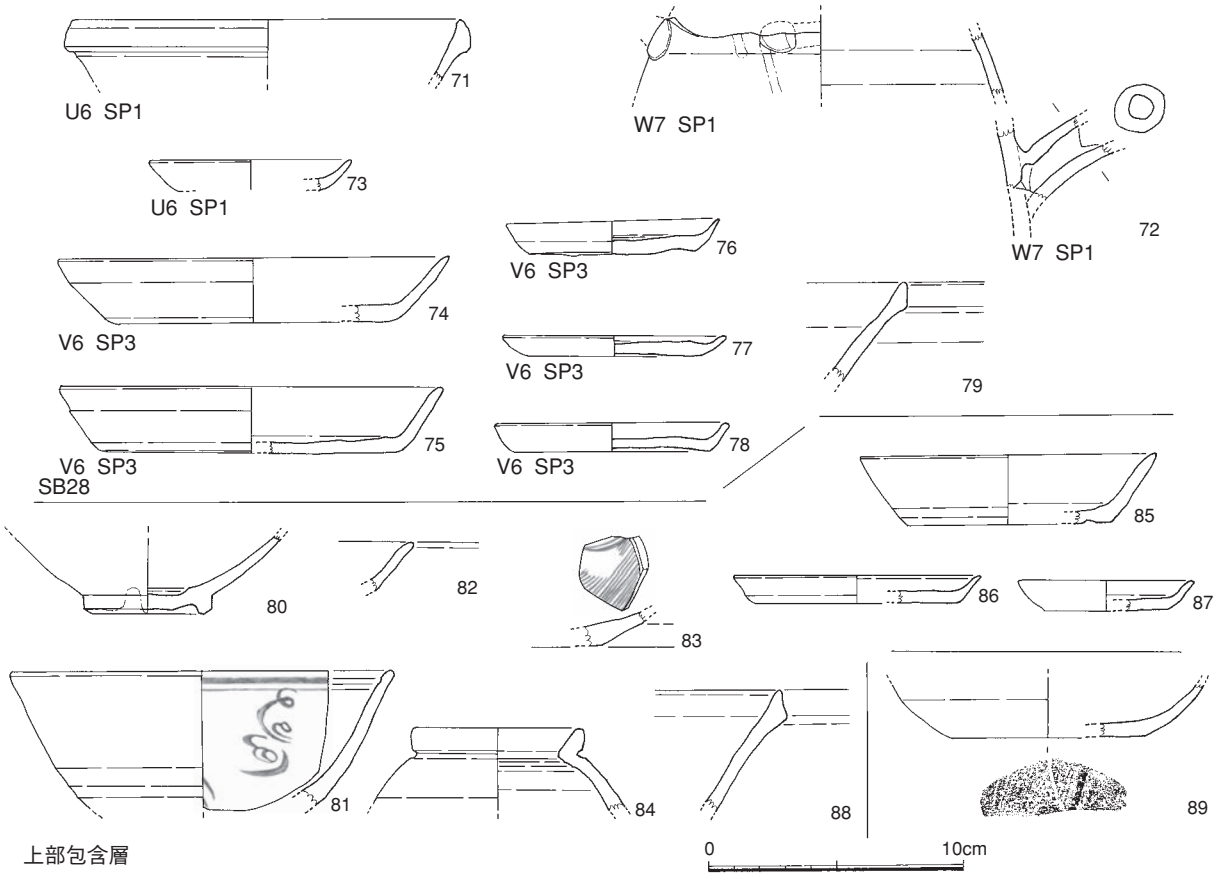


Fig.46　14区出土中世遺物実測図．1（1/3）

Ⅲ．小結

今回の調査では、南の１区から丘陵先端部、北側の14区まで、試掘調査を含め延べ10,800㎡の調査を実施し、縄文時代の包含層・土壙２基・柱穴・倒木痕89基・流路８条、古代～中世の整地面・溝17条・焼土壙47基・土壙27基・掘立柱建物29棟他柱穴多数・倒木痕５基、近世の溝62条・土壙33基・水田開墾時の廃石土壙14基・開田以前の畑畝溝多数・柱穴・倒木痕13基を検出し、面積に比して遺構は少ない。

遺物は、旧石器、縄文時代早期押型文・撚糸文土器・石鏃 ・晩期土器・石器を、中世整地層・溝を中心に12～15世紀代の土師器坏・皿・貿易陶磁器等をコンテナ３箱分と少ない。

旧石器時代は後世の混入資料として石核・細石核・剥片等が少量検出される。平成17年実施した第２次調査では三稜尖頭器を検出している。周辺の広瀬・馬立山・峯・脇山遺跡等、内陸部の遺跡として良好なフィールドとなっている。

縄文時代は広瀬遺跡同様、早期押型文期・晩期黒川式を中心とするが、明確な生活遺構はほとんど無く、早期で土壙１基、遺物も少量で、広瀬遺跡よりさらに生活痕跡は希薄である。定型石器も該期を主体に石鏃以外はほとんど無く、使用痕剥片が主体である。石鏃10点中使用不能に近い破損品は７点で破損率は70%、広瀬遺跡１次調査で23点中10点で43%、松木田遺跡で138点中48点で35%と生活痕跡の多い遺跡では低く、狩猟具とその破損率の高率さから、本遺跡が生活域ではなく狩猟域であることを示している。晩期においても同様で土壙１基で、第２区の炭粒を多く含む包含層の炭粒ANS分析結果はBC1400～1250・BC1420～1290で、黒川式古期の鹿児島県上野原遺跡のBC1400～1110に近い。広瀬遺跡の晩期に撹乱されたG11グリッド包含層検出炭粒の結果はBC510～460で、夜臼Ⅰ式期板付遺跡のBC550～390・夜臼Ⅱb式期菜畑遺跡８上層のBC820～550・那珂君休遺跡のBC790～550に近い。また本遺跡倒木痕89基中、時期が明確なのは晩期の２基のみで、広瀬遺跡同様、生産域として晩期に開墾された可能性を示している。

遺跡の中心となる時期は古代～中世で、掘立柱建物29棟他多くの遺構を検出し、集落を形成する。

掘立柱建物は全て側柱建物で、調査区先端の14区丘陵鞍部で12世紀後半～末の整地層下の２×３間SB29を最大に５区１×２間SB12を最小として全域に分布し、３～９区の主丘陵南東に20棟が集中する。間口１間桁行２～４間の細長い建物が12棟あり、倉庫と目される。主軸方向が地形に規制されるものと磁北に規制されるものとがあり、後者が17棟と６割を占め、両者が切り合う関係にはある。14区で地形に沿う12世紀後半～末廃絶のSB29が、磁北に規制される12世紀末以降のSB28に切られるが、これが全ての建物に適用できるか判然としない。居館と考えられる500m程北に位置する広瀬遺跡１次調査１区と同時期である。遺物は14区にややまとまるものの、他は伴わない。溝・検出面等で14世紀初めまでの資料が散見され、この時期まで一分存続した可能性があるが、遺物の出土量から長期間居住した状況ではなく、短期間で廃絶したものとおもわれる。要因としては広瀬遺跡同様、13世紀初めの水害が考えられ、13世紀以降拠点集落は東丘陵上の峯遺跡に移行する。

焼土壙は全域で計47基検出し、２・５・６・７・14区で地形に沿って直線的に並ぶ傾向が伺える。時期は集落が形成される12世紀後半前後が主と考えていたが、３基分の炭のAMS分析の結果はAD650～820と予想を遙かに上回る古さで、該期の資料は全く見られない。一方峯遺跡ではAD1000～1560の年代値がえられ、本遺跡と大きくかけ離れる結果となっている。細かな検討は18年度「上広瀬２」で併せて行いたい。

Tab.5　1区遺構一覧表

遺構番号	グリッド	種　別	時　期	規模/縦×横(m)×深さ(cm)	主な出土遺物	備　　考	写真番号	挿図番号
SK01	S40	焼土壙	古代～中世	0.25×0.9×32.0	炭		5	6
SB01	Q41	掘立柱建物	古代～中世	5.5+α×2.6（5×2間）		SX05と切り合い		5
SX02	Q41	倒木痕	11C前半	1.2+α×1.2×4.0	炭　土	AMS	4	3
SX03	S41	暗梁	中世末～近世初	8.0+α×3.8+α×62.0	土師器(坏・Ⅲ・鍋・甕) 瓦質　須恵器　縄文(粗製) 白磁　青磁　陶器(碗・甕) 黒耀石(fl)		6	6
SX04	S41	倒木痕	中世末～近世初	3.5×1.5+α×28.0	土師器			6
SX05	R41	暗梁	中世末～近世初	2.3×1.1×29.0	縄文　土師器	SB01と切り合い		6
SX06	R41	倒木痕	縄文晩期	3.3+α×1.3×24.0	土器　炭			3

Tab.6　2区遺構一覧表

遺構番号	グリッド	種　別	時　期	規模/縦×横(m)×深さ(cm)	主な出土遺物	備　　考	写真番号	挿図番号
SK07	U38	焼土壙	古代～中世	1.5×1.4×57.0	炭		10	9
SK08	W38	焼土壙	古代～中世	1.1×1.0×16.0	炭		11	9
SD09	V38	溝	中世	5.0+α×0.6×13.0	土師器			8
SX10	T38	自然流路	中世	9.5+α×2.5+α×11.0	黒耀石（石鏃）			8
SX11	T38	自然流路	中世	12.0+α×2.0×22.0	縄文(粗製) 弥生(壺?) 黒耀石(fl・石鏃)			

Tab.7　3区遺構一覧表

遺構番号	グリッド	種　別	時　期	規模/縦×横(m)×深さ(cm)	主な出土遺物	備　　考	写真番号	挿図番号
SK12	F46	焼土壙	古代～中世	1.5×1.0×25.0			14	13
SK13	F46	廃石壙	近世	1.2×1.2×48.0				14
SK14	D44	焼土壙	7C後～9C初	1.6×1.1×27.0	炭	AMS 樹種同定(シイノキ属)	15	13
SK15	F45	廃炭壙	中世	2.1×1.6×22.0	黒耀石（fl）			
SK16	B45	廃石壙	近世	1.4×1.2×26.0			17	14
SK17	F44	焼土壙	古代～中世	1.9×1.0+α×56.0	炭　土師器　黒耀石（fl）	SB03と切り合い	15	13
SK21	E44	土壙	古代～中世	1.3×0.9×14.0	縄文（粗製）	SB03と切り合い		
SK22	D46	廃石壙	近世	1.3×0.7×26.0				14
SK23	D46	廃石壙	近世	0.9+α×0.7×18.0				
SK46	G47	廃炭壙	古代～中世	1.0+α×1.0×13.0				
SK47	B45	廃石壙	近世	1.2×0.9×15.0				
SK48	D44	廃石壙	近世	1.9×0.8×24.0				
SD24	E46	畦溝	近世	1.6×0.3×18.0	黒耀石（ufl）			
SD25	F46	畦溝	近世	1.8×0.2×8.0	黒耀石（fl）			
SB03	E44	掘立柱建物	古代～中世	6.8+α×4.1+α(2+α×2+α間)		SK17・21と切り合い		12
SB04	C45	掘立柱建物	古代～中世	5.2×5.1(4×4間)				12
SX18	B44	流路	縄文	1.4×0.6×9.0	縄文（粗製）			
SX19	E45	包含層	縄文	8.3+α×1.1×19.0	土　黒耀石（ufl）石器（fl）			
SX20	D45	倒木痕	縄文	3.0×2.9×3.0	黒耀石（fl・ufl）			
SX45	C45	倒木痕	縄文	2.5×1.1×43.0				

Tab.8　4区遺構一覧表

遺構番号	グリッド	種　別	時　期	規模/縦×横(m)×深さ(cm)	主な出土遺物	備　　考	写真番号	挿図番号
SK26	B43	焼土壙	古代～中世	1.0+α×1.4×6.0			19	15
SK27	C42	焼土壙	古代～中世	1.0+α×1.0×40.0		SB07・08と切り合い	18	15
SK30	F42	土壙？	縄文	1.8×0.8×11.0	縄文（楕円押型文）			15
SK32	E43	廃石壙	近世	0.7+α×0.6×30.0				15
SB05	E42	掘立柱建物	古代～中世	4.0×2.3(2×1間)		SB06と切り合い		15
SB06	E43	掘立柱建物	古代～中世	3.4×2.3(2×1間)		SB05と切り合い		15
SB07	C42	掘立柱建物	古代～中世	4.0×3.6+α(2×1間+α)		SB08・SK27と切り合い		15
SB08	B・C42	掘立柱建物	古代～中世	5.7+α×4.9+α(2+α×2+α間)		SB07・SK27と切り合い		15
SD29	F42	畦溝	近世	9.7×0.5×7.0	黒耀石（fl）土師器(坏・Ⅲ)			
SD31	E42	畦溝	近世	13.6×0.4×8.0	縄文（粗製）			
SD33	D43	畦溝	近世	3.2+α×0.5×4.0	サヌカイト（fl）土製品（焼工）			
SX28	E43	倒木痕	縄文	2.0×1.1×17.0	黒耀石（石器）			
SX34	D42	倒木痕	中世？	1.5×0.7×13.0	土師？（鍋？）			

Tab.9　5区遺構一覧表

遺構番号	グリッド	種　別	時　期	規模/縦×横(m)×深さ(cm)	主な出土遺物	備　　考	写真番号	挿図番号
SK35	C40	焼土壙	古代～中世	1.5×0.9×19.0			22	19
SK36	H39	焼土壙	古代～中世	1.1+α×1.0×44.0	炭	SB09と切り合い	23	19
SK37	F40	焼土壙	7C後～8C後	1.6×0.9×45.0	炭	AMS	24	19
SK38	C40	廃石壙	近世	2.1×1.6×5.0	黒耀石（ufl）			19

SK39	I41	焼土壙	古代～中世	0.4+α×0.3+α×17.0				
SK41	E40	焼土壙	古代～中世	1.2×0.9×42.0	縄文（粗製）黒耀石（fl）			
SK43	I40	土壙？	縄文	0.6+α×0.7×10.0	縄文（粗製）			
SD40	C39	畦溝	近世	3.1×0.4×11.0	縄文（粗製）サヌカイト(fl) 黒耀石(fl)			
SD42	F39	畦溝	近世	11.4×0.5×23.0	縄文（粗製）黒耀石（fl）			
SD44	F41	畦溝	近世	1.5×0.3×7.0	黒耀石（調整fl）			
SB09	H40	掘立柱建物	古代～中世	3.6×1.8（2×1間）		SK36と切り合い		18
SB10	G40	掘立柱建物	古代～中世	4.4×4.0+α(2×1+α間)		SB11と切り合い		18
SB11	E·F39	掘立柱建物	古代～中世	5.1+α×3.9+α(2+α×2+α間)				18
SB12	C40	掘立柱建物	古代～中世	3.9×1.5（2×1間）				18

Tab.10　6区遺構一覧表

遺構番号	グリッド	種　別	時　期	規模／縦×横(m)×深さ(cm)	主な出土遺物	備　　考	写真番号	挿図番号
SK61	A38	焼土壙	古代～中世	0.5+α×0.5×4.0				
SK62	A38	焼土壙	古代～中世	0.5+α×0.3×5.0				
SK63	A38	焼土壙	古代～中世	1.2×0.9×9.0	黒耀石（fl）		28	20
SK64	C37	焼土壙	古代～中世	1.4×1.1×22.0			30	20
SK65	D37	焼土壙	古代～中世	1.4×1.0×22.0			29	20
SK66	E37	焼土壙	古代～中世	1.7×1.1×24.0	炭	SB15と切り合い	31	20
SK71	F38	土壙	近世	0.9×0.7×32.0	青磁（碗）			
SK72	G37	倒木痕	縄文	3.0×1.0×23.0	黒耀石（fl）			
SK73	G36	倒木痕	縄文	0.3+α×1.5×81.0	黒耀石（fl）			
SD68	B37~E36	溝	中世	6.6×0.2×20.0	縄文（粗製）サヌカイト（fl）	SB13·14·17と切り合い		
SD69	A38~B37	溝	13C末～14C初	12.4+α×0.9×32.0	土師器(坏・Ⅲ・不明) 青磁(龍泉Ⅳ碗)		25	20
SD70	A37	溝	中世	2.2×0.6×2.0	土師器（坏）			
SD74	A37	溝	中世	4.3+α×0.3+α×20.0	サヌカイト（fl）			
SB13	E·F37	掘立柱建物	古代～中世	7.1×3.9(4×2間)		SB14·SD68と切り合い		21
SB14	E37	掘立柱建物	古代～中世	5.1×2.1(3×1間)		SB13·SD68と切り合い		21
SB15	F38	掘立柱建物	古代～中世	5.1+α×4.0(2+α×3間)		SK66と切り合い		21
SB16	E38	掘立柱建物	古代～中世	4.4×2.0(2×1間)				21
SB17	C37	掘立柱建物	古代～中世	3.4×2.5(2×2間)		SD68に切られる		21
SX67	G36	炭窯？	12C初～中頃	3.1+α×1.5×15.0	土師器（丸底坏）炭		26·27	20

Tab.11　7区遺構一覧表

遺構番号	グリッド	種　別	時　期	規模／縦×横(m)×深さ(cm)	主な出土遺物	備　　考	写真番号	挿図番号
SK75	C35	焼土壙	古代～中世	1.3×1.0×9.0			35	25
SK76	G34	焼土壙	古代～中世	1.0×0.5×14.0				25
SK77	J34	焼土壙？	古代～中世	0.8×0.7×6.0				25
SK78	H34	焼土壙	古代～中世	1.7×0.9×20.0			36	25
SK79	J34	土壙	近世	0.9+α×1.0×21.0	染付（Ⅲ）			
SK80	F34	廃石壙	近世	1.6×1.4×27.0				25
SK88	H35	廃石壙	近世	1.7+α×1.5×14.0		SB19を切る		
SK89	F35	廃石壙	近世	1.6×1.2×11.0				25
SB18	I33	掘立柱建物	古代～中世	2.9×1.9(2×1間)				24
SB19	I34	掘立柱建物	古代～中世	4.5+α×3.3(3+α×3間)				24
SB20	G33	掘立柱建物	古代～中世	4.8+α×1.5(3+α×1間)				24

Tab.12　8区遺構一覧表

遺構番号	グリッド	種　別	時　期	規模／縦×横(m)×深さ(cm)	主な出土遺物	備　　考	写真番号	挿図番号
SK81	N33	焼土壙	中世	1.5×0.7×39.0			43	30
SK82	M34	焼土壙	中世	1.5×0.9×18.0			44	30
SK83	M35	廃石壙	近世	0.7+α×1.0×39.0	黒耀石（ufl）			
SD84	N36~M34	溝	中世	14.1×1.1×15.0				30
SD85	M34	溝	近世	3.2×0.3×13.0	土師器（甕？）			
SD86	M35	畦溝	近世	1.2×0.3×8.0	サヌカイト（ufl）			
SD87	N32	溝	中世	1.5+α×0.6×14.0				30

Tab.13　9区遺構一覧表

遺構番号	グリッド	種　別	時　期	規模／縦×横(m)×深さ(cm)	主な出土遺物	備　　考	写真番号	挿図番号
SK91	L29	焼土壙	古代～中世	1.6×1.2×14.0			39	27
SK92	K29	焼土壙	古代～中世	1.2+α×0.8×15.0			40	27
SK93	J32	焼土壙	古代～中世	1.5×1.0×9.0				27
SK95	L30	土壙	古代～中世	1.0×0.7×12.0	土師器（不明）			

SB21	J30	掘立柱建物	古代～中世	4.4×1.3(4×1間)		SB22と切り合い		26
SB22	J30	掘立柱建物	古代～中世	5.4×1.9(3×1間)		SB21と切り合い		26
SX94	K31	倒木痕	縄文晩期	3.0×2.0×12.0	縄文(楕円押型文・条痕文) 黒耀石(fl)			

Tab.14　10区遺構一覧表

遺構番号	グリッド	種　別	時　期	規模/縦×横(m)×深さ(cm)	主な出土遺物	備　　考	写真番号	挿図番号
SK101	Q26	焼土壙	古代～中世	2.1×1.1×29.0			45	31
SK104	R26	土壙？	中世	3.3+α×0.3+α×6.0	黒耀石（fl）			
SD103	P26~027	溝	中世	8.4+α×1.2+α×22.0	黒耀石（fl）			
SB23	P26	掘立柱建物	古代～中世	5.1×2.5(3×1間)		SB24と切り合い		31
SB24	P26	掘立柱建物	古代～中世	3.6×2.1(2×1間)		SB23と切り合い		31
SX102	Q27	倒木痕	縄文	1.4×1.0×65.0	黒耀石（fl）			

Tab.15　11区遺構一覧表

遺構番号	グリッド	種　別	時　期	規模/縦×横(m)×深さ(cm)	主な出土遺物	備　　考	写真番号	挿図番号
SK111	S21	焼土壙	古代～中世	1.6×1.0×19.0			47	35
SK112	T22	廃石壙	近世	1.2×1.0×20			48	35
SD114	Q19	溝	中世	4.4+α×0.7×46.0		SB25を切る		35
SB25	Q18	掘立柱建物	古代～中世	3.6+α×1.9+α(3+α×1+α間)		SD114と切り合い		35
SX113	R19	不整土壙	近世	1.2+α×5.4×15.0	黒耀石（残核）			

Tab.16　12区遺構一覧表

遺構番号	グリッド	種　別	時　期	規模/縦×横(m)×深さ(cm)	主な出土遺物	備　　考	写真番号	挿図番号
SK121	T16	焼土壙	古代～中世	1.5×0.9×34.0			50	37
SK122	U16	焼土壙	古代～中世	1.7×0.9×30	炭	SB26と切り合い	51	37
SK123	U17	焼土壙	古代～中世	1.4×0.9×30.0			52	37
SK124	U17	廃石壙	近世	1.4×1.4×36.0			53	37
SB26	U16	掘立柱建物	古代～中世	4.5+α×4.3(2+α×2間)		SK122と切り合い		37
SX125	T16	倒木痕	中世	0.9×0.8×29.0	青磁（碗Ⅴ類）			
SX126	U16	倒木痕	縄文	2.4×1.5×31.0	サヌカイト（fl）黒耀石（ufl）			
SX127	U16	倒木痕	縄文	1.4×1.0×49.0	黒耀石（ufl）			

Tab.17　13区遺構一覧表

遺構番号	グリッド	種　別	時　期	規模/縦×横(m)×深さ(cm)	主な出土遺物	備　　考	写真番号	挿図番号
SK131	T12	焼土壙	中世	1.3+α×0.5+α×38.0				
SK132	V14	焼土壙	中世	1.5×1.0×38.0		SB27と切り合い	54	38
SK133	V14	焼土壙	中世	1.7×1.0×54.0		SB27と切り合い	55	38
SD134	S12	溝	中世	2.9+α×0.3×4.0	黒耀石（ufl）			
SB27	U14	掘立柱建物	古代～中世	6.3×5.3(3×2間)		SK132・133と切り合い		38

Tab.18　14区遺構一覧表

遺構番号	グリッド	種　別	時　期	規模/縦×横(m)×深さ(cm)	主な出土遺物	備　　考	写真番号	挿図番号
SK141	Ba2	焼土壙	古代～中世	1.2×0.9×9.0				45
SK142	Ba4	焼土壙	古代～中世	1.8+α×1.1×19.0			60	45
SK143	Z4	焼土壙	古代～中世	1.6×0.8×23.0			57~59	45
SK144	Z6	焼土壙	古代～中世	1.9×1.4×69.0			61	45
SK145	Z7	焼土壙	古代～中世	2.0×1.3×56.0	縄文（粗製）		62	45
SK146	Y6	焼土壙	古代～中世	1.5×0.8×26.0			63	45
SK147	Z8	焼土壙	古代～中世	1.8×1.1×34.0			64	45
SK148	Y9	焼土壙	古代～中世	1.5×0.8×20.0			65	45
SK149	W6	焼土壙	古代～中世	1.7×1.0×20.0			66	45
SK150	U6	焼土壙	古代～中世	0.3+α×1.0×34.0			67	45
SK157	U7	土壙	古代～中世	1.5+α×1.9×38.0	縄文（粗製）土師器（坏）	SB26に切られる		
SK158	X6	土壙	古代～中世	1.2×1.1×18.0		炭廃棄		
SK159	Z7	土壙	古代～中世	2.7×1.5×45.0		炭廃棄		
SD153	V6	畦溝	近世	3.7×1.7×4.0	縄文(粗製) サヌカイト(fl) 土師器(坏・Ⅲ) 土製品(焼工)	SB13・14・17と切り合い		
SD154	V6	畦溝	近世	2.2+α×0.4×10.0	縄文(粗製) 土師器(坏・Ⅲ) 青磁　土製品(焼工)			
SD155	V7	畦溝	近世	3.0+α×0.5×6.0	土師器（坏・Ⅲ）土製品（焼工）			
SD156	V8	畦溝	近世	3.5×0.6×5.0	土師器（坏・Ⅲ）青磁（碗）			
SB28	U・V7	掘立柱建物	12C末～13C初	6.7×4.2(3×2間)	土師器(Ⅲ・不明)青磁(碗・瓶・水差)白磁(水注・口禿碗)土製品(焼土)縄文(粗製)	4面庇 SB27・SK157を切る		43
SB29	U7	掘立柱建物	12C後～末	7.7×5.8(3×2間)		SB26に切られる		44
SX151	Ba6	不整土壙	近世	4.6×2.1×26.0	縄文（粗製）			
SX152	Z6	不整土壙	近世	2.4×1.5×28.0	縄文（粗製）			

付編：上広瀬遺跡第１次調査に伴う自然科学分析

Ⅰ．放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani

1．はじめに

福岡市上広瀬遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2．試料と方法

測定試料の情報、調整データは表１のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

3．結果

表２に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行った^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を、図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

4．考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

参考文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), 425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代, 3-20.

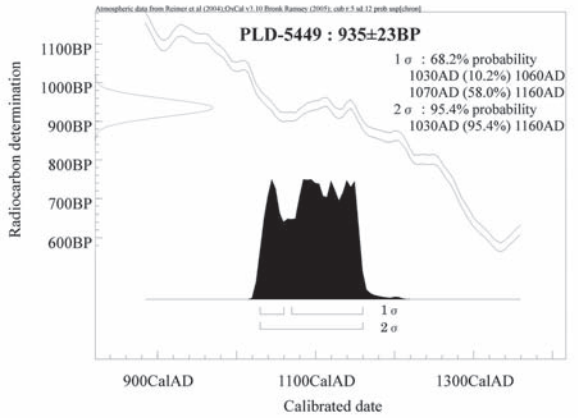
Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) Radiocarbon 46, 1029-1058.

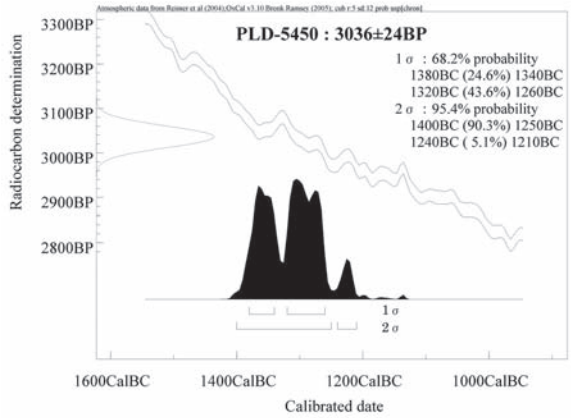
表1　測定試料及び処理

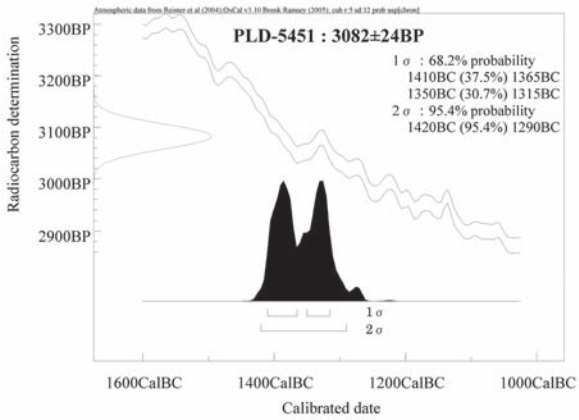
測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-5449	位置：1区 遺構：SX06 その他：縄文倒木痕	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-5450	位置：2区 層位：包含層2層	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-5451	位置：2区 層位：トレンチ13層	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-5452	位置：3区 遺構：SK14 その他：焼土壙	試料の種類：炭化物・材（シイノキ属） 試料の性状：最外以外樹皮に近い部分を採取 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-5453	位置：5区 遺構：SK37 その他：焼土壙	試料の種類：炭化物・材 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-5454	位置：12区 遺構：SK122 その他：焼土壙	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH

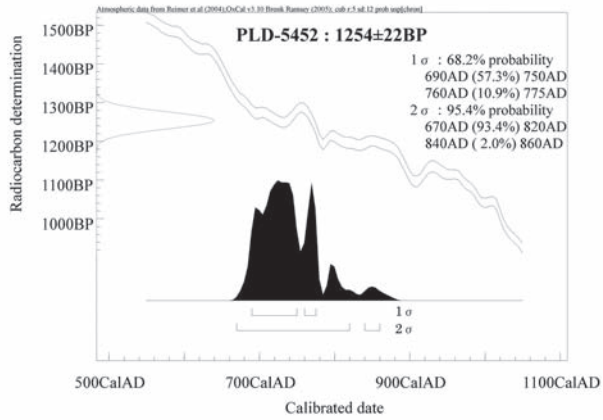
表2　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

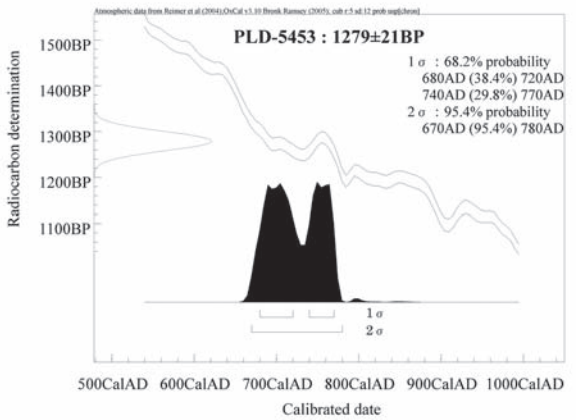
測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代 (yrBP±1σ)
			1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
PLD-5449	-29.73±0.14	935±25	1030AD(10.2%)1060AD 1070AD(58.0%)1160AD	1030AD(95.4%)1160AD	935±23
PLD-5450	-26.50±0.16	3035±25	1380BC(24.6%)1340BC 1320BC(43.6%)1260BC	1400BC(90.3%)1250BC 1240BC(5.1%)1210BC	3036±24
PLD-5451	-26.29±0.16	3080±25	1410BC(37.5%)1365BC 1350BC(30.7%)1315BC	1420BC(95.4%)1290BC	3082±24
PLD-5452	-26.24±0.15	1255±20	690AD(57.3%)750AD 760AD(10.9%)775AD	670AD(93.4%)820AD 840AD(2.0%)860AD	1254±22
PLD-5453	-28.49±0.14	1280±20	680AD(38.4%)720AD 740AD(29.8%)770AD	670AD(95.4%)780AD	1279±21
PLD-5454	-25.00±0.14	1310±20	660AD(50.5%)700AD 740AD(17.7%)770AD	650AD(70.4%)730AD 740AD(25.0%)770AD	1312±22

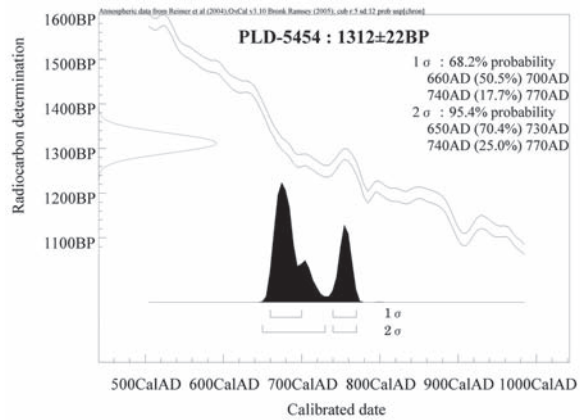

PLD-5449 : 935±23BP
1σ : 68.2% probability
1030AD (10.2%) 1060AD
1070AD (58.0%) 1160AD
2σ : 95.4% probability
1030AD (95.4%) 1160AD
Radiocarbon determination
1100BP
1000BP
900BP
800BP
700BP
600BP
1σ
2σ
900CalAD
1100CalAD
1300CalAD
Calibrated date


PLD-5450 : 3036±24BP
1σ : 68.2% probability
1380BC (24.6%) 1340BC
1320BC (43.6%) 1260BC
2σ : 95.4% probability
1400BC (90.3%) 1250BC
1240BC (5.1%) 1210BC
Radiocarbon determination
3300BP
3200BP
3100BP
3000BP
2900BP
2800BP
1σ
2σ
1600CalBC
1400CalBC
1200CalBC
1000CalBC
Calibrated date


PLD-5451 : 3082±24BP
1σ : 68.2% probability
1410BC (37.5%) 1365BC
1350BC (30.7%) 1315BC
2σ : 95.4% probability
1420BC (95.4%) 1290BC
Radiocarbon determination
3300BP
3200BP
3100BP
3000BP
2900BP
1σ
2σ
1600CalBC
1400CalBC
1200CalBC
1000CalBC
Calibrated date


PLD-5452 : 1254±22BP
1σ : 68.2% probability
690AD (57.3%) 750AD
760AD (10.9%) 775AD
2σ : 95.4% probability
670AD (93.4%) 820AD
840AD (2.0%) 860AD
Radiocarbon determination
1500BP
1400BP
1300BP
1200BP
1100BP
1000BP
1σ
2σ
500CalAD
700CalAD
900CalAD
1100CalAD
Calibrated date


PLD-5453 : 1279±21BP
1σ : 68.2% probability
680AD (38.4%) 720AD
740AD (29.8%) 770AD
2σ : 95.4% probability
670AD (95.4%) 780AD
Radiocarbon determination
1500BP
1400BP
1300BP
1200BP
1100BP
1σ
2σ
500CalAD
600CalAD
700CalAD
800CalAD
900CalAD
1000CalAD
Calibrated date


PLD-5454 : 1312±22BP
1σ : 68.2% probability
660AD (50.5%) 700AD
740AD (17.7%) 770AD
2σ : 95.4% probability
650AD (70.4%) 730AD
740AD (25.0%) 770AD
Radiocarbon determination
1600BP
1500BP
1400BP
1300BP
1200BP
1100BP
1σ
2σ
500CalAD
600CalAD
700CalAD
800CalAD
900CalAD
1000CalAD
Calibrated date

Ⅱ．上広瀬遺跡第１次調査３区SK14（焼土壙）出土炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

1．はじめに

ここでは、3区SK14（焼土壙）から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。なお同一試料を使用して、AMS法による年代測定が実施されている（別報参照）。

2．試料と方法

炭化材は、放射径約6cm、接線径約5cmの破片であった。

同定は、炭化材の横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に材の3方向（横断面・接線断面・放射断面）の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM－T100型）で観察と写真撮影を行った。

同定した炭化材の残り破片は、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に保管されている。

3. 結果

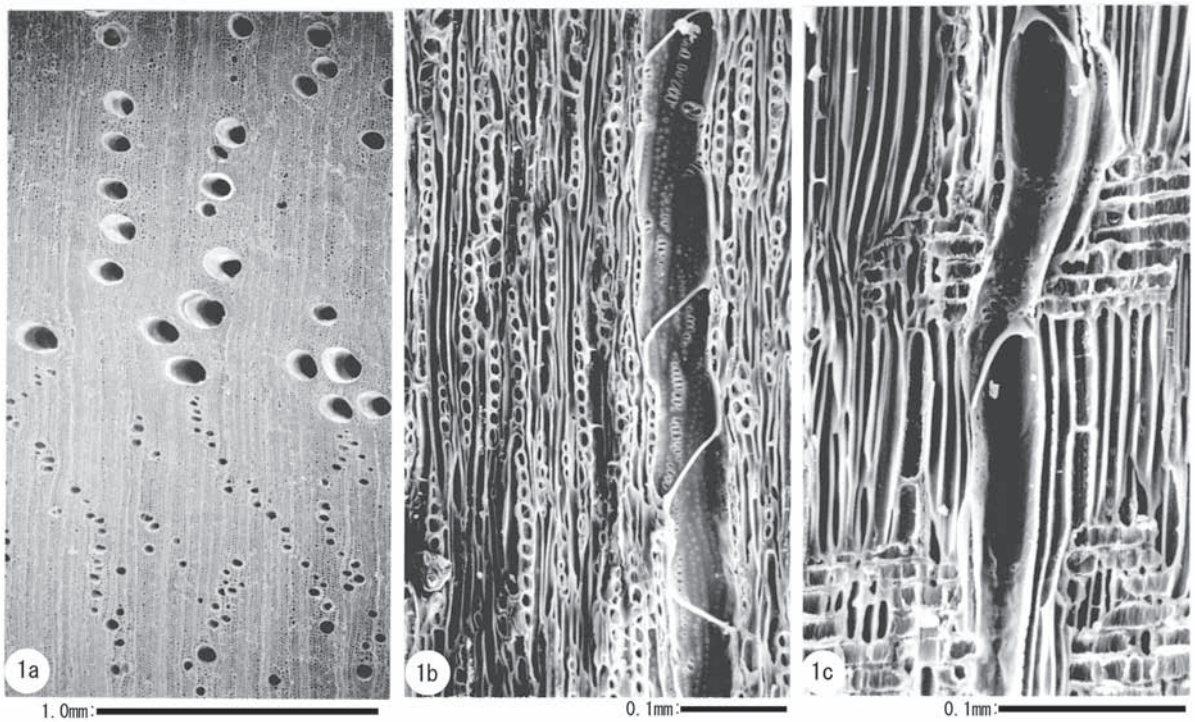
材組織を走査電子顕微鏡で観察した結果、以下に記載する形質からブナ科シイノキ属と同定された。シイノキ属は暖帯に生育する常緑広葉樹で照葉樹林の主要素である。関東以西・四国・九州に分布するツブラジイ（コジイ）と、本州の福島県と新潟県佐渡以南・四国・九州に分布するスダジイがあるが、この炭化材からは種を特定する形質は確認できなかったので、シイノキ属の段階で同定を留めた。

材組織記載

シイノキ属 Castanopsis　ブナ科　図版1　1a－1c（3区SK14（焼土壙），PLD－5452）

中型の管孔が単独で間隔をあけて配列し、さらに数個が放射方向に分布後、急に小型となり管孔は火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は単列同性、道管との壁孔は交互状・柵状である。

細胞幅の狭い緩く集合した放射組織の存在は確認できなかったので、ツブラッジイとは特定できていない。



図版１　上広瀬遺跡第１次調査出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真

1a-1c：シイノキ属（3 区 SK14（焼土壙），年代測定番号 PLD-5452）

a：横断面　b：接線断面　c：放射断面

報告書抄録

ふりがな	ひろせ　かみひろせ
書名	広瀬遺跡２・上広瀬遺跡１
副書名	石釜地区基盤整備促進事業関係調査報告書
巻次	２
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	902
編著者名	加藤良彦
発行機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1　TEL 092-711-4667
発行年月日	2006. 03. 31

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
広瀬遺跡/ 上広瀬遺跡	福岡市早良区大字西、内野8丁目/ 福岡市早良区大字西字広瀬地内	40130	0800/ 0801	33°29′28″/ 33°29′36″	130°20′28″/	20030616～20031226/ 20040401～20041112	6,243/ 10,800	基盤整備促進事業/ 基盤整備促進事業
集落/集落	旧石器～縄文～中世/ 旧石器～縄文～中世	広瀬－集落－旧石器－石器/縄文－集石炉１＋貯蔵穴３＋土壙39－土器＋石器/中世－溝７＋掘立柱建物１＋土壙20＋焼土壙41＋土器焼成壙１＋炭窯３－貿易陶磁器＋土師器＋瓦器＋石器/ 上広瀬－集落－旧石器－石器/縄文－土壙２－土器＋石器/溝17＋焼土壙47＋土壙27＋掘立柱建物29－貿易陶磁器＋土師器＋瓦器＋石器						

広瀬遺跡２・上広瀬遺跡１

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第901集

2006年（平成18年）3月31日

発 行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号
（092）711－4667

印 刷　ソ ウ ヤ マ 印 刷
福岡市博多区中呉服町10－５
（092）291－6160